

## 動詞・形容詞問題語用例集

著者	国立国語研究所
ページ	1-272
発行年	1971-03-30
シリーズ	国立国語研究所資料集 ； 7
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002268">http://doi.org/10.15084/00002268</a>

# 動詞・形容詞問題語用例集

国立国語研究所

西尾寅弥

宮島達夫

秀英出版

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
PUBLICATIONS SOURCE VII

**MATERIALS FOR THE STUDY OF PROBLEMATICAL  
VERBS AND ADJECTIVES IN MODERN JAPANESE**

These materials are derived from 52 modern literary works (approx. 330,000 examples); scientific reports, editorials, and essays (approx. 60,000 examples); 90 magazines published in 1956, and various magazines published in 1953-54.

CONTENTS

- I Examples of verbs and adjectives which are not found in most small [dictionaries (1,540 words)
- II Examples of verbs and adjectives which have two or more readings for the chinese characters used in writing them (660 words)
- III Examples of verbs which can not easily be labeled transitive or intransitive (490 words)
- IV A list of verbs and adjectives arranged in the so-called "gozyûon" order based on the reversed syllabic spelling of the words

Syûei Syuppan Co.

2-30, Nôgayakagatô, Sinzuku-ku, TOKYO, JAPAN

1971

## 刊行のことば

第一研究部書きことば研究室では、昭和39年度から「語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等——」という題目の下に研究を行なってきた。その全体の研究成果は、いずれ国立国語研究所報告として刊行する予定である。本書は、この研究のために利用した大量の用例カードから、下記のそれぞれの観点によって整理した結果をまとめたものである。

この研究の担当者は見坊豪紀（昭和39、40年度のみ書きことば研究室長）、西尾寅弥（昭和41年度からは室長）、宮島達夫（昭和42年6月からは主任研究官）であって、本書を刊行するに当たって次のように分担してまとめた。

- I. 辞典にあまり登録されていない動詞・形容詞の用例——宮島（動詞）・西尾（形容詞）
- II. いくとおりにも読みうる動詞・形容詞の用例——宮島
- III. 自動詞か他動詞か決めにくい語の用例——宮島
- IV. 語末からの逆びきによる動詞・形容詞一覧——宮島（動詞）  
・西尾（形容詞）

昭和46年3月

国立国語研究所長 岩淵悦太郎

## 目 次

刊行のことば	1
はじめに	3
資 料	4
I 辞典にあまり登録されていない動詞・形容詞の用例	9
II いくとおりにも読みうる動詞・形容詞の用例	103
III 自動詞か他動詞か決めにくい語の用例	162
1 辞典によってゆれているものの表	162
2 自・他の決定に参考となる用例	189
IV 語末からの逆びきによる動詞・形容詞一覧	232
動 詞	234
形 容 詞 1	258
形 容 詞 2	264
形容動詞（和語）	267

## はじめに

書きことば研究室では、現在「語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等——」という課題の仕事を行なっている。この仕事のいちばんの特色は、かなり大量の用例カードに基づいて行なっている点にある。そして、昭和46年度には「動詞の意味・用法の記述的研究」「形容詞の意味・用法の記述的研究」という形でまとめる予定である。本書は、それとは一応別個に、われわれの用例カードが、資料的に活用されることをねらいとして企てたものである。理想的に言えば、われわれのもっているすべての用例を資料として刊行するのが、ある意味でいちばん望ましいことであろう。しかし、これは膨大なものになるので、実際の計画にはなりえない。そこで、生の資料そのままではなく、ある観点から資料を処理した結果をいくつか集めて一冊にまとめることにした。一つの観点からみるばあいには、そのほうが利用しやすいものになるばあいもあるだろう。

おわりの「語末からの逆びきによる動詞・形容詞一覧」は他の3つとはちがって、用例カードではなく、辞典の見出し語を資料としたものである。用例カードの整理が完了していない段階で、われわれの仕事の手段としての必要から作ったものであった。謄写版ずりで研究所内に配ったところ、他の目的からも役立つという意見があったので、ここに収録することにした。

なお、表題は便宜上「動詞・形容詞」としたが、狭義の形容詞のほかに、いわゆる形容動詞をも含めた。形容動詞の認定基準としては、連体形として「～な」の形をとりうるものという、わりあい操作しやすい、ゆるい基準によった。

本書の作成は、「刊行のことば」に示した分担で行なったが、Ⅱ「読みの決めにくい語とその用例」は宮島の指導の下に研究補助員高木翠が分担した。高木は全期間を通じてこの研究を助けた。また、豊泉美奈子ほか数名のアルバイトの助力をも得ている。

# 資 料

この用例集の資料である用例カードの種類・内容・概数・テキストなどは以下のとおりである。

## 1. 文学 作品

明治・大正・昭和にわたる52の文学作品から、動詞・形容詞など、あわせて約33万の用例を採集したもの。これが量的にも中心的な資料である。その作品と、用いたテキストは次の表のとおりである。用例の出典のあとにつけた数字は、そのテキストにおけるページを示している。（作品をえらんだ方針や、用例カード作成の過程については、国立国語研究所年報17～19を参照）

なお、原作は歴史的かなづかいで書かれていて、使用したテキストでは現代表記に改められているもの、あるいははじめから現代かなづかいで書かれているものには\*印をつけた。

	年 代	作 家 名	作 品 名	出 典	ベ ー 数 ジ
1	1898	国 木 田 独 歩	武 蔵 野	岩波文庫	27
2	1900	泉 鏡 花	高 野 聖	"	72
3	1901	徳 富 健 次 郎	思出の記(上)	"	229
4	1906	伊 藤 左 千 夫	野 菊 の 墓	"	54
5	1906	島 崎 藤 村	破 戒	"	336
6	1907	田 山 花 袋	蒲 団	"	81
7	1907	二 葉 亭 四 迷	平 凡	"	135
8	1910	長 塚 節	土(上)	"	208
9	1913	森 鷗 外	阿 部 一 族	"	55
10	1913	有 島 武 郎	或 る 女(前)	"	233
11	1913	鈴 木 三 重 吉	桑 の 実	"	159
12	1914	夏 目 漱 石	こ こ ろ	"	285
13	1915	徳 田 秋 声	あ ら く れ	"	249
14	1915	芥 川 竜 之 介	* 羅 生 門	"	12

	年 代	作 家 名	作 品 名	出 典	ペ ー 数
15	1916	倉 田 百 三	*出家とその弟子	岩波文庫	213
16	1917	佐 藤 春 夫	田園の憂鬱	〃	115
17	1917	久 保 田 万太郎	末 枯	新潮文庫	56
18	1919	菊 池 寛	恩讐の彼方に	岩波文庫	34
19	1919	武者小路 実 篤	友 情	〃	125
20	1921	志 賀 直 哉	*暗 夜 行 路(前)	〃	261
21	1922	長 与 善 郎	青銅の基督	〃	114
22	1923	正 宗 白 鳥	生まざりしならば	新潮文庫	45
23	1923	里 見 稔	多 情 仏 心(前)	岩波文庫	359
24	1926?	宮 沢 賢 治	銀河鉄道の夜	〃	79
25	1926	宮 本 百 合 子	伸 子(上)	〃	199
26	1928	山 本 有 三	波	〃	394
27	1929	小 林 多 喜 二	蟹 工 船	〃	113
28	1930	林 芙 美 子	*放 浪 記	新潮文庫	303
29	1930	横 光 利 一	機 械	〃	29
30	1930	野 上 弥 生 子	真 知 子(前)	岩波文庫	205
31	1931	永 井 荷 風	つゆのあとさき	〃	114
32	1933	谷 崎 潤 一 郎	春 琴 抄	〃	76
33	1934	室 生 犀 星	あにいうと	新潮文庫	25
34	1936	佐 多 稲 子	*く れ な い	〃	144
35	1936	阿 部 知 二	冬 の 宿	岩波文庫	195
36	1937	川 端 康 成	雪 国	〃	170
37	1938	中 山 義 秀	厚 物 咲	新潮文庫	37
38	1938	堀 辰 雄	風 立 ち ぬ	岩波文庫	92
39	1939	岡 本 か の 子	河 明 り	新潮文庫	99
40	1939	太 宰 治	富 嶽 百 景	岩波文庫	23
41	1943	中 島 敦	李 陵	新潮文庫	52
42	1947	丹 羽 文 雄	*厭がらせの年齢	〃	42
43	1948	大 仏 次 郎	帰 郷	〃	349
44	1949	田 宮 虎 彦	*落 城	〃	44



	年 代	作 家 名	作 品 名	典 出	ペー ジ 数
45	1949	井 上 靖	闘 牛	新潮文庫	80
46	1950	獅 子 文 六	*自由学校	〃	377
47	1950	井 伏 鱒 二	本日休診	〃	82
48	1951	大 岡 昇 平	野 火	〃	176
49	1952	野 間 宏	*真空地帯(上)	岩波文庫	232
50	1954	三 島 由 紀 夫	潮 騒	新潮文庫	159
51	1954	中 野 重 治	*むらぎも	〃	352
52	1959	石 川 達 三	*人間の壁(上)	〃	350

(合計 8047ページ)

## 2. 科学説明文・論説文など

文学作品とは性質のちがった資料として、あとから補充的に追加したものであるが、下記の資料からとった、約6万枚の用例カードがある。作品名につけた\*は文学のばあいと同様である。

作品年代	執 筆 者	作 品 名	出 典	ペー ジ 数
1916	河上 肇	*貧乏物語	岩波文庫	163
1929	出 隆	哲学以前	新潮文庫	260
1920～1941	三木 清	人生論ノート	〃	141
1934～1951	小林 秀雄	*私の人生観	角川文庫	139
1919～1922	阿部 次郎	人格主義	〃	170
1950	笠 信太郎	*ものの見方について	〃	185
1937	石原 純	*社会事情と科学的精神	現代日本思想 大系25・科学 の思想Ⅰ	11
1946	武谷 三男	*革命期における思惟の基 準	〃	14
1948	湯川 秀樹	*物質世界の客観性につい て	〃	34
1947	坂田 昌一	*原子物理学の発展とその 方法	〃	16

作品年代	執筆者	作品名	出典	ページ数
1936	長岡半太郎	* 総長就業と廃業	現代日本思想 大系25・科学 の思想I	30
1948	渡辺 慧	* 原子党宣言	〃	6
1961	梅棹 忠夫	* 高崎山	現代の教養6・ 学問の前線	53
1965	小尾 信弥	* 宇宙の謎はどこまで解けたか	〃	11
1964	藤田 信勝	* 物質の根源と宇宙を結ぶ	〃	33
1965	高瀬 良夫	* 生命の暗号を解く	〃	29
1965	柴谷 篤弘	* 生命の謎はどこまで解けたか	〃	12
1964～1965	朝日新聞 学芸部	* 学問の動き	〃	36
1965	石田英一郎	* 抵抗の科学	〃	7
1965	藤森 栄一	* 旧石器の狩人	〃	14
1966	関 つとむ	* 未知の星を求めて	〃	15
1966	渥美 和彦	* 人工心臓を体内に	〃	12
1966	桜田 一郎	* 新しい繊維	〃	9
1966	坂井 利之	* 文字を読む機械	〃	9

(合計 1409ページ)

### 3. 「現代雑誌九十種」の用例

先年、書きことば研究室が行なった「現代雑誌九十種の用語用字」の調査のために作られたカードが、そのまま用例カードとして利用でき、これも資料の一環をなしている。この調査のサンプル内における、自立語全体の延べ語数は約44万であるが、そのうち動詞は9万余り、形容詞（形容動詞は含まない）は約1万、合わせて10万余りと推定される。

この雑誌資料はすべて、昭和31（1956）年の1月号から12月号までのものである。90種の雑誌の名まえは、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語

用字』第一分冊の2ページにゆずることにする。ここには雑誌の類別と各類の例だけをあげよう。

評論・芸文(12誌)	群像・世界……………
庶民(14誌)	家の光・週刊朝日……………
実用・通俗科学(15誌)	エコノミスト・自然……………
生活・婦人(14誌)	暮しの手帖・婦人公論……………
娯楽・趣味(35誌)	アサヒカメラ・小説の泉……………

引用した例については、出典として雑誌名・発行年月・ページが示してある。

#### 4. 「総合雑誌」の用例

「現代雑誌九十種」の前に、書きことば研究室が行なった「総合雑誌の用語」の調査のために作られたカードも、同じく資料の一部をなしている。この調査のサンプル内における、自立語全体の延べ語数約23万のうち、動詞・形容詞は約6万である。

この雑誌資料は昭和28(1953)年7月号から昭和29(1954)年6月号までのものである。雑誌は次の13種である。

改造 解放 学園評論 国民 心 人生手帖 世界 世潮 中央公論 日本及日本人 ニューエイジ 文芸春秋 平和

## I 辞典にあまり登録されて いない動詞・形容詞の用例

1. 本篇は、われわれの用例の集積の中から、国語小辞典の類にはあまりのせられていないような語と、その用例を1～2例程度ずつあげたものである。
2. われわれの集めて得た、すべての語とその用例をあげるには、非常に大きいスペースが必要となるので、次善の策として、国語小辞典（新選国語辞典、岩波国語辞典、講談社国語辞典など）でもたいてい収録しているような、ごくありふれた語とその用例は割愛したわけである。したがって、ここにあげるような語を、辞典がみおとしているとか、登録すべきだとかいうことを意味する性質のものでは、まったくない。
3. われわれの資料では、「～はじめる」（歩きはじめる、降りはじめる等）「～すぎる」（食べすぎる、大きすぎる等）のような、規則的に作られる合成語もそのままの形で採られている。国語辞典は、このような、分解してすぐわかる合成語は見出し語にとっていないのが普通である。したがって、機械的にやれば、このような、構造のひじょうに透明な合成語も、かなり多くはいつてくるはずである。しかし、こういう性質の合成語は除外したものが多い。
4. 複合サ変の動詞や、形容動詞のばあい、その語幹の部分、名詞としては、小辞典が見出し語に採録していても、動詞や形容動詞の品詞性は認めていないものがある。このようなばあい、小辞典はその動詞や形容動詞は見出し語に採っていないものとして、本篇には取り上げたものがかなり多い。
5. 形容動詞としては、連体形が「～な」の形をとる普通のもののほかに、ごく少数ではあるが、文語的な「～なる」の形のもの、文語のタリ活用に相当する「～たる」の形のものも収録した。なお、形容動詞の見出し語形は便宜上、連体形とした。
6. 本篇の資料は書きことばであるから、当然文語的・文章語的な語も多いし、また一方俗語的・方言的な語なども出てくる。そのような語も、あきらかに方言であるものなどは別として、たいてい採録した。なお、書き手のまった

く個人的な用語とみなして採らなかった語も少数ながらあった。以上のことの結果として、かなり方言的な語、俗語的な語、個人的な用語なども混在していることになる。

7. 結果的にみて、ここに採録された語は複合語的・派生語的なものが多い。国語小辞典が、単純語的な用言を採録していないということはあまり多くないであろうから、これは当然の結果といえるだろう。
8. くりかえしになるが、本篇は、全資料を公刊することが無理なので、その一部分をあげたものである。その一部分をふるい分けるまったく便宜的な方法として、小辞典の見出し語を参考に使ったにすぎない。また、上に述べたところからわかるように、語の取り上げかたに、主観的な要素もかなり混在しているといわなければならない。

(担当 動詞——宮島達夫，形容詞——西尾寅弥)

あいきゅうする(哀求) 「其んなら何か物を売つて呉れないか、銭はあるが——」と僕は哀求した。(思出の記・上 181)

あいきゅうする(哀泣) 救ひ出された患者が火と雪との中で哀泣するものもあり、まことに凄惨な光景を呈した。(冬の宿 90)

あいしょうきする(相衝撃) 彼女に堪へ切れないほどの感情が、心内に相衝撃するものゝやうに見えた。(河明り 322)

ああおしい(青々) 僕は生命がまだ形をなさないで生れかけようとしてゐる青々しい匂ひだと思ふよ。(海の水の匂いについての表現)(冬の宿 62)

ああおする(青々) 勁んだ土や、蒼々した水や広々した雑木林——関東平野を北へ北へと横ぎつて行く汽車が、山へさしかゝるに連れて、(あらくれ 105)

○青々したその芽生えのところだけは、特別日光がたまるかと思ふほど、明るく美しく見えた。(伸子・上 152)

ああぎいろい(青黄色) 山の下多くの飲食店や商家には灯が青黄色い柳の色と一つに流れて、(あらくれ 46)

○自分だけしか知らないことを話す場合の、もの惜みの気持やら得意やらが、蒼黄色い三好の顔に、ありありと現はれてゐた。(多情仏心・前 112~113)

ああぎる(青) 風を懷へ入れ足を展して休む。青ぎつた空に翠の松林、百舌も何処かで鳴いてゐる。(野菊の墓 23~24)

ああぐらい(蒼暗) 蒼暗い空に、凍てついた星の数はたとでもなかつた。(多情仏心・前 17)

ああぐろい(青黒) 目の前に大きな杉が一面青黒く繁った雄大な山の腹が見える。(私の人生観 46)

○血の気の引いた青黒い顔をしかめて「ううん、ううん、ううん……」と律をつくつた呻き声を出してゐた。(本日休診 108)

ああじろむ(蒼白) 「なんの用なの、一体。」さき子が近づくと初めて津上は口を開いた。頬が蒼白んで、ひどく憔悴してゐた。(闘牛 104)

○きつと、蒼白んだ顔を振り向けて、「なんにも御返事をすることはないぢやありませんか」(多情仏心・前 64)

ああずばい(青酸) 雨に濡れた草の、青酸つばい臭ひに混つて、私のよく知つてゐる、あのつんと鼻をつく臭気が、緑の間に漂つてゐた。(野火 104)

ああずむ(青) 酢のやうな臭ひが鼻を突いて、雨に曇つてゐる溝板の上の空気は青ずんで見えた。(波 54)

○出るまへに、まつ子は戸棚の奥の、古い長持の底から風呂敷包みを出してゐたが、ひどく蒼ずんだ昔風のお召の着物と、黒い小紋縮緬の羽織とをきて出てきた。(冬の宿 105)

ああっほい(青) 末広な、青ッばいカンテラの光が揺れる度に、ゴミゴミした棚の一部

や、脛の長い防水ゴム靴や、(蟹工船 24)

**あおりつける**(呻) ——せん枝のコツプにいふ通り<sup>なみなみ</sup>満満とついだあと、自分も湯のみで<sup>あふ</sup>呻りつけた。(末枯 37)

**あかあかする**(赤々) 今まで赤々してゐた夕陽がかげつて、野面からは寒い風が吹き、(あらくれ 6)

**あかぎいろい**(赤黄色) そしてその赤黄色い<sup>ひ</sup>灯の美しく水に映るのが、いかにもにぎやかで、なんとなく東京の真夜中の町を思わせた。(暗夜行路・前 152)

**あかぐろい**(赤黒) 片山は色白だが、兄貴は赤黒い顔をしてる。(むらぎも 138)

○イエスの蒼白の裸体は屍色を現はし、血は赤黒く凝固してゐるらしかつた。(野火 80)

**あかさびずる**(赤錆) 工場らしい跡に、焼けて赤錆びした機械が片附けもせずに、怪物のやうな姿に春の光を浴びてゐた。(帰郷 192)

**あかさびる**(赤錆) そして太いほうは赤さびて、その頭から元気のない煙をわずかにたてている。(暗夜行路・前 139)

○洞窟の入口に七輪があり、赤さびた石油缶があり、一枚のむしろがある。(人間の壁・上 303)

**あかしする**(証) 私の心の内にはびこる悪は、私に地獄のある事をますます明らかに<sup>あかし</sup>証しました。(出家とその弟子 50)

**あかづく**(垢) 市九郎は、<sup>くしげつ</sup>梳らざれば頭髮は何時の間にか、伸びて双肩を掩ひ、<sup>ゆあみ</sup>浴せざれば垢づきて、人間とも見えなかつた。(思讐の彼方に 76)

**あかばむ**(赤) 向ひの家の屋根に半分さした、赤ばんだ日影の色に目をとめた。(桑の実 80)

**あかみわたる** 或はそこに在りとある物総て一時に微笑したやうに、限なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思ひがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、(「あひびき」からの引用)(武蔵野 11)

**あきがかかる**(秋) 蔭になつた<sup>あけ</sup>量の色が、余り綺麗だもんで……紫に見えるでせう。もう秋がかつて来たんですよ。(或る女・前 92)

**あきっぽい**(飽) あきっぽくて、気が小さくて、じき人にまいってしまつて、ひとになじめない私の性格がいやになつてくる。(放浪記 123)

**あきない**する(商) その廻船によつて商ひする問屋はだんだん殖え、大阪で二十四組、江戸で十組にもなつた。(河明り 270)

**あくしゅみな**(悪趣味) 空樽に腰かけさせる店のしつらえも、実用一点張りで悪趣味には感じさせなかつた。(むらぎも 217)

**あくする**(悪) 母は継母で兎角自身(道太郎氏の事)を邪魔にし父に悪する<sup>あく</sup>の傾<sup>かたがき</sup>がある事(思出の記・上 216)

**アクセント**する ネクタイ、靴下もかなり大胆にアクセントして下さい。(婦人生活 1956)

年 8 月 448)

**アクセントづける** 別布をあしらつてアクセントづけたハイネックのワンピース。(ドレスメーカーキング 1956 年 1 月 156)

**あぐらする**(胡坐) 崩れたやうにあぐらして、しりにかう我がぜんをながめて、ゆびさしをした。(高野聖 54~55)

**あけくれする**(明暮) いつもミシンの唄に明け暮れしている平和な彼女が、(放浪記 216)

**あさっぽい**(浅) 人間は実に浅つ**っぽい**もので、ごく皮相で人を判断してしまふ。(思出の記・上 68)

**あざみわらう**(嘲笑) きちきち一杯に、ゆくかゆかずの境涯を脱しかねてゐた祖母の無能を、嘲み笑ひたいやうな気持が、(多情仏心・前 246)

**あさりつく**(漁) 不運な職業にばかりあさりつく私だ。もう何も云わないであの人と一緒にになろうかしらとも思う。(放浪記 198)

**あしらいうる** 全く異様のお客様だったので、娘さんもどうあしらひしていいのかわからず、(富嶽百景 69)

**あずかりしる**(与知) 皆、彼女の蔵書であって、良人のあずかり知るところでない。(自由学校 6)

○しかしこういうやむにやまれぬ近代的な決意はよくよく孔子のあずかり知らぬことであるらしい。(厭がらせの年齢 294)

**あずけいれる**(預入) 日本などでは、一たん荷物を預け入れてさえおけば、あとは途中何度乗り換えをしても、(貧乏物語 48)

**あせくさい**(汗臭) これは、駒子の想像どおりで、合シャツでは暑いのを、我慢して働くから、酸っぱいほど、汗臭くなってしまう。(自由学校 188)

**あせじむ**(汗染) 玄関に出て見ると、そこには叔父が、襟の真黒に汗じんだ白い飛白を薄寒さうに着て、(或る女・前 51)

**あせっぽい**(汗) 汗っぽい顔を、畳にべったり押しつけてみたり、(放浪記 191)

**あだける** どうどうどう、畜生これあだけた獣ぢや、やい! (高野聖 50)

**あだなする**(渾名) 山本の家には謙作たちがチャボとあだ名していた小さくて、頑固で、気の強い、年寄りの三太夫がいた。(暗夜行路・前 236)

**あちこちする** 問題は岩崎の『労働者運動』の論文にもたち帰って評判があちこちした。(むらぎも 196)

○そんな一つを買って、併合後の朝鮮で小役人をしていた父が、女房子供からはなれて一人であちこちしていた間、これを離さずにいた。(むらぎも 16)

○事務員や水夫達が、物せはしさに人中を縫うてあちこちする間に、(或る女・前 79)

**あっしょくする**(圧触) こゝで蒼穹は高い空間ではなく、色彩と密度と重量をもつて、すぐ皮膚に圧触して来る濃い液体である。(河明り 293)

**あとじさる**(後退) 私は山本の来るまでに降りてしまおうと思った。そして馬乗りのま



ま少しあとじさった。(暗夜行路・前 11)

○すがすがしい土の香が立つ。伸子は段々あとじさりながら、一心に撒いてゐた。(伸子・上 169)

あともどる(後戻) つぎの部屋につづく隅のオランダ画の前から、米子は後戻つて来た。(真知子・前 65)

あばきだす(暴出) この地上に降りそそぐ宇宙線の正体をあばき出す必要があると、深い関心をもっていた。(物質の根源と宇宙を結ぶ 103)

あばきたてる(暴立) 友だちのいたずらや悪事をあばき立てる告げ口を、公認しているようにも思われる。(人間の壁・上 217)

○このようにして人間のなかから無残にもあらゆるものをあばきたてる軍隊に対する憎しみと共に、(真空地帯・上 84)

あばずれる 其の心持はあばずれた芸者が相撲を最真にしたり、又女学生が野球選手を恋するのと変りがない。(つゆのあとさき 82)

あばれこむ(暴込) 波は丸太棒の上まで一またぎする位の無難作で、船の片側から他の側へ暴力団のやうにあばれ込んできて、流れ出て行つた。(蟹工船 20)

あびせかける(浴掛) 蠟燭は彼の妻の手に持たれて、月の光を上から浴びせかけられて、ほんのりと赤くそれ自身の光を失つた。(田園の憂鬱 105)

○それとも毎日煙の如く浴せ掛けた埃から来たのであつたらうか、(土・上 63)

○一太刀浴びせかけた白髪の老人の悲鳴などが、(思讐の彼方に 69)

○踊を見ながら輪の周囲に立つて居る村落の女等は手と手を突き合うて勘次の容子を見てはくすくすと竊に冷笑を浴せ掛けるのであつた。(土・上 191)

○二人が、丸葉柳の茂みに近づくと、市九郎は、不意に街道の真中に突立つた。そして、今迄に幾度も口にし馴れて居る脅迫の言葉を浴せかけた。(思讐の彼方に 65)

あぶくたつ(泡立) 窪地の古池だけがまだ眠りこけてゐた。鰻には揺れず、蛇にも過られず、翡翠も掠めず、落葉も浮べず、沼氣さへもあぶく立たなかつた。(多情仏心・前 9)

あぶなっかしい(危) 振り向きもしずに、そんなことを云ひながら、ふらりふらりとあぶなっかしい歩調を運んで行つた。(多情仏心・前 176)

○四人も五人もの子供が、向ひの危かしい石垣の上に登つて、互に他を突き落さうとし合つてゐた。(生まざりしならば 202)

アベックする 彼は、金をとらずに、ハンド・バッグを返してよこした。

「じゃ、仕方がねえ。その代り、ちょいと、おれと、アベックしな」(自由学校 123)

あまあましい(甘々) どこでもいゝその娘に似たらしい所のある少女を見ると、内田は日頃の自分を忘れたやうに甘々しい顔付をした。(或る女・上 53)

あまえつく(甘) 輝雄は、どうしたんだ、どうしたんだ、といつてまつ子に喰つてかかりながら、甘えついてしばらく離さなかつた。(冬の宿 114)

- ・あまがる(甘) 度ごとにおいそれと云ふ目を出してやつてゐたひには、いよいよもつて甘がられ、増長されるは知れきつた話だつたけれども、(多情仏心・前 342)
- ・あまずい(甘酢) 糸昆布を用いる場合は甘酢く煮たもので結びます。(婦人生活 1956年2月付録 家庭生活 369)
- ・あまにがい(甘苦) 私にも何となく甘苦い哀愁が抽き出されて、ふとそれがいつか知らぬ間に海の上を渡つてゐる若い店員にふらふら寄つて行きさうなのに気がつく と、(河明り 312~313)
- ・あらけずりする(荒削) 川の左に聳える荒削りされたやうな山が、山国川に臨む所で、(恩讐の彼方に 73)
- ・あれはてる(荒果) はばかりから出て来ると、荒れ果てた縁側のそばへ狐のような目をした犬がじっと見ていた。(放浪記 17)
- ・あわくう(泡喰) 彼はオットマンの向側の美しい二人に気がつくと、泡喰つて、さうしてなかに異常な存在にぶつつかつたかのやうなあわて方で引つ返した。(真知子 125)
- ・あわれっぽい(哀) 伴子さんだから、かうして弱音もお聞かせします。哀れつぽくなつてゐる私も、お目に掛けます。(帰郷 257)
- あはれっぽいこと云ふやうだけど、二人の仲も今日だけかしらと思ふのよ。ねイ民さん……(野菊の墓 24)
- ・あんりつする(安立) ある共通の根本的仮定(独断的信条とか憲章とか)の上に安立している当の社会の意識や(哲学以前 36)
- ・いいあてる(言当) 脇目もふらず、ミシンを踏みながら、背後の本箱の置時計が、指している時間を、正確にいい当てる。(自由学校 6)
- ・いいおくる(言送) 父母の中一人、是非出京して此の問題を解決して貰ひたいと言ひ送つた。(蒲団 58)
- ・いいそえる(言添) 母は、みね子自身はまだ聞いてゐないのかも知れないと云ひ添へた。(真知子・前 161)
- ・いいにくい(言悪) つい一寸した久留米<sup>がすり</sup>餅でもいゝから、一枚お拵へになるといゝけれど、かういふ事は何か私が言ふのは言ひ悪い。(桑の実 137)
- ・いいほどく(言解) 親兄弟に話すも同じことだ。一向差支が無い。斯う自分で自分に弁解して見た。(破戒 141)
- ・いいわけする(言訳) それに就て自分は何も云ひわけしない。(友情 125)
- ・いえいする(家居) 淀屋橋筋の春琴の家の隣近所に家居する者は(春琴抄 181)
- ・いかえす(射返) 藩士たちはことさら大仰に弓をかまえて矢を射かえした。(落城 29)
- 模様の織り出された厚い糊の硬い卓<sup>テーブル</sup>布が美しく且清らかに電燈の光を射返してゐた。(こころ 87)
- ・いかりくるう(怒狂) 若者はこの乱暴にかつとなつて怒り狂つたが、(或る女・前 85)
- ・いきおいたつ(勢立) 広介が今日の期待に勢い立っているのを見ると、(くれない 90)

いしする(意志) 彼がなにか意志することは自由であるが、その実行が自分たちに関係

する場合に勝手なことをされては困るときめつけた。(真知子・前 141)

○われわれはただ現在の新たな感情を感情し現在惹起されている意志を意志するのみである。(哲学以前 113)

いしゅする(縊首) 巷説によると片野俊三は未亡人にたいする失恋の結果縊首したといふことになつてゐる。(厚物咲 40)

いしょくする(衣食) 独力で衣食してゐる娘にふさはしいやうな自惚<sup>うねぼれ</sup>、気儘などが、(多情仏心・前 358)

○第一、今日の政事家で政論に衣食するものが幾人ありませう。(破戒 189)

いずまう(居住) 父親は奥へも通らず、大きい柱時計や体量器の据ゑつけてある上り口のところに、行儀よく居住つて、お島の小さい時分から覚えてゐる持古しの火の用心で蓑をふかしてゐたが、(あらくれ 128)

いせこむ いせのきく布は切り開いた分量をいせこみ、いせのきかない布の場合はダーツにして肩になじませます。(若い女性 1956年3月 107)

いそんする(遺存) 中国では隋唐の史料も多く遺存しているからである。(日本及日本人 1953年9月 73)

いたがゆい(痛痒) それに、早速もち出された話にも、慥かに痛痒いところはあつた。(多情仏心・前 141)

いだす( Casting) 使をやつて正金銀行で換へた金貨は今 Castingされたやうな光を放つて懐中の底にころがつてゐたが、(或る女・前 32)

いだす(射出) 見も知りもせぬ路傍の人に与へるやうな、冷刻な驕慢な光をその眸から射出したので、(或る女・前 21)

いたずっぱい(痛酸) 急に信之は、可愛さのために涙ぐみさうになつて了つた。白熱した細い針金でも、ちりちりと胸さきへ揉み込まれるやうな、一種痛酸つぱい感じだつた。(多情仏心・前 262)

いたずらする(悪戯) おつぎは髪へ悪戯されたことを嫌つて思はず手を当て見て櫛の無くなつたのを知つた。(土・上 192)

いただるい(痛) 打ちのめされたやうに体ぢうがいただるくて、慾にも得にも起きてゐれなかつたので、(多情仏心・前 249)

いたてる( Casting) 見た目にも明るそうな白い色の鉄筋コンクリートの建物がいたてられ、(むらぎも 50)

いたんしする(異端視) 十九世紀末のドイツで、マルクス説に対する謂わゆる修正主義が、甚だ不評判で、異端視されたもの(ものの見方について 73)

いちこんする(一言) さて私は最後に世界の平和について一言するであろう。(貧乏物語 153)

いちゃいちゃする そんなにいちゃいちゃしたければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。(つゆのあとさき 18)

- いづらい 二人の争ひが募つてくると、上田は傍にゐるのがゐづらくなつて、そつと座を外して、隣りの家へ行つたが、(生まざりしならば 222)
- いどみかかる(挑掛) すぐもういゝ機嫌になりかゝつた信之が、大手を拡げ、まづ長男のぶの信紀に挑みかゝつた。(多情仏心・前 261)  
○二人の青年科学者たちは、体あたりで高崎山のサルにいどみかかっていった。(高崎山 32)
- いなくさい(田舎臭) 私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。(こころ 102)
- いなれる(居馴) 静かな町にはもう明が<sup>あかり</sup>ついて、山国に居なれた彼女の目には、何を見ても潤ひと懐かしみとがあるやうに感ぜられた。(あらくれ 36)
- いぬく(射抜) 近よつてねらいうちした元込銃に胸もとを射ぬかれて前のめりに倒れた。(落城 38)  
○つまり私は暗示にかかつた信徒みたいに主人の肉体から出て来る光りに射抜かれてしまったわけだ。(機械 15)
- いねむる(居眠) 伯父は途中で居睡つたと見へて、馬は夢中の英雄を乗せながらまたひよつくり木山の営に帰つた。(思出の記 47)  
○椅子に掛けて居睡つてゐた案内人の老人は、靴の音を聞いて目をあけて見た。(帰郷 265)
- いばりくさる(威張) 学校に少々寄付をしているからといって、あの威張りくさった態度は何だい君。(人間の壁・上 222)
- いばりちらす(威張散) 部下に対して威張り散らす者は、百中の九十九まで(残る一部はお殿様である)長上の前に匍匐して見せるであらう。(人格主義 115)
- いふかしむ(訝) 奥の間から洩れる精妙な撥の音を訝しみあの三味線には仕掛けがしてあるのではないかなどと呟いたと云ふ。(春琴抄 208)
- いふったい(燻) それから風呂桶へ腰を掛けてごしごしと洗ひながら「此りや燻つてえ」と復沈んだ儘ごしごしと垢を落して居たが(土・上 199)
- いまさらめかしい(今更) ロウるさい偽善家の「世間」と云ふものを、今更めかしく嘲笑する気は起らなかつたとしても、(多情仏心・前 254)
- いまさららしい(今更) 竜岡は今さらしく登喜子の顔を見た。(暗夜行路・前 32)
- いみきらう(忌嫌) 岡などは本能的にその人達を忌み嫌つてゐた。(或る女・前 139)
- いみしんちょうな(意味深長) 山は歳来寺、寺は帰命寺という何となく曰くありげな、三成にとっては意味深な名である。(人物往来 1956年12月 162)
- いやりたらしい(厭味) 同時に同じ女を失つた男が二人よつて、愚痴の云ひ合ひをするなどは、洒脱どころか、歯がうきさうに生々しく、青臭く、そして厭味ッたらしい話ではないか! (多情仏心・前 345)
- いゆする(医癒) 自分のような不治の難病を医癒する者のあろうはずはないと諦めれば

それまでである。(哲学以前 207)

いよくする(意欲) 精神が思考し感じ意欲する主体であるのに対して、物質が思考せられ感ぜられ意欲せられる対象であるところにある。(人格主義 53)

いらつかせる(苛) 安吉をいらつかせたのとは別な、斎藤自身の何か特殊な今日の勞れで(むらぎも 321)

いりあげる(炒上) 油鍋で鳥獸の肉をいり上げている者、(講談俱樂部 1956年5月 373)

いりあげる(入揚) 彼の父親は賭博や女に身上を入揚げて、その頃から弟の厄介ものであつたが、(あらくれ 12)

いれこむ(入込) 機失ふ可からずと次男の三次郎を入れ込まうとの心底は、実に鏡にかけて見るが如した。(思出の記・上 132)

いろあせる(色褪) 東海道線などとは別の国の汽車のやうに使ひ古して色褪せた旧式の客車が三四輛しか繋がつてゐないのだらう。(雪国 84)

○その思想や主張の内容は、党員の離合集散や党首の入れ替りでたちまち色あせてしまふ。(ものの見方について 129)

いろけづく(色気付) 色気づいた子供みたいなもので、することは無軌道でも、気持は、ほんとに、他愛ないんです。(自由学校 309)

いろぞめする(色染) 薬で黒く色染めしてあるので、はくとすぐピリッと破れるらしい。(放浪記 167)

いろづける(色付) 輝雄の顔付きや言葉や身振りが、今までとは全くちがつた、恐ろしい意味に色付けて蘇ってくるのであつた。(冬の宿 151)

いろづける(色付) 赤い版行で色づけたぼんぼんの袋は、どこかの縁日の、夜店のカンテラの灯と、ざわざわした人の往きかひを思はせた。(桑の実 96)

いろっぽい(色) ハデ好きで、今日も、キモノは小豆色に桜の小紋、化粧は厚く、髪もコッテリと、渦巻かせてある。まだ、眼つきも、色っぽい。(自由学校 38)

いろめかしい(色) 女は楷火の灰を防ぐために頭髮は手拭でつつみ、モンペをはいた膝を斜めに色めかしく横坐りして、(厚物咲 19)

いんじゅんする(因循) 日頃因循してゐただけ、障碍が起つたなら、極力これを排斥して思ふところを決行しやうといふ元氣さへ出て来たやうな心持になつた。(つゆのあとさき 92)

いんしょうする(印象) いろいろ違つた富士の姿を脳裏に印象して家に帰った後で、(ものの見方について 28)

いんしょうづける(印象付) 死ぬ間際の醜惡な外形だけを、うんと印象づけてしまふんだわ。(厭がらせの年齢 298)

いんどうする(引導) 多小高いところへ上つて人を引導しようというものは(大法輪 1956年6月 175)

いんねんする(因縁) あのミッドウェイ沖で縄をなくしてさんざん苦勞したという事実

が、大きく因縁してくるわけだ。(小説新潮 1956年9月 130)

いんれいする(引|例) 分かりきつた綴を間違へたり、引|例すべき参考書の或る章が容易に探し出せなかつたりした。(真知子・前 72)

ウェーブする その猫の毛と同じくらゐ綺麗にウェーブさせるためには可なり時間のかゝる自分の髪結ひと、(真知子・前 16)

うかびだす(浮出) 私の眼は、ちやうど数間先きに落ちてきた橙色のライトの中に浮び出した人物の方に釘づけにされた。(冬の宿 131)

○その台所の片隅では、薔薇のコップが、暗のなかでぼつりと浮び出して来る。(田園の憂鬱 118)

うかびでる(浮出) 永劫の時の流の一つの点に浮び出る泡沫にも比すべき私の生において(人生論ノート 141)

○体中をくすぐるやうな生の欲びから、やゝもすると何んでもなく微笑が自然に浮び出ようとした。(或る女・前 165)

○そのぼやけて簇つた花の一つ一つが、不思議と、母のその顔よりもずつと明瞭に目に浮び出て来る……(田園の憂鬱 98)

うきあげる(浮上) 模様の周囲に藍と白とを組み合わせにした小さなきさべり笹縁のやうなものを浮き上げて編み込んだり、(或る女・前 69)

うきうきしい(浮々) お島が毎日のやうに呼出されて、市内の芝居や寄席、鎌倉や江の島までも見物して一緒に浮々しい日を送つてゐた山の連中は、(あらくれ 213)

うけこたえる(受答) 事務長はあぶに当惑した熊のやうな顔付で、柄にもない謹慎を装ひながらうけ答へた。(或る女・前 167)

うけこむ(受込) 其言葉の尾に縋つて、何処かの雑誌へ周旋をと頼むだ。こんなのをめく目のふれ当りと謂ふのだらう。機を制せられて、先生も仕方がなさうに是も受込む。(平凡 104)

うけささえる(受支) その樹と樹との枝と葉とが形作るアアチ形の曲線は、生垣の頭の真直ぐな直線で下から受け支へられて居た。(田園の憂鬱 63)

うけみな(受身) そして、結局はお榮の意志で運命を決める。それよりほかはないという受け身な気持ちにおさまるのであった。(暗夜行路・前 186)

うずかす(疼) その黄色い煙の中を時々紅い火や青い火がちかちかと神経をうづかして駆け通つた。(或る女・前 155)

うすがすむ(薄霞) 目も遙かに、蓮華と菜種とが続いて、果は薄霞んだ連山まで、一望のうちにをさめるやうな、(多情仏心・前 292)

うすぐもりする(薄曇) その日も薄曇りしてゐたうへ、気温は昨夜から急に下つて、冬が舞ひ戻つたやうに底冷たかつた。(冬の宿 193)

うすぐもる(薄曇) それはうす曇つた日だつた。(風立ちぬ 154)

うすぐらむ(薄暗) モウモウと立籠めた湯気に、電燈の光さへ薄暗んだ浴室の、誰一人

の眼もないところで、(多情仏心・前 316)

うすざむい(薄寒) 田圃に薄寒い風が吹いて、野末のこゝ彼処に、千住あたりの工場の煙が重く棚引いてゐた。(あらくれ 20)

うすちゃける(薄茶) 主人夫婦と十七八の娘を頭に五六人の子供が薄茶けた明りの下に、思ひ思ひの方に顔を向けて眠つてゐるのは、(雪国 141)

うすにごる(薄濁) 薄濁つた液体のあちこちに、三箇所、耳ほどの大きさに、どろりとしたチョコレエト色の塊が散つてゐた。(多情仏心・前 182)

うすべったい(薄) 青年は震へ戦<sup>もろ</sup>て足を組み違へ、片一方を爪先き立てた。薄べつたい甲が、その爪先の下に敷かれたが、動かなかつた。(多情仏心・前 24)

うすぼける(薄) むしろ首ぎり水につかつた砂利船そのものとして感じていたその重い品物のイメージがふわあつと薄ぼけて、(むらぎも 321)

うすよこれる(薄汚) 汚い座敷に、うすよこれた座布団を敷いて坐ると、春子はすぐに言った。(人間の壁・上 255)

うすらつめたい(薄冷) 初秋だ、うすら冷たい風が吹いている。(放浪記 90)

うすらねむい(薄眠) 劇しい仕事のなかに、朝から薄ら眠いやうな顔をしてゐる乱次<sup>ぐら</sup>のない小野田の姿が、時々お島の目についた。(あらくれ 149)

うたぐりふかい(疑深) 鼻息の荒いお島たちは、人の気風の温和でそして疑り深いN一市では、どこでも無気味がられて相手にされなかつた。(あらくれ 178)

うちあたる(打当) 棚からもの<sup>の</sup>落ちる音や、ギーイと何かたわむ音や、波に横ッ腹がドブーンと打ち当る音<sup>の</sup>がした。(蟹工船 20)

○監督がアセリ出した。すると、テキ面にそのことが何倍かの強さになつて、漁夫や雑夫に打ち当つてきた。(蟹工船 51)

うちあてる(打当) しかしその生まな姿にとらわれ、その色や匂に打ち当てられる人間の宿命を感じることは、なんとも呪わしいことだ。(文芸春秋 1953年9月 310)

うちおろす(打下) その時或る説明しがたい心持で、身構へて把つて居た自分の杖をふり上げると、自分の前で何事も知らずに尾を振つてゐる自分の犬を、彼は強かに打ち下した。(田圃の憂鬱 58)

○脇差に白い晒布をまき、左から右にかけて手をひくと、介錯人が木刀をその後頭にうち下すのだつた。(落城 17)

うちかける(打掛) それに火をうちかけると、やがてめらめらと蛇の舌のような炎が積みあげた枯葉をなめた。(落城 35)

○そして二三十足らずの兵が落葉松の木を楯にかわるがわる元込銃をうちかけて来た。(落城 36)

うちかさなる(打重) その赤い光芒が櫓にうち重なつて倒れている黒首勢の死屍を赤くそめて浮き上らせた。(落城 36)

うちかたる(打語) その晩事務長が来て、狭つこい boudoir のやうな船室<sup>ふね</sup>で晩くまでし



めじめと打ち語つた間に、(或る女・前 209)

うちかふせる(打被) うつかり出る所を一人が蒲団を持つて後から打被せる。(思出の記・上 67)

うちかふる(打冠) 其処らに落ち散つた藁屑を早速の紐に、打冠つた。(思出の記・上 180)

うちきょうずる(打興) 彼等は、まるでスポーツに打ち興ずるが如く、この神をも許さざる大罪を犯しつづけたという。(実話雑誌 1956年8月 126)

うちくずす(打崩) 敵弾は石垣を無残にうちくずしていたが、やがて一弾が西丸を堀の中にうちおとすと砲声はやんだ。(落城 47)

うちくつるぐ(打寛) この男は打ち寛いだ風で、その猫の背を撫で撫で物を云つてゐる。(伸子・上 15)

うちこめる(打籠) お島が始めて自分自身の心と力を打籠めて働けるやうな仕事に取着かうと思ひ立つたのは、(あらくれ 140)

うちしおれる(打消) 今日はその擬態をうまく身に付けることもできぬほど、実際はまつたく打ち消れてゐるのであつた。(冬の宿 196)

うちしめる(打湿) 実に其年の夏休程打湿つた休暇は無かつた。(思出の記・上125)

○市九郎は、死骸を見守りながら、打ちしめつて聞いた。(思讐の彼方に 73)

うちたおす(打倒) ヤリを打ちこまれ、怒りに狂う野牛、その角に打ち倒された人間。(学問の動き 249)

○林中尉は特別に装工兵にかたく打たせた長靴の底で木谷の向うずねをけり上げてうち倒した。(真空地帯・上 169)

うちたてる(打立) どうすれば揺ぎなき真の教育の基準をうち立てることができるか。(人間の壁・上 100)

○経済学で精密な科学を打樹てたそのマルクスは、(ものの見方について 70)

うちちらす(散) 金火箸ほどのステツキで右往左往にうち散らし、自分は微傷も負はなかつた。(思出の記・上 188)

うちながめる(打眺) モニカは神色自若としてその前に進み、跪き、先づその像を手にとつてぢつと打眺めた。(青銅の基督 115)

うちならす(打鳴) 今度はその厚ぼつたい翅でもつて、ちやうど乱舞の足音のやうに、ばたばた、ばたばた、と障子紙を打ち鳴らした。(田園の憂鬱 83)

うちひしぐ(打拉) 日本人としてはじめてのノーベル賞を受賞して、敗戦に打ちひしがれた日本人の血を沸かせた湯川秀樹氏。(物質の根源と宇宙を結ぶ 100)

うちひらく(打開) 涙で重つた臉は段々打ち開いたまゝの瞳を蔽つて行つた。(或る女・前 156)

うちひらける(打開) そこから急に打ちひらけて、遠い地平線までも一帯に眺められる。一面に薄の生ひ茂つた草原の中に、(風立ちぬ 76)

うちふる(打振) 彼も帽子を脱つて、彼らに向ひ、ゆるやかに大きく打ち振つた。(伸

子・上 161)

○彼は頭を打ち振り乍らかう呟いて、石段の降り口の方に向つた時、(青銅の基督 60)  
うちふるう(打震) 泣く音をたてまいとして烈しくうち震ふ胸を膝へ抱きあげ、両腕に  
ぢつと力をこめた。(多情仏心・前 200)

うちふるえる(打震) 折から、鐘楼で撞き始めた鐘の音が花を落つてうちふるへながら、  
余音をひろげて行つた。(帰郷 130)

うちふるわす(打顫) おしまひには、市九郎の槌の音のみが、洞窟の闇を、打ち顫はし  
て居た。(恩讐の彼方に 79)

うちまかす(打負) 木村は自分の感情に打ち負かされて身を震はしてゐた。(或る女・上  
197)

うちまかす(打任) 先生は先づ諸老先生が遠来の客に育英学舎を掌どるの大任を与へ、  
具つ全然打任かして思ふまゝに意見を行ふの余裕を与へられたことを謝し、(思出の記  
・上 143)

うちまくる(射) 然し同艦の火砲はその総力をあげて、射ちまくっている。(特集文芸春  
秋 1956年 私はそこにいた 47)

うちまける(打負) はじめはそれを聞くまいとしながら遂に打ち負けて病人からそれを  
聞き出してしまつたあの不吉な夢のことまで、(風立ちぬ 106)

うちまたがる(打跨) 選ばれた使者は、李陵に一揖してから、十頭に足らぬ少数の馬の  
中の一匹に打跨ると、一鞭あてて丘を駈下りた。(李陵 156)

うちまもる(打目守) 一そう底に深く掘がつて見える黒瞳で、遠い鍵盤をぢつと打ちま  
もつてゐた。(真知子・前 135)

うちみやる(打見) 話の糸目を引つ張り出しておいて、まともに博士を打ち見やつた。  
(或る女・前 111)

うちみる(打見) 前にも云つた通り外来の先生、如之打見た所芝居の女形にもなりそう  
な優男(思出の記・上 114)

うちむれる(打群) 今来た往還も、往還の此方に二三人打群れて、立つて居るのも、手  
にとる様に見へる。(思出の記・上 41)

うちやる(打遣) 好い加減な生返事をしたなり、打ち遣つて置きました。(こころ 234)

うちよる(打寄) それから老若打寄つて酒宴をした。(阿部一族 61)

うちわする(打忘) あのころほど一切を打ち忘れて青葉の匂いを吸い込んだ時もない。  
(私の人生観 43)

うちわる(打割) 竊に瓜や西瓜を盗んで路傍の草の中に打ち割つた皮を投げ棄てて行く  
のである。(土・上 195)

○打ち割って云えば、母と二人だけで簡素な生活に這入れる事が、ほんとうは一番の  
理想なのだけれども、(放浪記 301)

うつうつする(憂々) 憂々した気持が、もたれかゝるやうに、其処へ雪崩れて行く。

(蟹工船 54)

うつける(虚) が、彼女はうつけたやうにぼんやりと目を見ひらいてゐるきりだつた。

(風立ちぬ 113)

うつしだす(映出) 小さな箱のような電車の車内の灯がその一瞬、丘の上の二人の姿を映し出した。(くれない 143)

うつしとる(写取) 附近の山川地形を剩す所なく図に写しとつて都へ報告しなければならなかつた。(李陵 156)

うつゆうする(鬱憂) 日英開戦のとき、ピゴット少将は鬱憂して狂気のやうであつた。

(文芸春秋 1954年1月 66)

うでぐみする(腕組) 一頭の牛の前で腕組みして、誰かの説明に鷹揚に背いてゐる岡部の小さい姿を、(闘牛 149)

うのみする(鵜呑) アメリカが日本案にケチをつけたという恰好になつても困るし、こちらがまるまる鵜呑みした恰好も困る。(世界 1954年3月 66)

うまれでる(生出) 若い母親が胎内に育つて動いてゐる子供を感じながら、生れ出てからの姿や形をいろいろに想像してゐるのと(帰郷 187)

○その客間は若い信者や、慈善家や、芸術家達のサロンとなつて、そこからリバイバルや、慈善市や、音楽会といふやうなものが形を取つて生れ出た。(或る女・前 28)

うまれもつ(生持) 一種の意地であろう。また、生れもった氣質と体質のせいだろう。(自由学校 12)

うらぎりする(裏切) 現に其自尊心を裏切してゐる物欲しさうな顔付とを(こころ 188)

うらみる(恨) いやたとい法然聖人にだまされて地獄に墮ちようと私は恨みる気はありません。(出家とその弟子 85)

うりあげる(売上) 今年は、十月までで二十億六千万円を売上げているから、年間売上高は二十一億円を超える。(ダイヤモンド 1956年12月18日 88)

うろおぼえる(覚) それから、映画俳優の名などをうろおぼえてきて、それはどんな俳優かときくこともあり、(冬の宿 116)

うろんくさい(胡乱臭) 櫛を持つた右の手を、頬のあたりまでさげて、ぢろりと見やつた眼つきには、胡乱臭いと云ふ以上に、やゝ狼狽<sup>うろたへ</sup>したやうな色さへ見えたが、(多情仏心・前 320)

うわむける(上向) 上向けた靴の大きさには葉子は吹き出したい位だつた。(或る女・前 234)

うんぴつする(運筆) 純粹に運筆することの、その苦しさよりも、(富嶽百景 63)

うんめいつける(運命付) 人は死すべく運命づけられた動物だから。(哲学以前 204)

えいたおれる(酔倒) 間も無く細君も奥の方から出て来て、其処に酔倒<sup>ふひたふ</sup>れて居る敬之進が復た復た丑松の厄介に成つたことを知つた。(破戒 242)

えがきだす(描出) 逆さまに映る三層の楼閣を囲んで、陽を受けた枝の影が水に描き出

されてゐる。(帰郷 263)

○どうやら吉川は、いささつを目に見える形で安吉の前に描き出したいのらしい。  
(むらぎも 194)

えだわかれする(枝分) 上へ行って枝わかれした大きな枝、(むらぎも 292)

えづけする(餌付) ニホンザルとおなじようにゴリラを餌づけして、(高崎山 48)

えんざする(円坐) 枯枝を焚いてまわりに円坐した黒菅藩士たちは、(落城 24)

おいあげる(追上) 巨大な原子核破壊装置が次々に生まれ、宇宙線研究のあとを追いついてきた。(物質の根源と宇宙を結ぶ 118)

おいかふせる(追被) 彼女の返事に、力一杯、何かを追いつ被せるように、「ウンニャ、娘なんか、おれは、貰わねえ。そんなものには、用はねえ！」(自由学校 273)

おいそろ(生揃) あゝ此翼が生へたらばと僕は未だ中々生ひ揃はぬ吾翼をかきむしりたく思ふのであつた。(思出の記・上 214)

おいたつ(生立) 罪人の心裡にも美しく生いたつべき萌芽がある。(哲学以前 27)

おおいかくす(覆隠) 振り払ひもしずに——然し、相変らず両手でしっかりと覆ひ隠してゐた顔を、なほその上にも背けたが、(多情仏心・前 290)

○駒子は、われ知らず、シンミリした口調になった。それを、掩ひ隠すように、甘鯛の照焼に、箸をつけた。(自由学校 310)

おおいがたい(覆難) 政党政治の混乱とこれに対する国民の不信は、おおい難いものがある。(実業之日本 1956年6月1日 23)

おおいかぶさる(覆被) 黒い雲が建ち並んだ大きな建物の上に重苦しくおおいかぶさっていた。(暗夜行路・前 29)

○パン・ゲルマンの思想は、こうしてどことなくドイツ国民に覆いかぶさってきて、(ものの見方について 77)

おおうける(大受) 『カラ手旋風』が大受けするのと同じように、(月刊ファイト 1956年1月 14)

おおかわりする(大変) 同じころのロンドンでは、大臣も労働者も、あまり大変りしない食生活をしていて、(ものの見方について 123)

おおさわぎする(大騒) 夕方からは一人の女中に手伝つて、大騒ぎして晩の料理を拵へたりすることが出来た。(真知子・前 11)

おおせる(仰) お師匠様はいつもそのように仰せられます。(出家とその弟子 46)

おおほねおる(大骨折) 僕は先刻外人との対話に大骨折つた不手際を思ひ出して赤面しながら「いや一向出来ません」(思出の記・上 199)

おおゆれる(大揺) 車体がカーヴの内側へ傾きながら大揺れして、(むらぎも 214)

おおよろこびする(大喜) すると子供たちは大変喜びます。にこにこして、大喜びするんです。(人間の壁・上 193)

おおわらいする(大笑) いちど、大笑ひしたことがあつた。(富嶽百景 54)

おくりむかえする(送迎) それとは見せず、いつも艶麗に、店に来る人、また出て行く人を送り迎へてゐた。(帰郷 35)

おくりむかえる(送迎) 今まで閉止してゐた乱想の寄せ来るまゝに機敏にそれを送り迎へようと身構へた。(或る女・前 51)

おぐろい(小黑) 泥か何かの<sup>とばし</sup>辻がついた跡でゞもあるやうに、小黒<sup>にじ</sup>く滲んでゐる。あとでそつと摘み洗ひにして見よう。(桑の実 155)

おこりたつ(歳立) そのおこり立つた真紅の炭火を見た瞬間、(田園の憂鬱 114)

おこりつける(怒) 昂子は怒りつけるやうな眼つきをして、顔を上げた。(波 213)

おさえこむ(押込) それは心の奥底の方へおさへこんでしまつた。(冬の宿 185)

おさならしい(幼) あはれと思つて最う暫くつきあつて、而して諸国を行脚なすつた内のおもしろい談をといつて打解けて幼<sup>も</sup>らしくねだつた。(高野聖 10)

おさまりかえる(納返) 女房の方に背を向けて腰かけ、三吉は納まり返つて、悠々と一服吸ひつけた。(多情仏心・前 218)

おしかぶさる(押被) 薔薇を抱擁する日向は追追と広くなつた。押しかぶさつた梅や杉や柿の枝葉が、追追に刈られたからである。(田園の憂鬱 32)

おしかぶせる(押被) 剛介の眼に一瞬、不審の色がひらめいたようだ。孫七はすかさず押しかぶせ、口早にいつた。(読切倶楽部 1956年12月 364)

おしげづく(怯気付) 我が前ではあの通り広言しておき乍ら、今更辺地に行つて急に怯氣づくとは何事ぞといふ。(李陵 155)

おしこくる(押) 私をその米袋で押しこくつて荷づくりしていた、瘦せぎすのおとなしい未亡人風の女も、(世界 1953年10月 167)

おしせまる(押迫) お島が此こそと見込んだ商売に取着きはじめたのは、十二月も余程押迫つて来てからであつた。(あらくれ 146)

○その中央にある建物を周囲から遠巻きして押迫つて来るやうにも感じられた。(田園の憂鬱 24)

おしつつむ(押包) 今迄は意識下に押しつつんでゐた情慾を一時に解き放つてしまつて、(冬の宿 83)

おしながす(押流) 川上から押流<sup>でいしや</sup>す泥砂の一面に盛上つたところを見ても、<sup>はんらん すさま</sup>氾濫の凄じさが思ひやられる。(破戒 98)

○最後まで悪戦苦闘した社会党の努力も、(多数)という議会の約束によって押し流されてしまつた。(人間の壁・上 354~355)

おしならぶ(押並) 葉子はつかつかと進みよつて事務長と押し並んで寝台に腰かけてしまつた。(或る女・前 150)

おしひしぐ(押拉) 然しそれよりもその瞬間に葉子の胸を押しひしぐやうに狹めたものは、底のない物凄不安だつた。(或る女・前 209)

おしひしめく(押鞣) またたちまち、灰色の雲が空にぎつしりと押しひしめき風がはげ

しく鳴り、(冬の宿 99)

おしひしゃげる(押) 束髪<sup>さくぱつ</sup>の頂<sup>たか</sup>きが、丁度、深くかぶつた鳥打帽で、いくらか押しひしやげられた耳と、すれすれの高さだつた。(多情仏心・前 17)

おしゃれな(洒落) 神倉先生はまだ二十四、五の若くておしゃれな女教師だった。(人間の壁・上 77)

おしろいくさい(白粉臭) 白粉臭い人間を相手にした時と、代議士かなんかを痛振つてゐるのとは、ちつた<sup>けじめ</sup>ア差異<sup>さ</sup>がつけられさうなもんだね。(多情仏心・前 56)

おそいかかる(襲掛) 翌日、李陵韓延年速かに降れと疾呼しつゝ胡軍の最精銳は、黄白の幟<sup>しほ</sup>を目指して襲ひかゝつた。(李陵 163)

○いましがたまで私達を肉体的ばかりでなく、精神的にも襲ひかかつてゐるやうに見えた危機を、(風立ちぬ 116)

おちかかる(落掛) 斯うして戸板に載せて、其上から外套を懸けて、扇屋を指して出掛けた頃は、月も落ちかゝつて居た。(破戒 293)

○大きな重い枝はそれの小枝を地面へ打つけて落ちかかつた。(田園の憂鬱 32)

○父は自分の達者な保証を自分で与へながら、今にも己れに落ちかゝつて来さうな危険を予感してゐるらしかつた。(こころ 111)

おちつきます(沈着澄) 「風邪ですか。」と尋常四年の教師が沈着き澄まして言つた。(破戒 263)

おちばする(落葉) ともすると又常磐木が落葉する。(高野聖 23)

おったまげる(魂消) スビレーンでいちばん面白いのはこれだと、きいて、読んだわけだが、オッタまげた。(改造 1954年1月 149)

おどおどしい 理想の人でゝもあるやうに近寄つて来た少女達は、葉子におどおどしい同性の恋を捧げながら、(或る女・前 48)

おとこくさい(男臭) まり子は、太刀川圭一の下宿で、男臭い下着のほころびを繕つていた。(小説と読物 1956年6月 81)

おとこすきる(男好) 色が白くポツチャリして男好きする娘だつた。(面白倶楽部 1956年2月 209)

おどむ(澁) 高原地の古い町が澁んだやうな静かさと寂しさで、彼女の曇<sup>うろ</sup>んだ目に映つた。(あらくれ 250)

おどりくるう(踊狂) 領地の村の娘をあつめて焚火のまはりに踊り狂ひながら、焰の中に彼の肖像、手紙、一切の記念を焼きすてた。(冬の宿 123)

おにごっこする(鬼) 上靴の儘、机の上を鬼ごっこして遊んでゐる所へ、偶然先生が来合せられたのである。(心 1954年2月 80)

おびえあがる(怯上) そのかほをみただけで、娘は怯えあがつた。(中央公論 1954年3月 259)

おぼわる(覚) 三味線や歌を習わせられました。よく覚わらないので揆<sup>げ</sup>でたたかれまし

た。(出家とその弟子 135)

**おもいいる**(思入) それだつたのに思ひ入つて内田の所に来て見れば、内田は世の常の人々よりも一層冷やかにさむ思はれた。(或る女・前 55)

○職人はやつぱり深く自分のことに思入つてゐるやうに、それには耳も仮さなかつた。(あらくれ 168)

○母も今頃は慎太郎は東京に着ゐて、最早何処ぞの学校に入つたことゝ思ひ入つて居るであらふ。(思出の記・上 196)

**おもいいる**(思入) (しばらく沈黙、やがて思ひ入れたやうに) お師匠様、あなたは私を愛してくださいますか。(出家とその弟子 112)

**おもいうかぶ**(思浮) 長唄といへば直ぐ踊の舞台が思ひ浮び、芸者の座敷を思ひ出さぬといふ風である。(雪国 69)

○安吉の頭に「何といつても」という辰野隆吉の論文の癖が思いうかんだ。(むらぎも 179)

**おもいおく**(思置) これでもう此の世に何一つ思置く事はありません。(つゆのあとさき 116)

**おもいおよぶ**(思及) 彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬ事であつた。(恩讐の彼方に 92)

**おもいかえす**(思返) 江戸時代の作者がどれだけ優れてゐるか知れないと言つたことなどを夢のやうに思返した事もあつた。(つゆのあとさき 58)

**おもいくっする**(思屈) この娘は、何かしきりに心に思ひ屈してゐる(河明り 269)

**おもいとる**(思取) 木下がやさしい性情が好きなのだ思ひ取つては、そのやうにならうと試み、(河明り 335)

**おもいめぐらす**(思廻) 列車が川崎駅を発すると、葉子はまた手欄にてすり寄りかゝりながら木部の事を色々と思ひめぐらした。(或る女・前 22)

○ビキニ鳥の死の灰をかぶつた漁船の被害などから思ひめぐらせると、(文芸春秋 1954年5月 171)

**おもいよる**(思寄) 心静かに考へて置かうとした木村に対する善後策も、思ひよらぬ感情の狂ひからそのまゝになつてしまつて、(或る女・前 196)

**おもがわる**(面変) 一つはその故で面変つては見えなけれど、十年以前に二三度見かけたことのある、これこそ窪井謹五郎に相違なかつた……。 (多情仏心・前 315)

**おもろい** こりやワリとオモロイおつさんやないかと一部で評判がよろしくなつた、(文芸春秋 1954年2月 259)

**おやみない**(小止) その上に、ランプの焰がどうした具合か、毎夜、ぼつぼつと小止みなく揺れて、どこをどう直して見ても直らなかつた。(田園の憂鬱 60)

○九月になると、すこし荒れ模様の雨が何度となく降つたり止んだりしてゐたが、そのうちにそれは、殆んど小止みなしに降り続き出した。(風立ちぬ 104)

**おりあしい(折悪)** 折り悪しく高熱が出たところで、心配だから、たびたび腰を浮かして辞し去ろうとするのを、(私の人生観 71)

**おりかがむ(折屈)** 仰向きに臥たまゝ両腕をひろげ、木村が折屈むのを待つて、ぐつと引寄せながら、(つゆのあとさき 88)

**おりかがめる(折跼)** そんな篠原の面前に、そつと両膝を折り踞めて頭を垂れると、(別冊文芸春秋 1956年 54号 296)

**おりしく(折敷)** 私は砂に折り敷き、いゝ加減に発射した。(野火 85)

**おりめたしい(折目正)** 庄馬鹿が、自慢の羽織を折目正しく着飾つて、是見<sup>み</sup>よがしに人々のなかを分けて歩くのも、をかしかつた。(破戒 213)

**おんきせがましい(恩着)** この悲劇的な恩着せがましい手紙は、人のよい母親をふるへ上らせた。(潮騒 150)

**おんでる(出)** 当然みずから内閣をおん出るべきはずであつたが、(ものの見方について 98)

**おんなくさい(女)** 教室では、女教師は女であつてはならない。女くさくてはいけないが、しかし清潔な女でなくてはならない。(人間の壁・上 85)

**おんりする(下)** 「さあ、今度おんりするのよ。君<sup>きみ</sup>やにおんぶしてエッチャエッチャつて行くのよ」(暗夜行路・前 82)

**がいかする(外化)** かくして外化され客観化された自らをさらに種々の方向に統一肯定する対象構成の原理である。(哲学以前 230)

**がいしょうする(概称)** かういふ叫声を日本語は「悲鳴」と概称してゐるが、あまり正確ではない。(野火 84)

**かいせんする(快戦)** 翌朝、久しぶりで肉薄米襲した敵を迎へて漢の全軍は思ひきり快戦した。(李陵 160)

**がいそうする(外挿)** つぎつぎ発見される新事実をまえに、地球上の物理学をただ外挿した考へで進んでゆくことができるかどうかも自明ではないし、宇宙を対象とした新しい物質観や物理学が必要なのかも知れない。(宇宙の謎はどこまで解けたか 99)

**かいたたく(買叩)** 作家になりそこねたような人々の原稿がやすく買叩かれた。(むらぎも 294)

**かいてんする(開展)** この痛みは彼の体験を深めて、新しき人生の視野を開展する。(人格主義 172)

○最も放胆に開展しながらも、発端と大団円とがしつくりと照応できる物語のやうに、(田園の憂鬱 64)

**かいならす(銅馴)** この年月銅馴らした鸚鵡の籠を掃除し、盆栽に水を灌ぎなどした後、(つゆのあとさき 90)

**かいほす(掻乾)** 僕等がどんなに踏張つたつて、こいつを掻乾<sup>かいほ</sup>すことは出来やせんよ。(波 66)



かえりさく(返咲) ひところは、絹は影をひそめていましたが、また最近返り咲いてきています。(装苑 1956年 5月 115)

かかずらわる(拘) 明子の当てこする愚痴にかゝずらわるまいとしていた。(くれない 109)

かがみこむ(屈込) その足元にかがみこんで、「上等兵殿、上等兵殿、どうか、自分に巻脚絆とらして下さい……」とたのみこんでいた。(真空地帯・上 96)

かがめこむ(屈込) もともと不自由な世界に、身を屈め込んでゐて、人間が卑屈になるのは当然だ。(帰郷 138)

かがやかな(輝) あの細い雲の隙間のところに、明るいかがやかな光の名残を残して。(光は夕日の光) (田園の憂鬱 68)

かがやきわたる(輝渡) 朝の空は蒼々とはれて、日は小さくその蒼さの中に融け入るやうに輝きわたつてゐた。(冬の宿 41)

○かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。(蒲団 7)

かかりきる(掛切) 机にかゝりきつて、幾枚かの下図を引いた。(青銅の基督 101~102)

かきゅうする(下給) しかし勿論酒は祭日に下給されるべきものだった。(真空地帯・上 176)

かきわけ(嗅分) <sup>けもの</sup>獣が巢の安全、或は近づいた危険を本能的にかきわけると同じやうな直覚を持つてゐる。(伸子・上 178)

かくいつする(画一) しかし国民の各個人に他律的服従を強ひて、異れる個性を画一せんとする点において(人格主義 151)

かくいつてきな(画一的) 画一的な義務教育は、この子にもやはり英語を教え、物理、化学を教え、代数、幾何を教えることになる。(人間の壁・上 204)

○しかしながら義務教育はすべての子供に画一的に課せられている。(人間の壁・上 204)

かくしもつ(隠持) そして一二の侍は隠し持つてゐた刀を執つた。(青銅の基督 94)

かくしょうする(確証) 助かる見込みが絶無と確証されぬ前に(むらぎも 192)

かくふする(拡布) しかるに他国を侵略することによつて自国の文化を世界に拡布せんとするのは(人格主義 150)

かくようたる(赫耀) こはこの大英国の栄光中最もかくようたる赫耀たる霊彩を放てる宝玉である。(貧乏物語 166)

かけよる(駈寄) 私はその家に駈け寄り、階の欠けた階段を飛び上つて、踏み込んだ。(野火 73)

かさだかい そのなかにまじった白粉の白い顔や風にひるがえる色彩のある裾やその手にさげたかさだかい持物は木谷の眼をとらえずにはおかなかった。(真空地帯・上 143)

がさつく がさついていながらばらっとした家々の屋根がみんな堤防より低かった。(むらぎも 311)

かさねあわせる(重合) 数字全体を標準数字と重ね合わせるのではなく、それぞれの数字の特徴点だけで比べようという、うまい方法が考え出された。(文字を読む機械 388)

かさねぎする(重着) 今日は急に春になつたやうに温かつたので、重ね着した肌は汗ばんで、(生まざりしならば 178)

かじとる(舵取) 人間と人間との関係をうまく舵取ってゆく行き方は、(ものの見方について 51)

かしまだつ(鹿島立) 一人ぼつちで遠い旅に鹿島立つて行く自分といふものがあぢきなくも思ひやられた。(或る女・前 82)

かしやくする(呵責) 自分はなぐさまれる犠牲、お客は呵責する鬼ときめました。(出家とその弟子 129)

カジュアルな カジュアルな上衣として家庭で着たり散歩に使うとか、(ドレスメーカー 1956年12月 214)

かじょうする(過剰) 俗説によると精力が過剰すると、鼻血が出るという。(文芸春秋 1954年1月 88)

かすかすする ぐずりと鼻をならして、手紙から顔を上げると、カスカスした低い声で、「浅川のためだ。死んだと分つたら、弔ひ合戦をやるんだ。」と云つた。(蟹工船 42)

かすまえる(算) 今でこそ私は腰弁当と人の数にも算まへられぬ果敢ない身の上だが、(平凡 8)

かせする(枷) われわれの失うものは、人類の良心にかせせられた物質の鉄鎖であり、(原子党宣言 417)

かたいきする(肩息) が仔獅子は、僅かに肩息してゐるのが認められるのみで、幕を見込んだ形を崩さない——。(俳句 1956年9月 107)

かだいしする(過大視) 生産過剰傾向を過大視して、景気の反動を心配するのはまだ早い。(ダイヤモンド 1956年10月2日 16)

かたがえしする(片返) スカートの前の両脇に中心側へ片返しした片ひだをとり、(装苑 1956年8月 208)

かたがえす(片返) ぬい代は肩で一センチ五ミリ、脇下で一センチにし、つれる部分に切込みし袖に片返します。(主婦と生活 1956年3月付録 春のニューデザイン 82)

かたちづく(形付) 箒の目のあとが扇形にうつくしく形づいているのだが、こんなことが今は何になるうか。(落城 14)

かたちづける(形付) 同様に綿を積み重ねて頬や額、顎を形づけます。(若い女性 1956年8月付録 手芸と工作 95)

○小さいほうのりんごは丸く形づけて皮をむき、(主婦と生活 1956年5月付録 家庭料理 161)

かちえる(贏得) 此の場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分に贏ち得るやうに勉めた。(蒲団 55)

○フェルミの理論が贏ち得たすべての成功をそのまま引きつぎ、(原子物理学の発展とそ

の方法 330)

**かちかちする** 梶原さんはかちかちした人でね。(文芸春秋増刊 1954年2月 76)

**かちすすむ**(勝進) 3—0 明石中と勝ち進み。(野球界 1956年8月 143)

**かちづける**(価値付) 観察力の点で、同時に自分自身をも高く価値づけ、よく役づけることも出来るわけだつた。(多情仏心・前 122)

**かちのこる**(勝残) 四日目に勝残つた者は、全部寄手力士として勤進寄角力に出場する資格が獲られる。(読切小説集 1956年7月 313)

**かちめな**(勝目) 広介が、黙っている明子に勝目な挑戦をするように、(くれない 25)

**がちがちする** こういうガチャガチャした店ばかりではなく、もう少しおっとりした上品そうな酒場を選ぶことも出来た筈だが、(週刊東京 1956年10月6日 43)

**かきつく**(活気付) 自分特有の動機を、スッカリ失くして居た市九郎は、女の声を聴くと、蘇つたやうに活気づいた。(恩讐の彼方に 61)

**かきづける**(活気付) 二人のいまお互に感じ合つてゐる一種の同情のやうなものが、そんなとりとめのない話をまで活気づけるやうに見えた。(風立ちぬ 78)

**かききな**(活気) 活気な老人で、八十何歳と云ふ歳をして、<sup>なげし</sup>承塵には鎗だの鉄砲だの飾つて、(思出の記・上 30~31)

**かききりする** かききりした、女々しい点のない自由なその性格は嫌ひではなかつた。(真知子・前 22)

**かつてしる**(勝手知) 勝手知つた縁側の方に廻つた彼女の瞳に映つたのは、(闘牛 84)

**かつてほうだいな**(勝手放題) そんな勝手放題なまねをされるのを葉子は見向きもしないで黙つてゐた。(或る女・上 46)

**かどだたしい**(角立) しかし只温かく、柔和なと云ふのもちがふ。それでゐて角立たしい気持ちがあるのでは微塵もない。(青銅の基督 87)

**かなぐる** (為<sup>しやう</sup>様がないねえ、)といひながら、かなぐるやうにして、其の細<sup>ほそ</sup>帯<sup>おび</sup>を解きかけた、(高野聖 52)

**かねそなえる**(兼備) 生体と同じような自動制御機構をも、かねそなえていなければならぬ。(人工心臓を体内に 370)

**かねもうけする**(金儲) かかる貧乏人の無知なる女を相手に高価なぜいたく品を売り付けて金もうけすることも、(貧乏物語 147~148)

**かばんする**(下番) そして彼は衛兵の交代後、衛兵を下番した木谷に部隊にかえるから自分と一緒にくると命令した。(真空地帯・上 185)

**かみがかかる**(神掛) さうした時の津上の態度には、頭の冴えといふよりも、少々神がかつたやうなところが感じられた。(闘牛 111)

**からつな**(苛辣) 寝るにも起きるにも、自分ばかりを凝<sup>みつ</sup>視めて暮してゐるやうな、年取つた母親の苛辣な目が、房吉には段々厭はしくなつて来た。(あらくれ 95)

**かりかりする** 五目やきそばぐらいなら——かりかりした柔さ、どろりとした中の筍、

- えんどう、椎茸がうまかった。(むらぎも 204)
- かりだす(借出) 昭和電工も昭和二十三年度末までに鶴見工場修復などのために数回にわたつて二十六億円を借出しました。(世界 1954年2月 183)
- がんいする(含意) 他の諸国のぎせいにおいてアメリカの利益をはかろうとする考え方を含意するものであろうか。(改造 1953年8月 13)
- かんがえうかぶ(考浮) 少なくともそういう事を考え浮かぶ人があるはずである。(貧乏物語 90)
- かんがえおよぶ(考及) さうして或一つの心持を、仲間の他の者にはつきりと伝へたいといふ人間の不可思議な、靈妙な慾望と作用とに就ても、おぼろに考へ及ぶのであった。(田園の憂鬱 38)
- かんがえこむ(考込) 三浦は、なほ暫く考へ込んでるたが、思ひきつたやうに立ち上つた。(闘牛 126)
- かんがえだす(考出) 他方では教科書法案を考え出したり、教科書国定問題を考え出したり、いろいろ苦勞しているわけです。(人間の壁・上 319)
- かんかんする 暑い日がかんかんしてる中でね。(桑の実 122)
- かんきわまる(感極) 嬉しい。安心した。<sup>かんきわ</sup>感極まつた涙がはらはら伸子の頬を転がり落ちた。(伸子・上 60)
- かんこうな(寛宏) 動機と心情とに対する寛宏な洞察なしに外形のみによつて他を審かむとする者。(人格主義 78)
- かんこする(感悟) 和尚この一喝の下に始めて大いに感悟するところあり、すなわち改めて滴水と号し。(貧乏物語 140)
- かんじとる(感取) 彼は染一等兵が自分の方に気をくばっているのを感じ取った。(真空地帯・上 136)
- かんしょうする(感傷) 感傷的な人間は回顧することを好む。ひとは未来について感傷することができぬ。(人生論ノート 108)
- かんじょうする(感情) 「今やわれわれの任務は、無産者階級の理論を理論しておるところにはなくて、実に、無産者階級の感情を感情するところにあらねばならぬのであります……」(むらぎも 75)
- かんしんする(関心) 我々の日常の生活は行動的であつて到着点或ひは結果にのみ関心し、その他のもの、途中のもの、過程は、既知のものゝ如く前提されてゐる。(人生論ノート 135)
- かんずる(癒ずる) 彼等の小さい娘の喜久子は癒ずつた、けたゝましい泣声できまつて眼を覚ます。(真知子・前 100)
- かんぜいする(勧説) 細川家でも困り果て、帰邸を<sup>かんぜい</sup>勧説した。(私の人生観 138)
- かんせつする(関説) さらに歴史科や地理科においても、道德問題につねに関説することは可能であるばかりでなく、必要でもある。(中央公論 1953年9月 14)

かんぜんする(完全) 更に其の開墾に第一の要件である道具が今は完全して自分の手に  
提げられてある。(土・上 104)

かんだつ(癱立) 台所の流し元に唯一枚嵌められて居るガラス板が、がちやがちやと揺  
れどほしに揺れて、彼の耳と心とを癱立たせた。(田園の憂鬱 99~100)

かんちがいうる(勘違) 彼はその頃からすでに木谷を中堀中尉の側の兵隊であるとかん  
ちがいでいたように思えるのである。(真空地帯・上 169~170)

がんちくする(含蓄) それは無限に豊富なるものを可能的に含蓄していて自ら内面的に  
分化発展する絶対自由の活動であるとも言えよう。(哲学以前 270)

かんつうする(感通) 犬好は犬が知る。私の此心はボチにも自然と感通してゐたらしい。  
(平凡 32)

かんとうする(完登) 次にいずれかの登山隊が出て、比較的天候に恵まれさえすれば必  
ず完登できるという結論がでているわけで、(娯楽のみうり 1956年6月15日 25)

かんだうする(貫道) だが観は、日本の優れた芸術家たちの行為のうちを貫道している  
のであり、(私の人生観 105)

かんなんする(艱難) 貴方のやうに、若い時から艱難して、其風波になみかぜも  
で、自然と性質を鍛へる人もある。(破戒 323)

かんぶない(完膚) 駒子の叔父としての彼の監督不行届を、完膚なく攻撃し、(自由学校  
346)

○就中論敵を完膚なき迄に説破することを最も得意としてゐた。(李陵 174)

かんべきな(疳癰) 病苦のため疳癰な本性が出たのだらう。(本日休診 112)

かんぼする(緩歩) ビカデリイの燈火と人の海にたゞよはされつゝ緩歩して、人影の稍  
疎らなる辺に到り、(文芸春秋 1954年1月 66)

かんりゅうする(換流) 事務室で准尉はのびのびとし部屋中を支配し、おさえ、部屋の  
空気は彼のところで換流していた。(真空地帯・上 15)

きあらい(気荒) 彼は如何かすると気分がわるいといつて、少し遅くまで寝てゐるやう  
なことがあると、主婦のおとはは直きに気荒く罵つた。(あらくれ 12)

きうつする(気鬱) 近來叔父が筋の悪い流れ者の女を妾に入れて、叔母がひどく気鬱し  
て、(思出の記・上 86)

きおもい(気重) 涼氣の立つて来た忙しい夕暮の町を帰つて来たが、気重いやうな心持  
がして、店へ入つて行くのが憚られた。(あらくれ 216)

きかかる(来掛) 安吉は乏しい街燈の光を あびてぶらぶらと岩崎邸横へ来かかった。  
(むらぎも 217)

きかくする(規画) ドイツ人ならまず完全に規画した道路を作った上で、その道路に沿  
って個人個人の家を建てる。(ものの見方について 84)

きがまえる(気構) 疑獄政変史——疑獄は政変を気構える——(世潮 1954年6月 23)

きかんぼうな 實際私はきかん坊でわがままでもあった。(暗夜行路・前 10)

- きくずれる(着崩) 騒ぎに着くずれた彼女の着物は、裾<sup>すそ</sup>広がりのぶざまな格好になっていた。(暗夜行路・前 35)
- きぐろい(黄黒) 無雑作にかけてあるムシロの裾から、子供のやうに妙に小さくなつた、黄黒く、艶のない両足だけが見えた。(蟹工船 58)
- きけいな(畸形) 彼に涙を流させた畸形な花を一つ咲かせてから、日ましによい花を咲かせて、咲き誇らせて居たのに、(田園の憂鬱 56)
- きこうする(帰向) 帰巢本能というべきものがある、時至れば、必ず家と妻とに帰向せざるを得ない、習性を持っている。(自由学校 262)
- きこうする(帰校) 一ト月ばかりすると先生の書状が届いて、到底急に帰校せらるゝ訳に行かぬことが分明的なつた。(思出の記・上 145)
- きざする(危坐) もし自分がこつそり其の二階に登つて行つて、遺瀬なき恋を語つたら何うであらう。危坐して自分を諫めるかも知れぬ。(蒲団 73)
- きざする(起座) 棒の様に縮むで居た手足が少し伸びて、咽に氷りついた舌が少し弛むで、僕はやつと起座して礼を述べ、(思出の記・上 185)
- きずきあげる(築上) 浜近く of 村の中に、一段高く石垣を築きあげて、白練堀を繞らした大きな家であつた。(思出の記・上 70)
- そういう形で経済の理論を築き上げていった結果は、(ものの見方について 71)
- 田舎町の映画館主を振り出しに今日の地位を腕一本で築き上げただけあつて、(闘牛 86)
- きする(記) しかしこれは当面の問題には関係せぬから、ここにこれを記するを止め、(総長就業と廃業 342)
- きぜわしない(気忙) 達三は、気ぜはしないらしい性質を見せて、給仕された茶を受け取つて飲んだ。(帰郷 317)
- 滝十郎が、気忙なく墨みかけて訊くのを、ぢつと見返した目のうちには、押搦するやうな色さへ浮んでゐた。(多情仏心・前 324)
- きそづける(基礎付) カントとマルクスの接種で、社会主義を倫理的に基礎づけようとする考へ方なぞに依れば、(真知子・前 140)
- きたいする(帰隊) あと十分で夕食時限がくるにかかわらず、安西二等兵は帰隊してこないのだった。(真空地帯・上 205)
- きくつつする(佝屈) 春琴の纖手が佝屈した老梅の幹を頻りに撫で廻す様子を見るや(春琴抄 189)
- きっそぐ(切殺) 麦が刈られて其の束が両端を切つ殺いた竹の棒へ透して畑の外へ担ぎ出された時、(土・上 129)
- きったつ(立) 巨大な煉けた事務所建築が、劇務にひしやげた鉄籠のやうに左右に迫つてきつ立つてゐる。(伸子・上 40)
- きながい(気長) 鉦が急行で駆け出す後から、笛が、いやに荘重に、気長く追っていく

- 調子は、なんともいえず、ブザマで、滑稽だった。(自由学校 31)
- きのうする(機能) それだけを頼りにしては、現代の複雑な社会生活は機能してゆかない。(ものの見方について 150)
- きのどくする(気の毒) 彼が座敷へはいると、竜岡が気の毒したという気持ちを現わして言った。(暗夜行路・前 23)
- きのりうすな(気乗薄) 旧正月がすんだばかりで、催し物にあきあきしてゐる若者たちは気乗薄であつた。(潮騒 22)
- きはんする(規範) われわれの世界は規範する意識の努力場である。(哲学以前 258)
- きふせな(気鬱) 結婚してからも、どうかすると、おゆふから離されて、房吉が気鬱な母親の側に寝かされたり、(あらくれ 95)
- きべいする(帰米) ハロルド・坂田が久しぶりに帰米したので(月刊ファイト 1956年3月 12)
- きまりきる(極) 月々極まりきつた金で暮らしてゐる、恐らく親類ぢうで一番余裕のない未亡人の家計簿に取つては、(真知子・前 77)
- 冒険の獲物はきまりきつて取るにも足りないやくざものである事を葉子はしみじみ思はされた。(或る女・前 161)
- きむづける(義務付) 反省されて良心活動の主体と見られたわれわれ個人は義務づけられ運命づけられた人間であつて、(哲学以前 266)
- きゃっかんしする(客観視) あたかもかく我を客観視するところの我、自他一切を自然的必然的として知る我、(哲学以前 237)
- きゃっかんする(客観) 一方痛切に嫉妬の念に駆られながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。(蒲団 28)
- きゅうかんする(休館) 一カ月半休館して改装した日比谷公会堂での久々のコンサート。(週刊新潮 1956年9月17日 14)
- きゅうぎよする(休漁) 日は晴れてゐたが、風のために全村は休漁したので、母は新治に頼み事をした。(潮騒 25)
- きゅうざんする(休山) 小嶋鉦山は10年以上休山していたので、坑内の空気はほとんど動かず、(ポピュラーサイエンス 1956年8月 79)
- きゅうしょうする(急昇) 最近我が空軍はイル二八型として知られているソ連の双発ジェット軽爆撃機の数が急昇している点に関心を払っている。(日本及日本人 1954年3月 44)
- きゅうじんする(究尋) ただ教権を信奉することではなくて、実証的に批判し、究尋することである。(大法輪 1956年4月 66)
- きゅうていしゃする(急停車) 急停車した勢ひに舞立つた埃を、ヘルメット帽に手を掛け顔をそむけて避けた平服の紳士は、(帰郷 16)
- きょうぐうづける(境遇付) 自分と同様に間違つて境遇づけられて生れて来た人間なの。

だ。(或る女・前 162)

きょうみふかい(興味深) これを上<sup>うへ</sup>にのべたような気持で読んでみると、甚だ興味深いものがある。(ものの見方について 34)

○妖艶<sup>あうえん</sup>な、若い葉子の一挙一動を、絶えず興味深く<sup>きょうみふかく</sup>ぢつと見守るやうに見えた。(或る女・前 132)

きよせきする(拒斥) いわんや相互に拒斥<sup>きよせき</sup>し或いは相反するとすれば如何。(哲学以前 260)

きりつする(規律) 従って、前進する力はあるが、その力に伴うべき心の秩序が足りない。自分を規律するものがない。(人間の壁・上 251)

きりぬく(切抜) 新聞に載っている本野夫人の住所を切り抜<sup>あざぶ</sup>いて麻布のそのお邸へ出掛けて行ってみた。(放浪記 76)

きんこうする(均衡) われわれの真の自立とは特需のもとに均衡<sup>きんこう</sup>したその日本経済の均衡関係を破壊するということではないかと思う。(世界 1953年7月 25)

きんちゃくする(緊着) 既に漁師の手に生命を握られて居る蛸は力を極めて壺の内側に緊着すれば<sup>きんちゃく</sup>什麼強い手の力が袋のやうな其の頭を持つて曳かうとも、蛇が身体の一部を穴に挿入したやうに<sup>もぎれ</sup>拗切るまでも離れない。(土・上 166)

きんでんする(緊填) 「ほう。九九式だな。うむ、ちゃんと緊填<sup>きんでん</sup>してあるな。ふむ、こりや使へさうだ」(野火 157)

くうかつな(空洞) 空洞な平野には、麦や桑が青々と伸びて、泥田をかへしてゐる農夫や馬の姿が、所々に見えた。(あらくれ 176)

くうごする(空語) 最早や他の如何なる真の判断もくだし得ないでただ「真理は唯一なり」と空語するのみに終ろう。(哲学以前 190)

くうな(空) その空虚をまぎらさうとして無理にあんな空<sup>くう</sup>な享楽主義を肯定したかつたからの事だと思つた。(青銅の基督 73)

くきだつ(莖立) かう考へてあたりを見ると、不思議に野菊が繁つてゐる。弔ひの人に踏まれたらしいが猶莖立<sup>くきだつ</sup>つて青々として居る。(野菊の墓 54)

くぎづける(釘付) 鞭うたれるイエスの背は血にまみれ、重ねて釘づけ<sup>くぎづける</sup>られた足から滴つた血は、木を伝つて流れてゐた。(野火 79)

くされる(腐) 校舎は腐れ、かたむいてくる。(人間の壁・上 307)

ぐしょうする(具象) 真黒な熊のやうなものに嘉門は具象<sup>ぐしょう</sup>されてゐたのだ。(冬の宿 146)

くすぼる(燼) 父はその頃、商売上の事から抗夫と喧嘩をして頭をグルグル手拭で巻いて宿にくすぼ<sup>くすぼる</sup>っていた。(放浪記 11)

くすぼれる(燼) 障子襖の燼<sup>くすぼれる</sup>ぼれたその部屋には、持主のゐない真新しい簞笥が二棹も駢んでゐて、(あらくれ 120)

くちおもい(口重) ちらと、また相手の顔には沈んだ影が現れて、例の口重<sup>くちおもい</sup>い調子で視線を、よそに逸らした。(帰郷 45)



- くちづける(口付) そこで、沢におり、流れに口づけて、水を飲み続けた。(ニューエイジ 1953年8月 11)
- ぐちっぼい(愚痴) こうして親と子とはひきさかれた。それでも彼女には愚痴っぼい影がない。(むらぎも 30)
- ぐちな(愚痴) あの愚痴な性質から、<sup>ねほりはほりききとが</sup>根彫葉刻聞答めて、何故引越す、斯う聞かれたら何と返事をしたものであらう。(破戒 30)
- くつうな(苦痛) 細君の尻に敷かれるということは、外観ほど、苦痛なものではない。(自由学校 190)
- くどきおとす(口説落) どつちがあさましいか、女は口説き落してみないことには、分らないわよ。(雪国 130)
- くねらす その度に漁夫は身体をくねらし、寝返りを打つた。(蟹工船 63)
- くびきる(首切) 一方では教育予算が足りないために、その義務教育学校の教師を大量に首切るという。(人間の壁・上 147)
- くまどる(隈取) 蠟燭の焰の影にややいかつく隈取つた友の顔がうかび上る。(潮騒 87) ○稻荷の祠も垣根も雪に隈取られ、(河明り 276)
- くゆる(燻) クラレンス・ブラウン監督の名作「燻ゆる情炎」以来、(スクリーン1956年2月 144)
- くるみづける(付) 左右とも裕にぬって、身頃の上のにせ、バイヤステープでくるみづけます。(主婦と生活 1956年1月付録 スタイルブック 79)
- くるみとる(取) もはや胎児でなくつて赤んぼである。それを婦長が、湯あがりタオルで両手にくるみ取る。(本日休診 62)
- くれなずむ(暮) 眼下の千曲川と遠い犀川とが暮れなずむ川中島平野の中に二筋に光っていた。(小説春秋 1956年2月 255)
- くろまる(黒) ふだんの紅殻いろは、河岸の黒まつた倉庫に対し、緋緘の鎧が投げ出されたやうな、鮮やかな一堆に見える。(河明り 276)
- くろむ(燻) 褐色のペンキが燻み、ポーチには雨漏りさへしてゐた。(冬の宿 161)
- ぐんらいする(群来) ニュウナイスズメは秋に群来する有害鳥であるが、(娯楽よりり 1956年5月25日 70)
- けいきづく(景気付) 年の市などに景気ついた町を出歩いたり、(あらくれ 171)
- けいきづける(景気付) 花火代は御心配要りません。こちらとしても大会を景気づける意味で大変結構なお話です。(闘牛 147)
- けいしんする(敬親) それだからと云つて、今のまゝのあなたでは、僕にはあなたを敬親する気は起りません。(或る女・前 105)
- けいとうだつ(系統立) かれらが系統だつて勉強して行くさまが影絵のように動いて安吉に見える。(むらぎも 250)
- けいとうだてる(系統立) 男女の別に分けて、大体さういふやうに系統だててみること

が出来る。(本日休診 101)

けがする(怪我) 見ると、何日ぞや錨綱で足を怪我した時、葉子の世話になった老水夫だつた。(或る女・前 229)

げきせいする(激成) フランス革命がその後におけるこういった対立を激成したのか、(ものの見方について 104)

けちけちする 蝶はそれらのけちけちした花に愛想を尽かして浜へ下りて来たものらしい。(潮騒 111)

○配給ということがてんで判らなくて、こちらがけちけちしてる**と**ばかり思ってるんだ。(厭がらせの年齢 267)

けっとうする(決答) あまりに懇切にまた熱心に相談せらるるから、今度は判然決答し、三顧を煩わさない覚悟で、二日間の猶予を乞うた。(総長就業と廃業 363)

けつりょうする(結了) 自分のなすべき凡ての仕事が既に結了して、是から先は威張つて遊んで居ても構はないやうな晴やかな心持でゐた。(こころ 70)

げんかいする(限界) 真の我、真の能動的なる我は決して客観化されず時間空間的に限界されない或る者であり、(哲学以前 238)

げんきづく(元気付) 町で父から刀を買つて貰ふと片野はすつかり元気づいて、反対に父の馬の歩みを急がせる様になつた。(厚物咲 16)

げんきづける(元気付) 伝通院の横腹の上り坂が出たときそれは安吉を元気づけた。(むらぎも 72)

げんしゅつする(幻出) がらんとして何もない石畳と絨毯の奥まつた薄闇へ、高い窓から射し入る陽の光がステンドグラスの加減で、虹ともつかず、花明りともつかない表象の世界を幻出させてゐる。(河明り 304~305)

げんしょうする(現象) 本質は偶然性を媒介として現象する。(革命期における思维の基準 143)

けんとうちがいな(見当違) ところが親と兄とは、食事をあたえないことによって悪癖を治そうという、見当ちがいな懲罰を課しているのだった。(人間の壁・上 21)

こういする(行為) 他人の期待に反して行為するといふことは考へられるよりも遙かに困難である。(人生論ノート 90)

こうえいする(公営) かかる事業を公営せるもの全国において四十一個所、(貧乏物語 55)

こうえんする(好演) 彼女の夫君がマルセル・カルネの「嘆きのテレーズ」や「われら巴里つ子」で好演したフランス映画界の新進二枚目スタア、ローラン・ルザッフルであることは(映画之友 1956年9月 36)

こうがな(齧牙) 右はマルクスの齧牙な文章を——しかもわずかにその一節を——直訳したのであるから、(貧乏物語 120)

こうきな(好奇) 事務長は偶然に不思議を見つけた子供のやうな好奇な呆れた顔付をし

て、葉子の姿を見やつてゐたが、(或る女・前 174)

こうしょくな(好色) 好色な好奇心がおれに全くなかったといえは嘘になる。(むらぎも 137)

こうていする(高低) 右に左に高低する肝の声歯ぎしりの音を聞きさまさまの事を考へたが何を考へたか少しも覚へぬ。(思出の記・上 161)

こうとうな(荒唐) 而してあの荒唐な奇怪な心の adventure を却つてまざまざとした現実の出来事でもあるかのやうに思ひなして、(或る女・前 127)

こうはんいな(広範囲) このような問題を解くため、広範囲な研究が展開されたが、(人工心臓を体内に 368)

こうりゃくする(寇掠) 丁度酒泉張掖の辺を寇掠すべく南に出て行く軍があり、陵は自ら請うて其の軍に従つた。(幸陵 188)

こうるさい(小蒼蠅) 電車は黄色い車体を悠長に日に照らしながら、少し走つたかと思ふとガタン、またガタン、こうるさく一丁目毎に止りながら進む。(伸子・上 63)

○小学校の中は、内で親に小蒼蠅く世話を焼かれるよりも、学校へ行つて友達と騒ぐ方が面白い位に思つてゐたし、(平凡 47)

こおりつめる(氷) 側の小溝が落ち込むだ藁屑を封じ込めたまゝ氷つめて、鼻の尖や耳の端宛ながら剃刀をあてらるゝ様な暁に、(思出の記・上 58)

こかする(固化) 千代子は自ら醜いと信じてゐる顔の効能を信じてゐた。それはひとたび固化すると、美しい顔よりも、ずつと巧みに感情をいつはることができた。(潮騒 73)

こきざみな(小刻) 悪寒のやうな小刻みな身ふるひが絶えず足の方から頭へと波動のやうに伝はつた。(或る女・前 122)

こきみよい(小気味) 十月小春の日の光のどかに照り、小気味よい風がそよそよと吹く。(武蔵野 19)

○葉子は木部のあわて方を見ると、車内で彼から受けた侮辱に可なり小気味よく酬い得たといふ誇りを感じて、(或る女・前 21)

こくする(克) ことに、良人を克する腕前にかけては……(自由学校 36)

こくへんする(黒変) おれの印画紙が、そこでぶざまにしる事実として黒変したのだ。(むらぎも 295)

ここりつく(凝) 水道の栓が半ばこごりついてちょろちょろしかでない水をそそごうとつき出していた両手を動かすと、(真空地帯・上 86)

こころたつ(心立) 島村は驚いて、最早ここを去らねばならぬと心立つた。(雪国 154)

こころまちする(心待) いつのまにかその悪習の魅力に慣れて、彼を心待ちするやうになつてゐた。(冬の宿 27)

こさびしい(小淋) 障子の縁に立てた懐鏡の蓋の赤い布がかうした沈んだ心持を色づけるたつた一つの赤い色のやうに小淋しい。(桑の実 154)

こさむい(小寒) 小寒い雨がまだ止んでゐなかつた。(蟹工船 25)

こじあげる(扛) 木の株へ唐鍛を強く打込んでぐつとこじ<sup>あ</sup>上げようとした時(土・上 99)

こしかける(腰掛) 駒子は今しめたばかりの障子をさつとあけて、窓に体を投げつけるやうに腰<sup>か</sup>けた。(雪国 95)

こしだかな(腰高) ニーナという二ツになる女の子のお守りで黒いゴム輪の腰<sup>た</sup>高な乳母車に、(放浪記 134)

こしたんたんたる(虎視眈々) そこで、世間は、彼を才人と呼ぶが、あんな虎<sup>たんたん</sup>視眈々たる才人というものがあるものではない。(私の人生観 64)

こじろい(小白) 始終帳場に坐つてゐる、色の小<sup>せき</sup>白<sup>とこ</sup>い面長な優男が、その主人であつた。(あらくれ 110)

こすっかしい 精悍なようにもこすっ<sup>か</sup>らしいようにも見えるきりつとした面構えだ。(むらぎも 169)

こすむ(小隅) 白2とこちらへ<sup>こ</sup>スムべきで、黒3なら、白4、6と左上隅が拡大してくる。(棋道 1956年8月 87)

こずるい(小狡) 憎<sup>にく</sup>気はないが、薄い眉は小<sup>くげ</sup>狡さうである。(潮騒 21)

こせいな(小勢) 小<sup>せ</sup>勢<sup>い</sup>な人数には広過ぎる古い家がひつそりしてゐる中に、私は行李を解いて書物を繙き始めた。(こころ 109)

こそぐ 人前では考へられもせぬやうな思ひが、旋風の如く頭の中をこ<sup>つむじかぜ</sup>そいで通るのを覚えた。(或る女・前 168)

こそっぱい 鰯は其のこ<sup>こ</sup>そ<sup>つ</sup>ぱい<sup>ばい</sup>筥の中で暫く其の身を動かしては落付く。(土・上 115)

こだまする(舒) 併し、夫のさうするままに、彼の妻も声を合せて犬の名を呼んだ。その甲高い声が丘に舒<sup>ゆる</sup>した。(田園の憂鬱 107)

こつぶな(小粒) 雨は蹂み固めてある百姓の庭の土にも薄<sup>い</sup>菜<sup>わさ</sup>や石<sup>い</sup>竜<sup>りゆう</sup>芮<sup>し</sup>の黄色い小<sup>こ</sup>粒<sup>つぶ</sup>な花を持たせて、(土・上 197)

ことあげする(言挙) 岩田法相は議会で天皇制をこと<sup>こ</sup>あげする輩を不敬罪でオドシつけんとしてゴウゴウの非難を受け、(革命期における思惟の基準 141)

ことつてる(言伝) やまは娘が、私の仕事時間を済ましてから来て欲しいと言<sup>こと</sup>伝<sup>つ</sup>てたが、(河明り 282)

こねあがる(捏上) 赤土へ自動車<sup>くるま</sup>がこね<sup>こ</sup>上<sup>あ</sup>ってしまつて、雨の降る櫟<sup>くわ</sup>林<sup>りん</sup>の小道に、自動車はピタリと止つてしまつた。(放浪記 83)

こねあげる(捏上) あの人の真実ぢやなくて、君が勝手に心の中で捏<sup>こ</sup>ね<sup>あ</sup>げ<sup>あ</sup>げた《或る女》の像なのかい。(冬の宿 71)

こびつかせる まだよく乾いてはゐなかつたカンブスは、その間に、一めんに草の葉をこ<sup>こ</sup>び<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>せてしまつてゐた。(風立ちぬ 72)

こまい(小) 「何<sup>い</sup>歳<sup>く</sup>かい。何、十二、小<sup>こ</sup>い<sup>ま</sup>な。好<sup>よ</sup>々、乃<sup>お</sup>公<sup>れ</sup>が猥<sup>きた</sup>つてやる。初<sup>は</sup>め<sup>じめ</sup>の間は些<sup>ち</sup>辛<sup>まつ</sup>いぞ」(思出の記・上 53)

こまちゃくれる こ<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>く<sup>く</sup>れた、おし<sup>し</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>べ<sup>べ</sup>り<sup>り</sup>な娘だ。(人間の壁・上 99)

こんぜつする(昏絶) この荒療治のお蔭で、不幸にも蘇武は半日昏絶した後に又息を吹返した。(李陵 191)

こんだてする(献立) これら児童の生理的要求に応ずるよう慎重なる注意をもって献立されたる食事をば、(貧乏物語 51)

こんなんする(困難) 建前は粗末なもので、動もすると障子が乾反つて開閉に困難するやうな安普請ではあつたが、(平凡 112)

さいきする(再帰) 信仰と言えは神に再帰せんとする意志であり、(哲学以前 179)

さいきてきな(再帰的) しかしまた或る分裂はその来し方に向つて再帰的に、各々夫々再統一の足を前後左右に種々の形でのばしてゆく。(哲学以前 64~65)

さいきばしる(才気) 作品は二つとも上手にできていて、手法に新しい試みもあり、何にしても明るくて才気ばしっていた。(むらぎも 238)

さいさんする(採算) それで時価を採算すると、手堅くふんでも八分に利回る。(エコノミスト 1956年6月23日 69)

さいしんする(催進) 或慾望を催進し或慾望を抑制するものとして働かずにはゐられない。(人格主義 22)

さいする(賽) 二月に入つた一日宇佐八幡宮に賽して、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。(恩讐の彼方に 82)

さいする(猜) 春琴女が後年の烈しい気象を見れば或はさういふ事実が性格に影響を及ぼしたのかとも猜せられなくはないが(春琴抄 142)

さいだいな(最大) あゝ。人類はその最大なものを失うのか。(出家とその弟子 196)

さかいする(境) 頭を下げると、国道の土手の線が前方の闇を横に長く切つて、ほのかに空と境してゐるのが見えた。(野火 113)

さきぐりな(先潜) 先くどりな言葉を許して貰ひたい。(多情仏心・前 352)

さきばしりする(先走) ぜんたい何を目かけて、あれほどにも力こぶを入れ、あれほどにも一人先走りしたものかわからない気がした。(暗夜行路・前 62)

さくごする(錯誤) それら彼の幼年時代の追想のなかへ、時々強ひて錯誤して織り込まれて、その奥深い記憶の森のなかで仙女にならうとして居るのであつた。(田園の憂鬱 98)

さくざつな(錯雑) 彼女に対する錯雑な愛情などで弱気になっていたが、永見に対しては彼は毅然としていた。(くれない 85)

さくづける(作付) 畑作として夏野菜の後作とし、その跡には麦が作付けられる。(農耕と園芸 1956年7月 43)

さくれいする(策励) せめて文筆の道で、生家の名跡を遺さしたいと、私を策励しかゝつてゐるのだつた。(河明り 274)

さげすましい(蔑視) 鈍くさい口の利方や、卑しげな奴隷根性などが、一緒に育つて来た男であるだけに、一層醜くも蔑視ましくも思へた。(あらくれ 39)

さしかわす(差交) <sup>のきば</sup> 檐端はづれに枝を<sup>さしかは</sup>差交してゐる、山国らしい丈のひよる長い木の梢には、小禽の声などが聞かれた。(あらくれ 252)

さしのぞく(差覗) お豊とやす代も共に興るように縁からさし覗いて笑った。(くれない 120)

さしむかう(差向) 而も互にその三角関係を承知して、ひとつ食卓に差向つたと云ふ、不思議な晩餐の光景が展開されてゐた。(多情仏心・前 329)

さしわたる(差渡) 電気の光が車内に差渡つて、芳子の白い顔が丸で浮彫のやうに見えた。(蒲団 81)

さめやる(冷) 宏は我家へかへつてからも、昂奮がさめやらずにそはそはしてゐた。(潮騒 85)

さわぎたてる(騒立) そこに隣の細君がきて、嘉門の綯帯をかへなければ、とさわぎ立てた。(冬の宿 133)

○その勇ましい闘争的な組合員が、一つ事件がおこると、それを機会に手柄を立てようとして騒ぎ立てるのではないかと思うと、志野田ふみ子は気がすまなかつた。(人間の壁・上 146)

さんこうする(参校) 其日は郡視学と二三の町会議員とが参校して、校長の案内で、各教場の授業を少許づゝ観た。(破戒 17)

さんぶする(謔誣) 今口を極めて李陵を謔誣してゐるのは、数ヶ月前李陵が都を辞する時に盃をあげて、其の行を壮にした連中ではなかつたか。(李陵 167)

じあいふかい(慈愛深) そして妹達に比べて、自分の方が、一層慈愛深い人の手に育てられてゐる一人娘の幸福を悦んでゐた。(あらくれ 44)

しえいする(止營) 漠北・浚稽山の麓に至つて軍は漸く止營した。(李陵 152)

しおがれる(塩) 「早月さん」と濁つて塩がれた事務長の声がした。(或る女・前 180)

しおくさい(汐臭) 彼は大波止の海岸の方へ向つて浜から来る汐臭い秋風に顔へながら歩いた。(青銅の基督 20)

しおくる(仕送) 父の安左衛門が生存中は月々春琴の「云ふがまゝ」に仕送つたけれども(春琴抄 185)

○町の旅館や料理屋へ肴を仕送つてゐる魚河岸の間屋の旦那が、仕切を取りに、東京からやつて来て、(あらくれ 111)

しおこしょうする(塩胡椒) 鯨肉に塩・コショウして小麦粉、溶き卵、パン粉(卸しチーズ入り)をつけて揚げる。(主婦と生活 1956年1月付録 家計簿 112)

しかりとばす(叱飛) 彼は反つてはらはらして、妻を叱り飛ばした。(田園の憂鬱 53)

じきする(自棄) 汚された女は「染められた絲の再び白くならぬ」嘆きのため自棄して、荒廢の生に沈淪して行く。(人格主義 176)

しきゅうな(至急) マダム、シュールは巴里で亡夫の遺著を出版するについて至急な用事が出来たので、(つゆのあとさき 90)

じこひはんする(自己批判) だから、われわれは過去の党の欠陥やあやまりを非妥協的に自己批判し、その上にたつて六全協の決議を準備した。(中央公論 1956年2月 50)

じさいらしい(子細) 子山羊だと思っているうちにわずか二三か月の間にいつか角も三寸ほどになり、顔の下からは先のとがった子細らしいひげがはえていた。(暗夜行路・前 134)

○「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉ちて再び筮竹を数へ算木を置き直して、(つゆのあとさき 9)

じじゅうする(始終) 不当にも或る場所に積まれてゐた金を、正当なる他の場所へ移す、と云ふ事務的な、平俗な感じで始終してゐた。(多情仏心・前 256)

じしんする(自信) しかし自分の裡にはたしかに孫四郎なぞの窺ひも得ぬ何かがあると自信してはゐるものの(青銅の基督 13)

しちくどい 安吉の母親が、一つことを二度以上いやがられてもくり返すような七っくだい熱情がある。(むらぎも 169)

しちらかす(仕散) 庭のなかへは入つては糞をしちらかす。田や畑は荒す。夜は吠えてやかましい。(田園の憂鬱 49)

しちらす(仕散) 祖母が内に居る時は、私は散々我儘を言つて、悪たれて、仕度三昧を仕散らすが、(平凡 13)

しっこくな(漆黒) 漆黒なびかびかした多少怪奇な形を具へた帽子の真角なかどの上へ、(田園の憂鬱 40)

しっする(叱) 或ひは藺相如となつて秦王を叱し、或ひは太子丹となつて、泣いて荊軻を送つた。(李陵 201)

しつとがましい(嫉妬) 一度も縁づいた事のない彼女が、嫉妬がましい息づかいで、まるで夢遊病者のような変な狂態を演じようとしている。(放浪記 216)

しつとぶかい(嫉妬深) 而して恋人の愛心を詰り責める嫉妬深い男のやうに、火と涙とを眼から迸らせて、打ちもすゑかねぬまでに狂ひ怒つた。(或る女・上 53)

しなる(撓) 鳶は天の高みで、両翼をためすやうにかはるがはる撓らせて、さて下降に移るかと思ふと移らずに、(潮騒 7)

シニックな かうして私はこの若い気の弱い女中の子が、シニックな女中強姦者の養子となつたのを了解したが、(野火 40)

じぬいする(地縫) 裏袴を十分ひかえて外まわりを地縫し、芯の縫代を切り取って表に返し、形を整えます。(婦人倶楽部 1956年11月 423)

○明きは切込みを入れて持出し、見返しに整え、袖下を地縫して前に返します。(婦人倶楽部 1956年10月 98)

しばいがる(芝居) まるで無抵抗に田代の芝居がかつた饒舌を真向うから浴びて、パイプを銜へたまま狭い庭の隅の山茶花の株に視線を投げてゐる津上の眼は、冷たく無感動だつた。(闘牛 79)

しはいてきな(支配的) そしてかならずや支配的な大きなアイデアが、そこに残るであろう。(ものの見方について 92)

じひふかい(慈悲深) あの慈悲深いお師匠様がうそをおっしゃるはずはありません。(出家とその弟子 137)

しぶったい(渋) 蠟燭を吹消したあとの、渋ったいやうな異臭がだんだん薄らいで行くと共に、眼がやうやく闇に慣れて来た。(波 59)

しほまる(燈) 一同が袋の口の紐を引いた様に輪がほまつて、ばらりばらりと手拍子をとつて、復以前のやうに拡がる。(土・上 188)

しめあげる(締上) あの女は、男の首をしめ上げるのが、好きでね……。 (自由学校 257)

じめつく 照ると曇るとで雨にじめつく林の中のやうすが間断なく移り変つた、(武蔵野 11)

しもふくれる(下脹) 王女の下脹<sup>しもぶく</sup>れた豊かな頬と云ひ、大どかな眉と云ひ、領巾<sup>ひれ</sup>をかついだ服の様子と云ひ、所謂天平時代の風俗そつくりであつた。(伸子・上 23)

しゃくべんする(釈弁) 一緒に乗り込んで来たつれの美少年と自分との関係を、いち早く説明し、釈弁しようとかゝつてゐる気持が(多情仏心・前 141~142)

しゃちこだつ(鯨立) そんなときの赤座の胸毛は逆立つて銅像のやうなからだ<sup>は</sup>が撥ちぎれるやうに、舟の上で鯨立つて見えた。(あにいもうと 156)

しゃべくる(喋) シャベルを持った女や、空のモッコをぶらさげた女の群が、三々五々しゃべくりながら長屋へ帰って行つた。(放浪記 7)

しゅうえんする(終焉) 五島慶太氏の乗出しによって終焉した白木屋騒動に、古荘老の果した役割は忘れられないが、(エコノミスト 1956年1月14日 48)

しゅうかいな(醜怪) そのからみあつた複雑なものの醜怪な姿に、大部分の人はまだ気がついていなかった。(人間の壁・上 28)

じゅうぎょうする(従業) 家族だけが従業する工場は三五六を数える。(中央公論 1954年1月 203)

しゅうぎよくする(終局) もとより死によつて終局する故に、人格価値の実現を求める生活が無意義になるといふのではない。(人格主義 177)

しゅうじする(習字) 私が履歴書を書くためにこのごろ使つてゐる硯と筆と紙とをつかつて、習字してゐるのであつた。(冬の宿 136)

じゅうじする(住持) 向陽院と云ふ堂宇が立つて、そこに妙解院殿の位牌が安置せられ、<sup>まやうしゆぢ</sup>鏡首座と云ふ僧が住持してゐる。(阿部一族 56)

じゅうしょうする(重傷) 後に明治二年大村がその進歩的思想のために保守派に襲われて重傷し、ついに死んだが、(中央公論 1956年1月 312)

じゅうしょうな(重症) すなわち重症な腎臓病の人は蛋白質を制限しなければ尿毒症を起す危険があるわけです。(婦人之友 1956年6月 105)

しゅうする(執) 求めるといふことはあるがままの自己に執しつつ他の何物かをそれに



附け加へることではない。(人生論ノート 144)

しゅうだんする(集団) 言葉と言葉とが集団して一つの有機物になつて居る文章といふものを、(田園の憂鬱 37)

しゅうとうする(襲踏) ただ叙述を正確にするために、従来人々の採用した標準をば、ただそのまま襲踏しようとするに過ぎぬ。(貧乏物語 20)

じゅうのうする(従農) 小生も今では作男として三年間当地に従農していますが、(学園評論 1954年5月 75)

しゅうばいする(収買) どのような種類の農産物をどれだけ生産し、どれだけ収買し、どれだけ輸出するか、(中央公論 1953年9月 106)

じゅうばいする(十倍) 何でも僕が故郷の谷に十倍する——と思つた——<sup>ながめ</sup>眼界であつた。(思出の記・上 50)

しゅうまくする(終幕) 二月十八日の夜、四国外相会議が終幕して数時間の後、(中央公論 1954年4月 137)

しゅうろうな(醜陋) 所が、刑罰も数ある中で、よりによつて最も醜陋な宮刑にあはうとは! (李陵 174)

しゅうわいな(醜猥) <sup>しうかい</sup>醜猥な話を立ちぎさされて、喧嘩になつて、(冬の宿 40)

じゆする(呪) 私は陀羅尼を呪した。(高野聖 64)

しゅつえいする(出詠) わたくしが或る綜合雑誌の投稿欄に出詠したことがM先生に知れて、(短歌 1956年2月 162)

しゅつえきする(出役) 戸上弥兵衛が縊死事件の検視に出役した最初から (小説新潮 1956年9月 147)

しゅっしょうする(出唱) 陳垣の公開状はもとより、毛沢東の出唱した有名な整風運動の坦白の一形式である。(改造 1953年8月 7)

じゅようする(需要) 他方には金持ちの人々の需要する<sup>しやし</sup>奢侈ぜいたく品がうずたかく生産されつつある。(貧乏物語 95)

じゅんじょだつ(順序立) 葉子の心はこんなに順序立つてゐた訳ではない。(或る女・前 163)

じゅんじょだてる(順序立) <sup>こん</sup>此様な事はウロ覚えに覚えて居るが、其頃の生活を順序立てて話せと云はれたら、其は出来ぬ。(思出の記・上 9)

じゅんずる(順) 小説家が文学者の異名となるに順じて、詩という文学の故郷が忘れられて行くように見えます。(私の人生観 123)

○だが豆がやがて大きなこととなり、一方靴に順じて平らに歩く法を間もなく会得すると、(私の人生観 25)

じゅんちよくな(順直) ここでは、人相も構図も忍苦の表情で欠乏をうったえている。そして、これこそが順直なプロセスなのだ。(むらぎも 28)

じゅんな(純) いな、鑑賞もまた純なる感情の自己創造だと言えよう。(哲学以前 161)

- 放蕩<sup>ほうとう</sup>こそすれ私はあの子の純な性格も認めて愛しているのだ。(出家とその弟子 119)
- しょうじこむ(招込) 客は息子の凱旋を二重にお目出度がつて早速奥の宴席へ息子招<sup>じこまう</sup>じこまうとしたが、(厚物咲 30~31)
- しょうじよする(消除) 煮ることによつて変質、腐敗の有毒・有害物を消除することができる。(文芸春秋 1953年11月 51)
- しょうしんする(上伸) さらに次期は冬期より生産が増加するので、業績は上伸しよう。(エコノミスト 1956年4月7日 75)
- しょうする(状) 時雄は其の姿と相對して、一種状すべからざる満足を胸に感じ、今迄の煩悶と苦痛とを半ば忘れて了つた。(蒲団 34)
- しょうせいする(醸生) 他の粗大なる帝国主義とともに、世界的不安を醸生すべき理由となるのはやむを得ない。(人格主義 150)
- しょうたんする(賞嘆) 漸く今年咲いたのだと云ふ河井の説明を賞嘆してゐるのをあとに残し、(真知子・前 123)
- しょうどうする(唱道) 切支丹の唱道してきた人格的な神の先入主によつて。(青銅の基督 46)
- しょうとうする(上騰) 野良一面、糸遊上騰<sup>いとう</sup>して永くは見つめて居られない。(武蔵野 23)
- しょうはんする(上阪) 私は三十五年と三十六年と二た夏上阪して小南先生の教えを乞い(文芸春秋増刊 1953年12月 33)
- しょうブルジョアてきな この合理性には小ブルジョア的なところがあり、不合理性の方にはプロレタリア的なところがあった。(むらぎも 6)
- しょうべんくさい(小便臭) お前のやうに小便くさい女を引つけて歩いてゐる奴と、はばかりながらもんは異つた女なんだ。(あにいうと 153)
- しょうみょうする(称名) そして口のうちに、「南無、南無、南無」と弱々しく称名<sup>しょうみょう</sup>しながら戻つて来る。(伸子・上 169)
- しょげきる(悄気切) みんなろくろくお夕飯もいただかずにふさぎ切っているような次第です——としょげ切っていた。(むらぎも 232)
- しょざいする(所在) またこれと違って邪馬台国が北九州に所在する国であるならば、(学問の動き 255)
- しょさする(所作) 私を気易くしたのは、この娘が自分で自分の美しさを意識して所作する二重なものを持たないらしい気配である。(河明り 246)
- しょれつする(序列) かくのごとく序列し来れば、理学の研究が実効を奏し得るや否の断案を下すは工学者に待たなければならぬは、軌今發明の歴史により火を睹るより明らかである。(総長就業と廃業 361)
- しょれつづける(序列付) 日本では、はじめから序列づけられた連続的自然がある。(高崎山 60)

しらげはてる(精果) 婦人は何時かもう米を精げ果てて、衣紋の乱れた、乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を反して立つた、(高野聖 40)

じりつく 旅のそらで、あかの他人に介抱されて、七転八倒の苦しみも遠慮がちに、人を待つ気持にぢりつきながら、(多情仏心・前 251)

じれじれする(焦) 彼の長い話にじれじれしてゐた田口夫人は、(真知子・前 141)

しれわたる(知渡) 器量好みで大騒ぎして貰つた辰子に対しても、半年と誠実な夫でなかつたのは関係者に知れ渡つてゐた。(真知子・前 21)

しれんする(試煉) 或いは我を苦悩において試煉する者は神であるなどと言つてゐる限り、(哲学以前 253)

しろむ(白) 月が家並の後ろの高い檜の梢まで昇ると、向ふ片側の家根が白ろんで来た。(武蔵野 31)

しわたてる(皴立) 額に皴立て顔をしかめて懸命に自分を抑へてゐる意志の強さには、味気なく白けるほどで、(雪国 35~36)

しんきよする(信抛) それは自分のと云はず、お澄のと云はず、真心と云ふものに信抛する心の怠りで、また力弱さだつた。(多情仏心・前 199)

しんきんな(親近) この点において科学は他の情的意志的とも言うべき諸態度から区別されるとともに、哲学とは親近な関係に置かれる。(哲学以前 112~113)

しんこんする(新婚) 新婚したばかりの夫をパンパンのふところに沈没させたりする、(ニューエイジ 1953年10月 91)

しんしする(参差) 截り立つたやうな梢は葉を参差してゐて、(河明り 307)

しんじゅんな(真純) ゆえにこのアイデアの観想(真理の認識)に入る道は感覚的肉体的な汚れを去つて真純なる思惟そのもの精神そのものとならねばならない。(哲学以前 30)

○信ずるというはすなわちそれゆえに主客合一の境において愛することであり、真純に知ることである。(哲学以前 180)

しんしょうする(心証) またこれによつて神が慈愛の母なるとともに正義の父なることが心証されればよいが。(哲学以前 271)

しんだいな(深大) 銀河の光は薄い煙のやうに遠く壮厳な天を流れて、深大な感動を人の心に与へる。(破戒 86)

しんてきな(神的) その時、言葉といふものが彼には言ひ知れない不思議なものに思へた。それには深い神的な性質があることを感じた。(田園の憂鬱 38)

○主客相即し自他不離なるこの境において、一切は神的なる、いな、超神的なる純愛のうちに融合統一する。(哲学以前 254)

しんにんする(信認) アイゼンハワー大統領によるチャールズ・E・ポーレンの駐ソ大使への任命を信認したことは、(改造 1953年8月 185)

しんねんする(信念) 決勝を信念し、全身心を傾倒して(日本週報 1956年8月15日 27)

ずあんする(図案) もうこなひだから色んな柄を図案して慰み半分に縫つてお出でになるのであつた。(桑の実 100)

すいせんする(水戦) 折しも冬のことで、越人と水戦したが、例の大將は、ひびのきれぬ葉を利用して大いに敵を破つた。(ニューエイジ 1954年3月 27)

すいほうする(衰毫) せん枝の暗く眼を伏せた、さびしい、衰毫した姿が鈴むらさんの胸に浮んだ。(末枯 56)

すいぼつする(水没) 電源開発で貴重な湿原植物が水没すると、かねてからウワサは高かったが、(週刊新潮 1956年6月26日 69)

すうはいする(数倍) しかしそのためには、T33の国産化に数倍する巨額な設備資金を必要としよう。(知性 1956年6月 232)

すえおく(据置) そういうふうに人間が動き廻るのではなく、この人間を真中に据え置いて、人間の方は動かない場合、(ものの見方について 32)

すえひろな(末広) 末広な、青ツばいカンテラの光が揺れる度に、(蟹工船 24)

すきさんまいな(好三昧) T大名譽教授という肩書はあるが、まったく世を捨てて、好き三昧な生活をしてる。(自由学校 25)

すじくれだつ(筋立) だぶだぶのズボン一つで、筋くれ立つた厚みのある毛胸に一絲もつけない大男は、(或る女・前 145)

すすびる(煤) さうして部屋を形造つた壁、障子、天井、畳は直ぐに煤びて来た。(田園の憂鬱 21)

すすばける(煤) 「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がをかしくなるほど煤ばけた珍品古什の類を(青銅の基督 9)

すっこむ(込) 犬儒派的な村山が、奥の部屋へおそくまですっこんで、全国の高専学校から来た調子のよさそうな報告を、はた目に残酷に見えるような調子で篩にかけて片っぱしから整理して行った。(むらぎも 119)

○猫よ、猫よ。おくへおくへすつこめ！(田園の憂鬱 95)

すっとぼす(飛) 「わかつてる。どつかの兵隊んだらう。弾にすつ飛ばされたんだらう」(野火 145)

すっとぶ(飛) タオルの覆面も、サングラスも、どこかへスッ飛んで、顔がまる見えとなったが、(自由学校 123)

すてさる(捨去) その子を、小学校卒業まで育てあげてから捨て去るというのは、どんな気持の変化であろうか。(人間の壁・上 37)

○摸写的の考えを棄て去る限り経験とか認識とかの意も変らねばなるまい。(哲学以前 22)

すてみな(捨身) 葉子の心に純粋な同情と、男に対する無条件的な捨身な態度が生れ始めた。(或る女・前 13)

○而して採みくたになつた写真の屑を男の胸も透れと投げつけると、写真の中つたそ

の所に噛みつきもしかねまじき狂乱の姿となつて、捨て身に武者ぶりついた。(或る女・前 175)

すべない(術) 葉子は<sup>すべ</sup>術なさうに木村のその顔を面白く思ひながらまじまじと見やつてゐた。(或る女・前 220)

すべりおとす(辻落) 額の紙を鼻の下まで辻り落して、突出した脰で受留めると、他の男も女も熱心にその芸当を真似た。(生まざりしならば 179)

すましかえる(澄返) そろいもそろうて、みな、<sup>はうき</sup>帚木もって、すましかえって掃いてやる。(真空地帯・上 53)

すましこむ(澄込) すまし込んで、横向に、自動車の進むさきを見詰めてゐた。(多情仏心・前 143)

すみかえる(澄返) 夕は瀬鳴の音が静寂の天地に澄みかへる頃迄も、止めなかつた。(恩讐の彼方に 75)

すみふるす(住古) 永年住み古した田舎家の中に、たつた一人取り残されさうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた。(こころ 117)

すりあがる(刷上) その日編輯局長の津上は社告の載つた仮刷りが刷上ると、それを一枚ポケットに入れて、(闘牛 74)

ずりあげる 夫人は黒眼鏡をズリ上げながら、メモに何か書きつける。(放浪記 177)

ずるがしこい(狡猾) 葉子の胸の中にはこんな狡猾<sup>ずるがしこ</sup>いいたづらな心も潜んでゐたのだ。(或る女・前 98)

せいかくづける(性格付) マルクスを革命的実践の偉人として性格づけることを得しめなくしているのも(学園評論 1954年5月 41)

せいかする(聖化) それは地上に足を置く罪人としての自責であり、自らを聖化せんとする焦慮である。(哲学以前 249)

せいしする(省思) この二つの事実を出発点として、悪の存在が我々の向上の努力に如何なる意義を持つかを省思するとき、(人格主義 167)

せいする(省) 其の間二度芳子は故郷を省した。(蒲団 13)

○僕が行つて母を省する毎に、母の眼は僕の背丈を測つて、「未だ、小さい、小さい」と云ひ貌であるのを、(思出の記・上 133)

せいせいたる(青々) 要するに勤勉な彼等は成熟の以前に於て既に青々たる作物の活力を殺いで食つて居るのである。(土・上 97)

せいせいたる(菁々) 夏草が菁々と生繁つて崖のうへには新しい家が立駢んでゐた。(あらくれ 232)

せいぜんたる(凄然) さうしてそのなかには醜さといふよりも寧ろ故もなく凄然たるものがあつた。(田園の憂鬱 25)

せいとうづける(正当付) 政府の首脳部としては寛大な国防支出をどうやつて正当づけたらよいのか弁解に苦しんでいる。(中央公論 1953年11月 63)

- ・せいとうな(正統) 正統なマルキシズムの見地から、今日のやうな絵画の価値はどう解釈されるだらう。(真知子・前 71)
- ・せいばくする(制縛) 生活に制縛されて貧しいものに悦びを見出すのに慣れたといふだけのものでなく、(帰郷 342)
- ・せいよくする(制抑) 少数を以つて多数を制抑して行かねばならん。(日本及日本人 1953年9月7)
- ・せいいいな(清麗) 小さなコップの小さな世界は緑と銀との清麗な秋である。(田園の憂鬱 113)
- ・せいいいな(清冷) そのまゝアルヌールのジャンチイナリシズムを細く、くつきり浮かび出させ、清冷なお伽話の世界を見る様だ。(スクリーン 1956年1月 161)
- ・せかつく(急) 彼女はいつも物判りのよく泰然としてゐるミス・プラットが、湯ぐらゐのことでせかつくのを、愛らしく面白く感じた。(伸子・上 114)
- ・せきせきたる(籍々) 其の次には君江が名声籍々たる文学者の恋人である事をさほど嬉しいとも思つてゐないやうに見える事である。(つゆのあとさき 72)
- ・せきせきりょうりょうたる(寂々寥々) 事実春琴の門を叩く者は幾人と数へる程で寂々寥々たるものであつた。(春琴抄 185)
- ・せきたつ(急立) 夫人の悪意はせき立つて募るばかりだつた。(或る女・前 166~167)  
○お島さんが此方へ来てゐる話をする、それぢや私<sup>わたし</sup>が一人で行つて連れて来るといつて、急立つもんだからな。(あらくれ 127)
- ・せきばつする(責罰) 彼の神曲においては地獄の中に責罰せらるる性質の悪である。(人格主義 168)
- ・せけんみな(世間並) 我々はかくの如き愛の実例を、孫に対する祖母の溺愛や、娘の結婚に対する世間並な母の心配や、(人格主義 117)
- ・せじせじしい(世辞々々) 田川夫妻が自分と反対の弦の藤椅子に腰かけて、世辞々々しく近寄つて来る同船者と何か戯談口でもきいてゐると(或る女・前 88~89)
- ・せっそうする(節奏) そして、その水煙と水光とが微妙に節奏する刹那に明確な現実的人間性の画出されて来るのが、(河明り 260~261)
- ・ぜったいな(絶対) 子供たちが生まれた当時に明子は、絶対な繋りを以て或る日から忽然と我が家の一員になった赤ん坊を見て、(くれない 58)  
○私には、群集が絶対に必要であつた。(私の人生観 68)
- ・せつな(切) このまま消えてしまったならばせいせいするだろうと云つた気持ちが切なのです。(放浪記 303)  
○御健康と御幸福と御学業の隆盛とを切に祈ります。(冬の宿 172)
- ・せっぷくてきな(説服的) それをいかにも企業家らしい説服的な口調で順序よく述べて行つた。(或る女・前 199)
- ・せばる 損と知れている商売をつかませたり、田地をせばったり、貸した金は返りはし

ないし。(出家とその弟子 25)

ぜひない(是非) その夫を妻が頼み少く思ふことは是非ない事である。(田園の憂鬱 42)

○葉子は遮られて是非なく事務卓の側に立ちすくんだが、誇りも恥も弱さも忘れてしまつてゐた。(或る女・前 175)

せまっこい(狭) その晩事務長が来て、狭っこい boudoir のやうな船室で晩までしめじめと打ち語つた間に、(或る女・前 209)

せようする(施用) 酸化層に施用されたアンモニヤは酸化されて硝酸となり、(農業世界 1956年11月 38)

せりあがる(競上) 水面が次第に肩から首すじの方へとせり上がってくるのがそうやっていてわかる…… (むらぎも 353)

○それの一刻の音毎にそそられて、彼の心持は一段一段とせり上つて昂奮して来た。(田園の憂鬱 85)

せりあげる(競上) 初は地声の少し大きい位の処から、段々と甲高に競上げて行つて、絲のやうに細くなつて、(平凡 79)

せりくだる(迫下) 目の前に迫つて来かと思ふと、迫り下つて、渦巻いてゐる底知れぬ淵を見せるのである。(潮騒 145)

せりこむ(競込) 時には一つの学校から、他の学校へ彼女は腕車を飛ばしなどして、せり込んで行く多くの同業者と劇しい競争を試みることに、深い興味を感じた。(あらくれ 230)

せりさがる(競下) 又段々競下つて来て、果はパッと上げたやうな太い声になつて、余念がない。(平凡 79)

センシュアルな それがまるで私を愛撫でもし出したかのやうな、呼吸づまるほどセンシュアルな魅力を私に感じさせた。(風立ちぬ 80)

せんしんする(先進) 洗滌力や水溶性などの性能上、新機軸を出したものとして注目されているなども、一步先進している例として見のがせないところだ。(東洋経済新報 1956年7月28日 70)

せんちやくする(染著) 我々の意志が悪に染著せぬ限り、禍害は単に人格を破滅に導く力がないばかりではなく、(人格主義 175)

せんちょうする(洗腸) 疫痢かもしれない。兎に角洗腸しませう。(波 205)

せんめいする(宣明) それは明瞭に組合の政治からの独立を宣明したものであった。(ものの見方について 118)

せんれいな(纖麗) よく見ると他の部分の纖麗な割合に下顎骨の発達した(或る女・前 11)

ぞうえきする(増益) 石油化学への原料供給によつて増益するのである。(ダイヤモンド 1956年3月3日 74)

そうきする(想起) アメリカ国民は半ば奴隷、半ば自由の状態で生きることはできない。

- といった事実を、想起していただきたいと思う。(世界 1956年9月 30)
- そうこうする(増光) 予報通り確実に増光して来れば、白昼でも、立派に見える明るさなのだ。(未知の星を求めて 323)
- そうこうする(増嵩) しかも新たに農政指導団体を設立することは農民の負担を増嵩することになるから、(中央公論 1953年11月 300)
- そうしする(創始) 社会保障制度などは、最初にはこの世紀の初めに自由党が創始した案であって、(ものの見方について 43)
- そうしする(創試) 八木秀次氏が、超短波を利用して通信を創試し、世界に名を知られている。(総長就業と廃業 366)
- そうせいする(創生) 光子から陰陽電子対が創生されたり、中間子のような地上に存在しない新しい素粒子がつくり出されたりするような(原子物理学の発展とその方法 333)
- そうちくしはじめる(造築始) すぐに、平野口に出丸を造築し始めた。(週刊東京 1956年11月24日 27)
- そうほてきな(相補的) 物質と相補的な関係にあるものとしての精神を定立するに足る積極的根拠は乏しいと(物質世界の客観性について 289)
- そうようする(装用) 眼鏡を装用してみて見え方と疲労を検査し、(婦人之友 1956年3月 99)
- そこあかるい(底明) 初冬に入つて間もないあたゝかい日で、照るともなく照る底明るい光線のためかも知れない、(河明り 245)
- そこうな(粗硬) 粗硬な葉の中にやわらかな心<sup>しん</sup>を包むで野菜の中の武蔵坊弁慶と一寸洒落た甘藍<sup>キャベージ</sup>はべたりと坐り、(思出の記・上 88)
- そこきみわるい(底気味悪) ただ安吉には、沢田のやり方が、どなりつけるという調子でなかったことで底気味わるかった。(むらぎも 44)
- そこぐろい(底黒) 肌の底黒い腕がまだ骨張つてゐて、どこか初々しく人がよささうだから、(雪国 27)
- そこさむい(底寒) 底寒くて、薄暗い工場の中ですべる足元に気をつけながら、立ちつくしてゐると、(蟹工船 66)
- そこしれない(底知) そこは峠の絶頂で眼の下に底知れぬ闇の如く黒く展がつてゐる千々岩灘が一眼に見え、(青銅の基督 84)
- 私は何か底知れない氣うつさを感じながら襖をあけると、(放浪記 197)
- そこつめたい(底冷) 子供のない共かせぎの夫婦には、何年たっても本当の夫婦になり切れないような、底冷たいものがあつた。(人間の壁・上 265)
- その日も薄曇りしてゐたうへ、気温は昨夜から急に下つて、冬が舞ひ戻つたやうに底冷たかつた。(冬の宿 193)
- そこつよい(底強) 病氣から恢復してきた咲子には、まつたくふしぎなほど底強い生命力のやうなものが内に燃えてゐることが、(冬の宿 145)



そこぬけな(底抜) さう主人のやうに底抜けな馬鹿さにはなかなかなれるものではなく、  
(機城 15)

そそうな(粗造) 敬之進の住居といふは、どこから見ても古い粗造な農家風の草屋。  
(破成 241)

そそりつくす(尽) 卵を生んだ鶏が何羽も何羽も、人の癪をそそり尽さねば措かないや  
うな声で、(田園の憂鬱 51)

そよふく(吹) そよ吹く風は忍ぶやうに木末を伝ツた、(武蔵野 11)

そらいかめしい(空敞) 唯神体のない空虚な宮殿のやうな空いかめしい興なさを感じさ  
せるばかりだつた。(或る女・前 133)

そりこむ(剃込) 剃り込んであるとしても、尻下りに長く引いた眉や、並びのいゝ白い  
歯、人中のさが心持まくれ上つた薄い脣など、(多情仏心・前 138)

○彼は額の生えぎわにまるく剃刃をあてさせており、もみあげのところを切りたつよ  
うにそりこんでいた。(真空地帯・上 22)

そわそわしい 木村の様子の方が却つてそはそはしく眺めやられた。(或る女・前 224)

ぞんきな 「いつもだつて、はたでお前さんがみてるやうな、そんなぞんきなもんぢア  
ないんだよ、ぞんきに見せるまでにやア、裏に相応からくりがしてあるんだよ」(多情  
仏心・前 156)

そんな(損) こういう人物は、強権に抵抗するような損な行動はとらない。(人間の壁・  
上 126)

たいきよする(退居) しかし種々の条件から企業方面への進出をはばまれた茅氏は小資  
産階級の地位に退居してこれを固守し、(改造 1954年6月 163)

たいけいづける(体系付) ローレンツはその電子論を体系づけるに際して、エーテルは  
空間に静止しているという根本仮定から出発したのであった。(物質世界の客観性につい  
て 262)

だいじがる(大事) あんたは人間よりも、魚の方を大事がつてゐるのね。(波 247)

たいじゆくする(退塾) 去る門閥の子弟は、秋来て冬になると直ぐ退塾した者もあつた。  
(思出の記・上 58)

たいしよする(大書) 真ッ赤なペンキで、温泉マークを描いた看板を掲げ、御休憩何百  
円と、大書してあったりした。(自由学校 211)

たいそうらしい(大層) 君江は心の中で高が五人か十人、数の知れた男の事を大層らし  
く経験だの何だのと言ふにも及ぶまいと、(つゆのあとさき 11)

たいひょうな(大兵) 田川博士の側にゐて何か話をしてゐた一人の大兵な船員がゐたが、  
(或る女・前 85)

たかくてきな(多角的) 一面的ではない多角的な、割り切ることのむづかしい考え方を、  
(ものの見方について 41)

たがくな(多額) 多額な訴訟費用をどうしたらいいのか、そういう点がむづかしいと思

います。(人間の壁・上 170)

たかる(抱) 併しそれから半月ほど過ぎて訪ねて行つた時には、駿は少しも泣かずに、彼に抱かつた。(波 151)

たきあがる(炊上) 水は七四度近くで沸点となるから、米などは勿論炊き上るわけがない。(旅 1956年 8月 106)

たきこめる(焚込) 数馬は行水を使つて、月題を剃つて、髪には忠利に拝領した名香初音を焚き込めた。(阿部一族 68~69)

たくさつする(磔殺) 神の子は磔殺された、そは恥ずべきことなるがゆえに恥ずかしと感じない。(哲学以前 177)

たくしおろす(下) その時やつと襟巻を顎の下までたくし下した滝十郎が、(多情仏心・前 38)

たじな(多事) 人と人との間には、やはり、口に云ひ尽せない多事な一年の月日が横はつてゐるのを、伸子は感じた。(伸子・上 132)

たそがれる(黄昏) そのたそがれた樸の小道を、自動車が一台通ったきりで、雨の怒号と、雷と稲妻。(放浪記 83)

○夕餐の煙は町の空を籠めて、悄然とした友達の姿も黄昏れて見えたのである。(破戒 10)

たたきおとす(叩落) 一人が長刀を叩きおとすと、横だきに黒菅の女をかかえて逆に山肌をかけ登つた。(落城 41)

○こちらが吉沢をたたき落さなければ、吉沢は必ずや彼を執行委員の地位からたたき落すことを考えるだろう。(人間の壁・上 25)

たちあらわれる(立現) やがて細君がおどおどしながら立ち現はれて、先づと葉子を茶の間に招じ入れた。(或る女・上 54)

たちがる(立枯) 埃まびれに立ち枯れた木木が殺風景な感じを与へるが(春琴抄 136)

たちきれる(断切) 鋸の歯が半以上に喰ひ入ると、未だ断ち切れない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へ切れなくなつて、(田園の憂鬱 32)

○木村の希望が果敢なく断ち切れる前、自分の希望が逸早く断たれてしまはないとどうして保障する事が出来よう。(或る女・前 228)

たちこめる(立籠) 気の毒な百姓の一家は立籠つた煙などを苦にしては居られない。(田園の憂鬱 21)

たちすぐれる(立優) 彼女の立ちすぐれた眉目形は花柳の人達さへ羨しがらせた。(或る女・前 28)

たちそろ(立揃) 実に其稲葉の艶々と青むで、暢々と立揃つた所は、都人士に見せもしたい。(思出の記・上 6)

たちはなす(裁離) 前裁落し布から、乳布と袖口布を裁ち離しておく。(主婦の友 1956年 11月付録 和裁と和装 118)

たてつづく(立統) 町屋風の格子戸や、土塀に囲はれた門構の家などが、幾軒か<sup>たてつよ</sup>立統いたはづれに、(あらくれ 106)

たどりあるく(辿歩) 立退きさを辿り歩いて、(中央公論 1953年12月 279)

たどりきわめる(辿極) 如何なる範囲まで真理として自ら主張し要求する権利があるかを厳密に論理的にたどりきわめる仕事である。(哲学以前 124)

たどりぬく(辿) 而して追想は多くの迷路をたどりぬいた末に、不思議な仮睡状態に陥る前まで進んで来た。(或る女・前 163)

だまくらかす(騙) 隠居さんをだまくらかして、いろいろおれのことを聞き出したのは、(小説と読物 1956年2月 391)

だみる(濁) その声が、不思議だった。誰も、笠置シズ子のような、濁みた、太い声なのである。(自由学校 219)

たようする(多用) 加里肥料を多用し、葉になるべく傷付けないこと。(農耕と園芸 1956年7月 63)

たんきてきな(耽奇的) さうしてそれが彼の耽奇的な空想に、怖ろしい、併し魅惑のあるボオの小話の発端を与へた。(田園の憂鬱 87~88)

だんきゅうする(談及) 極々稀に時事に談及せられる場合には、政府も罵り、民間党も罵り、(思出の記・上 96)

たんけいな(単系) これまでは単系な卵色に塗られてゐたのが、二階と同じ傾向の、でも幾らか清楚な模様紙で貼られ、(真知子・前 193)

たんこうな(淡紅) その淡紅な薄い唇、むせ返へるやうなみづみづしい黒髪の膏と、化粧した肌の香ひ、(青銅の基督 35)

だんじこむ(談込) 浜尾東大総長に呼びつけられ、不心得を懇々談じ込まれた。(総長就業と廃業 340)

たんそくする(探測) ロケットや人工衛星が未知の天体を探り、月や火星ロケットが直接これらを探測している現代は、(宇宙の謎はどこまで解けたか 89)

だんどる(段取) 決して前々から段取つてあつた訳ぢやないんですよ……(多情仏心・前 75)

たんめいな(短命) それは向こうから短命な人間や動物どもを静かに眺め、永続する何ものかを人間の心と分かとうとする様子をする。(私の人生観 132)

ちからない(力無) 伸子は、何といふことなく、力無い<sup>ちから</sup>歪んだ微笑を口のあたりに浮べた。(伸子・上 124)

○雨の霽れ間に、相変らずの山鳩が、力無く啼き交すだけであつた。(野火 127)

ちからよわい(力弱) 古綿に似た薄雲を漏れる朝日の光が力弱くそれを照す度毎に、(或る女・前 143)

ちくちょする(蓄貯) 彼はむしろ、浪費することによつて蓄貯せむとする愚者の類に数へらるべきである。(人格主義 35)

ちしきする(知識) 知識そのもの・経験することそのことを、知識された内容(知識)・  
経験された内容と同一視してしまつた。(哲学以前 118)

ちちかまる(縮) 背中を円くして、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を傍  
らの枝へふはりとかけた。(高野聖 40)

ちちかめる(縮) 四十男も降りて来て、隅の方に身をちちかめてかしまつた。(本日休  
診 74)

ちちくする(馳逐) 商品の優秀をもって競争場裏に馳逐せねばならぬ。(総長就業と廃業  
348)

ちちくりあう(乳繰合) とぼけるな。新治と乳繰り合うたくせに。(潮騒 81)

ちちこまる(縮) と、倒れた身体が、伸びたごむの収縮するやうにちちこまるのを感じ  
た。(真知子・前 179)

ちちこめる(縮) 雨森は、それを焼火鉢にして、上体をテーブルに丸く縮こめて安吉を  
待っていたらしかつた。(むらぎも 270)

ちぶとりする(血肥) 顔の色赤々として、血肥りして、形も振も閑はず腕捲りし乍ら、  
談したり笑つたりする肌合に比べたら、(破戒 27)

ちほうな(痴呆) あの時分の若い痴呆な恋が、いつの間にか、水に溶かされて行く紅の  
色か何ぞのやうに薄く入染んでゐるきりであつた。(あらくれ 211)

ちいろいろい[な](茶色) 夜目に茶色い革のジャンパアの背中が見える。(潮騒 75)

○青年のうしろにもひとり、十二ばかりの眼の茶いろな、可愛らしい女の子が黒い外  
套を着て、(銀河鉄道の夜 288)

ちやかっしょくな(茶褐色) 眉間と下腹と白くて、他はすべて茶褐色な一頭も耳を振つ  
て近いた。(破戒 114)

ちやくそうする(着想) DNAの二重らせん構造モデルは、1953年にイギリス人の物理  
学者クリックとアメリカ人の若い生物学者ウォトソンとの二人によって着想されてい  
らい、(生命の謎はどこまで解けたか 184)

ちやくだつする(着脱) 蓋を単に口金に合せて押すか、あるいは蓋を引くことによって、  
簡単に着脱することができる。(ポピュラーサイエンス 1956年3月 87)

ちゅうげんする(忠言) 私は友人として(彼には迷惑かも知れぬが)彼に忠言する。(文  
芸春秋 1954年1月 115)

ちゅうしゅうする(注集) 秋近い日の光はそれに向つて注集して居た。おお、薔薇の花。  
彼自身の花。(田園の憂鬱 46)

ちゅうじゅんな(忠順) 真に為すべしとの命令に忠順な者のみよく為し能うところの自  
由を有する。(哲学以前 207)

ちゅうやくする(注訳) しかしてわが国の熊沢蕃山はさらにこれを注訳して次のごとく  
述べている。(貧乏物語 121)

ちようざんな(洞残) 彼は何かしらいらしながら肉体からも精神からも来る洞残な

気持ちに自身を浸し尽くして、(暗夜行路・前 35)

ちょうしはずれな(調子外) 彼女はものに驚いたやうに、調子はづれな、頓狂な声を出した。(波 126)

○路はちやうどだらだら下なり、小僧さん、調子はづれに竹の杖を肩にかついで、すたこら上げたわ。(高野聖 27)

ちょうじゅする(長寿) 長寿して死ぬと、青春期や壮年期の記憶はなくて、死ぬ間際の醜悪な外形だけを、うんと印象づけてしまうんだわ。(厭がらせの年齢 298)

ちょうしゅつする(重出) 同じような話が重出するのでおもしろくないが、物語を進めるために、今一つ似寄ったお話をしなければならぬ。(貧乏物語 69)

ちょうぜつてきな(超絶的) 併し個を越えた、さういふ超絶的なものは、ぼんやり理解は出来ても、(波 323)

ちょうちょうしい(喋々) お帰り遊ばせお帰り遊ばせ、と口々に喋々しく言ふ声が玄関でした。(平凡 66)

ちよくちする(直知) 自らの内容なる純粹感情を直知する純粹知覚の立場に立つことである。(哲学以前 243)

ちらける(散) わづかのいいかをりになつて毛あなからちらけてしまふのです。(銀河鉄道の夜 294)

ちらめく あほりを食ふ度にばツと捲き起る火の粉の、ちらめく金砂子となつて消えて行く空には、(多情仏心・前 22)

ちんきな(珍貴) 珍貴な異国の香料、宝玉、絹、更紗のたぐいを満載して立ち帰つたなら、(小説倶楽部 1956年6月 290)

ちんきな(珍稀) アメリカに流れこんだ貴重珍稀な原稿や、書籍、地図、手紙、歴史的文書の代償としては、(中央公論 1953年7月 170)

ちんせいな(沈静) 女の坂を曲ると、その風さへ死んで、薄暮の沈静な光芒が、雲のはざまから流れ落ちてゐるのを見るだけであつた。(潮騒 47)

ちんつうする(鎮痛) 真の知識欲に伴うそれは真理という目的があり真理獲得の希望によつて激励され鎮痛される。(哲学以前 23)

ちんな(珍) 雪江の親達は親世撫を撫つてゐるさうだ、一寸珍だね、なぞと素破抜かれては余り名誉でない、(平凡 130)

○「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がをかしくなるほど煤ぼけた珍品古什の類を処狭く散らかした六畳の室の中を(青銅の基督 9)

ちんらくする(沈落) いかに英国民の大多数が貧乏線以下に沈落して衣食なお給せざるの惨状にあるかを述べたが、(貧乏物語 155)

ついいる(突居) 小さい枝折戸のあるのを開けて這入つて、権右衛門は芝生の上に突居た。(阿部一族 76)

つういんする(通院) 片足に約八回ぐらい通院する必要があります。(小説サロン 1956年

12月 244)

つうべんする(通弁) 通弁するには大村のところでよりも安吉の方で困る。(むらぎも 167)

つうわする(通話) 東京と通話するなどということは剣呑至極だった。(文芸春秋 1953年 7月 67)

つかいつぶす(使潰) 高校出の若い投手を、毎シーズン使いつぶして来た南海だけに、(ベースボールマガジン 1956年増刊23号 93)

つかいふるす(使古) ただ一つ、書物の間に小さな使ひ古された聖書がはさまつてゐた。(冬の宿 172)

○東海道線などとは別の国の汽車のやうに使ひ古して色褪せた旧式の客車が(雪国 84)

つきあける(築上) 四方は小高く石垣を築き上げて、上には平石の間々に小石を敷つめ、(思出の記・上 24~25)

つきあてる(突当) 真中に坐つてゐても、何度転がされて、船縁に突当てられたか分らない位だった。(波 259)

つきささる(突刺) 前を行く警固のものの馬の尻に矢がつきささつた。(落城 21)

○さき子の入つて来た姿を見掛けた彼の眼は、冷たくさき子の心に突き刺さつてきた。(闘牛 104)

つきのめす(突) 勘次はぼつさりと、立つて居るおつぎを突きのめす様に戸口に送つてがらりと戸を閉ぢて掛金を掛けた。(土・上 173)

つきはぎな(継接) 然しそんなつきはぎな考へ方が、どうしていつまでも葉子の心の底を蝕む不安を医す事が出来よう。(或る女・前 161)

つくりつける(作付) 教壇のうしろには、やはり山奥の小学校のような黒板がつくりつけてあったが、(むらぎも 82)

○隅の大理石柱の下に、活々としたさざめきを眺めながら、つくりつけた微笑を湛へて坐つてゐる。(伸子・上 92)

つくります(作増) ボレロ衿廻りの横から拾う分は編出し糸で左右に作り増し、あとから綴付けます。(婦人生活 1956年3月付録 春のあみもの 63)

つくりめする(作目) 仮糸で二号針に作り目して淡グリーンで編む(婦人生活 1956年10月付録 あみもの全集 193)

つけけんする(着剣) その次の汽艇からも、やつぱり銃の先きに、着剣した、顎紐をかけた水兵!(蟹工船 115)

つけつけする そのことを幾らかつけつけしたいいい方で当の吉川にいったものもあった。(むらぎも 197)

つけのびる 黒3のコスミに白4、6とツケノビで連絡した時黒7と悠々おさまられる。(棋道 1956年8月 87)

つっこかす(突転) 母親のために、そこへ突転されて、竈の角で脇腹を打つたのが因で、

到頭不幸な胎児が流れてしまった。(あらくれ 91)

つづめける(筒抜) そういう話声は、座敷から茶の間へ、筒抜けるので、駒子も、五笑会なるものの性質が、おぼろげに、分明してきた。(自由学校 32)

○曇り日の筈であつたが、南側を全面窓にとり、その広い磨り硝子を通して一面に降つて来る戸外の光線は、室内を陰影といふものの殆どない、筒抜けた明るいものにしてゐた。(閑牛 127~128)

つっぱしる(突走) 道の端れの椰子の根方まで突走り、そこで立ち止つて、けたゝましく吠え立てた。(野火 74)

○東京を遠く離れて、青い海の上をつっぱしっていると、(放浪記 111)

つつぶくれる 軽い冗談口で受け流すだらうと思ひの外、すぐお坊ちやんらしくつつぶくれてふところなど、(多情仏心・前 282~283)

つつぶせる(突伏) 島村が近づくのを知ると、女は手摺に胸を突つ伏せた。(雪国 43)

つつまきれる(包切) たうとうある時に、うれしさを包み切れなくなつて私に打ち明けた。(冬の宿 116)

つばきする(唾) 憤然としておのれが面<sup>おもて</sup>に唾せ<sup>つばき</sup>られたるがごとくに嚇怒する。(貧乏物語 161)

つまさきだてる(爪先立) 青年は震へ戦<sup>そわ</sup>へ足を組み違へ、片一方を爪先き立てた。(多情仏心・前 24)

つやっぱい(艶) 一時代前の因襲のうちに成人したために、さういふ艶っぱい問題になると、正直に自分を開放する丈の勇気がないのだらうと考へた。(こころ 33)

つよきな(強気) それは強気な諦めを根底に持って、迷しる感情に捨て身に身を横たえているような、(くれない 127)

○非難を笑いに交ぜて言うと、広介は軽いあわて方を見せたが、わざと強気に皮肉な色を唇にただよわせて、(くれない 105~106)

つらす(吊) 今、愛情に泣いているかとおもうと、次の瞬間には憎悪で目を吊らした。(くれない 133)

つらまえる(捕) 席を立たうとした時に、先生は急に私をつらまへて、「時に御父さんの病気は何うなんです」と聞いた。(こころ 93)

つるさがる(吊下) 青地にカルピスと染抜いた小旗が軒に沢山つるさがつてゐる茶見世にはひつて、(波 199)

つるさげる(釣下) その虫については口紅をつけたお菊が後ろ手に縛られて、釣る下げられたところだと番頭が説明した。(暗夜行路・前 215)

つるさる(吊) この部屋が宙に吊るさつてゐるやうな気がして来て、なにか不安定であつた。(雪国 52)

つるしあがる(吊上) 彼等は体の重みの甚しい苦痛の為に閉ぢた眼がつるし上り、顔は蒼い土色をし、(青銅の基督 55)

つるしさがる(釣下) 今まで法衣をかけて置いた、枝の尖へ長い手で釣し下つたと思ふ。  
と、(高野聖 46)

ていぎづける(定義付) 宇宙における普遍的な生命を定義づけるために、地球生物をその一例とするような超生物学の展開が予想され、(生命の謎はどこまで解けたか 186)

ていじょうてきな(定常的) そこから物質が創造されて宇宙をいつまでも定常的なものに保っておくのだと、(宇宙の謎はどこまで解けたか 99)

でいる(出入) 彼は其当時お品の家へは鄰づかりといふので能く出入つた。(土・上 66)

ておう(手負) さき子は自動車に荒く揺られてゐる手負うた愛人の顔をじつと見詰めてゐた。(闘牛 143)

ておくれる(出遅) 地野上等兵は班を出おくれて、銃架のところであうろうしている安西二等兵に言った。(真空地帯・上 61~62)

でかでかする でかでかしたキャブレなんか建てるのは、打ち毀した。京都は京都としていつまでも残すんです。(帰郷 301)

てがみする(手紙) 今アメリカに主人はゐるが自分に貴女へ手紙するようにとの言づけでこの手紙を書くこと、(ニューエイジ 1953年9月3)

てきじする(摘示) 畢竟工業大学が、市民と半絶縁態度を持していたから、工学研究の大切な物を没却したことを暗々裡に摘示している。(総長就業と廃業 362)

てきじよする(剔除) 非悪性纖維性腫瘤を剔除する手術をしたのです(リーダーズダイジェスト 1956年12月 128)

てきようする(摘要) これについての賛成または反対の態度を保留するが、つぎにその荒筋だけを摘要しておこうと思う。(原子党宣言 412)

でさかる(出盛) 丁度晚餐後、人の出さかる最中だ。(伸子・上 7)

てさばきする(手捌) 写真のシャッターくらくら器用に手さばき出来るほどの男に見える。のかも知れない、(富嶽百景 71~72)

でしふる(出洩) 伴子は、もつと前に店に出かけてゐる筈だったが、俊樹のことが気になつて出洩つてゐて、(帰郷 232)

てずれる(手擦) 彼は白い低いカラアと黒いネクタイと黒い地味な少し手ずれた服を着てゐた。(伸子・上 12)

でそびれる(出) いひ後れては却つて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕置にもなることと、つかつかと前へ出た。(高野聖 30)

てつがくする(哲学) わたし等は、哲学するために、生きてるわけではないから………(自由学校 77)

○それは真に哲学する人々のみの体験する或る者であろう。(哲学以前 32)

○哲学者は自己のうちに懐疑が生きてゐる限り哲学し、物を書く。(人生論ノート 26)

てぬける(出抜) 東京湾を出抜けると、黒潮に乗つて、(或る女・前 97)

○彼は寺内を出抜けて山へかかったが、(暗夜行路・前 154)



てばしこい(手) 伯母は僕の帯のゆるむだのを手ばしこく結むで呉れた。(思出の記・上 157)

○そして手ばしこくコルセットをはめたり、漸く着なれたベチコートを着けたりした。(あらくれ 230)

てはなれる(出離) 傳が横町を出離れる時、一寸後を振向いて見たら、(平凡 54)

てびかえる(手控) あれほどの煙草喫みのイギリス人が、ほんの少し値上げになったばかりに喫むのを手控えているのだということは、(ものの見方について 158)

てまわしする(手廻) これが伯父さんの先生でも有らうものなら、口を尖<sup>とん</sup>がらかして、「もツと手廻して早うせにや不好！」と来る所だ。(平凡 76)

てまわる(手廻) なんぼ大将でも、まさかそこまでは手廻るまいと思つてたんだが、(多情仏心・前 224~225)

○最近はどうどん話をふやしているので磨きをかけるまでに手廻らない形がある。(文芸春秋増刊 1954年4月 76)

てもどる(出戻) 死んだ者と同じように再びこの家に出もどるなというて焚く門火の煙が一筋、(世界 1953年9月 204)

てりあわせる(照合) そんな連中のなかにお島をおくことの危険なことが、今夜の事実と照合せて、一層明白<sup>はつきり</sup>して来るやうに思へた父親は、(あらくれ 63)

てりかえる(照返) 蜜柑山に照りかえった黄いろい陽を浴びて村道に出た。(放浪記 166)

てんどうする(転動) 殺す事に気も転動して、女がその頭に十両にも近い装飾を付けて居る事を全く忘れて居た。(思讐の彼方に 67)

てんどうする(伝道) 永年支那で伝道してゐたといふ婦人と話してゐたミス・ブラットは、(伸子・上 112)

てんばくする(纏縛) それよりもこの得態の知れない男女関係の間に纏縛され、退くに退かれず、切放しも出来ず、(河明り 292)

てんびょうする(転錨) 監督等が自分達で、船を領海内に転錨さしてしまつた。(蟹工船 99)

てんぼうする(電報) それをまたその儘鸚鵡返しに電報して来た。(キング 1956年10月 113)

てんめんする(纏綿) 不平や、怨恨や、羨望や、嫉妬や、陰險な執拗な復讐心などは、互ひに纏綿し次第に鬱積して、(人格主義 92)

○その間に纏綿する事情のいかにデリケートであつたかは、推察に難くない。(総長就業と廃業 343)

てんわする(電話) 例えば私が東京と電話する。(ものの見方について 199)

とうかくする(統覚) 簡単に心理学者の語をもつてすれば知覚し或いは統覚することである。(哲学以前 52)

どうかんする(洞観) 世界と人生の真相を洞観せしめる一種の体系的思想として期待さ

れているのに応じて、(哲学以前 94)

とうこうする(東行) 北上し東行し、まるで反対の方へ押し遣られるやうな迂曲の道を  
辿りながら、(河明り 287)

どうさする(動作) まづ録音にあたってはマイクロホンがこんなに広い範囲を一樣に動  
作しない。(科学朝日 1956年 4月 90)

とうじんする(倒尽) タカの知れた値段だけにいまだ家産を倒尽したという悲劇を耳に  
せぬのはご同慶の至り。(文芸春秋 1953年 8月 111)

とうだんする(投弾) さらに日本総領事館に放火投弾した事件も、(面白倶楽部 1956年 7  
月 202)

どうりゅうする(動流) その草のために一時動流することをさへぎられたそれらのささ  
やかな水は、(田園の憂鬱 13)

どえらい 今度こそ日本民族の運命をかけたどえらい大戦争が、いよいよ近く南方のど  
こかで始まるに、(人物往来 1956年 4月 122)

とおどおしい(遠々) 横浜に移つたために、<sup>おど</sup>晚くなれば泊つて行くやうなこともあつた  
けれど、昨年あたりから、何故か急に遠々しくなつてゐた。(多情仏心・前 148)

とがめだてる(咎立) 鑑札のない娘がたまに宴会などの手伝ひに出て、咎め立てる芸  
者がいないのだらう。(雪国 26~27)

ときがいく(時買) 米や醤油を<sup>したぢ</sup>時<sup>ときがひ</sup>買しなければならぬやうな日が、三日も四日も二人  
に続いてゐた。(あらくれ 163)

ときほぐす(解) 割箸で中のそばを解きほぐすようにして、(むらぎも 71)

○親子関係、仲間関係の実態が、つぎつぎとときほぐされた。(高崎山 36)

○沢田先生はまず、こういう生徒の警戒心を解きほぐしてやらなくてはならなかった。  
(人間の壁・上 97)

ときほぐれる(解) ほの白く解きほぐれている明子の顔を見て広介が、その頬を指で突  
くようにして、(くれない 52)

ときほごす(解) 僕はこの矛盾を解きほごして見たくなつて堪らない。(或る女・前 203  
~204)

ときらす(途切) 私は黙つてゐた。奥さんも言葉を途切らした。(こころ 50)

とくきくな(得策) しかしほんとうに考うれば、一部の実業家を利するよりも、国民全  
体を富ます方が得策な場合がはなはだ少なからぬであろう。(貧乏物語 111)

とくしな(篤志) 然し、蓮太郎は篤志な知己として丑松のことを考へて居るばかり、同  
じ素性の青年とは夢にも思はなかつた。(破戒 89)

○万一にも外国に見るやうな篤志な金持があらはれて、(真知子・前 119)

とくしゅてきな(特殊的) なおそこには極めて多種類の特殊的なものが具体化されるこ  
とはつねである。(社会事情と科学的精神 126)

○どのやうな利己主義者も自己の特殊的な利益を一般的な利益として主張する。(人

生論ノート 92)

どくぞんする(独存) 認識するより先きにそうした世界がその対象として独存していたわけではなくて、(哲学以前 228)

とくちょうづける(特徴附) 想像力の欠乏がこの努力家型を特徴付けてゐる。(人生論ノート 75)

とくていする(特定) 謂はば慣例に過ぎない一つの儀式を境界として、突然特定した或る存在が自分の存在に結びつき、(真知子・前 11)

○総長には沢柳政太郎と特定してあったが、理学部の部長を誰にするかの問題となり、(総長就業と廃業 340)

とげとげする(刺々) その先生といふ文字が——<sup>くわく</sup>画は少いが、妙に刺々したその文字が、鋭く彼の瞳に突刺さつた。(波 33)

○神経がトゲトゲしているあなたにこんな手紙を差し上げるとあなたは、ひねくれた笑いをなさるでしょう。(放浪記 14)

ところまばらな 知多半島や渥美半島のところまばらな燈火に比べて、(潮騒 119)

としわかい[な](年若) リヤカーには年若い女が乗つて腹這ひ加減にうづくまつて、それが首から下をすつかり毛布にくるまつてゐた。(本日休診 110)

○三種講習を済まして、及第して、<sup>やうや</sup>漸く煙草のむことを覚えた程の年若な準教員などは、(破戒 26)

○同行の婦人というのも、まだ年若で、恐らく、高級パンパンか、ダンサーではなからうかという、服装でしたが……(自由学校 300)

どったりする 口のなかでブツブツ云ひながら、塩ぬれのどったりした律天を脱いだ。(蟹工船 92)

とつつかまえる(取捉) 最終には取捉まへて否応なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、(平凡 34)

とつつかまる(取捉) あゝ云ふ人たちと来たら、とつつかまつたら中々はなれないんだからね。(多情仏心・前 51)

○銃架のところで昼飯をたべに階下から上ってきた川水兵長にとつつかまった。(真空地帯・上 102)

とっぱい あんた、とてもトッポイわね。(自由学校 45)

どづよい(度強) 母親が、角張つて度強い顔に、青い筋を立てゝ、わなわな顫へるまでに、毒々しい言葉を浴せかけて、(あらくれ 59)

とどうする(渡道) 私は山口県より渡道した自衛官です(実話雑誌 1956年12月 323)

とびあがりな(飛上) 自分に飛びあがりなところのあることは安吉自身たえず知っていた。(むらぎも 113)

とびぬける(飛抜) それも、猪子先生のやうに飛びぬけて了へば、また人が許しをするんですよ。(破戒 307)

**とぼつく** どうもいつもの滝さんのやうな具合に、すかつといかないぜ。すつかりとぼ  
ついちまつてるんぢアないのかい(多情仏心・前 75)

**とぼとぼする** あのとぼとぼする蠼燐の火が私の心に何かささやくような。(出家とその  
弟子 173)

**どまつく** 火夫の代表は、普段一度も云つたこともない言葉をしやべり出して、自分で  
どまついてしまった。(蟹工船 110)

**とまどいする**(戸惑) 自分の予期しているものと明子の考えとの隔たりに、瞬間戸惑い  
したように見えた。(くれない 93)

**どやしつける** 卒業試験、就職難、さういつたものが団塊になつて私の頭をどやしつけ  
た。(冬の宿 61)

**とりしぼる**(扼) 僕等は恰も兵学校の生徒が戦場の報知を聞く心地で、細腕をとりし  
ぼりつ学校の窓から社会を望むで居た。(思出の記・上 119)

**とりすかす**(取贖) お志保はいろいろに取贖して、動つて見たり、私語いて見たりした  
が、一向に感覚が無いらしい。(破戒 218)

**とりそえる**(取添) 編笠、草鞋、竹の輪なぞを取添へ、別に魔除と言つて、刃物を棺の  
蓋の上に載せた。(破戒 110)

**とりそなえる**(取備) 中には動物園までとり備えて、子供の客引きをしているところも  
あるという。(実業之日本 1956年3月15日 67)

**とりちらかす**(取散) 部屋のなかには、取り散らかされて足の踏みこむ場所もないほどで  
あつた。(本日休診 87)

**とりちらかる**(取散) 取りちらかつた座敷の真中に、座蒲団を枕にして寝てゐたが、  
(あらくれ 20)

**とりのこす**(取残) それで彼はとうとう帰る事になつた。折角来た私は一人取り残され  
た。(こころ 6)

○既成の概念は進みゆく現実に取りのこされ、その非妥当性が赤裸々に暴露されてき  
たのである。(革命期における思惟の基準 136)

○取り残した芋の葉に雨は終日降頻つて、八百屋の店には松茸が並べられた。(蒲団40)

**とりはだだつ**(鳥肌立) そして、げえつと吐気を催したが、口からはなにも出ず、目の  
縁が湿つて、頬が鳥肌立つた。(雪国 80)

○どこを押せば、あの実直さうな内科の老医師から、人の首筋に鳥肌立たせるやうな  
文句が出るのだらう。(本日休診 100)

**とりまぎらす**(取紛) 気を取り紛う燦々たる星がなければ、永くはその凝澄した注視に  
堪へないだらう。(河明り 307)

**とろんこな** トロンコな目を見据あたまゝ、うつとりしかけてゐた三好が、そのとき急  
に頓狂な声を出した。(多情仏心・前 220)

○カクテルやウキスキイが混つた揚句の日本酒で、有緊豪酒の三好も、大ぶん目つき

がトロロンコになつて来てゐた。(多情仏心・前 217)

とんがらかす 唇をとんがらかさずに、僅かな隙から息を洩らすやり方の口笛で、(多情仏心・前 137)

どんな(鈍) たゞ何かに鈍な私でございますから……(桑の実 49)

とんにゅうする(遁入) 「ドイツのポケット戦艦一隻が当地の沖合で海戦ののち、十三日の夕刻、当地に遁入してきた」(特集文芸春秋 1956年 世界を震撼した三十大事件 186)

とんほがえりする(返) だが、今の日本人を見て御覧。そんな雄大な計画はとんぼ返りしても出て来ない。(帰郷 281)

なかぬいする(中縫) 上は衿付止りまで、下はベルト付止りまでを中ぬいして返し、衿ぐりにギャザーを寄せます。(主婦と生活 1956年10月付録 秋冬のニューデザイン 83)

ながほそい(長細) 二階の窓障子は高さ一尺ぐらゐしかなくて長細い。(雪国 105)

○ほんと云やアかう云ふ長ツ細い部屋は嫌ひなんだけれど……(多情仏心・前 302)

ながまる(長) 青木さんは小さい方の室に、蔓の椅子に長まつて、少し開けてある硝子戸を通して外を見てゐられた。(桑の実 28)

ながめすてる(眺捨) 重なる心配をどこ吹く風と眺め捨てていられるものじや。(別冊小説新潮1956年1月 196)

なげとばす(投飛) 彼奴らの意識の低さはありませんよ。自覚がないんです。霧島さんは、ずるぶる投げ飛ばしましたよ。(冬の宿 134)

なごりない 昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うらゝかに昇りぬ。(武蔵野 8)

なぞえる 間にある毛を云うのだが、ここでは陰毛をなぞえてそう称したもの。(日本及日本人 1954年5月 94)

なぞらう 亭主は又苗束へ香煎を少し振り掛けた。それは稲の花に模擬<sup>なぞら</sup>つたので、稲の花が一杯に開く様との縁起であつた。(土・上 203)

なだめすかす(宥暉) いやがる子供をなだめすかして、ようやく学校まで連れて来たのだ。(人間の壁・上 277)

なつこい(懐) 「私の部屋へもよろしかつたらいらつしやいまし。又ゆつくりお話しませうね」となつこく云つてそこを去つた。(或る女・前 137)

なでさげる(撫下) 「ええ、ちきしょう……」と心で顔を撫で下げる気で彼はフランス語の受験場の方へ足に力を入れて歩いて行った。(むらぎも 334)

なぶらす 手欄に臂をついたまゝ安心して、晩夏の景色をつゝむ引き締つた空気に顔をなぶらした。(或る女・前 19)

なまかじりな(生嗜) 八千人か一万人の教師のうちの一人か二人が、なまかじりな民主教育の(行き過ぎ)をやっただけのことであつた。(人間の壁・上 103)

なみたつ(並立) 更にそれらを取り囲みながら果てしく並み立つてゐる松林の上に、(風立ちぬ 93)

なみだっぽい(涙) おくみはいつか自分の小さかつたときから今日までの事をそれから

それへと考へ返して、言ひ知らない涙つばい自分を見守つた。(桑の実 69)

○「ゆみちゃん! どこへ行ってもたよりは頂戴ね。」と、由ちゃんが涙っぽく私へこんなことを云っている。(放浪記 86)

**なやめる**(悩) そなた迄を、不幸にはしたくないと、唯さへお心を悩めていらつしやるものを(週刊朝日 1956年3月18日 45)

**ならびたつ**(並立) 泰西諸国と並び立つには是非日本人種改良をせねばならぬ、(思出の記・上 90)

**なりきしめく**(鳴軋) 自動車が切通し下の区画整理で掘り返された道路で、進行すると云ふより上と下に躍り、車体全体で鳴りきしめいてゐた。(真知子・前 161)

**なんこうする**(南行) 且つ戦ひ、且つ退きつゝ南行すること更に数日、或る山谷の中で漢軍は一日の休養をとつた。(李陵 159)

**にぎてきな**(二義的) もつとも、近所ぢゆうで担ぎこんで来たこの患者を縮尻らすと、開業早々に患家の信用を失ふので、二義的な意味も手伝つて手を尽したのは云ふまでもない。(本日休診 63)

**にぎやかす**(賑) 友を訪へば夫の席に出て流暢に会話を賑かす若い細君、(蒲団 11)

**にくあつな**(肉厚) 肉厚な自分の頬垢を、厚い平手で打返さないではおかぬ小野田に喰つてかゝつた。(あらくれ 154~155)

**にくづける**(肉付) すなわちあらかじめ決定されていることが肉づけられるだけだ。(むらぎも 14)

**にこつく** 互に顔を見合せ何となし彼女らはにこつた。(伸子・上 74)

○俊一はおとなしく、愛撫に依つて受ける快感を楽しんでゐるやうにニコついた。(生まざりしならば 200)

**にこりたつ**(濁立) あの清らかであつた渠の水は、毎日の雨で徒らに濁り立つて居た。(田園の憂鬱 59)

**にしまる**(煮染) 仕事が終わつてから、煮しまつた手拭で首を拭きながら、皆ゾロゾロ「糞壺」に帰つてきた。(蟹工船 71)

**にじりおりる**(蹠降) 舟は算盤に乗せられて、大ぜいの掛声と共に、しぶしぶ水際へむかつて蹠り降りる。(潮騒 103)

**にじりしりぞく**(蹠退) 若者は力の限り泳いだ。巨大なものはすこしづつ蹠り退いて道をひらいた。(潮騒 145)

**にじりだす**(蹠出) ちょうど今にじり出そうというときでしたが、また巡視隊が廻つて来ましたので、さつそく草の中にかくれました。(世界 1956年6月 187)

**にじりでる**(蹠出) 私たちは、またしてもにじり出て行き、(世界 1956年6月 187)

**にちやつかす** 小畑はいつ伊之が飛びかかつてくるかわからない汗あぶらをにちやつかす、底恐ろしさに足がすくんでしまった。(あにいうと 145)

**にとかす**(煮溶) フライパンにバターを煮溶かし、水からおろしてフライパンを傾け、

(主婦と生活 1956年12月付録 冬のお料理 56)

にやす(煮) その十数人の名の中に一人として、「それなら僕が知つてゐる。」といひ得るものが無かつたのに葉を煮やしたらしかつた。(冬の宿 46)

にゅうじゅくする(入塾) 松村清磨と云つて、僕より二歳年長で、僕より半歳あまり後れて入塾した少年であつた。(思出の記・上 68)

にゅうてんする(入店) こんなことは、入店してから、初めてだった。(週刊朝日 1956年5月13日 59)

にょうぜつな(饒舌) 年寄でも流石女の饒舌なもので、間はず語りに色々の事を教へて呉れた。(思出の記・上 187)

による(似寄) 物語を進めるために、今一つ似寄ったお話をしなければならぬ。(貧乏物語 69)

○自分と似寄つた姿なり性格なりを木部に見出すといふ事は、自然が巧妙な皮肉をやつてゐるやうなものだつた。(或る女・前 15)

にらみすえる(睨据) 逃げないで、にらみすえていると、ゴリラは二、三メートル手前でとまって引きさがる。(高崎山 49)

にらめる(睨) 「悪党」と暫くしてから、葉子是一言これだけ云つて事務長を睨めた。(或る女・前 233)

○ほんとに、把み殺しもしかねない、無念の形相で、平さんは、虚空を睨めた。(自由学校 273)

にわかず(煮) 煮わかし湯を鍋に入れ、バターを入れてとけたら、(婦人生活 1956年6月付録 西洋料理 71)

ぬいあがる(縫上) 縫ひあがつた毛布にホックや釦をつけたり、穴かざりをしたりすること敏捷な指頭を慣した。(あらくれ 142)

ぬいおさえる(縫押) 脇身頃に重ねて1.5センチ巾のステッチで縫いおさえ、(若い女性 1956年12月 301)

ぬいけす(縫消) 身頃はダーツを縫い消し、肩と、左脇明き30センチ残して脇を割縫にし、(婦人倶楽部 1956年6月 155)

ぬいとりする(縫取) あけても暮れても緑の糸で、一枚の葉の一部分だけを縫ひ取る。(真知子・前 153~154)

ぬいとる(縫取) とにかくかう言つたやうな柄を、こんな風に縫ひ取つて帯にしたらどうだといふのさ。(桑の実 125)

ぬいわる(縫割) 後スカート中央を縫割り、ウエストにギャザーを寄せて胴接ぎをします。(婦人生活 1956年8月付録 簡単服とブラウス 116)

ぬかくさい(糠臭) 仮令其飯は、往々にして糠臭く、其汁にはよく炭屑砂利藁ぎれなんど推参な汁の実が飛び込む癖があるにもせよ、(思出の記・上 103)

ぬかるむ 人垣の前の雪は火と水で溶け、乱れた足形にぬかるんでゐた。(雪国 170)

ぬきあしする(拔足) 君江は袂をおさへ拔足して十歩ばかり。(つゆのあとさき 13)

○子供のやうに肩をすぼめながら、襲子はそつと唐紙をしめ、拔足して病床に近づいた。(波 213)

ぬぐいさる(拭去) 朝のうちは、スマトラ島の影が見えてゐたが、正午の光はそれを拭ひ去つてゐる。(婦郷 62)

○恨みや怒りを綺麗に拭ひ去つて、諦めきつたやうに総てのものを唯しみじみとなつてかしく見せるその思ひ。(或る女・上 192)

ぬすみぎきする(盗聞) いままでにもう踊場のところに潜んでぬすみぎきしてゐたのであらうか、(冬の宿 150)

ぬすみきく(盗聞) 監督は絶えず無線電信を盗みきかせ、他の船の網でもかまはずドンドン上げさせた。(蟹工船 98)

ぬすみみる(盗見) 島村が葉子を長い間盗見しながら、彼女に悪いといふことを忘れてゐたのは、(雪国 12)

ぬりたくる(塗) 女たちはさも手負いであるかのように髪をさんばらに切り、泥を顔や手足にぬりたくつて備えを固めた。(落城 41)

ねかしつける(寝) 彼はおむつを取換へて、もう一度寝かしつけた。(波 143)

ねぐさい(寝臭) 昨夜のまゝに電燈のついてゐる閉切つた座敷の中の蒸暑さが一際胸苦しく、我ながら寝臭い匂ひに頭が痛くなるやうなので、(つゆのあとさき 85)

ねころがる(寝転) 彼はそんな人中へ出るよりも、家に寝転がつてゐたかつた。(波 167)

ねじたおす(捩倒) 下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。(羅生門 13)

ねじまげる(捻曲) 満身の力をこめて、この鉄格子をネジ曲げ、そのすきまから脱出した欲望に、襲われる。(自由学校 362)

○私が気付かぬうちに、私のあらゆる挙動を観察して、それを強く捻ぢ曲げて、嘉門に密告したのだ。(冬の宿 153)

ねじもどす(捻戻) 私は、それを見とどけ、また、ゆつくりからだを捻ぢ戻すとき、娘さんを、ちらと見た。(富嶽百景 54)

ねじらす(捩) 二人ともうつむいて、体を少し捩らして斜に向きあつたまま、一言もいはなかつた。(冬の宿 174)

ねじる(捩) おくみは、やがて中からその電気のかさを引きよせて灯を捩ぢた。(桑の実 136)

ねせつける(寝) 大きなアクビにごまかして、袖で眼をふきながら、蒲団を敷いて時々やんをねせつけてやる。(放浪記 265)

ねたおれる(寝倒) 強敵に襲ひかゝられた孤軍のやうに、たじろぎながら又ソファの上にねたおれた。(或る女・前 157)

○眼をつぶつて、床の上に寝倒れると、木村の手を持ち添へて自分の脾腹を押へさし



て、(或る女・前 222)

**ねたりる**(寝足) 十分寝足りた機嫌のよさから、ふいとそんな気を起した。(多情仏心・前 339)

**ねっちりする** 説明のしようのない、反対も賛成も両方しにくいようなアマチュアの場合が斎藤のねっちりした口調から予想されて目当なしに安吉は警戒した。(むらぎも 316)

**ねばりつく**(粘付) 汗じみた顔には下げ髪がねばり附いて、頬は熱でもあるやうに上気してゐる。(或る女・前 47)

**ねぶそくな**(寝不足) 寝ぶそくなはれぼったい時ちゃんの臉を見ていると、たまらなくいじらしくなってくる。(放浪記 156)

**ねみだれる**(寝乱) 寝みだれた画家の髪<sup>の</sup>毛は、いつもより白く見え、その下に酔ひざめの、好人物らしい顔があつた。(帰郷 55)

**ねむりおちる**(眠落) 勞れ切つて眠り落ちると、一度隣の部屋でも掃除するらしいはたきの音に薄目をあいたきりで、(多情仏心・前 338)

**ねめすえる**(脱据) 思はずッとその小男をねめ据ゑて、出入口を開いて通させようともせずに、(多情仏心・前 316)

**ねめつける**(脱) さう叫んで、自動車をねめつけたが、急に酔漢らしい高笑ひになつて、またひよろひよろと歩き出した。(多情仏心・前 177)

**ねめまわす**(脱廻) 津上は敵意とも輕蔑ともつかぬ視線でリングの方をねめ廻してゐたが、唐突にこんなことを言つた。(闘牛 151)

**ねらいうつ**(狙射) 攻め上つて来る佐土原勢を溪川ぞいの間道にねらい射つためである。(落城 26)

**のぞかす**(覗) 黄金の円光をもつた電気栗鼠が、可愛い顔をその中からちらちらのぞかしてゐるだけでした。(銀河鉄道の夜 314)

○対の緋をきて、襦袢の白襟の間から首一ぱいの毛糸ジャケツをのぞかしているこの青年は、(むらぎも 265)

**のぞきでる**(覗出) ぼやけてゐたやうな眼からは、たちまちきりりとなつかしさうな瞳が覗き出た。(河明り 283)

○葉子は左手を二の腕がのぞき出るまでずつと延<sup>のび</sup>して、そこにあるものを一払ひに払ひのけると、(或る女・前 34)

**のぞきみる**(覗見) どの顔も髻だらけだし埃と汗まみれになつて茫漠と車内を覗き見て、後方に飛び去つて行つた。(帰郷 75)

**のぞきめがね**(覗眼鏡) 歪んだ月に、指を円めて覗き眼鏡していると、(放浪記 174)

**のぞける**(覗) 首と袖口とからのぞけたジャケツは黄茶色の色だけでも温かそうに見えた。(むらぎも 266)

○高い、不愛想な看護婦は、狡猾な意図を露骨にあらはした顔をドアに覗けた。(真

知子・前 207)

のっぴきする その人の寄る船つき場へ尋ねて行き、のっぴきさせず、お話をつけよう  
ぢやありませんか(河明り 292)

のひろい(野広) お島は野広い境内を、其方こつち歩いてみたが、(あらくれ 19)

のりすこす(乗過) 目の前にバスの発車を見ながら、むなしく乗り過す事がある。  
(娯楽よみうり 1956年12月7日 11)

のりつぶす(乗潰) 馬の二十歳といえは、人間に換算すれば七十歳に相当し、途中で乗  
りつぶしてしまつては、元も子もないから(文芸春秋 1956年3月 52)

のんのする(乗) 「坊や、のんのするかい。」(波 196)

はいいろな(灰色) 北国街道の灰色な土を踏んで、(破戒 97)

○背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、(或る女・前 97)

はいかか(這掛) 屋敷の隅の肥料小屋には、夕顔糸瓜烏瓜苦瓜瓢が無暗に這ひかゝつ  
て、(思出の記・上 88)

はいがかる(灰) 向ふの広場に立つ寂びた銚色の建物と、正面の灰がかつた大理石の円  
柱や階段が、(真知子・前 61)

○空に浮ぶ冬雲の焦茶色が灰がゝつた紫色に変つた頃は、もう日も遠く沈んだのであ  
る。(破戒 287)

はいがくする(廃学) 僕の責任として、芳子に廃学させるには忍びん。(蒲団 45)

はいしんする(背信) 多くの者が裏切つたり背信したりするのは臆病からばかりではな  
い。(中央公論 1954年3月163)

はいずりまわる(這廻) ハカマカズラの太いつるが、奇怪なかたちにははいずりまわつて  
いる。(高崎山 19)

はいする(佩) 大小は佩しているけれども、それは伊達であつて、武士の魂は抜けて遊  
治郎になり下つてしまつた。(文芸春秋 1953年11月 106)

はいずる(這) 一日の重労働で働き疲れた体を荷車のかじ棒に託して、はいずる様にし  
て急ぐ姿を。(葦 1956年7月 95)

はいつくばる(這蹲) また床板に真直ぐ足をたてて両手を前につき、はいつくばること  
もいらない。(真空地帯・上 36)

はいもうする(敗亡) 誰を見ても、先づ松陰先生を差向けて見ると、一人として手応  
ある人物はない。皆一溜りもなく敗亡する。(平凡 79)

ばかあたりする(馬鹿当) 昨年の炎熱景気でバカ当りした扇風機は、(週刊新潮 1956年8  
月27日 37)

ばかつよい(馬鹿強) 戦争や組合の闘争となると、それがバカ強い力を発揮する。(もの  
の見方について 85)

ばかでかい(馬鹿) 今から考へたらお伽話めいて見えるくらゐに馬鹿でかい人間の夢を。  
(綿郷 281~282)

はかりしる(計知) 手が届きさうにあざやかだけれども、高さは凡そ計り知られぬ。(高野聖 38)

○ただ「貞淑」といふ単純な一言葉に尽きる心であるか、——まつたく測り知りやうはなかつた。(冬の宿 199~200)

はかりしれる(測知) ジョンソン大統領が、『米国医学会の勝利』とよんだ如く、その成果は測り知れないものがあり、(人工心臓を体内に 372)

はくい あら、兄さん、眼がハクいんだね (自由学校 208)

はくしよする(白書) いよいよ留置場へ入れられる時も、病院の待合礼のような黒塗りに白書した番号を、渡される。(自由学校 359)

はくめいな(薄命) 己の運命は孫の手の中に握られている、自分の薄命な生涯についてどう嘆いてみたところで、(厭がらせの年齢 270)

はぐらす 銀子は、良人が、願みて他をいう口癖には、慣れてるので、めったに話をハグらされるようなことはない。(自由学校 281)

はぐりかえず 私は又逆に頁をはぐり返した。(こころ 146)

はげこむ(化込) 殆んど申合わしたように丸髷、束髪、銀杏返しのもれもこれも、素人扮装の大化けに化けこみ。(むらぎも 232)

はげちよろける(剝) 風呂屋の軒には剥げちよろけた彩色の木彫が施され、湯気はその軒にまとはりついた。(潮騒 75)

ばさつく 八つ手の広い葉が安吉の頭の上でばさつく。(むらぎも 310)

ばさつく 新薬の清潔で乾いたばさつく音。(むらぎも 68)

ばさばさする おっぴらいた東京近郊、千葉県へ続くばさばさした平坦地の上の一点でその感じがある。(むらぎも 136)

はさみつける(挟) 彼は命じて二枚の板を取寄せ、其の間にジェムシードを挟みつけ、しかと結び合せた。(日本及日本人 1953年8月 135)

はじらしい(羞) 最早心に思ふ半分も云ひ現はし得ぬ、羞ぢらしい深い娘の口調ではなかつた。(青銅の基督 87)

はせちがう(馳達) 丑松もまた高等四年の一組を済まして、右左に馳せちがふ生徒の中を職員室へと急いだのである。(破戒 17)

パセティックな 活気のずんずん恢復しつゝあつた彼女には何かパセティックな夢でも見てゐるやうな思ひをさせた。(或る女・前 99)

ばたつかせる 風がときどき戸をばたつかせた。(風立ちぬ 104)

はたらきあげる(働上) 十年も働きあげたその上で、カフェーの女給を妾に引き入れてみたり、(放浪記 234)

はたらきじにする(働死) 私は働き死にしなければならないのだろうか! (放浪記 132)

はたらきずきな(働奸) 働 好な、はたらきずきな、はたらきずきな、はたらきずきな、人の好い、しかも子の無い叔母は、いつでもはたらきずきなやうに丑松を考へて居るので、(破戒 119)

はたらきづめる(働詰) りきが働きづめて打倒れでもしなければよいがと、(あにいうと 137)

はどうする(波動) すなわち単に塗られた絵具を見るのでもなく波動する音波を聞くのでもなく(哲学以前 242)

バトンタッチする 理研仁科研究室に芽生えた宇宙線研究の伝統は、朝永氏から早川氏へとバトンタッチされ、(物質の根源と宇宙を結ぶ 112)

はなもとじあんな(鼻元思案) 今から思うと、いかにも鼻元思案な話だが、(暗夜行路 前・226)

はなれる(場慣) 来賓を代表した高柳の挨拶もあつたが、是はまた場慣れて居る丈に手に入つたもの。(破戒 73)

はねかせる(跳) 天井や、肉をぶら下げてある大きなガラス戸棚に、きらつ、きらつと、明るい斑点をはねかせた。(波 7)

はねかる(跳) その言葉と一しよに水がばしやりと行介の顔にはねかつた。(波 247)

はねこむ(跳込) まず黒1とハネコミ、白2、黒3、とオン出す。(囲碁 1956年12月 55)

はねさがる(跳下) こうハネサガってワタリをみながら71の断点を間に合わそうとした。(棋道 1956年9月 128)

はばかりない(憚) 母の憚らない呼び声が、ぼんやり彼女に迷惑な心持与へる。(伸子・上 146)

はばひろい[な](幅広) 息を切って、深い呼吸をしている、父の幅広い肩が見るからに憎々しかった。(暗夜行路・前 17)

○巾広い、牛の啼声のやうな汽笛が、水のやうに濃くこめた霧の中を一時間も二時間もなつた。(蜚工船 97)

○爽やかな長いそのうへ幅広な葉を風にそよがせて、(田園の憂鬱 13)

はらたてる(腹立) 武子は腹立てたやうに云つた。(友情 75)

○腹立てたときでも、顎をつき出して口をとがらして物をいうことがない。(むらぎも 102)

バランスする イギリス国民がいろいろの思想をバランスしたような落着きのある考えで済ました顔をしているのと、(ものの見方について 109)

はりころす(拳殺) じたばたすると拳殺すぞ!(心 1953年7月 82)

はりだつ(針立) 心はひたすら、あのうねる樹幹の鬱蒼の下に粗い歯架の清涼な葉が針立つてゐる幻影に浸り入つてゐた。(河明り 321)

はりまげる(殴曲) 私は余程飛竜つて横面をグワンと殴曲げてやらうかと思つた。(平凡 83)

はりわたる(張り互) 明け暮れたゞ河面を眺め乍ら、張り互つた意識の中から知らず識らず磨き出されて来る作家本能の触角で、(河明り 260)

はれあがる(腫上) 患部全体が瘤のやうに腫れあがつて、一部の肉が碎けてゐた。(本日

休診 77)

はれぼったい(腫) 紙一重の昨夜のつかれに、腫れぼったい臉を風に吹かせて、久し振りに私は晴々と郊外の路を歩いていた。(放浪記 84)

はんえいきゅうてきな(半永久的) 半永久的な社会投資と見るべき自動車道路などが、出来たと思うと、二、三年のうちに修理されたりして、(ものの見方について 156)

○小型のポンプさえ作れば、心臓なしのイヌを半永久的に生かしておけるはずであったが、(人工心臓を体内に 367)

はんげきな(繁劇) ふだんの繁劇な都会の濠川の人為的生活が、雪といふ天然の威力に押へつけられ、(河明り 276~277)

ばんする(番) ある朝釜の下の火を番しながら、<sup>しやが</sup>跪坐でゐるとき言葉を返したのが胸にすゑかねたといつて、(あらくれ 91)

はんせいする(半醒) 妙な感覚で彼女は半醒した。(伸子・上 67)

はんせつする(半折) 内灘の票をほぼ半折して当選した、この兩代議員は、(世界 1953年 11月 108)

ばんせんな(万全) まあいづれにせよ、人間といふものは万全な者はないからね、(伸子・上 183)

はんとうめいな(半透明) 同時にその半透明な乳白色は刻刻に少しづつ併し確実に無色で透明なものに変化して来るのであつた。(田園の憂鬱 28)

はんほうけんてきな(半封建的) ところが、日本の講座派歴史家にかかると明治維新は半封建的な絶対主義的変革だし、(学問の動き 262)

ひうんな(非運) 第一に僕の人生の出発点からして、捨子といふ、悲運なハンデキヤップがついてゐるんです。(河明り 327)

びおんな(微温) どんな時代が来ても独得の適度で公正らしい態度が、自然と、本人に怪我をさせないばかりか、微温な読書人の固定した信用を失はしめない。(綿郷 149)

ひがみっばい(僻) 小うるさくって、ひがみっばくて、叱られるとすぐ泣く、厄介な娘だった。(人間の壁・上 32)

ひきかくれる(引隠) 高柳は素早く罅を通り抜けて、引隠れる<sup>ひきかく</sup>楊処<sup>ばしよ</sup>を欲しいと言つたやうな具合に、旅人の群に交つたのである。(破戒 104)

ひきくらべる(引比) 丑松は蓮太郎の精神を思ひやつて、其を自分の身に引比べて<sup>ひきくら</sup>見た。(破戒 294)

ひきそばめる(引) 櫓を引きそばめて、飛ぶ速さで迫りつつ呼ばわつた。(面白倶楽部 1956年 4月 190)

ひきはぐ(引剥) 喘ぎながらおどりがあがつて、まるで引き剥ぐようにどこからでも裂き始めた。(くれない 124)

ひきゆがめる(引歪) 高柳はまた口唇を引歪めて<sup>くもびる ひきゆが</sup>、意味ありげな冷笑を浮かべる<sup>あざわらひ</sup>のであつた。(破戒 258)

ひきる 養父は如何かすると、蚕室にゐるお島の傍へ来て、もうひきるばかりになつてゐる蚕を眺めなどしてゐた。(あらくれ 25)

ひげんじつな(非現実) 島村が葉子を長い間盗見しながら、彼女に悪いといふことを忘れてゐたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらへられてゐたからだつたらう。(雪国12)

ひげんする(微減) 売上げは十億円で前々期比微減したが (エコノミスト 1956年9月22日 76)

ひこつかせる 油断も隙もなく、常に秘密の匂に鼻をヒコつかせてゐる事實は、三好も見聞してゐたうへに、(多情仏心・前 136)

ひしぎつぶす(拉潰) 自分の身も心も唯一息にひしぎ潰すかに見えるあの恐ろしい力は、(或る女・前 170)

ひしょうな(卑小) つまり人の卑小な点にすりついて行くようにして激励するってことの卑しさを自分で知っていて、(むらぎも 312)

ヒステリーくさい(臭) どうやら、ヒステリー臭い発作だった。(自由学校 128)

ヒステリカルな 何か別の事で非常に激昂して居るらしい心を、彼の犬の方へうつして、ヒステリカルな声で散散に吐鳴り立てた。(田園の憂鬱 50)

○派手な部屋着のままの女が、両手を引きしぼつて歩き廻りながら、ヒステリカルに何か叫んだ。(伸子・上 37)

ひたあかい(赤) ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山に埋めかけた処、(野菊の墓 15)

ひたあかるい(明) 北九州の菜の花は見わたす限りの壮観だが、ひた明るい、乾ききつたその晩春風景がかなりうまく描けている。(婦人画報 1956年6月 265)

ひだいな(肥大) 「いや。」と弁護士は肥大な身体を動つた。(破戒 100)

ひたはしる(走) 東京へとひた走るオリンピアの火が県営新潟陸上競技場に着いた三十九年の十月一日。(学問の動き 252)

ひだりする(左) たゞ此路をぶらぶら歩て思ひつき次第に右し左すれば随処に吾等を満足させるものがある。(武蔵野 19)

ひつきする(日着) 松村が故郷から城下まで二十何里、加之半分は嶮岨の山道を、楽に日着きする男。(思出の記・上 77)

ひっこく(引扱) 五六本屹立した縦の木は引つ扱いた様な梢が相倚つて、(土・上 191)

ひっこみじあんな(引込思案) 大抵なことまでは、ひと一倍引込思案な方です。(多情仏心・前 258)

ひっさう(引摺) 見る者の心をぎゅつと捕へ、底知れぬ闇の世へ引つさうつて行くやうな、奇しくも甘い眼つき、(青銅の基督 35)

ひっしな(必至) 自分の致命的な罪を、意識して居る市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、(恩讐の彼方に 59)

ひつぜんな(必然) 不自然な、しかし必然な引力とでもいふやうなものによつて、彼の

眼とまた出逢つた。(冬の宿 181)

ひっちらかす(引散) 帰つて来ると、書物も<sup>だしばな</sup>出放しにしたり、毛糸の球を転がしたりして<sup>ひつちら</sup>引散かす。(平凡 75)

ひっつかまえる(引把) あの女、引ッ把まえたら最後、おれは、タダで置かねえよ(自由学校 273)

ひつつける(引付) 両手でかけ布団を羽織るように肩のところへ引つつけて、そのままあぐらに移りながら床の上に起きた。(むらぎも 208)

ひつつれる(引攀) 頬のこけた蒼白の顔の上部、両の鬢と額とは大火傷の痕の如く緒黒く光つてひつつれてゐる。(青銅の基督 66)

○その少し落ち窪んだ目のまはりがときどきびくびくとひつつ壁れるやうだつたが、(風立ちぬ 133)

ひっぱす(引外) そのままの恰好で、その母親が、いきなり台所口へ大きな声で返事して子供はひっぱすされた感じを持つ。(むらぎも 286)

ひっぱたく(引叩) よし、思ふさま今日は肋骨の折れるまで、引っぱたいてやらうと伊之が飛びかかると、(あにいもうと 153)

ひっぺがす それに棺桶だつて直ぐ蓋ア開けられるやうに釘を外へ打ち抜いてあるんだからひっぺがすなア造作はねえや。(青銅の基督 77)

ひとくろうする(一苦勞) また、鈴木の家の出産の時には、産婆を呼ぶのに、一苦勞したさうである。(自由学校 194)

ひとつねする(同衾) 渠等夫婦がひとつねするのに枕を並べて差支へぬ、(高野聖 68)

ひととおい(人遠) 至て無口な、人遠い少年であつたが、(思出の記・上 68)

ひとなつかしい(人懐) 水と水とがもつれてからまつて、揉み合て、自から音を発するのである。何たる人なつかしい音だらう!(武蔵野 24)

○恙云ふ処ですからあんなものまで人懐しうございます、(高野聖 37)

ひとなみすぐれる(人並優) 聖者とは罪の感じの人並みすぐれて深い人のことを言うのだよ。(出家とその弟子 177)

ひとなみはずれる(人並外) <sup>さとやつこ</sup>里奴が、ちよつと人並はずれた才女でなければ、(多情仏心・前 294)

ひとむきな(一向) お前には素直なひとむきなよい素質がある。(出家とその弟子 70)

ひとわるい(人悪) 彼自身が、人悪く諷刺されて居たやうに感じられた。(田園の憂鬱 112)

ひねひねする 歌舞伎役者によくある骨細のヒネヒネしたの<sup>が</sup>、(週刊読売 1956年12月30日 73)

ひねびる(干稲) 仮令痩せさせないまでも肥して行くことをしない畑の土に茄子は干稲びてそれで処処に一つつ宛花を持つて居た。(土・上 129)

ひねりあげる(捻上) 兼頭氏が八字髻を捻りあげ捻りあげ息巻あらく攻め立てる、(思

出の記・上 203)

ひびょうする(被病) 中には被病して治療に行き(週刊読売 1956年7月8日 10)

ひぼうな(美貌) 葉子の記憶に親切な男として、勇悍な男として、美貌な男として残り、  
たいと云ふ程な野心(或る女・上 182~183)

ひまな(暇) 石本はこのあいだまである大臣の秘書官をしていたが、内閣の更迭とともに、  
に今はわりに暇な日を送っている。(暗夜行路・前 43)

ひめやかな(秘) 吉三郎のは聖なる人の誕生を祝し、それを記念せん為めのひめやかな  
集りを飾らうとしての金子である。(青銅の基督 43)

ひょうしする(拍子) 皆復た拍子して囃し立てた。(土・上 182)

ひょうしんな(病身) 始終蒼い顔ばかりしてゐる病身な主婦は、(あらくれ 125)

ひょうちょうする(表徴) 自主的な政治経済をやらなければといふ気魄を、政府も国民  
も失つてしまつたことは、現在起つてゐる社会の色々なやな問題が現実に表徴して  
ゐるんぢやないかと思ふ。(心 1954年5月 44)

ひょうばんな(評判) 評判な美しい女でござすもの。(破戒 117)

ひよろけこむ(込) 足袋跣のまゝ玄関にさがり、外套や襟巻をかなぐり捨てると、六畳  
の茶の間へひよろけ込んだ。(多情仏心・前 184)

ひよろけでる(出) もう一度手を振つて、それから信之は、ひよろひよろとおもてへ  
ひよろけ出た。(多情仏心・前 173)

ひよろける 砂利を踏んで、左にひよろけたまゝ、ふらふらツとそつちへ歩きだすと、  
(多情仏心・前 173)

ひよろたかい(高) そして准尉の後についておずおずとはいってきた星二つの引率兵は  
見るからにひよろ高く、(真空地帯・上 5)

ひよろつかす 三好が故意と足もとをひよろつかして立ち上りながら、(多情仏心・前 82)

ひらつく そのところを目がけて白紙をひらつかせて安吉が突き進んだ。(むらぎも 336)

ひろくする(徴禄) 御維新後、お定りの士族の商法で徴禄して了つた上に、(多情仏心・  
前 244)

○こちらが、徴禄してしまつたのに、そういう男と顔を合わすのは、気がヒケるとい  
うものである。(自由学校 89)

びんさつする(憫殺) 丁稚の分際で生意気な真似をすると憫殺されるか嘲笑されるか、  
どつちみち碌なことはあるまいと(春琴抄 155)

ひんそうらしい(貧相) あの禿あがつたやうな貧相らしい顔から、いつも耳までかゝつ  
てゐる禿犬のやうな髪毛や赤い目、(あらくれ 39)

びんほうくさい(貧乏臭) が、私は実際先生の貧乏臭いのを看て、輕蔑の念を起したの  
だ。(平凡 101)

○たつた一つ婚約の指輪だけが貧乏臭く左の指にはまつてゐるばかりだつた。(或る女・  
前 224)



ひんまたぐ(引跨) <sup>の</sup>乗ると<sup>か</sup>懸うぐらぐらして<sup>やはら</sup>柔かにずるずると<sup>は</sup>這ひさうぢやから、わつ  
といふと<sup>ひんまた</sup>引跨いで<sup>こし</sup>腰をどさり。(高野聖 48)

ファンタスティックな 小雨を降らせて通り過ぎる真黒な雲のばつくりと開けた巨きな  
口のファンタスティックな裂目から、月は彼等を冷え冷えと照して居た。(田園の憂鬱  
105~106)

ふうきる(封切) ゴールデンウイークに封切るという「ヒマラヤの魔王」に、(近代映画  
1956年6月45)

ふかぎな(不可疑) かつその基礎となつた数学的演繹法が最も確實不可疑な(明晰判明  
な)ものと認められていたがため、(哲学以前 135)

ふかけんな(不可見) それ等の草木は或る不可見な重量をもつて、さほど広くない庭を  
上から圧し、(田園の憂鬱 24)

ふかこうてきな(不可抗的) これをサタンと呼ぶならこれほど強力な不可抗的なサタン  
はいまい。(哲学以前 19)

ふかっせいな(不活性) このために、グリーゲンは脳においてはその量は変化すること  
ではなく、不活性なものであると考えられていた。(自然 1956年1月26)

ふかほれする(深惚) 僕の方があなたに深惚れしとる事だけは、この胸三寸でちやんと  
知つとるんだ。(或る女・前 181)

ふかまさる(深) まづその梢から、旭に照り映えたと見るまに、空は、深まさり、蒼み  
互つた。(多情仏心・前 9)

○氣持としては反動的に傾き、而も情慾の執着は深まさつて行つた。(多情仏心・前 243)

ふきあがる(吹上) 爽やかな朝風に、波のように蚊帳が吹き上って、まことに楽しみ  
な朝の寝ざめなり、(放浪記 136)

○安吉の頭のなかで、噴水が十も二十も並んでふき上がってくるような感覚でピアノ  
が連れて鳴る。(むらぎも 22)

○次々と話して行くうちに、どっと内からふき上ってきた怒りのために、(真空地帯・上  
166)

ふきおこる(吹起) 思いもかけない、谷間の突風が吹き起って、五百助は、相当の衝撃  
を、受けたらしい。(自由学校 322)

ふきおちる(吹落) 西風は川に吹き落ちる時西岸の篠をざわざわと撼がす。(土・上 101)

ふきさらす(吹曝) ふきさらした寒風に真蒼になつた真兵衛の顔がくたびれた晒布のよ  
うにみえた。(落城 25)

ふきする(不義) 不義した女を出すことが出来ないやうな腑ぬけと、一生暮さうとは思  
はない。(あらくれ 100)

ふきたてる(吹立) とある農家の前に一人の飴屋、面白可笑しく唐人笛を吹立てて、幼  
稚い客を呼集めて居る。(破戒 127)

ふきच्छょうな(不吉兆) 「何だい、御発途に、不吉兆な」と審むる勝助爺も、鼻声で

あつた。(思出の記・上 37)

ふきつのる(吹募) 外ではまた風がふきつのり、雪の粉が雨戸を打つてゐた。(冬の宿 132)

ふきでる(吹出) 木谷の眼はすわって、額に太い筋がふき出てきた。(真空地帯・上 117)

○そりかえった板と板との間にすき間があいて、そこから土がふきでている。(真空地帯・上 137)

ふきながれる(吹流) 急に濃い霧が吹き流れて来て、頂上のパノラマ台といふ、断崖の縁に立つてみても、いつかうに眺望がきかない。(富嶽百景 53)

○冬中閉されてあつた煤けた部屋の隅々まで、東風が吹流れて、町に陽炎の立つやうな日が、幾日となく続いた。(あらくれ 122)

ふきまよう(吹迷) どこからともなく吹き迷つてきた風が、岩壁の梵字の下にゆらめいてゐた三本の蠟燭の炎ををののかせ、(潮騒 89)

ふきみだれる(吹乱) その白髪のの瘦せた老翁が秋風に吹き乱れる果樹園の小菊の間を黙々と逍遙してゐる有様には一種の趣きがあつた。(厚物咲 41)

ふきめぐる(吹廻) 今日是一日、はじめての東風が島を吹きめぐるつたが、夕刻になつてもその風は肌へを刺さなかつた。(潮騒 46)

ふきわたる(吹渡) うら淋しく秋風の吹きわたるその小さな港町の棧橋に、(或る女・前 143)

ふくぎつする(複雑) 社長は私が話した海の上の男と、娘との間の複雑した事情は都合よく忘れて仕舞ひ、(河明り 312)

ふくせいする(副生) 石油精製のとき副生する分解ガス、石油坑井ガス、天然ガスなどを原料にする方法によつて製造され、(中央公論 1953年7月 131)

ふくな(不具) そして、近年夫妻が、こんな不具な児を生んだ罪亡ぼしのために心を合せてゐたのが、(生まざりしならば 195)

ふくれあがる(脹上) 科学者たちの夢は、無限にふくれあがつた。(高崎山 45)

○熱帯潰瘍で片足が棍棒のやうにふくれ上つてゐた。(野火 25)

ふくれかえる(脹) 「畜生、ガブガブ飲むつたら、ありやしない。」——給仕はふくれかへつてゐた。(蟹工船 17)

ふけていな(不決定) そんな風で、不決定な気持の日を重ねてゐるうちに、二月も末近くなつた。(多情仏心・前 260)

ふけわたる(更渡) ふけ渡つた阪道には屋台の飲食店がところどころに残つてゐるばかり。(つゆのあとさき 29)

ふけんそくな(不検束) 彼等も、年が年中うちをあげ放題にして飛び廻つてゐる不検束な父親に対して、不思議に深い親しみをもつてゐた。(多情仏心・前 261)

ふさう(適) 今の場合ふさわぬように意識されながら、割引きの最初の経験、二度目の経験という形で頭に浮かんでくる。(むらぎも 213)

- 見たところ派手でハイカラで儲けの荒いらしいその商売が、一番自分の気分に適つてゐるやうに思へた。(あらくれ 147)
- ふざけかかる 近所の小犬がうるさくふざけ掛かった時に子山羊が不意に角もない頭を相手の横腹にぶつけた様子を(暗夜行路・前 39)
- ふさる(伏) すこし知能の低い二年生の弟は、ねむそうに食卓に伏さっているのだった。(人間の壁・上 36)
- すぐ、莞爾とはころびた唇の上に、怒つたやうな真面目な青年の顔が伏さつた……。 (多情仏心・前 21)
- ふしくれる(節) 野梅の節くれた枝に、二、三輪の白い点々が、日に輝いていた。(自由学校 377)
- ふしだつ(節立) 彼等は荷物を蟹臭い節立つた手で、驚づかみにするとあわてたやうに「糞壺」にかけ下りた。(蟹工船 72)
- ふじゆうする(不自由) すると、二、三日で、煙草銭にも、不自由することになる。(自由学校 24)
- ふしょうたらしい(不精) たつた一人である時の信之の陰気臭さ、不精たらしさ、(多情仏心・前 62)
- そこに、坂東三津五郎の住居の塀のはづれに、隅田川のドンヨリ無精つたらしく流れてゐるのが窺はれた。(末枯 49)
- ふじょうな(不浄) 全く、私は穢多です、調里です、不浄な人間です。(破戒 312)
- ふしんような(不信用) それほど不信用な自分なのであらうか。(真知子・前 181)
- ふせきする(布石) こう布石しておいて、その後は、日本側の騒ぎが大袈裟だとか、誇大だとか、極力、病気を軽いものとして宣伝して来たが、(中央公論 1954年 5月 125)
- ふせとめる(伏止) 引返し編をして伏止める (婦人生活 1956年10月付録 あみもの全集 193)
- ふせんする(附箋) 併し不幸なる哉、其手紙は附箋せられて帰つて来た。(思出の記・上 194)
- ふせんなる(富贍) 実に伯母の着実なる思慮と母の富贍なる経綸不撓の氣力と、(思出の記・上 91)
- ふちあける(明) 彼のうちにある傲慢な血をそのままぶちあけてもたじろがず、かへつて一緒によるこべる人間でなければならなかつた。(友情 14)
- ふちあたる(当) 社会党のラマディエを首相とする再建連立内閣は、四月にはルノー工場のストライキにぶち当り、(ものの見方について 98)
- ふちぶちする 二十五だと云っていたが、労働者上りらしいブチブチした若さを持っていた。(放浪記 12)
- ふちょうしな(不調子) 芳子はこの乱暴な不調子な時雄の行為に尠なからず心を痛めて、(蒲団 54)
- ふちんする(浮沈) わしは一生の間煩悩の林に迷惑し、愛欲の海に浮沈しながらきょう

まで来た。(出家とその弟子 205)

ふつきゅうする(復級) きぬ子が家に帰つてから、行介は彼女をもとの組に復級させたいと思つたが、(波 71)

ふつくりする 葡萄色のふつくりしたネクタイをお直しになりながら椅子にお附きになる。(桑の実 120)

○大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、豊頬した如何にも愛嬌のある円顔で、(平凡 10)

○ピチピチしてるな。面白さうな女だな。だが、やんちゃで、とてもふつくりした女の味なんかなかくて……。 (冬の宿 122)

ふっこわす(壊) そいつをぶつこはしや、銀の十字架かめだいか取れようつてもんだ。(青銅の基督 78)

ふつつぶす(潰) 内閣調査局をぶつつぶしてしまふんだ。(冬の宿 133)

ふつとばす(吹飛) アッというまに、全員ふつとばされた。(高崎山 49)

ふつとぶ(吹飛) 何台といふトロツコがガスの圧力で、眼の前を空のマツチ箱よりも軽くフツ飛んで行つた。(蟹工船 13)

ふていせつな(不貞節) あんな不貞節な虫のいゝ事で救はれるなら本当に救はれる事位お安い事はありませんわ。(青銅の基督 24)

ふてっていな(不徹底) また当事者の不徹底な妥協的態度のために、無慙に失敗した。(人格主義 149)

ふとういつな(不統一) 反つて、この両様の無雑作な不統一な混合であつた。(田園の憂鬱 25)

ふどうな(不動) その不動な表情は、強ひていへば「考へる猫」に似てゐた。(野火 78)

ふどうりな(不道理) 世にある不道理な習慣、「番太」といふ乞食の階級よりも一層劣等な人種のやうに卑められた今日迄の穢多の歴史を繰返した。(破戒 286)

ふとんむしする(蒲団蒸) 面憎い奴だ、蒲団蒸してやらふじやないか、宜からふと、(思出の記・上 67)

ふにあいな(不似合) 如何にも人柄に不似合ひな下手な字体で、(或る女・前 217)

○壁にかゝつた、多分寄附らしい、他の道具類とは不似合にハイカラなクックウ時計が二時を打つた。(真知子・前 59~60)

ふまんする(侮慢) 老支那が、あんまり日本を侮慢するから、これを一ペン、足腰のたたぬほどたたきつけておいて、(週刊サンケイ 1956年9月23日 34)

ふみいる(踏入) 常に深刻に自他の生活と思想の根柢に踏み入り、そこに懷疑によつて前提・仮想の不都合を発見し、(哲学以前 32)

○五日目、漢軍は平沙の中に時に見出される沼沢地の一つに踏入つた。(李陵 160)

ふみいれる(踏入) 一面に薄の生ひ茂つた草原の中に、足を踏み入れてゐた。(風立ちぬ 76)

○キマリの悪さと同時に、なにか、次元のちがった世界に、足を踏み入れた面白さも、

感じた。(自由学校 158)

ふめつな(不滅) 行介はこれを読んでゐるうちに、生殖細胞といふ不滅なものは、(波 323)

ふもうな(不毛) それはどんな感情の色も持たぬ不毛な冷たさで、そこに光つてゐた。(野火 72)

ふゆうな(富有) 比較的に下層階級の富有な米国でも、(貧乏物語 31)

ふゆがれる(冬枯) 見渡す限り冬枯れた田野が、球場を取りまいて西にも東にも拡がつてゐた。(闘牛 105)

ふゆされる(冬) かなめ垣や、桜の木立や広い冬ざれた花圃に沿うて廻るやうになつた裏庭の、(真知子・前 116)

ふりあおぐ(振仰) 冷たくなつて底に残つてゐた珈琲を、振り仰いでぐつと飲むと、(多情仏心・前 158)

○葉子はふと泣きやんできつと倉地の顔を振り仰いだ。(或る女・上 177)

ふりあらいう(振洗) よく汚れをすすぎとり、次にもまずにふり洗いしてすすぎをよくします。(婦人画報 1956年4月 251)

ふりおちる(降落) 初年兵はみな、いまにも自分たちの上にふりおちてきそうなげしい罵声<sup>のばせい</sup>を予感して、(真空地帯 220~221)

ふりそう(降添) 畳み重なる山と山との上に、更に遠く連なる一列の白壁<sup>しろかべ</sup>。今年の雪も早や幾度か降り添うたのであらう。(破戒 122)

ふりつむ(降積) 降り積む雪の氣勢が、逆上<sup>のぼせ</sup>あがりさうに暖まつた部屋のなかまで、しんしんと滲み込んで来た。(多情仏心・前 106)

ふりはらう(振払) 母は私の手を振り払って、出て行こうとした。(暗夜行路・前 12)

○女は屈辱を振り払ふやうに、「帰りますわ。いいのよ、なんとも思いませんわ。また来ますわ。』。(雪国 27)

ふるける(古) 婆やは小遣帳をつけた後に、眼鏡をかけて、貸本屋から貸りた古けた講談本を読んだ。(桑の実 34)

ふるふるしい(古々) 床の間には近ごろ買い集められた古々しい禅宗の本がたくさん積んであった。(暗夜行路・前 232)

ふれんぞくな(不連続) これらの不連続な部分が種々な段階(原子・物体・天体)であり、(原子物理学の発展とその方法 322)

ふれんな(不廉) 此の頃では不廉な酒は容易に席上へは運ばれなく成つて居たので(土・上 205)

ふわつく そんな風に、気持がふわつくと云ふのが、つまり人間として鍊<sup>きたへ</sup>の足りない証。抛だ、(多情仏心・前 344~345)

ぶわつく ぶわつく 筈の胴から上も、うつ向き加減に両手を束髪<sup>きんぎ</sup>のルイズのあたりへあげてゐるせゐで、(多情仏心・前 311)

ふんぞくする(分属) かかる事物事象が種々の世界に分属するか専属するかというのも、  
(哲学以前 90)

ふんぞる(反) そして胸をふんぞつてゐるんですが、やつぱり大いに狼狽<sup>ろうばい</sup>して赤い顔を  
してゐましたよ。(冬の宿 28)

ふんべつくさい(分別) つい一分前まで、あれだけの大騒ぎをしていたのに、いまは急  
に厳肅な表情をつくり、大人のような分別くさい顔をしている。(人間の壁・上 8)

ふんむする(噴霧) 夏胞子の浮遊液を植物の茎や葉に噴霧して夏胞子堆の出方を調べる。  
(農業朝日 1956年 3月 57)

ふんわりする ふんわりした豆腐<sup>ひきにく</sup>と挽肉<sup>うすむじ</sup>を淡味をつけて炒め煮したもの。(婦人倶楽部  
1956年 8月付録 182)

へいじょうする(閉場) 劇場や興行物は既に一時間ほど前には閉場してゐるので、(つゆ  
のあとさき 79)

へいぞくな(平俗) 不当にも或る場所に積まれてゐた金を、正当なる他の場所へ移す、  
と云ふ事務的な、平俗な感じで始終してゐた。(多情仏心・前 256)

へきざいる(僻在) 勘次は其の菜種油のやうに襟林と相接しつつ村落の西端に僻在し  
て親子三人が唯凝結したやうな状態を保つて落付て居るのである。(土・上 164~165)

へしおれる(折) 未だ断ち切れない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へ切れなくなつ  
て、やがてばきりと自分からへし折れ、(田園の憂鬱 32)

へずりとる(取) 飯盒<sup>はんごう</sup>に入れて炊事囚が一つ一つはかりで測って、一瓦でも多いとへず  
り取りやがる。(真空地帯・上 160)

へそくる(臍繰) 男にあまりへそくる趣味はないのですが…。(婦人公論 1956年12月 103)

へたする(下手) へたすると、とんでもないようなものになる。(娯楽よみうり 1956年 8  
月24日 28)

へたりこむ(込) 何から何まで五角形のようなこの男がすっかりへたりこんでいる。(む  
らぎも 321)

べつする(別) さればとて孤独<sup>どとり</sup>は別して子供に辛いので、僕は何時しか昔共に伍するを  
屑<sup>いさぎよ</sup>しとせなかつた其下流の仲間入をした。(思出の記・上 22)

へりどる(縁) まんなかに石でへりどつた炉<sup>ろ</sup>をこしらへ、焚火<sup>たきび</sup>で、寒の内は旨い鮎<sup>あな</sup>の味  
噌汁をつくつた。(あにいうと 132)

へんたいする(変態) 豊かな生き生きした(或いは時にはすでに変態しまたは死滅した)  
意味内容を限定せんとする試みが、(哲学以前 24)

ほいない(本意) 私は少し本意なかつたが、やがて奥まつた処で琴の音がする。(平凡  
68)

ほうこうづける(方向付) 人間集団の心理や行動を、計画的に方向づけ、規定する目的  
に出たものなのである。(抵抗の科学 302)

○すなわち例えば星学的思维に方向づけられた立場はその統一を横に広め、一切を天

体と見て他を顧みない。(哲学以前 69)

ほうじゅんな(豊醇) このなみなみとあふれるように盛りあがった<sup>こがおい</sup>黄金色の液体の<sup>ほうじゆん</sup>豊醇なことはどうだろう。(出家とその弟子 91)

ほうていする(法定) 従って前述のように株式会社の規模を法定するとしても、(ジュリスト 1956年2月15日 216)

ほうとうぶらいな(放蕩無頼) ふと老人は鶴子が操を破つたのは或は放蕩無頼な件に欺かれた為ではないかといふ気がした。(つゆのあとさき 54)

ほうふくする(抱腹) 小さな物語、<sup>しん</sup>而も哀れの深い物語、或は<sup>ほうふく</sup>抱腹するやうな物語が(武蔵野 30)

ほうほうたる(蓬々) 六尺ゆたかの赤髯<sup>ほうほう</sup>蓬々たる、併し人相のいゝ西洋人が警部巡查を相手に何か頻りに(思出の記・上 196)

○蓬々とした髪の毛の白くなつたさまは灰か砂でも浴びたやうに爺むさく、(つゆのあとさき 108)

ほうむりさる(葬去) 過去は葬むり去つてしまつた方が生活も思ひ切つて新しくなる筈である。(帰郷 247)

ほうりこむ(放込) リュックのなかに二十幾冊の雑誌をつめて、これを帰りに滑りながら一冊ずつ谷に放り込むんだと言う。(私の人生観 35)

ほうりつける(投) お島も床の間に活かつたばかりの花を顛覆へして、へし折りへし折りして小野田に<sup>はよ</sup>投りつけた。(あらくれ 237)

○じれつたくなつて、赤ん坊を畳の上に放りつけてしまひたいと思ふ位だが、(波 142)

ほえたつ(吠立) 若い男は、急に威嚇的に吠え立つた。(帰郷 111)

ほえたてる(吠立) 犬はその顔と脊を熊笹の上に現はして、盛んに吠え立てた。(こころ 77)

ほえつく(吠付) 何とか<sup>どう</sup>如何とかして、掃溜の隅で如何とかしてゐる処を、犬に吠付かれて蒼くなつて逃げたとか、(平凡 22)

ほかす 綿打弓でびんびんと<sup>ほか</sup>ほかした綿は箸のやうな棒を心にして蠟燭位の大きさにくると丸める。(土・上 45)

ほがす 眉間と米喰みに小さい穴を<sup>ほが</sup>ほがしそこから鬱血をしたゝらすことによつて死を長びかす仕方のある事を(青銅の基督 67)

ほかつく 季節が段々<sup>ひとへもの</sup>ほかついて、仕事には単衣でなければならぬ頃に成つたので女同志の目は隠しおほせないやうに成つた。(土・上 66)

ほかんする(補完) 制度としてのそれを補完すべき裁判官に対する内面的な要請ではないかと考えている。(世界 1954年3月 88)

ほきゅうする(捕球) ダイレクトと確信して捕球した野手はあの場合当然一塁に投げるものだ。(野球界 1956年4月 132)

ほくす(牧) 蘇武は既に久しく北海(バイカル湖)のほとりで独り羊を牧してゐたので

ある。(李陵 191)

**ほぐらかす** こいつア一つ、なんとかほぐらかして了はなきアならない、(多情仏心・前 69)

**ほくりゅうする**(北流) 北流する海潮を乗り越えつゝ、今や木下君の船は刻々馬來半島の島角に近づきつゝあるのです。(河明り 311)

**ほじくりかえす**(返) 役人共が死んぢまつた者の棺桶をほじくり返へして迄検べるやうなしつつこいマネをしやがるからだ。(青銅の基督 75~76)

**ほじくりだす**(出) 見るうちに、売れのこつた栄螺を七つばかり、ほじくり出して食つて行つた。(冬の宿 190)

○はたせるかな、その返答の中に認識不足の点あるをほじくり出した。(総長就業と廃業 361)

**ほそっこい**(細) 両手を差延べて、俊一の細っこい身体をぐつと引寄せようとしたが、(生まざりしならば 193)

○宇治の鳳凰堂も実に典雅で美しいだけで、西洋の巨大な古寺院を見て来た者には、美しいが細っこいな、と感じられる。(帰郷 248)

**ほそまる**(細) 柔かに膨らみつゝ、上へと細まる柱は、地から生えた樹木の姿に似てゐる。(芸術新潮 1956年 6月 86)

**ほだてる** <sup>こび</sup>小女のは掃除するのぢやなくて、埃をほだてゝ行くのだから、(平凡 121)

**ほっこうする**(北航) これ以上北航しても、川崎船を発見する当がなかつた。(蟹工船 41)

**ほっさす**(発作) 夜になつて痙攣は間断なく発作した。(土・上 51)

○宅に帰って黙考すると、相変らず総長嫌忌病が発作した。(総長就業と廃業 363)

**ほっちゃりする** 艶々と禿げた頭に、太いぼつちやりした手をやりながら、(真知子・前 143)

**ほっちゃりする** 色が白くポツチャリして男好きする娘だつた。(面白倶楽部 1956年 2月 209)

**ほっちりする** <sup>こども</sup>小兒らしい、意味のない、然もぼつちりした目で、じろじろと門に立つたものを睨める、(高野聖 28)

**ほっぽりだす**(放出) 彼一人放つぽり出して行くのも心残りのやうな気がして返事を躊躇してゐるところへ、佃が入つて来た。(伸子・上 75)

**ほとけくさい**(仏臭) 室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を揉たれた私は、其烟の中に坐つてゐる女二人を認めました。(こころ 272)

**ほねぶとな**(骨太) この骨太な、意地のつよい、闘志にみちた、行動的な男にとっては、(人間の壁・上 43)

**ほねぼそな**(骨細) 木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整つた、天才風に蒼白い滑らかな皮膚の、(或る女・前 11)



ほのおする(焰) 片野に抱く瀬谷の感情は体内でぼつぼつと焰するほどに強かつた。

(厚物咲 15)

ほのじろむ(仄白) 二十五日、冬の空のにぶい夜明けが、山肌の落葉松の梢に墨絵のようにはのじろんでいた。(落城 23)

ほほえみかわす(微笑交) 稲妻のやうに彼女の心に響いたのは、男がその好意に応じて

<sup>ほほえみ</sup>微笑みかはす様子のないと云ふ事だつた。(或る女・前 8)

ほめあげる(褒上) その時、此の男はハツキリと李陵を褒め上げた。(李陵 168)

ほめたてる(褒立) 同時にその種類の知的なウィットは、彼女のやうな教養ある婦人でなければ云へない言葉だと賞め立てた。(真知子・前 103)

ほりあてる(掘当) 「とうとう君は金鉋を掘り当てたな!」といった。(生命の暗号を解く 166)

ほりかえす(掘返) 木谷はたしかに両手をうごかしてポプラの根元を掘り返しているように思えるのだ。(真空地帯・上 95)

○お島が七つとき初めて、人につれられて貰はれて来た時の惨めなさまを掘返して聞かせた。(あらくれ 29)

ほりくほめる(掘褒) その下には丈の高い石の頂を掘り窪めた手水鉢がある。(阿部一族 35~36)

ほろほろする 林檎を食ひながら、表紙のボロボロした講談雑誌を見てゐるのがゐた。

(蟹工船 11)

ほろほろする 後で勘次は蒲団からずり出して見たら、麦ばかりのほろほろした飯であつた。(土・上 69)

ほんぞくな(凡俗) 日本の家族制度は十年一日の如く、浅はかな見栄坊と、感傷と、矛盾と、無理の多い、誤算の、凡俗なくらしをつづけていくのであろう。(厭がらせの年齢 293)

ほんほんたる(凡々) 此の人形の折檻がなかつたら自分は一生凡々たる芸人の末で終つたかも知れない(春琴抄 160)

ほんもうな(本望) 長い間の願いがかない、このような本望なことはございません。

(出家とその弟子 79)

まいおちる(舞落) 彼は、紙幣を手渡しする一瞬間に、故意に指を放した。ヒラヒラと、紙幣が舞い落ちた。(自由学校 122)

まいおりる(舞降) さつき見たやうな驚が、まるで雪の降るやうにぎやあぎやあ叫びながら、いつばいに舞いおりて来ました。(銀河鉄道の夜 282)

まいたつ(舞立) 急停車した勢ひに舞立つた埃を、(帰郷 16)

まいとぶ(舞飛) 眼は、寂寞を極めた冬の空に舞ひ飛ぶ火の粉を追つてゐた。(多情仏心・前 24)

まいのほる(舞昇) 鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来た、が

フト柱を建てたやうに舞ひ昇ツて、さてバツと一齊に野面に散ツた——(武蔵野 16)  
 マイルドな オバサマ、小麦色ちやうどっていうんですか、マイルドな膚はだね(自由学校 63)  
 まう(廻) 丁度ちやうどちうとで余程谷が深いのでございますから、目が廻まわふと悪うござんす。

(高野聖 47)

まがりこむ(曲込) 自分は二つに折れるやうに小さくなつて、既に一人腰かけてゐる寝台に曲りこむと、(或る女・前 187)

まきおこす(捲起) このソ連科学者の発表は、内外に大きなセンセーションを捲き起した。(未知の星を求めて 322)

まきおこる(捲起) あほりを食ふ度にばツと捲き起る火の粉の、(多情仏心・前 22)  
 ○そうした敵勢の噂が伝わるごとに城内には藩士たちのどよめきがまきおこるのだつた。(落城 13)

まきつく(巻付) メリンスの着物は汗で裾にまきつくあつぱりと、すぐピリッと破けてしまう。(放浪記 87)

まきつける(巻付) 再び氣を失ひながら、佃の頸に両腕をまきつけ彼の唇に自分の唇を押しつけた。(伸子・上 67)

まきとる(巻取) おくみはそれから坊ちやんに赤い糸の束を手頭にかけてゐて貰つて、糸巻へ二つばかり巻き取つた。(桑の実 92)

まくしかける(捲掛) 田川夫人が益々せき込んで、矢継早あつぱりにまくしかけようとするのを、(或る女・前 168)

まじめくさい(真面目) そんな事を諄々じゆんじゆんと説き聞かすまじめくさい青年になっていた。(暗夜行路・前 129)

○方針なんて真面目くさくたてるだけでも信じられないじゃありませんか。(放浪記 168)

ましめする(増目) 交叉編の下側で一目ずつ増し目する(婦人生活 1956年3月付録 春のあみもの 113)

まだらな(斑) 斑まだらな萱を縫つて、林の方へ進む間も、臭ひは遠くならなかつた。(野火 146)

○古着か何かの友禅縮緬の衣裳を着て、斑まだらに白粉をぬつた半玉などが、引断なしに、部屋を出たり入つたりした。(あらくれ 111)

まちきる(待切) 佐々は伸子の帰るのを待ち切つてゐたらしく、(伸子・上 56)

まちきれる(待切) しかし彼等はやがてまち切れなくなつて衛門前の面会人受付簿のところまで出かけて行つた。(真空地帯・上 14)

まちのぞむ(待望) 新治は食卓の話題に、母親の口から、あの見知らぬ少女の噂が出ることを待ちのぞんだ。(潮騒 13)

まちふせる(待伏) 翌朝漸く丘陵地に辿りついた途端に、先廻りして待伏せてゐた敵の主力の襲撃に遭つた。(李陵 160)

まっかくな(真角) 漆黒なびかびかした多少怪奇な形を具へた帽子の真角な<sup>・</sup>か<sup>・</sup>どの上へ、  
(田園の憂鬱 40)

まっくろけな(真黒) 勘ちやんと云つて、私より二ツ三ツ年上で、獅子ツ鼻の、色の真黒けな児だつたが、斯ういふのに限つて乱暴だ。(平凡 16)

まつわりつく(纏付) 松の小枝から梢へそれから更に隣りの桜の木へまでも纏りついた  
藤蔓は引つばられて、(田園の憂鬱 33)

○そのうちに子供たちが帰つてきて彼にまつはりついた。(冬の宿 39)

○その自由にも、統一ドイツに対して地方の諸州がその自由を主張するという調子がまつわりついている。(ものの見方について 87)

まとめあげる(纏上) 私は貧弱な思想家ですが、自分の頭で纏め上げた考を無暗に人に隠しやしません。(こころ 85)

まどる(間取) 爪哇更紗のカーテンが、扉の開閉の際に覗かれる空間を、三四尺奥へ間取つて垂れ廻してある。(河明り 283)

まなびとる(学取) そばでは母親が、娘から新規の知識を学びとらうと一生懸命であつた。(潮騒 71)

まぬける(間抜) 「ダレカ？」と、間抜けた発音の誰何もせず、立つて咎めに来る気配も見えなかつた。(帰郷 70)

○そして其の事を吹聴してあるくらい、作の顔が一層間ぬけてみえ、厭らしく思へた。(あらくれ 29)

まぶしつける 疲労の脂汗に光つてゐる顔や手に<sup>すなほこり</sup>砂埃をまぶしつけながら、(冬の宿 186)

まぶれる 何とかいふ草花などは、すっかり土の上に伏してしまつて、あさましく雨の脚の弾く泥にまぶれてゐる。(桑の実 102)

○鰯は乾いた庭の土にまぶれて苦しさうに動く。(土・上 116)

まるける(円) ふくらんだ胸のあたりで着て居た其の単衣を円げて持ち、霞も絡はぬ姿になつた。(高野聖 53)

まるまっちい(丸) 手荒くみせて、その実は十分注意をこめて、右へ左へごろりごろりと丸まつちい<sup>からだ</sup>体を転がしてやつた。(多情仏心・前 266)

まるまるする(丸々) 四つか五つの時分に、焼火箸を捺しつけられた痕は、今でも丸々した手の甲の肉のうへに痣のやうに残つてゐる。(あらくれ 35)

まわりくねる(廻) 私は、なんといふまはりくねつた事をいふのだ、俺はいやだ、と思つたが、(冬の宿 39)

まわりこむ(廻込) 杉本光厳は墓碑の裏側へまはりこんで行き、石肌に薄葉をあてた。  
(別冊文芸春秋 1956年 53号 130)

まわれみぎする(廻右) ぐるりと廻れ右して、落葉しきつめた細い山路を、まつたくいやな気持で、どんどん荒く歩きまはつた。(富嶽百景 69)

みあきる(見倦) 僕は巴里にもゐたし、文明人といふのは見倦きるくらゐ見て来た男だ

が、(婦郷 56)

みあらためる(見更) かういふ掘割りにさう一々河名のついてゐることは、それ等の掘割りを新しく見更めるやうな気がした。(河明り 265)

みおほえる(見覚) 誰やらの邸で歌の会のあつた時見覚えた通りに半紙を横に二つに折つて、(阿部一族 45)

みがきあがる(磨上) 足もとにはみがき上がったのが三足ばかり並んでゐた。(むらぎも 41)

みがきあげる(磨上) そして彼等の靴は昨夜から十分 みがきあげてあつた。(真空地帯・上 130)

みがきこむ(磨込) 桧造りに、ちよいと手間を掛けた屋台の奥に、磨き込んだ銅の大鍋を控へて、(多情仏心・前 203)

みがきだす(磨出) 弱い光の日が落ちてからは寒気が星を磨き出すやうに冴えて来た。(雪国 157)

○知恵は運命だけがみがき出すのだ。(出家とその弟子 70)

みがきたてる(磨立) みがき立てた床柱の前に座布団を据えられると、貧しい教師には気おくれがするような場所であつた。(人間の壁・上 224)

みかじる(見喰) 東京田舎の新聞を見喰り、隣室の談話を聞き喰り、(思出の記・上 96)

みぎする(右) たゞ此路をぶらぶら歩て思ひつき次第に右し左すれば随処に吾等を満足させるものがある。(武蔵野 19)

みくらべる(見較) 私と向う側の貸間札のかゝつてゐる部屋の硝子戸を見較べた。(河明り 247)

みさげはてる(見下果) 空想の上でこそ勇氣も生彩もあれ、実生活に於ては見下げ果てた程貧弱で簡単な一書生の心と(或る女・前 159)

みさだまる(見定) 実は、この娘に結婚させようといふ若い店員がございますのですが、どうも、その男の氣心がよく見定まりません。(河明り 270)

みじろぐ(身) 『芽生え』が出て、世間のごく一部が暗幕のかげで身じろいだ。(むらぎも 193)

ミスティックな すべての魅力的な思索の魅力は冥想に、このミスティックなもの、形而上学的なものにもとづいてゐる。(人生論ノート 80)

みずときする(水溶) 水溶きした片栗粉を引いて、どろりと白菜にからませます。(若い女性 1956年1月 198)

みずみずする(水々) 立昇つた深い水蒸気のなかに、山の手線の電燈や、人家の灯影が水水して見えた。(あらくれ 57)

○たゞ辰子の方は幾らか肥りかけて、結婚した三十女の瑞々した膨らみを持つてゐたに比べると、(真知子・前 22)

みだれとぶ(乱飛) その上の空低く群雀が乱れ飛んだ。(雪国 118)

みちがう(見達) 戦闘帽に緑色の襦袢、見違ふことは出来なかつた。日本兵であつた。

(野火 89)

みちな(未知) 久しく別れてゐて、全然未知な生活をして来た佃、(伸子・上 168)

みつくす(見尽) 三日ばかり山を歩いては、田舎家に宿り、夜が明けてはまた歩きして、松村家の山は大方見尽した。(思出の記・上 79)

みっともよい(見好) 大きな目をアングリ開いて欠びをする所なぞは、誰が眼にも余まり見とも好くもなかつたから、(平凡 31)

みなぎりわたる(漲渡) また堪へ難い哀愁が其の胸に漲り渡つた。(蒲田 30)

みのこす(見残) 芝居を見残して、お客様と蔵多屋へ行ってるんですって。(暗夜行路・前 77)

みひらく(見開) すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。(羅生門 14)

みまちがう(見間違) 彼は自分の書いた字を曾田の書いたものだとか誰かが見間違うということなどはありえないことだと思っていた。(真空地帯・上 136)

みまちがえる(見間違) そして最初星と見まちがえたように、光を放っている部分は、(宇宙の謎はどこまで解けたか 96)

みみょうなる(微妙) 虚空はるかに微妙なる音楽がきこえ始めた。(出家とその弟子 205)

みむかえる(見迎) 道端の子供等は皆好奇の目を円くして、此怪し気な車を見迎へ見送つて、(平凡 39)

○列車の中からはある限りの顔が人を見迎へ見送るので、(或る女・前 7)

みやこする(都) この近くに都して、かつてはジャワヤスマトラ方面にまで、威勢を振ったという(週刊朝日 1956年1月15日 82)

むいな(無為) このやうに無為な生活をいつまでもしようなどとは思つてゐないのであつて、(冬の宿 191)

○私は私の獲物を、その環形動物が貸り尽すのを、無為に見守つてはゐなかつた。(野火 133)

むえんな(無縁) 津上にとつてはすべては無縁な、埒もない一つの祝祭であつた。(闘牛 145)

むかえいれる(迎入) 今日私が輝雄を殴つたことを知らないやうで、いつものやうに迎へ入れてくれた。(冬の宿 132)

むかていな(無仮定) それゆえに、科学こそ最も無仮定なものであり、科学の所説こそ真理である、と。(哲学以前 121)

むきだす(剥出) 夫君に随いて倫敦にも行つたことのある若夫人は、腕をむき出した広東服を着て、(帰郷 61)

○自分でもそれほどの自覚なしに、突然思い切り歯を剥出して、いいッと顔をひん曲げた。(くれない 141)

- 番所裏の木立ちが無残に幹を折られ、土肌の新しい赤さが人肌のように生々しくむき出している。(落城 23~24)
- むきつけな** むきつけな 質間に佃は一寸間誤ついたやうであつた。(伸子・上 31)
- 貧しい家は貧しいなりに、深刻な生活の断層をむきつけに見せられることが少なくない。(人間の壁・上 211)
- むくむくする** 歸雲がむくむくしている波止場の上に、黒く突き揚った船の起重機。(放浪記 220)
- 小ぼけなむくむくしたのが重なり合つて、首を擡げて、ミイミイと乳房を探してゐる所へ、(平凡 27)
- むくれあがる**(上) 厚い脣、その下のむくれあがった顎、(むらぎも 84)
- 漁夫達はだんだん内からむくれ上つてくる性慾に悩まされ出してきてゐた。(蟹工船 49)
- むくれだす**(出) 紛らされてゐた利己的な思念が、心の底からむくれ出して来るやうに感じて、我儘な涙が湧立つて来た。(あらくれ 207)
- むくれる** 例えば吉田ワンマンから褒美をもらつても、嬉しくはなく、反対にムクレルだろう。(文芸春秋 1954年3月 91)
- むけいな**(無稽) そして生きる以上、人間共の無稽なルールに従はなければならないことも、私は前から知つてゐた。(野火 167)
- むじつな**(無実) 無実な父をこの長年月弾劾し続けて来たのだ……。 (宝石 1956年6月 63)
- むしゃぶる**いす(武者震) 自転車を止めようとした途端に、太箸巡査はガタガタと武者ぶるいした。(娯楽よみうり 1956年7月20日 21)
- むしりとる**(笔趣阁) 彼は傲慢な身振でのれんを頭ではねのけ、むしりとるやうにシャツを脱いで籠に投げこむので、(潮騒 95)
- むせつばい**(噎) 笑ひつづけて行くうちに何かむせつばいやうな気持になつたので、(冬の宿 59)
- むせびあげる**(咽上) ひとりきりになると、涙が急にあふれてきて、彼女はむせびあげて泣いた。(人間の壁・上 139)
- むせびなく**(咽泣) 昨夜も、伸子はこのことを考へ、咽び泣いた。(伸子・上 97)
- むそうする**(夢想) 現在日本の一部にも、かくの如き意味において世界の統一を夢想するものがないとはいへないやうに見える。(人格主義 149)
- むなさわがしい**(胸騒) その人はもうかなりな年であつたし、私は歯がズキズキする程胸さわがしくなつてしまった。(放浪記 282~283)
- むほんする**(謀反) 誰某と云ふ前参議は謀反して死刑の際に「唯有皇天后土知」と云つた、(思出の記・上 11)
- むめいな**(無名) かやうな生活条件のうちに生きるものとして現代自身も無名な、無定

形なものとなり、無性格なものとなつてゐる。(人生論ノート 61)

むよくな(無慾) しかし彼女の口振りは、まるで外国文学の遠い話をしてゐるやうで、  
無慾な乞食に似た哀れな響きがあつた。(雪国 41)

むらさきばむ(紫) 砂地自身は紫ばんだ色だが太陽の光で金色を帯びていた。(美術手帖  
1956年1月5)

むらむらする お島はむらむらした母への反抗心を抑へながら、平気らしい顔をしてそこへ出て行つた。(あらくれ 36)

むりおしする(無理押) 鳩山総理大臣と清瀬文部大臣とは、この法律を無理押ししても成立させようとしていた。(人間の壁・上 104)

むりする(無理) 少しでも下痢すると、食事が全然与へられなかつたので、患者は無理しても退院して行つた。(野火 24)

むれだつ(群立) 大洋のなかに岩の群立つ沖ノ瀬がみえる。(潮騒 57)

むれとぶ(群飛) 背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、時々思ひ出したやうに淋しい声で啼きながら、船の周囲を群れ飛ぶ外には、(或る女・前 97)

めかくしする(目隠) びろうどに似た厚い布が重たく垂れて、窓の在りかを目隠ししてゐた。(帰郷 48)

メカニックな 幾何学的な三角形のピラミッドとなぞの様なスフィンクスの人面獣のメカニックな美と内面的な精神美との対比が(世界 1956年9月 115)

めぐみふかい(恵深) 此恵深い師の承認を得さへすればそれで沢山だとまで思つた。  
(蒲団 40)

めくれかえる(捲返) 隔壁のペンキが熱のためボロボロとめくれ返るのが眼にうつつた。  
(特集文芸春秋 1956年 日本と戦った五年間 43)

めくれる(捲) それと一しょに上唇がめくれて上並びの歯がむき出しにされ、(むらぎも  
200)

めさがしする(目捜) 「駅長さん、弟は今出てをりませんか?」と、葉子は雪の上を目捜しして、(雪国 7)

めざます(目醒) ヒュームに目醒まされて彼の懐疑的結論から脱却することに努めたカントその人である。(哲学以前 119)

めしつかう(召使) 本庄は丹後国の者で、流浪してゐたのを三斎公の部屋附本庄久右衛門が召使つてゐた。(阿部一族 42)

めつける(目付) お島はもと郵便局であつた、間口二間に、奥行三間ほどの貸家を目付けてくると、(あらくれ 147)

めづもる(目測) 部屋の広さを目測るのに気が附かなかつたなら、滝十郎でも、その意味が、すぐには呑み込めなかつたに違ひない。(多情仏心・前 59)

めんえつする(面謁) 直ちに萩におもむいて藩主父子に面謁し、総督からの密旨をつたえた。(サンデー毎日 1956年8月26日 33)

めんばくする(面縛) 名は合同と称するも、実は面縛した降参人も同様だった。(文芸春秋 1954年2月84)

もうしおくれる(申後) 申後れたが、私は法学研究のため上京するのだ。(平凡 55)

もうそうする(妄想) 此後若し志を得る時あらば、此一片の餅を百倍して報みやうなどと妄想した。(思出の記・上 175)

もうばくする(猛蕪) 1試合に7回も猛蕪して来る打球を処理したので(野球界 1956年7月179)

もうゆうな(猛勇) 恐ろしい荒行をする猛勇な人や、夜の目も惜しんで研究する人や、(出家とその弟子 68)

もえあがる(燃上) 手紙はめらめらと燃上った。(波 397)

○かう云つてゐる中に葉子の心には火のやうな回想の憤怒が燃え上った。(或る女・前 69)

もえうつる(燃移) 一万人の全部が、一せいにマッチをすった。それがロウソクに燃えうつり、一万の紅提灯に火がともった。(人間の壁・上 347)

もえしきる(燃類) 火が燃えしきるときにはッと立つところの光耀に似たやうなものが(冬の宿 150)

もえたぎる(燃滾) まだその広汎な理解と燃えたぎる深い内心の欲求とを寸分も生かして居らぬのに(青銅の基督 13)

もえだす(萌出) 去年の落葉の間からぼつぼつ萌へ出した若草や草花を踏しだいて、うす闇い杉山に入つたり、(思出の記・上 77)

もえたつ(燃立) 男は部下に命じて崎山をもえたつ火の傍につれて行かせた。(文芸 1956年4月244)

○その頃わしらの心は燃えたつて、どれほど合作社をつくろうと熱心に考えたことでしよう。(群像 1956年1月118)

もえたつ(萌立) 実際彼等の足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ緑色、マーガレットの白、<sup>けし</sup>罌粟の紅さへ心の眼に沁むほど感じられたものだ。(冬の宿 13)

もえつく(燃付) 熟れた女盛りの官能に燃えついてくるだけに、(面白俱樂部 1956年5月158)

もぎとれる(掻取) ただ掻ぎとれた足だけを握つて居たりした。(田園の憂鬱 45)

もぎはなす(掻離) 曾田一等兵は班長の指を肩からもぎはなしながら言った。(真空地帯・上 75)

もぐつく 「ンぐ……」といったような声が洩れてきて模様のある掛け布団がもぐつく。(むらぎも 125)

もぐりこむ(潜込) 再び寢床に潜りこみながら、私は何んともかとも云はれないやうな不安な気持でそれを聞いてゐた。(風立ちぬ 126)

もしゃくしゃする 若白髪<sup>えは</sup>のまじつた粗剛さうな毛を、分けたとも掻き上げたともつか



ずモンシャクシャさせ、(多情仏心・前 26)

もぞつく そこに床が敷いてあって、もぞつきながら青年がまだもぐっている。(むらぎも 124)

もたせる(凭) 永松の銃は土にもたせて、そこへ照準をつけてあつた。(野火 164)

もたらせる(凭) 五百助は、開かない方のドアに、身を凭らせることができたが、(自由学校 37)

○中堀中尉の好意はすでに林中尉に見破られて、逆に木谷に全くわるい結果をもたせただ。(真空地帯・上 192)

もたれかける(凭) その遅く、率隠しに片手をもたれかけて、便所紙の箱に頭を入れ、うつぶせに倒れてゐた宮口が、出されてきた。(蟹工船 33)

もちきれる(持切) 雨もよひの空はたうとう持切れなくなつて、小雨がばらばら落ちて来た。(波 376)

○夜遅くまで帰つて来ないお島には解らないやうな、苦しい遺縁が持切れなくなつて来たとき、(あらくれ 160)

もっかする(黙過) われわれはいままで幾度、作曲の欠陥を黙過してきたことだろうか? (平和 1954年9月 47)

もっけいする(黙契) 偶然このカッフェーで邂逅しても、互に黙契する処があるらしく秘密を守り合つてゐるくらゐなので、(つゆのあとさき 20)

もっけつする(黙決) 最早二人は全く罪あるものと黙決されて了つたのである。(野菊の墓 32)

もぬける(藻脱) 家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてゐるやうに、(平凡 73)

ものおもわしげな(物思) 果然、彼女はもの思はしげな様子であつた。(波 279)

ものさびれる(物寂) かうしたものさびれた町の夜の灯も、おくみには何とはなく、自分にしたしい或物の含まれてゐるやうな、小なつかしい晩であつた。(桑の実 129)

ものわらいな(物笑) その同伴者のために、彼等がそこで陥つたもの笑ひな状態から脱するには、それが最もよい方法であつた。(真知子・前 115)

もみあげる(揉上) 赤い房々とした髭を揉みあげながら、外国の紳士が、トイレツトルームを出て来て、(多情仏心・前 25)

○足で抑へた縄の端へ藁を継ぎ足し継ぎ足してちよりちよりと額の上まで揉み挙げては(土・上 21)

もみおろす(揉下) 両手で腹の下乳房を揉み下すやうにして、下へ置いたバケツへ乳をお搾りになる。(桑の実 39)

もみだす(揉出) 米糠を袋に入れてもみ出した液で拭いても効果があります。(婦人倶楽部 1956年8月 421)

もみたてる(揉立) 狼狽<sup>あおて</sup>てチウと吸付いて、小さな両手で揉み立て揉み立て吸出すと、

- 甘い温かな乳汁が滾々と出て来て、(平凡 27)
- もやいす(舫) 川岸に舫ひしてゐる四艘の砂磔船のうちで、一ばん手前の一艘の舳に、(本日休診 72)
- もやす(萌) 腹が少し豊かになると、生きかえたように私達は私達の思想に青い芽を萌やす。(放浪記 77)
- もらいうける(貰受) 九時ごろ、ようやく三人は無印の番傘を二本もらい受けて、しとしとと降る秋雨の中へ出た。(暗夜行路・前 37)
- もりあわせる(盛合) ランチに盛り合せるお料理は、そのまゝ食べられるもの(主婦の友 1956年5月 304)
- もりかためる(盛固) 烈日が土偶のやうに盛固めた砂の上に直射してゐた。(波 399)
- もりこむ(盛込) いくつもの要素を数式に盛りこんでゆかねばならないだろう。(学問の動き 241)
- もりつける(盛付) 大皿の中央に酢魚を小さく盛りつけ、上に煎り玉子をかけます。(婦人生活 1956年8月付録 日本料理 87)
- もりわける(盛分) おわんに盛り分け、もみのりを少しずつ散らして、(主婦と生活 1956年12月付録 冬のお料理 141)
- もれうけたまわる(洩承) 「……ということであるらしい模様のように洩れうけたまわる」といった極度にあいまいな表現と、(むらぎも 230)
- もれきく(洩聞) 幾度も逢つてゐるうちに、自然に彼女の口から洩聞かされるので、その事も氣にかゝつてゐるらしかつたが、(あらくれ 215)
- もれきこえる(洩聞) その厚い壁を通してそこからは裕佐が嘗て夢想にも聞く事の出来なかつた世にも美しい合唱が洩れ聞こえて来るのだつた。(青銅の基督 85)
- やきこむ(焼込) 兎に角犬死すまいと思ふ一念の燃へ立つたのは、実に此時で、言ふまでもなく此は母の烈火にやき込まれたのである。(思出の記・上 29)
- やくづける(役付) 同時に自分自身をも高く価値づけ、よく役づけることも出来るわけだつた。(多情仏心・前 122)
- やくにゅうする(躍入) 彼等は人間の思惟や言葉を絶した境に或る非合理的の神秘的直感をもつて躍入せんとした。(哲学以前 141)
- やけおちる(焼落) 藁倉の半ばほどはもう屋根も壁も焼け落ちてゐたが、柱や梁などの骨組はいぶりながら立つてゐた。(雪国 170)
- やけだされる(焼出) 一方大学は、構内に臨時の学生寮をつくつて焼けだされた学生の一部を収容した。(むらぎも 99)
- やけのこる(焼残) 学校はたくさん焼かれてしまつて、焼け残った倉庫のなかだの、神社のなかだの、(人間の壁・上 237)
- やじりたおす(弥次倒) 先だつて芦田さんが、早稲田の講演でやじり倒されたのも、やはり全学連の手か。(東洋経済新報 1956年9月22日 26)

やせがたな(瘦形) いつになく若々しく装つた服装までが、皮肉な反語のやうに小股の切れあがつた瘦せ形なその肉を痛ましく虐げた。(或る女・前 174)

やせさらばえる(瘦) 人間と云ふものが、死神のやうに瘦せさらばへて了ふとか、(多情仏心・前 62)

やせほそる(瘦細) みなが息をぬいているときでも、たえず気をくばり動いていなければならないので、やせ細っていた。(真空地帯・上 221)

やっかいせんばんな(厄介千万) しかし、人生が人生である所以のものは、真理もまた虚偽と同じく厄介千万なものであるというところにあります。(私の人生観 118)

やほくさい(野暮) 夫人が病院にはいっているというからそれは仕方がないことも知れないが、いかにも野暮くさい男だ。(人間の壁・上 129)

やまる(止) ちやらちやらと涼しく音を立てて居た鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。(田園の憂鬱 15)

やみがたい(止難) そこの恐ろしい沈黙の中から起る強い快い赤児の産声——やみがたい母性の意識——(或る女・前 100)

やみほける(病筆) この年寄って病み癒<sup>な</sup>けているわしを、(出家とその弟子 204)

やりくずす(遺崩) 他人の遺り崩したあとの事業を引受けて、其を首尾よく築き立つる程の人であるならば(思出の記・上 112)

やりこす(遺越) Kを遺り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだったので、私は少なからず驚ろきました。(こころ 231)

やりっぱなしな(遺放) 不謹慎な口の利き方や、遺<sup>や</sup>つぱなしな日常生活の不検束さが、妹たち周囲の人々から、女震助か何かのやうに憚られた。(あらくれ 178)

やわやわする(柔々) 欄干には、下の西洋檜の木が、大きな柔々した青葉を揃へてゐる。(柔の実 28)

ゆうえつな(優越) いかなる場合にも冷笑することが人生で最も優越な事であると思ふ事にしてゐるらしい此男は、(青銅の基督 15)

○それは歴史のより優越な原因が我々自身でなくて我々を超えたものであるといふことを意味するのではなければならぬ。(人生論ノート 12)

ゆうきする(誘起) 邪淫の生活は人格全体の腐蝕を誘起する恐るべき生活である。(人格主義 75)

ゆうきづける(勇気付) 伸子は、外界から来る不安や不愉快さを、彼との対座で忘れ、互に勇気づけようとした。(伸子・上 125)

ゆうぐれかける(夕暮) 私はただ音を立てないやうにそつと扉を締めながら再び、夕暮れかけた庭面を見入り出した。(風立ちぬ 88)

ゆうざれる(夕) 夕ざれて、涼しくなって参りました。(出家とその弟子 86)

ゆうせいな(幽静) 世田ヶ谷の町中でもまづこの辺が昔のまゝの郊外らしく思はれる最幽静な処であらう。(つゆのあとさき 48)

ゆうばえる(夕映) 西の空が美しく夕ばえている。(暗夜行路・前 10)

ゆうめいむじつな(有名無実) アメリカの占領政治が終ると同時に、教育委員会の力をそぎ、有名無実なものにするか、(人間の壁・上 67)

ゆうやけする(夕焼) 空は夕焼して赤い色が天頂を越え、東の方中央山脈の群峰を雑色に染めてゐた。(野火 29)

ゆうやける(夕焼) 夕焼けた浜辺へ集まった。(放浪記 225)

ゆきたおれる(行倒) 金貨の小僧になるも、実に意外心外な話だが、途中に行倒るゝよりも猶優かも知れぬ。(思出の記・上 189)

ゆきたつ(行立) 何れも此も相当に行き立つてゐるらしい大きい小さいそれらの店が、お島の腕をむずむずさせた。(あらくれ 147)

ゆきちがう(行違) 君江は行きちがふ人毎に笑顔をつくりながら、電話室へ駆け込み、(つゆのあとさき 15)

ゆきつける(行) 映画館を出ると明子は、この頃行きつけたおでん屋でおそい夕飯を食べた。(くれない 121)

○いつも小涌谷、強羅、蘆の湯と、上の方へばかり行きつけて、そこへは、かれこれもう二十年ぶりだつた。(多情仏心・前 300)

ゆきとまる(行止) 草原が巾着の底のやうに、丘に囲まれて行き止つたところから、一方の丘に上ると、(野火 106)

ゆてあげる(茹上) 女の眼を悦ばせさうな冬菜は、形のまゝ青く茹で上げ、(河明り 264)

ゆてこぼす(茹零) 皮はせん切にして一晩水につけてから、一度茹でこぼし、(主婦の友 1956年1月付録 家計簿 70)

ゆりあげる(揺上) 彼は伸子が眼を開いたのを認めると、子供をすかさずやうに彼女の体を膝の上にゆり上げつつ云つた。(伸子・上 66)

○波の来る毎に揺り上げ、揺り下げ、宛ながら轆轤につて居る様。(思出の記・上 175)

ゆりこぼす(揺零) 一二寸も伸びた様に、何処を見てもさわさわさわさざめいては露を揺りこぼして居ると、(思出の記・上 7)

ゆりさげる(揺下) 然し大きな波は、川崎船と本船を、ガタンコの両端にのせたやうに、交互に激しく揺り上げたり、揺り下げたりした。(艇工船 38)

ゆるまる(緩) ソヴェトによる近隣諸国の鉄の支配がゆるまるだろうということだ。(中央公論 1953年11月 65)

ゆれかえす(揺返) さう云ふ、岸からまた揺れ返して来る波紋は、微ながら中心の瀬川まで達しないではなかつた。(多情仏心・前 127)

よいしびれる(酔痺) 女は両腕を門のやうに組んでもとめられたものの上をおさへたが、酔ひしびれて力が入らないのか、(雪国 33)

よいしれる(酔痴) 貧乏の屈辱を存分に嘗め尽した木村は、見る見る溫柔な葉子の言葉

や表情に酔ひしれるのだつた。(或る女・前 210~211)

よいたおれる(酔倒) 一升近く飲んで其の儘其処に酔倒れて、お膳の筋斗<sup>とんぼ</sup>がへりを打つ  
のにも頓着しなかつたが、(蒲団 20)

よいっぱりな(宵張) 窓からは、宵つぱりな都会の眠気知らずなざわめきと、(伸子・上  
9)

よいつぶす(酔潰) 彼は横地課長を酔ひつぶして家まで送つて行き (ニューエイジ 1953  
年10月 91)

ようせいな(陽性) 余興の太神楽が子供つぽく、陽性な太鼓の音を伝へた。(真知子・前  
23)

ようやな(妖冶) 全身の姿の何処といふことなく、正業の女には見られない妖冶な趣が  
目につくやうになつた。(つゆのあとさき 115)

よくじょうする(欲情) 自分の力で生き、自分の頭で考え、自分の腕で食い、自分の意  
志で欲情する——万事、自分づくめである。(自由学校 16)

よこねする(横寝) 一つ前の向側の座席だつたから、横寝してゐる男の顔は耳のあたり  
までしか鏡に写らなかつた。(雪国 9)

よじする(予示) 種々の原理を用い得るの自由あるを予示しているものとも言えよう。  
(哲学以前 72)

よじりのほる(攀登) すると今度は幸ひな波が、胸をほとんど浮標にぶつけるばかりに、  
一息に彼を運んで、浮標に一気によぢり登らせた。(潮騒 146)

よせかえす(寄返) さう思つた心のゆるみにつけ込んだのか、胸の苦しみは又急によせ  
返して来た。(或る女・前 116)

よそうがいな(予想外) 人間に知性を付与した自然がそれは予想外なことだと言うとし  
ても。(私の人生観 133)

よたな(与太) 加之に、子供は多勢で、与太<sup>おまけ</sup>(頑愚)なものはばかり揃つて居て(破戒 248)

よつぬいする(四縫) 三分の一の所にきたら表裏通して一針返し、そこから先は四つ縫  
いし、(主婦と生活 1956年11月付録 58)

よびおこす(喚起) 下女が枕頭へ来て喚起した時は、(破戒 180)

○汽車の窓から、首をのばして彼等の見てゐる山の形が、ふと浜屋の記憶を彼等に  
喚起したのであつた。(あらくれ 249)

よびすてる(呼捨) 佃は「さん」づけにする価値ない者、と心にきめたやうに、佃、佃  
と呼び捨てる母の口調が悲しく可笑しかつた。(伸子・上 142~143)

○「お前」と相手を低く呼びすてたり、「君」と呼んでも、呼ぶ人によって相手の位置  
が下がったりする。(ものの見方について 170)

よびなす(呼) 誰云ふとなく人々はその一団を犬儒派と呼びなした。(或る女・前 139)

よびわける(呼分) 姉娘に対して妹娘を「小糸さん」或は「こいさん」などゝ呼び分け  
ること現在も然り。(春琴抄 145)

**よふける**(夜更) 或る日又七郎が女房に言ひ附けて、夜更けてから阿部の屋敷へ見舞に遣つた。(阿部一族 62)

**よぼつきかける** からだの小さいよぼつきかけた年配の男が、店さきへ腰を浅くかけて、(むらぎも 201)

**よまいりする**(夜参) 六角堂に夜参りして山へ帰る道で一人の女に出会ってね。(出家とその弟子 73)

**よみあさる**(読漁) それを突き止めようとして、欧米の新しい文献を読みあさるうちに、(生命の暗号を解く 156)

○外国小説を読み渉猟つても満足が出来ぬ。(蒲団 8)

**よみかじる**(読齧) あれこれ機械的に読みかじった近代思想の機械的な運動が彼らの情熱に点火したのである。(私の人生観 143)

**よみこむ**(読込) それは、十月革命からブレスト・リトウスクの講和のところまでを読みこんでいた。(むらぎも 274)

**よみすすむ**(読進) 数頁読み進んだ時、衝立の外に軽い女の<sup>あしおと</sup>聲音が止つた。(伸子・上 73)

**よみちらす**(読散) たゞ書物だけはこれで色んなものを読み散らす方ですから、(真知子・前 119)

○三国志、八大伝、太閤記の類を山の如く持ち出して、あられを嚙りながら、読み散らしては、(思出の記・上 76)

**よみのこす**(読残) 「未だ、少し、読み残した本があるんだけど……」などと云ひながら、(別冊文芸春秋 1956年 53号 217)

**よみふせる**(読伏) 机の上には例の『懺悔録』、読伏せて置いた其本に気がついたと見え、(破戒 36)

**よめいる**(嫁入) 気心の判らぬ海へ行つた若い店員との婚約は解消して是非その男に娘を嫁入らせると意気込んだ。(河明り 289)

○金はお鱗が片野の許へ嫁入る時彼女の父から与へられたものである。(厚物咲 26)

**よりあげる**(繕上) が、軍人は無頓着になお油をつけ、髷の先を丹念に繕り上げていた。(暗夜行路・前 214)

**よりかたまる**(寄固) 堤防道の蔭に、一ところ寄りかたまつた掘立小屋の群がみえた。(冬の宿 109)

**よりたおす**(寄倒) 不振の夏場所も若ノ花の動きを完封して堂々と寄倒している、(相撲 1956年10月 69)

**よろけかかる** しかし、駒子も急に息切れして、島村によろけかかった。(雪国 166)

**らいこうする**(来降) 授洗者が出現せねばならない、救主が来降せねばならない。(哲学以前 27)

**らいこうする**(来迎) <sup>あみだ</sup>阿弥だ様が、管弦歌舞の聖衆を引き連れて、光り輝く雲に乗り、

- 欣求<sup>こんぐじようど</sup>浄土を念ずる臨終の人間のために来迎する。(私の人生観 93)
- らいしゃする(来車) その後の様子も聞きたいから、二十八日午後一時に、下記の家へ来車して貰いたい。(自由学校 69)
- らいとうする(来投) 第五、第六兩隊所属の越南兵士は襲撃軍に来投し、郵便局と停車場を占領。(文芸春秋増刊 1954年6月 53)
- らくすいする(落水) そして落水しては二日くらい田を干し、またカン水する。(農業朝日 1956年3月 73)
- らくはくする(落剥) 非常に乱暴な補修がしてあつて、落剥したところをセメントで埋めたりしている。(芸術新潮 1956年5月 93)
- りぐいする(利食) 復配しても一割と思われますから、少し、早いかもしれませんが、利食して差支えありません。(ダイヤモンド 1956年6月16日 91)
- りぐう(利食) 化学肥料の銘柄を利食つて、海運、石炭に乗りかえようと思うが如何。(東洋経済新報 1956年11月17日 92)
- りくする(戮) その志を行ふ前に故国の一族が戮せられてもはや帰るに由無くなつた事情とに尽きる。(李陵 200)
- りくつづける(理屈付) なんのことはない亭主の浮気を、女房が作家生活を楯にして理屈づけたのだ、(くれない 174)
- りくつばる(理屈) 哲夫たちのグループのプロレタリア文学論、それが理屈ばっていっているところにどれだけ隙が見えているにしろ、(むらぎも 53)
- 又、ただそんな理窟ばつた因縁ばかりではなく、彼は心からこの花を愛するやうに思つた。(田園の憂鬱 30)
- りゆうづける(理由付) と、関が初対面の時から示した露骨なよそよそしさも、今はつきりと理由づけられる気がした。(真知子・前 150)
- りゅうどくする(流読) 其様な時は生徒の流読する間に、眼早くさきの方を見て、(思出の記・上 209)
- りろんする(理論) 今やわれわれの任務は、無産者階級の理論を理論しておるところにではなくて、(むらぎも 75)
- りろんづける(理論) 理論に長じたドイツ人はかほど深刻な窮境に立って、なお科学の民族性なるものを理論づけ、(社会事情と科学的精神 129)
- るいるいたる(壘々) 育英学舎から四五丁離れて、古墳新墳壘々たる墓場があつて、其真中に杉が二本立つて居る。(思出の記・上 121)
- 無数の墓、石塔、地藏尊等壘々として並んでいる。(出家とその弟子 123)
- れいしする(冷視) 和菓子、シルコ、フンミツのすべてに渡って、街頭に陳列されたものを、冷視して、過ぎ去るのである。(自由学校 136)
- れいする(例) 例せば「君の彼<sup>あすこ</sup>点は好<sup>いい</sup>が此<sup>こ</sup>点は悪い」と云ふよりも、「彼<sup>あすこ</sup>点は悪いが、此<sup>こ</sup>点は実に宜い」と云ふと、(思出の記・上 154)

れいちょうする(冷嘲) 自分の生涯に対しても同じやうに半は慷慨し半は冷嘲したいやうな沈痛な心持になる。(つゆのあとさき 80)

れきじする(歴事) 三世に歴事して、云はゞ我家の武内宿禰である。(思出の記・上 17)

レクチュル(講義) ぢや少し講義るとね、<sup>たけのうもすくお</sup>無性の原生動物には親もなければ子もありやしない。(波 321)

れんいんする(連印) 親類に泣きつかれて夥しい金額の借用証文に連印する、(思出の記・上 10)

れんたつな(練達) 島でもつとも老練な海女がよその土地の海女に仕込まれた練達な少女に敗れたのである。(潮騒 130)

れんな(廉) 春魚の時節には鯛鰯の廉な<sup>はるうを</sup>こと夥しい、大抵五銭も出せば立派なものが一尾買へる(思出の記・上 207)

ろうえきする(勞役) 哲学はどこでもただ真理にのみかしずき、そのためにのみ勞役する高貴な奴隷である。(哲学以前 39)

ろうきゅうな(老朽) 風間敬之進は、時世の爲に<sup>おきざう</sup>置去にされた、老朽な小学教員の一人。(破戒 24)

ろうくする(勞苦) 夫の貧を養ふといふ心から、<sup>か</sup>斯うして細君が勞苦して居るといふことも解つた。(破戒 55)

ろうこうなる(老硬) 駒井先生の感化は諸先生の老硬なる頭脳にまでも影響を及ぼして、諸先生も可なり自由論者となり、(思出の記・上 142)

ろうせいな(老成) 基督教に養はれた、いやに取澄ました、年に似合はぬ老成な、厭な不愉快な態度であつた。(蒲団 47)

ろうたる(牢) ドイツ人のこの牢たる癖はなかなか治療しにくい。(ものの見方について 188)

ろうめんする(老免) 帝国大学を卒業後は直に助教授に挙げられ、老免せられるまで凡三十年漢文の講座を担当してゐたのであるが、(つゆのあとさき 53)

ろんじたてる(論立) やかましく論じ立てれば、これもまたむづかしい問題であろうが、(ものの見方について 126)

ろんじつめる(論) 意気盛なる兼頭氏は<sup>ども</sup>囁嚅の主人を追ひ立て追ひ立て滔々と論じつめたが、結局は斯様なつた。(思出の記・上 203)

ろんだんする(論談) かつて歐洲において哲学と称する思想がここかしこの客間で論談された時代に、(哲学以前 38)

わざわいする(禍) かくの如き文化的国際主義の障害として、むしろ世界に禍ひするものである。(人格主義 153)

○なるほど、私は死人だ。屍毒が近寄るものに禍する。(帰郷 324)

わらいかける(笑掛) ナイフから放した指を、卓布の上で組合せて、隆文は、真正面から、駒子に笑いかけた。(自由学校 62)



○曹長はときどき彼の方にやさしくわらいかけてきた。(真空地帯・上 6)

わらいかまける(笑)「飛んだ風をしてゐまして御免下さいまし。さ、お這入り遊ばせ。何んぞ御用でもいらつしやいましたの」と葉子は笑ひかまけたやうに云つた。(或る女・前 95)

わらいくずれる(笑崩) 美津枝は、ふツと噴飯<sup>ふきだ</sup>して、肚の底から可笑しさうに笑ひ崩れた。(多情仏心・前 242)

○女達は肩を振つて仲間同士ぶつかり合ひ笑ひ崩れた。(伸子・上 45)

わらいころげる(笑転) 可笑しい話が始つたので、人々は皆な笑ひ転がて、中にはもう泣いたものが有るとのこと。(破戒 206~207)

わらいさざめく(笑) 嚙々<sup>きやつきや</sup>と笑ひさざめいて、子供たちはすぐ起き返ると、(多情仏心・前 266)

わらいすてる(笑捨) ひとの言葉に反対は唱へないことにしてゐる信之だつたが、たゞそのまゝに笑ひ捨てられない気持にされた。(多情仏心・前 282)

わらいとばす(笑飛) お芝居にしてはあまりに上手過ぎるほど平気で笑いとばすだけです。(小説新潮 1956年1月 84)

わりびきする(割引) 平均反収は四石、ごく割引しても三石二斗は確実にあげているから、(農業朝日 1956年12月 62)

わるくさい(悪臭) 主人も襟垢の附た、近く寄つたら悪臭い匂が紛<sup>ごん</sup>としさうな、銘仙か何かの衣服<sup>きもの</sup>で、(平凡 100)

わるごすい(狡黠) 自分を信用させようと骨を折つてゐる、男の狡黠い態度<sup>わるごす</sup>も蔑視<sup>さげす</sup>まれたが、(あらくれ 198)

わるすきな(悪好) 新建の奥座敷で、昨夜も悪好きな花に夜を更してゐた主婦の、起きて出て来る姿をみると、(あらくれ 118)

わるよいする(悪酔) 酒をのみながら、感情が亢ぶると、悪酔することがある。(婦人公論 1956年5月 352)

## Ⅱ いくとおりにも読みうる動詞・形容詞の用例

動詞・形容詞が漢字で書かれたばあい、2とおりに（時には、3とおりにも4とおりにも）読めることがある。ここには、この種の例を、気づいたかぎり集めた。このばあい、ふりがなは無視して考えた。つまり、「行く」のように、ふりがなによって読みがあきらかな例でも、そのふりがながなければ他の読み方（「ゆく」）が可能になるばあいには、採集することにした。したがって、ふりがなによって臨時にそう読ませたというような例（「<sup>あとざまり</sup>退却する」など）もはいっている。

ある表記について何とおりの読みが可能と考えるかは、読み手の言語経験や学力によってちがってくる。ここでは、漢和辞典なども多少参考にしたが、主として調査者の判断によって決めたことをお断りしておく。

用例は50音順に並べ、ほかにどんな読みが可能かを→で示した。「上る」の例を「あがる」「のぼる」のどちらの項目にあげるかについては、つぎの規則によった。

- (1) 底本にふりがながあれば、その項目に入れる。
- (2) 個人の全集や、改造社版「現代日本文学全集」にふりがながあるばあいも、(1)に準ずる。
- (3) それ以外は、50音順で前の方の項目に入れる。

（担当 宮島達夫・高木 翠）

あいいざなう(相誘)→あいさそう 若い同志が相誘うては遠く林の小径を分て行く。

(土・上 168)

あいかなう(相適)→あいふさう 勇気と耐忍とを備えた人でなければ、総長として名実相適うこと不可能である。(総長就業と廃業 358)

あいさそう→あいいざなう

あいそうよい(愛想)→あいそよい 「いいえ、さうぢやございませんの。——構ひませんからどうぞ。」愛想よくお玉はいつた。(末枯 66)

あいそよい→あいそうよい

あいふさう→あいかなう

あいまいな→あやふやな

あおじらむ(蒼白・青白)→あおじろむ 蒼白んだ信之の頬には、ちよつと苦笑ひが浮んで、すぐ消えた。(多情仏心・前 316)

○青白んだような顔で、きつい眼の光だつた。(文芸春秋増刊 1953年12月 100)

あおじろむ→あおじらむ

あかしする(証)→しょうする 私の心の内にはびこる悪は、私に地獄のある事をますます明らかに証しました。(出家とその弟子 50)

あかす(証)→しょうす それでもお島の試された如才ない調子が、そんな仕事に適してゐることを証すに十分であつた。(あらくれ 158)

あがりおりする(上下)→のぼりおりする・のぼりくだりする 階段を上り下りする人間は、大概顔見知りの店員たちで、(河明り 279)

あがりきる(上切)→のぼりきる 石段を上り切ったところが玄関になり、玄関をはいてすぐの右手が鶴来の部屋だったから、(むらぎも 293)

あがりだす(上出)→のぼりだす 遙か右手の丘の上から煙が上り出した。(野火 71)

あがりつづける(上続・騰続)→のぼりつづける しかし私は上り続けた。頂上で芒の列は尽き、鞍状の草原が延びて、先に黒い喬木を並べた木立が見えた。(野火 51)

○陽光の中を行く私の体からは絶えず水蒸気が騰り続けた。(野火 136)

あがりつめる(上詰)→のぼりつめる まったく、人通りのない道で、坂を上りつめても、街頭の光りが、寂しい八の字を、描いてるだけだった。(自由学校 150)

あがりはじめる(上始)→のぼりはじめる 併しながら離別は終に來らねばならぬ。馬は坂を上りはじめた。(思出の記・上 40)

あがる(上)→のぼる ここの先生は、日に幾度も梯子段を上ったり降りたりしている。まるで廿日鼠のようだ。(放浪記 16)

○若々しい血潮は思はずお志保の頬に上るのであつた。(破戒 322)

○小さな蒸気船が汚穢船を何艘も引いて上つて來た。(波 74)

あがれる(上)→のぼれる 藻掻いても、足掻いても、最早駄目だ。田舎は深い井戸の様なもの、一度陥ちたら容易に上れない。(思出の記・上 13)

あきかかる→すきかかる

あきかかる(開)→ひらきかかる 「かういふ本当の自然と、それを切り拓いて行く人間の仕事に就いて、漸く眼が開きかゝつて来たのに、お訣れするのは、まったく惜しい気が致します」(河明り 318)

あきかける(開)→ひらきかける 障子がガタガタと……開きかけて、グツと支へたのを其儘にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、(平凡 84)

あく(空)→すく 窓を後にしてかけた席から半分伸び上り、自分の左側が空いてみると云つて招いた。(真知子・前 139)

あく(開)→ひらく 裏木戸が開いた音に、彼女は気がつかなかった。(人間の壁・上 266)  
○親仁は大口を開いて、(留守におらが此の亭主を盗むぞよ。)(はい、ならば手柄でござんす、さあ、貴僧参りませうか。)(高野聖 35~36)

あける(開)→ひらける 勘次が漸く眠に落ちた時お品は「口が開けなく成つて仕やうねえよう」と情ない声でいつた。(土・上 46)  
○戒律の完成は戒律以上の価値に活眼を開ける者にとつてのみ可能である。(人格主義 77)

あじきない(味気)→あじけない このまま下宿へ帰るのは何かしら味気ない。(人間の壁・上 112~113)

あじけない→あじきない

あたたまりきる(温)→ぬくまりきる 実に静かな夜だ。そして寒く、火のある部屋でも頻は冷え冷えと、まだ足の先は温まりきらずにいた。(暗夜行路・前 181)

あたたまる(温)→ぬくまる 其中にお腹も満くなり、親の肌で身体も温まつて、溶けさうな好い心持になり、不覚昏々となると、(平凡 27)

あたためる(温)→ぬくめる 酒を掌に温めながら、いま考へて見ても、彼は頷くのだ。(帰郷 342)

あっす→おす

あつっぽい(熱)→ねつっぽい 寝転んで鏡を見ていると、歪んだ顔が少女のように見えてきて、体中が妙に熱っぽくなってくる。(放浪記 191)

あつまる→たかる

あつめる(蒐)→もとめる 他のものは余程前から材料を蒐めたり、ノートを溜めたりして、余所目にも忙がしさうに見えるのに、私丈はまだ何にも手を着けずにゐた。(こころ 67)

あでやかな(艶)→えんな 細かな苔に蒼んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んで来たか、桜の花瓣の、三つ、六つ七つ、散り敷いてゐるのは、行く春の薦たけて艶なる風情だつた。(多情仏心・前 354)

あでやかな(艶麗)→えんれいな (あれ、嬢様ですつて、)と稍調子を高めて、艶麗に笑つた。(高野聖 37)

あでやかな(艶)→つややかな 『芳子さん?』『ええ。』と艶やかな声がする。(蒲団 33)

あでやかな→はでやかな

あとしざりする→あとずさりする

あとずさりする(逡巡)→あとしざりする・しゅんじゅんする 戸を開けて入つて来たのは丑松で、入るや否や思はず一步逡巡した。(破戒 195)

あとずさりする(退却)→あとしざりする・たいぎゃくする 丑松はまだ詫<sup>わ</sup>び足りないと思つたか、二歩三歩退却して、「許して下さい」を言ひ乍ら板敷の上へ跪<sup>ひざまづ</sup>いた。(破戒 312)

あぶない(危)→あやうい 空襲中東京の家で彼女が火に囲まれて危く助かつた話を聞き、(野火 167)

あぶらっこい→やにっこい

あふれおちる(溢落)→こぼれおちる 鶴子は酒屋の男の去つた後あたりにはもう誰もみないと思ふと、こらへてゐた涙が一時に溢れ落るのを急いでハンカチで押へた。(つゆのあとさき 56)

あふれかける(溢)→こぼれかける 宙に見張つてゐる伴子の二つの目に、また涙が溢れかけてゐた。(帰郷 183)

あふれる(溢)→こぼれる かわやへなぞ這入っていると、思わず涙が溢れる事がある。(放浪記 300)

あべこべな(反対)→はんたいな 急いで別れて行く高柳を見送つて、あべこべな反対な方角へ一町ばかりも歩いて行つた頃、斯の噂好きな町会議員は一人の青年に遭遇つた。(破戒 258)

あまい→うまい・おいしい

あます(剩)→のこす 自分は身の皮剥ぐ様にして金を剩し、(思出の記・上 188)

あまずい(甘酢)→あまずっぱい 糸昆布を用いる場合は甘酢く煮たもので結びます。(婦人生活 1956年2月付録 家庭料理 369)

あまずっぱい→あまずい

あやうい→あぶない

あやふやな(曖昧)→あいまいな 私は局量が狭いから、批評家等が誰も許しませぬに、作家よりも一段上座に坐り込んで、其処からあやふやな曖昧な鑑識で軽卒に人の苦心の作を評して、(平凡 107)

あやまる→ことわる

あらがう(抗)→さからう・はむかう 私としてはこれまであなたの意志に少しでも抗つたことはないつもりだけど、もう駄目なのでしょう。どうぞ自由して下さい。(くれない 135)

あらわな(露骨)→ろこつな 然し私はそんなあらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけと許思つて何時でも控えてゐた。(こころ 73)

あれはてる(荒果)→さびれはてる 羅生門の修理などは、もとよりたれも捨てて顧みる

者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が住む。(羅生門 6)  
 あれる→さびれる

あわい→うすい

いい(美)→うつくしい・よい 非常に音の美しい鶯が一羽飼つてあつた。(思出の記・上 75)

いい(清)→きよい・よい 今も忘れ難く思ふのは、水の清いのと、稲の美しさである。  
 (思出の記・上 6)

いい(好・善・可・佳)→よい 真面目な好い方なのよ。(帰郷 91)

○われわれすべてが、全体として、今日のごとき善い暮らしをしているのは、(貧乏物語 60)

○先づ恐しく調子が可いぢやて。(高野聖 33)

○質の佳い水は柔かぢやさうな。(高野聖 42)

いい(宜)→よい・よろしい 希望を持つことはやがて失望することである。だから失望の苦しみを味ひたくない者は初めから希望を持たないのが宜い、といはれる。(人生ノート 128)

いいわける(分疏)→ぶんそする 「勘次さんと吉こと起してた処なんだよ」内の女房は分疏してやつた。(土・上 218)

いう→ものいう

いかす(行)→ゆかす よし、今日は、このまま行かしといてやる……。逃がしといてやらあ。(真空地帯・上 61)

いかつい(厳)→いかめしい・きびしい 洋服を着たときの彼ののつしりした厳い姿が、如何かするとお島に頼もしいやうな心を抱かしめた。(あらくれ 145)

いかめしい→いかつい

いかめしい(厳)→きびしい 建物幾棟かあつて、長い塀は其周囲を厳しく取繞んだ。(破戒 125)

いからす→おこらす

いかりやすい(怒易)→おこりやすい ギリシア人のヒュブリスは彼等の怒り易い性質を離れて存しなかつたであらう。(人生論ノート 57)

いかる(怒)→おこる 武帝はこれを見ると酷く怒つた。(李陵 155)

いかる(憤)→いきどおる・おこる 顔中の神経を虫のようにピクピク動かして、何んでこんなに男が憤つていいのか、時姫にはさつぱり訳が分らなかつた。(小説と読物 1956年3月 340)

いかれる→やれる

いきあう→ゆきあう

いきあたる→ゆきあたる

いきおいこむ(勢込)→きおいこむ 起きかえると、なお勢い込んで立ち向かったが、その時私の目に映った父は今までの父とは、もう変わって感じられた。(暗夜行路・前 16)

いきおいたつ(勢立)→きおいたつ 広介が今日の期待に勢い立っているのを見ると、「子供のことなんか決して話さないでね。」と、冷たく言った。(くれない 90)

いきかえる(蘇生)→よみがえる お品は段々と身体が暖まるに連れて始めて蘇生つたやうに恍惚とした。(土・上 22)

いきずりする(嗚咽)→おえつする 顫々と震へて、僕は拳を握つた。突然に涙がほろり。と思ふと僕は嗚咽して哭き出した。(思出の記・上 26)

いきどおる→いかる・おこる

いきどおる→おこる

いきな(粹)→すいな 粹な人ぢアないつてえのかい? (多情仏心・前 27)

いきる(熱)→ほてる 休み茶屋で、ラムネに渴いた咽喉や熱る体を癒しつつ、帰路についたのは、(あらくれ 20)

いきわたる(行渡)→ゆきわたる この新設工場ができることによって、新鮮な牛乳が消費者に安く十分行き渡ることになり、(農業朝日 1956年4月 83)

いく(嫁)→かたづく・ゆく 「ぢや、どうしても、まあちやんには嫁く気はないのね。」(真知子・前 40)

いく(行・往・逝)→ゆく 朝のうちに葉氏が、シンガポールへ行くがと誘つてくれたが、辞退した。(帰郷63)

○マダムは次の日に京都へ往き奈良に遊び、二三日長崎に滞在して神戸に立戻つて便船を待つつもりであるから、(つゆのあとさき 93)

○その前年母を失つたばかりのところへ、また父に逝かれたので、(波 224)

いさぎよい→きよい

いさなう(誘)→さそう 山を穿つたこの流は天道様がお授けの、男を誘ふ怪しの水、生命を取られぬものはないのぢや。(高野聖 76)

いさめる(誠)→いましめる その時、狭い貸屋の奥の六畳間で、祖母は、諄々と、人生の行路の難いことを誠め、(多情仏心・前 245)

いじゅうする→ひっこす

いそがしい(忙)→せわしい 津上は忙しく立ち働いたこの三箇月の間、かかる索漠たる佻しい闘牛大会の情景を一度も想像したことはなかつた。(闘牛 140)

いだきしめる(擁擁)→だきしめる 「こんなことがあり得るだらうか! こんなことがあり得るだらうか!」と呻いて、骨が砕けさうに伸子を擁き締めた。(伸子・上 100)

いだく(抱)→だく 我々は自分にとつて都合のいいものを、抱き、愛し、歓迎する。(人格主義 95)

いだす(出)→だす 実兄の破産を現在眼の前に見ながら、一銭を出して救はうともせず、(思出の記・上 14)

いたずらする(悪戯)→わるさする おつぎは髪へ悪戯されたことを嫌つて思はず手を当て見て櫛の無くなつたのを知つた。(土・上 192)

いたわる(労)→ねぎらう 私もそこまで一緒に行つたが、二人とも、私に來いとは誘はなかつたのは、もうこれ以上むごい目には逢はさないと労つてくれたつもりか、お前にはもう行く資格はないと捨てたつもりなのか、分らなかつた。(冬の宿 185)

いつくしむ(愛)→いとしむ 青年の懷疑を客観的態度から、愛み各自の解決に導く代りに、(日本及日本人 1957年2月 57)

いっしゅうする→ひとまわりする

いっする(逸)→にがす・のがす 耕耘の時期を逸して居ると、肥料の欠乏とで幾ら焦慮つても到底満足な結果が得られないのである。(土・上 96)

いっする→はずす

いてる(凍)→こおる 雲の切れ間、凍るような夜空に星と一緒にあって長野の灯が見えた。(私の人生観 36)

いでる(出)→でる 友人から竊と短刀を借つて、墓場の一町ばかり手前から鞘を払つて、幽霊出なば突かん寄らば切らんと身構へながら(思出の記・上 121~122)

いとしい→かなしい

いとしむ→いつくしむ

いとまごいする(告别)→こくべつする 丈夫涙なきにあらず、離別の間に涙が、母に告別せぬは哀なが、(思出の記・上 159)

いびする→がっかりする

いぶる(燻)→くすぶる・けぶる ぶすぶすと燻る煙が蚊を遠く散乱せしめる。(土・上 186)

いましめる→いさめる

います(在)→おわします・おわす・まします 御胎内の尊きにて在すひりをの若君を我等に見はし玉へ(青銅の基督 86)

いやしい→いやらしい

いやしい→さもしい

いやす(癒)→なおす 彼の信仰が彼を癒したのである。(哲学以前 207)

いやな(嫌)→きらいな どうかして改良を加えたいものだが、厳しいリアリズムというものとは捨てることは嫌なので、(私の人生観 61)

いやらしい(鄙)→いやしい 成程其様思つて見れば眼のぎろりとして、にやりとする毎に歪む其口元に云はれぬ鄙しい所がある様に思はれた。(思出の記・上 127)

いらいらする(焦々)→じれじれする つくづく一人が淋しくなった。楊白花のように美しいひとが欲しくなった。本を伏せていると、焦々して来て私は階下に降りて行くのだ。(放浪記 62)

いらいらする(焦躁)→しょうそうする・やきもきする 已に母の不承知に会つて、焦躁して堪らぬ所へ、(思出の記・上 154)

いききたる(入来)→はいりきたる 如何なる博覧強記も、それが単に耳や眼から入り来つた多識である限り、哲学者には関しないもの無用のものであつた。(哲学以前 26)



いりこむ(入込)→はいりこむ 諸方から入込んでゐる蔭買ひの姿が、滅切夏めいて来た町に、景気をつけてゐた。(あらくれ 134)

いりこめる(入込)→はいりこめる フランスに、ナチスのな全体主義がなかなか入り込めないのも、またイギリスのように皇帝を温存できないのも、(ものの見方について 140)

いりまざる(入交)→いりまじる・いりまじわる 男女が入り交つて太鼓を中央に輪を描いて居る。(土・上 188)

いりまざる(入雑)→いりまじる 外の光が直接に差し込んでゐるところもあれば、滲むやうに壁画が明るくなつてゐるところもあつて、光と影とが入り雑つてゐる。(掃郷 78)

いりまじる→いりまざる・いりまじわる

いりまじわる→いりまざる

いりような(入用)→いりような 医者に入用な品として手もとに残つたのは、たつた一つ上衣のポケットに入れておいた聴診器だけであつた。(本日休診 66)

いる(居)→おる 翌朝になつて、それが増上寺の鐘とわかつたら、もう一ときも居られなくなつて、私は無断で逃げ帰つてしまつたのである。(文芸春秋 1954年2月 40)

いる(入)→はいる 夫は八月に入つて間のないある日であつた。(恩讐の彼方に 72)

○伸子は、話に身が入るにつれ、飾りつけなく、率直に口を利くやうになつた。(伸子・上 26)

いれかわる(入交)→いれまざる・いれまじる・いれまじわる 片隅にはやす代もいぎたなく足を丸めて眠り、寝息は入れ交り、蚊帳の中がいっぱいになる。(くれない 114)

いれずみする(刺青)→しせいする こんなのは、刺青してもらつて彫物師の家を出たときには、もう後悔してゐるに違ひない。(本日休診 101)

いれまざる→いれかわる

いれまじる→いれかわる

いれまじわる→いれかわる

いろいろな→さまざま

いろどりする(彩色)→さいしきする 紛れの無い六左衛門の娘、白いもの花やかにいろどり  
して恥の面を塗り隠し、(破戒 170)

いんしょくする→のみくいする

いんべいする→かくす

いんわいな→みだらな

うえる(飢・餓)→かつえる 飢えては一わんの麦飯に舌鼓をうち、渴しては一杯の泥水にも甘露の思いをなす、(貧乏物語 36)

○二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓ゑるやうなことも御座いますまい。(蒲団 57)

うかがう(覗)→ねらう 私は地に伏して銃を構へ、慎重に覗つて撃つた。(野火 52)

うさんな(胡乱)→うろんな 伯父は胡乱そうに伯母や母の顔を見て居たが、やがて独語

つ様に、(思出の記・上 140)

うすあかい(薄明)→うすあかい 私は窓から、バルコンの面してある細長い中庭がいくぶん薄明くなつて来たやうなのをぼんやりと見おろしてゐた。(風立ちぬ 105)

うすあかな→たんこうな

うすあかい(薄明)→うすあかい いつの間にか四壁は暗くなつて来た。青白い黄昏時の光は薄明く障子に映つて、本堂の正面の方から射しこんだので、柱と柱との影は長く畳の上へ引いた。(破戒 211)

うすい(淡)→あわい 冷暗所に入れておけば一月半ぐらいで、淡い黄色味をおびた梅酒ができますから、(婦人倶楽部 1956年6月 455)

うずくまる→はいつくばる

うすぐらい→ほのぐらい

うすくれないな→うすあかな・たんこうな

うずまる(埋)→うまる フランシスコ・ザビエルの遺骸が、この下に一時埋つてゐた位置を記念するものである。(帰郷 9)

○殆んど三年半ぶりで見るとこの村は、もうすつかり雪に埋まつてゐた。(風立ちぬ 145)

うずめかける(埋)→うめかける ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一心入目を拝むしをらしい姿が永く眼に残つてゐる。(野菊の墓 15)

うずめきる(埋)→うめきる 軀ごとすつぽりと津上の胸の中にとびこんでも、なほそこに埋めきらぬ間隙が、さき子には感じられた。(闘牛 85)

うずめさる(埋去)→うめさる 江戸時代に来た外人のヤンヨウステンの名から出た八重洲河岸、千代田城の外壕などの由緒などは無論、現代に用のないことで、トラックで運んで来る焼け煉瓦の雪崩の下に埋め去つて悔いはないのであらう。(帰郷 314)

うずめだす(埋出)→うめだす お前の顔を磨いてやらうと云つて横たはつてゐる私の顔をアルミニウムの切片で埋め出し、(機械 19)

うずめつくす(埋尽)→うめつくす 旧の一月から二月にかけて晒すので、田や畑を埋めつくした雪の上を晒場にすることもあるといふ。(雪国 151)

うずめる(埋)→うめる 「名うての仕末屋だから、瓶にでも入れて、土の中へでも埋めてあるのかも知れない。」(思雪の彼方に 62)

○稲草を以て田の空地を埋めることが一日でも速かなればそれだけ余計な報酬を晩秋の収穫に於て与へるからと教へて自然は百姓の体力の及ぶ限り活動せしめる。(土・上 197)

うずもれつくす(埋尽)→うもれつくす 巷塵に埋れつくした瀬谷の身にとつては友の善悪は最早問題ではなかつた。(厚物咲 15)

うずもれる(埋)→うもれる 親子三人の佗住居も季節さまさまの花に埋れて風情があつた。(厚物咲 23)

○雑草の中に埋もれて、誰一人汲む者もないことを、爺さんは、講談で聞き知ってるので、(自由学校 180)

うすらさむい(薄冷)→うすらつめたい <sup>さむ</sup>薄ら<sup>さむ</sup>冷く、もの寂しい秋の雨は、<sup>さとやつこ</sup>里奴が滞在の二日を、しとしとと降り続けた。(多情仏心・前 296)

うすらつめたい→うすらさむい

うたがう(疑)→うたぐる 私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。(こころ 85)

うたぐる→うたがう

うだる→ゆだる

うちあける→ぶちまける

うちこわす→ぶちこわす

うちふす(打伏)→うつぶす 色よく黄ばんだ<sup>おくて</sup>晩稲に露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせるか殊に清々しく、胸のすくやうな眺めである。(野菊の墓 19)

うつ(撲)→なぐる・ぶつ 「口をおあきつてばさ！」彼女は男がさし出した手の平をびしやりと撲つて云つた。(青銅の基督 32)

うつ→ぶつ・やる

うつくしい→いい

うつぶす→うちふす

うつろな(空虚)→くうきょな 「さう。」真知子は空虚にたゞ二音だけの返事を繰り返した。(真知子・前 210)

うつろな(空)→からな・くうな 空虚をまぎらさうとして無理にあんな空な享楽主義を肯定したかつたからの事だと思つた。(青銅の基督 73)

うでる(茹)→ゆでる 勘次は漬菜の手を放して軒下へ来た。手も足も茹でたやうに赤くなつて居る。(土・上 43)

うとうとしい→よそよそしい

うなずく(肯・頷)→きく 片野は新しい妻を大事にした。手が荒れるといふことで妻には土いぢりをさせなかつた。妻の云ふことを何でもよく肯いた。(厚物咲 31)

○あの女は、なかなか、人の頼みなんか、頷く女じゃないがね……(自由学校 255)

うなだれる(悄)→しおれる 勘次は悄れた首を擡げて三人の口を糊するために日備に出た。(土・上 81)

うまい→あまい・おいしい

うまい(甘)→あまい 蓮太郎は又、東京の市場で売られる<sup>くだもの</sup>果実なぞに比較してこの信濃路の柿の新しいこと、甘いことを賞めちぎつて話した。(破戒 10)

うまる→うづまる

うみくだびれる(倦憊)→うみつかれる お島はさう言つてうみ<sup>くたび</sup>憊れた男を引立てた。(あらくれ 181)

うみつかる→うみくたびれる

うみだす(産出)→さんしゅつする 声も、形も、其は皆な君が自分の疑心から産出した  
幻だ。(破戒 87)

うめかける→うずめかける

うめきる→うずめきる

うめさる→うずめさる

うめだす→うずめだす

うめつくす→うずめつくす

うめる→うずめる

うもれつくす→うずもれつくす

うもれる→うずもれる

うらがれる→すがれる

うる(得)→える 今日社会の多数の人々が、充分に生活の必要品を得ることができなく  
て困っているのは、(貧乏物語 77)

うる(獲)→える・とる 貧乏な百姓はいつでも土にくつついて食料を獲ることにばかり  
腐心して居るにも拘はらず、其の作物が俵になれば既に大部分は彼等の所有ではな  
い。(土・上 96)

～うる(得)→～える 遠方から敵を斃し得る武器を失った私に、空間は拡がった。(野火  
88)

○室町水墨画の優れたものは、自然にたいする人間の根本の態度の透徹は、外的条件  
の如何にかかわらず、いかなるものを表現し得るかということを、明らかに語ってい  
るのであります。(私の人生観 97)

うるおす(湿)→しめす 僕は二口三雪を嚙むで喉を湿し、(思出の記・上 182)

うるさい→わずらわしい

うろろろする(彷徨)→ほうこうする 相手を失つて彷徨してゐる恋で、基本体は矢張り  
満足を求めて得ぬ性欲だ。(平凡 94)

うろつく→ぶらつく

うろんな→うさんな

うんざりする(鬱蹙)→ひんしゅくする 何の学科も何の学科も、皆味も卒気もない鬱蹙  
する物ばかりだったが、就中私の最も閉口したのは数学であつた。(平凡 47)

うんざりする(淹悶)→えんもんする 長い長い、考へても淹悶するやうな信州の冬が到  
頭やつて来た。(破戒 166)

えいかける(酔)→よいかける 五百助の方は、一度、フラフラと酔いかけたが、酒量  
持ってる悲しさで、ある程度を越すと、いやに、酔いが停滞を始めた。(自由学校 148)

えいくたびれる(酔)→よくたびれる 私は善鸞様に盛りつぶされ、酔いくたびれて逃  
げて来ました。(出家とその弟子 88)

えいしびれる(酔痺)→よいしびれる 女は両腕を門のやうに組んでもとめられたものの上をおさへたが、酔ひしびれて力が入らないのか、「なんだ、こんなもの。畜生。畜生。だるいよ。こんなもの。」と、いきなり自分の肘にかぶりついた。(雪国 33)

えいしれる(酔)→よいしれる 貧乏の屈辱を存分に嘗め尽した木村は、見る見る溫柔な葉子の言葉や表情に酔ひしれるのだつた。(或る女・前 210~211)

えいたおれる(酔倒)→よいたおれる 間も無く細君も奥の方から出て来て、其処に酔倒れて居る敬之進が復た復た丑松の厄介に成つたことを知つた。(破戒 242)

えいつぶれる(酔潰)→よいつぶれる 一層この場で酔ひつぶれてさへしまへば周囲の者が結句どうにか始末をつけてくれるだらうと、(つゆのあとさき 77)

えいはじめる(酔始)→よいはじめる 葉子は自分で造り出した自分の 葬 <sup>おとしめな</sup>に他愛もなく酔ひ始めた。(或る女・前 13)

えがきはじめる(描始)→かきはじめる 先生は起き上つて、縁台の上に胡坐をかいてゐたが、斯う云ひ終ると、竹の杖の先で地面の上へ円のやうなものを描き始めた。(こころ 74)

えがきふける→かきふける

えがきわかる(描分)→かきわかる 近代社会と現代社会を明暗のコントラストで描き分けた清水氏の理論は、その後、大衆社会論の骨子となった。(学問の動き 272)

えがく(描)→かく 向うの山際の宙に、鶯が一羽、茶色の腹を時々見せて、ゆつたりと輪を描いて舞つてゐた。(帰郷 207)

○西南フランス、ラスコーの洞穴に描かれた壁画には、一万年以上のむかし、これを描いた人類の祖先の力強い生命感があふれている。(学問の動き 249)

えがける(描)→かける 僕でなければ描けない苦しい画を、その内、きつと描いて見せるんだよ。(帰郷 106)

えりだす(選出)→よりだす 彼は、比較的長いのを、選り出したが、それは、いわゆる洋モクだった。(自由学校 157)

えりとる(択取)→よりとる 清岡を呼出し、座敷には招待した記者二人を残して好きな芸者を択り取らせる事にした。(つゆのあとさき 67)

えりわかる(選分)→よりわかる その間の関係をできる限り正確にピンセットの先でよく選りわかることによって、何が、どういう事情で、マイナスになってきたかを突きとめて、(ものの見方について 164)

える→うる・とる

へえる→へうる

える(選)→よる 大きいのを、選ってきたんだが、やっぱり、いけねえかな……。 (自由学校 171)

えんな→あでやかな

えんもんする→うんざりする

えんれいな→あでやかな

おいしい(甘)→あまい・うまい 先に私が女の生徒さんたちを預つてゐたときに、一人あちらの方の人がゐて、そこの家からよく貰つたけど、あちらのはそれは甘いのね。  
(桑の実 144)

おいしげる(生茂)→はえしげる 山茶花などの枝葉の生茂つた井戸端で、子供を負ひながら襦袢をすゝいでゐる姉の姿が、垣根のうちに見られた。(あらくれ 55)

参照：はえしげる(生茂) 松が自然に美しく配置されて生え茂つた岩がかつた岸がすぐ眼の先きに見えて、(或る女・前 156)

おいしりぞける→おいのける

おいつく→おつつく

おいのける(追退)→おいしりぞける 彼の追ひ退けるのをのをつそりと避けて、障子の方へ逃げて行つてしまふと、(田園の憂鬱 83)

おいはらう(追払)→おっぱらう 姫に無理のれんぼをなし、鬼外道と化した小雪童子、天にかわつて、追払ってくれるわ(明星 1956年12月 160)

おいぼれる→ぼける

おうじゅくする(黄熟)→こうじゅくする 外は黄熟した八月の暑熱が、じりじり大地に滲透るやうであつた。(あらくれ 222)

おうらいする(往来)→ゆききする 太平洋を幾度も往来したらしい人達で、どんな職業に従事してゐるのか、さういふ見分けには人一倍鋭敏な観察力を持つてゐる葉子にすら見当がつかなかつた。(或る女・前 187)

おえつする→いぎずすりする

おえる(終)→おわる 学校の日課を終ると、直ぐ其足で出掛けたので、丑松はまだ勤務の儘の服装で居る。(破戒 8)

おごそかな(森厳)→しんげんな 深い森厳な音響に胸を打たれて、思はず丑松は首を垂れた。(破戒 337)

おごそかな(壮嚴)→そうごんな あゝ、無言にして聳え立つ飛驒の山脈の姿、長久に壮嚴な自然の殿堂——(破戒 123)

おこなう→やる

おこらす(怒)→いからす 伯父の前で否と云つて、伯父を怒らしたのである。(思出の記・上 157)

おこりやすい→いかりやすい

おこる→いかる

おこる(憤)→いきどおる 始終黙つて憤つてゐた。(平凡 107)

おさない→わかい

おしかぶせる→おっかぶせる

おじぎする(叩頭)→こうとうする 「天皇陛下様。大日本帝国様」と彼はぼろのやうに

山蛭をぶら下げた顔を振りながら、叩頭した。(野火 132)

おししりぞける→おしのける

おしとどめる(押止)→おしとめる 何か目に見えない力が背後に在つて、妙に自分の無  
法を押止めるやうな気がした。(破戒 142)

おしとめる→おしとどめる

おしのける(押退)→おししりぞける 「邪魔ぢや。」数馬は徳右衛門を押し退けて進んだ。  
(阿部一族 72)

おす(圧)→あつす <sup>やが</sup> <sup>およ</sup> <sup>こやま</sup> 聴て凡そ小山ほどあらうと<sup>けど</sup> <sup>お</sup> <sup>うしろ</sup> <sup>あ</sup> 気取られるのが胸を<sup>むね</sup> <sup>お</sup> <sup>す</sup> <sup>ほどに</sup> <sup>ちかづ</sup> <sup>き</sup> 近いて来  
て、牛が鳴いた、(高野聖 63)

おそろしい(可怖・可恐)→こわい 私には、それが可怖いんです。(帰郷 257)

○時節柄暑さのため、<sup>おそろし</sup> <sup>い</sup> <sup>やまひ</sup> <sup>は</sup> <sup>や</sup> 可<sup>お</sup> <sup>そろ</sup> <sup>し</sup> <sup>い</sup> 悪い病が流行つて、(高野聖 11)

おそろしい→おっかない・こわい

おそわる→ならう

おちいる→はまる

おちくぼむ(落凹)→おちへこむ 日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて、諸の太  
きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は、落凹んで了つた(田園の憂鬱 23)

おちとどまる→おちとまる

おちとまる(落留)→おちとどまる 五六尺天窓の上<sup>うへ</sup> <sup>しやくあた</sup> <sup>ま</sup> 上りしかつた樹の枝<sup>えだ</sup> <sup>から</sup> <sup>は</sup> <sup>かた</sup> <sup>り</sup> <sup>と</sup> <sup>笠</sup>  
の上<sup>うへ</sup> <sup>へ</sup> <sup>おち</sup> <sup>と</sup> <sup>ど</sup> <sup>ま</sup> <sup>る</sup> <sup>た</sup> <sup>も</sup> <sup>の</sup> <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup>。(高野聖 23)

おちばする(落葉)→らくようする <sup>また</sup> <sup>とき</sup> <sup>は</sup> <sup>ぎ</sup> <sup>も</sup> <sup>と</sup> <sup>す</sup> <sup>と</sup> <sup>又</sup> <sup>常</sup> <sup>磐</sup> <sup>木</sup> <sup>が</sup> <sup>おち</sup> <sup>ば</sup> <sup>す</sup> <sup>る</sup>、(高野聖 23)

おちへこむ→おちくぼむ

おっかない(可怖・可怕)→おそろしい・こわい <sup>お</sup> <sup>つ</sup> <sup>か</sup> <sup>な</sup> <sup>い</sup> 汝りや姉に抱かさつてんだ。可怖こと  
あるもんか(土・上 71)

○須田町から先は、自分ながら<sup>おつ</sup> <sup>か</sup> <sup>な</sup> <sup>い</sup> 可怕くて為様がなかつたの。(あらくれ 239)

おっかふせる(押被)→おしかふせる 「人聞きのわるいことを言つて下さるなよ。」お島  
は<sup>おつ</sup> <sup>か</sup> <sup>ふ</sup> <sup>せ</sup> <sup>る</sup> <sup>やう</sup> <sup>に</sup> <sup>笑</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup>。(あらくれ 214)

おつつく(追付)→おいつく 後からバタバタと追<sup>おつ</sup> <sup>か</sup> <sup>け</sup> <sup>て</sup> <sup>来</sup> <sup>る</sup> <sup>の</sup> <sup>は</sup>、雪江さんに極つてる。  
玄関で<sup>おつ</sup> <sup>つ</sup> <sup>く</sup> <sup>て</sup> <sup>追</sup> <sup>付</sup> <sup>い</sup> <sup>て</sup>、何を如何するのだから、キャツキャツと騒ぐ。(平凡 78)

おっぱらう(逐攔)→おいはらう 女はそこを<sup>おつ</sup> <sup>ぱ</sup> <sup>ら</sup> <sup>う</sup> <sup>と</sup> <sup>逐</sup> <sup>攔</sup> <sup>は</sup> <sup>れ</sup> <sup>る</sup> <sup>と</sup>、外へ出ていつまでもぶつぶ  
つ言つてゐた。(あらくれ 242)

おてんだらけな→しみだらけな

おどかしつける(脅)→おどしつける おゆふはいきなり昔し堅気の頑固な父親に、頭か  
ら<sup>おど</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>け</sup> <sup>る</sup> <sup>た</sup> <sup>ら</sup> <sup>一</sup> <sup>層</sup> <sup>突</sup> <sup>き</sup> <sup>つ</sup> <sup>め</sup> <sup>た</sup> <sup>気</sup> <sup>分</sup> <sup>で</sup> <sup>家</sup> <sup>を</sup> <sup>出</sup> <sup>た</sup>。(あらくれ 102)

おどかす(嚇)→おどす 落ちて了つたものはいくら叱つたつて<sup>おど</sup> <sup>か</sup> <sup>し</sup> <sup>た</sup> <sup>つ</sup> <sup>て</sup> <sup>返</sup> <sup>つ</sup> <sup>て</sup> <sup>来</sup> <sup>る</sup> <sup>も</sup>、  
のでもなし、(機械 11)

おどかす(脅)→おびやかす ダイヤモンドの話を持出して、こちらを脅かして置いて、

急に目を逸らして沈黙する彼と、かうしてダンスの相手になつてゐる彼とは、まるで別の人間のやうな気がする。(帰郷 43)

おどける→とぼける

おとしさる(貶去)→けなしさる 固定した家屋を築かないのも彼等の生活形態から来た必然で、頭から低級と貶し去るのは当然ない。(李陵 189)

おどしつける→おどかしつける

おどす→おどかす・おびやかす

おとなう→とう

おどむ(淀・澱)→よどむ 寒い冬の夕暮のあわたしい物音が、荒れた町の底に淀んでゐた。(あらくれ 165)

〇しめつばい六月の空の下に、高原地の古い町が、澱んだやうな静かさと寂しさで、彼女の曇んだ目に映つた。(あらくれ 250)

おとめらしい→おほこらしい

おののく→わななく

おびやかす(脅)→おどかす・おどす 「放逐して<sup>しほ</sup>へ、今直ぐ、それが出来ない<sup>おど</sup>とあらば吾儕<sup>われわれ</sup>挙つて御免<sup>ごめん</sup>を蒙<sup>かうむ</sup>る」と腕<sup>うで</sup>捲<sup>まく</sup>りして院長<sup>おびやか</sup>を脅<sup>おど</sup>すといふ騒動。(破戒 6)

おふう(背負)→しょう・せおう ある時は右の腕で敬之進の身体を支へるやうにしたり、ある時は肩へ取組<sup>とりぐ</sup>らせて背負<sup>おぶ</sup>ふやうにしたり、(破戒 69)

おふわす(負)→おわす 不良の分子を少からず持つてゐる疑問の子を、彼の背中に負<sup>おぶ</sup>はしたまま姿を消してしまつたきぬ子が、彼は今更のやうに怨めしかつた。(波 310~311)

おほこらしい(処女)→おとめらしい・しょじょらしい もんはそんな処女<sup>おほこ</sup>らしいものはすつかりなくしてゐるのだ。(あにいうと 148)

おぼろげな(朦朧)→おぼろな・もうろうな 朦朧<sup>おぼろげ</sup>ながら丑松は幼いお妻の俤<sup>おもひかげ</sup>を忘れずに居る。(破戒 128)

おぼろな→おぼろげな

おめく→わめく

おもいおこす(想起)→そうきする 隆とした其風采<sup>なりふ</sup>を眺めたばかりでも、いかに斯の新進の政事家が虚栄心の為に燃えて居るかを想起<sup>おもひおこ</sup>させる。(破戒 182)

おもいとどまる(思止)→おもいとまる 私は窓硝子を指で叩かうとしたのをふと思ひ止まりながら、さういふ彼女の姿をぢつと見入つた。(風立ちぬ 120)

おもいとまる→おもいとどまる

おやみない(小止)→こやみない ランプの焰がどうした具合か、毎夜、ぼつぼつと小止みなく揺れて、(田園の憂鬱 60)

おりかける(降)→くだりかける 塩町の電車通りから曲つて津の守阪を降りかけた。(つゆのあとさき 100)

おりきる(降)→くだりきる 新田といふ二十五歳の温厚な青年が、峠を降りきつた岳麓



の吉田といふ細長い町の、郵便局につとめてゐて、(富嶽百景 56)

おりだす(下出)→くだりだす 通れないので、引き返し左手に巻き出すと、大洞山に続く尾根にぶつかり、これだこれだと下り出した。(私の人生観 32)

おりはじめる(下始)→くだりはじめる 急いで山径を下りはじめた。(風立ちぬ 120)

おりる(下)→くだる 五百助は、坂を下りながら、話しかけた。(自由学校 204)

おる→いる

おろす→くだす

おろそかな(忽諾)→こつしよな・なおざりな・ゆるがせな 酔つては肝腎の手曳きの役が忽諾になるから飲む真似をして胡麻化してゐるのを(春琴抄 188)

おわします→います

おわす→います

おわす→おぶわす

おわる→おえる

カーブする(曲線)→きょくせんする 新富河岸の橋を曲線しながら、電車は新富座に突きささりそうに朽ちた木橋を渡って行く。(放浪記 169)

がいしゅつする→そとでする

かいす→げす

かいせる(解)→げせる その学生が彼を見上げたのが何のためなのか岡には解せなかったのだったが(むらぎも 90)

かいふくする→とりかえす

かえす(復)→ふくす・もどす 劇しく開けた戸が稍朽ち掛けた闕の溝を外れようとしてぎつしりと固着した。彼は苛立つて戸を叩いて溝に復すと其の儘飛び出した。(土・上 172)

かえる→もどる

かがみかける(踞)→こごみかける 私はその目を避けるやうな恰好をしながら、彼女の上に踞みかけて、その額にそつと接吻した。(風立ちぬ 100)

かがみこむ(屈込)→こごみこむ ベッドに近づきながら、節子の寝顔を屈込むやうにして見た。(風立ちぬ 125)

かがむ(屈)→こごむ (今でも屈うやつて見ますと恐いやうでございます。)と屈んで二の腕の処を洗つて居ると。(高野聖 40)

○小さな五六人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしてゐるらしく、立つたり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。(銀河鉄道の夜 247)

かがむ(踞・蹲)→こごむ・しゃがむ 彼は、蹲の間に、屈んで、人の注視を避けたので、五百助も、それに倣った。(自由学校 324)

○幸江は濡れた眼を上げて、ベッドの前に蹲んだ身を起こした。(家の光 1956年7月 81)

かがめる(屈・踞)→こごめる 「何卒はあ、決してやりませんから、へえお内儀さんど

うぞ」勘次は草刈籠を脊負うて前屈になつた身体を幾度か屈めていつた。(土・上 110)  
○太陽に祝福され野面や、犬や、そこに身を屈めて居る働く農夫などを、彼はしばらく恍惚として眺めた。(田園の憂鬱 109)

かがやく(燦)→きらめく 椀の底には、なるほど彼女の云ふとほり微細な金粉がほんの僅かばかりきらきらと燦いてゐた。(厚物咲 21)

かかわる(関)→かまう 駒子は、平さんが、配給所を去ったことを、知らないから、わが家へ帰る危険を、感じてはいるのだが、そんなことに関ていられないほど、心が切迫していた。(自由学校 357)

かかわる→こだわる

かきとどめる(書留)→かきとめる 彼女は十五六の頃から、読んだ小説を一々書き留めておき、そのための雑記帳がもう十冊にもなつたといふことであつた。(雪国 40)

かきとめる→かきとどめる

かきはじめる→えがきはじめる

かきふける(描耿)→えがきふける そんな時の彼の心持は、ただ一人で監禁された時には、無心で一途に唐草模様を描き耽るものだといふ狂気の画家たちによほどよく似て居た。(田園の憂鬱 39)

かきみだす(擾)→みだす 兎に角、この擾された気持を澄ますまで、私はあの河沿ひの家に取付いてゐなければならない。(河明り 275)

かきる(画)→くぎる 窓の前を一杯に塞いでゐるものは、南禅寺のうしろの空を画つてゐる鬱蒼とした初夏の翠風があるのみである。(週刊新潮 1956年3月4日 30)

かきる→しきる

かきわける→えがきわける

かく→えがく

かくじつな→たしかな

かくす(躲)→かわす 時雄はいかにしても苦しいので、<sup>いきなり</sup>突如其の珊瑚樹の蔭に身を躲して、其の根本の地上に身を横へた。(蒲団 28)

かくす(秘)→ひす それを秘してゐたのは、彼に対する好意からで、それをあかしたなら捨てられはしまいか、(多情仏心・前 343)

かくす(隠蔽)→いんべいする 文平は女の耳の側へ口を寄せて、丑松が隠蔽して居る其恐い秘密を私語して聞かせるやうな態度を示した。(破戒 275)

かくす(藏)→ぞうする 舳先に碎ける波頭と繁吹の下に、身をくねらして蟠つてゐる見えない真暗な波があつた。それは不規則な運動をくりかへし、支離滅裂な危険な気まぐれを感してゐる。(潮騒 145)

かくばる(角)→かどばる 彼は林中尉の形のよい高いが小さい鼻、かたくつた角ばっている耳を忘れることはできない。(真空地帯・上 65)

かけあがる(駈上)→かけのぼる 二人は八代神社の石段を上つた。一息に駈け上るのは

わけもなかつたのに、かれらは心満ち足りて一段一段噛みしめるやうに昇つた。(潮騒 157)

かけすぎる(馳過)→はしりすぎる・はせすぎる 片側町の人家は既に戸を閉め、人通りも電車も杜絶<sup>とだつた</sup>がちになつた往来には円タクが馳過<sup>かちか</sup>るばかり。(つゆのあとさき 39)

かけのぼる→かけあがる

かける→えがける

かける→くもる

かげんな→むくちな

がさつな(粗雑)→そざつな 町幅のだゞつ広い、単調で粗雑<sup>がさつ</sup>な長い大通りは、どこを見向いても陰鬱<sup>ひっそり</sup>に閑寂してゐたが、(あらくれ 165)

かしこい(慧)→さかしい つらいけれどいちばん尊いことなのだ。またいちばん慧<sup>かしこ</sup>いことなのだ。(出家とその弟子 181)

かしましい(聒)→かまびすしい 何番さんがお急ぎですよ、などと二階から金切声で聒<sup>かしま</sup>しく喚く中を、(平凡 114)

かしましい(墮)→やかましい 一時はあれほど墮<sup>かしま</sup>しく世の噂に上つた此の親爺が、今日泰然として銀座街頭のカツフェーに飲んでゐても、誰一人これを知つて怪しみ咎めるものもない。(つゆのあとさき 80)

かすか(微)→ひそか・ほのか 外の灯りで白んでゐる天井を睨むようにして、帰って来ない広介の行動を想像した。絶えず、大通りに微かに起って近づいてくる彼の足音を意識の底で待ちながら。然し広介は帰って来ない。(くれない 68)

かたい→こわい

かたい(難)→むずかしい 勝つことは愚か、防ぎとどめることも難いのである。(落城 40)

へがたい(難)→へにくい 俄商人はカンテラの光明と木陰の薄い闇との間に立つた其の姿が明瞭<sup>はつきり</sup>と見極め難いので、頻りに目を燈めつつ求められる儘に籬の端に立つて西瓜を出して遣る。(土・土 190)

○入り易く、学び難いのが、鉦でしようかな、四色の音が、出るようになって、全体を締める、あのイキの会得が、むづかしい。(自由学校 32)

かたづく→いく

かたわな(畸形)→きけいな 盲目も有繫お袋だから畸形<sup>かたわ</sup>に成つちや他人の処なんぞよりやええと思つたんでがせうね、(土・土 156)

かたわな(不具)→ふぐな 「ぢや、私が不具<sup>かたは</sup>なんでせうかね。」(あらくれ 200)

かつえる→うえる

がっかりする(落胆)→らくたんする 二日ばかり捜しあるいた口が、どこにも見つからなかつたのに落胆<sup>がっかり</sup>した彼が、日の暮方に疲れて渡場<sup>わたしば</sup>の方から帰つて来たとき、家のなかには其処らちゆう水だらけになつてゐた。(あらくれ 162)

がっかりする(萎靡)→いびする 少しでも塵芥が残つてゐると、掃直しを命ぜられるから、丁寧に奇麗に掃かなきやならん。是が中々の大役の上に、時々其処らの草むしり迄やらされて萎靡する事もある。(平凡 70)

かどだたい(角立)→つのだたい しかし只温かく、柔和なと云ふのともちがふ。それでゐて角立たしい気持ちがあるのでは微塵もない。(青銅の基督 87)

かどだつ(角立)→つのだつ さゞ波が星を呼び出すやうに、海一面に角立つてゐる。(河明り 338)

かどばる→かくばる

かなう→ふさう

かなしい(愛)→いとしい 母が飼ひし牛なればまた愛しきと水やりに立つ身の置き処なく(短歌 1956年7月20)

かびすぎる→はですぎる

かびな→はでな

かふる(被)→きる・こうむる 「君ひとりだけが、罪を被たものだといふ噂も聞いてをつた。しかし、それだからと云つて……」(掃部 135)

かまう→かかわる

かまびすしい→かましい

かまびすしい(喧)→やかましい 旅人を取囲んで、手ン手に喧しく己が家号を呼立てる、(高野聖 9)

かもく→むくちな

かよう(通)→とおる その時長十郎が心の中には、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたやうな、力の弛みと心の落着きとが満ち溢れて、(阿部一族 32)

からい(辛)→つらい 男の寡り暮らしよりも、働いて養わねばならぬ寡婦の方にこの弱点が考えられるのは、女の力の弱さや、女に辛い社会制度の欠陥なのであろう。(くれな い 92)

からな→うつろな

からまりつく→まといつく

からみつく→まといつく

かる→やる

かれいな→はなやかな

かれる→しおれる

かれる(覆)→しゃがれる・しわがれる 私はすぐに、彼女が何か打ち明けにくいやうなことを無理に言ひ出さうとしてゐるらしいのを覺つた。そんな場合のいつものやうに、彼女のいまの声もすこし覆れてゐた。(風立ちぬ 94)

かわかす(乾)→ほす 炭はしらぬ様に必ず一昼夜水に浸して乾したのを用ひ、(思出の

記・上 191)

かわす←かくす

かんきする←よびおこす

かんたいする←もてなす

かんばしい(香)←こうばしい 皆川淇園は、酒数献にいたれるときは味なく、肴数種におよぶときは美みなく、煙草数ふくに及ぶときは苦みを生じ、茶数碗におよぶときは香ばしからずと言ったが、(貧乏物語 78)

きいな←きたいな

きうつな→きぶせな

きうつする(気鬱)→きぶせする 近來叔父が筋の悪い流れ者の女を妾に入れて、叔母がひどく気鬱して、(思出の記・上 86)

きおいこむ→いきおいこむ

きおいたつ→いきおいたつ

きかえる(着更・着換・着替)→きがえる 二郎は身をかくして見送ると、乏しい外燈の光の中でも、あさ子が外出着に着更えていることが分つた。(新潮 1956年3月 160)

○鹿子が、寝巻に着換えていると、父と照代が戻ってきた様子で、(婦人倶楽部 1956年8月 141)

○純白のウェディング・ドレスから華やかなライラックのカクテル・ドレスに着替えて、(婦人倶楽部 1956年10月 16)

きがえる→きかえる

ききおえる(聞終)→ききおわる おかみさんは話を一応きき終ると、きてゐる兵隊服の胸もとを突き矜して(本日休診 113)

ききおわる→ききおえる

きく→うなづく

きけいな→かたわな

きけんな→けんのんな

きす(記)→しるす 前に記したイギリス流の大学を建設しようと目論見たのだそうだ。(総長就業と廃業 351)

○光普春琴恵照禪定尼、と、墓石の表面に法名を記し(春琴抄 135)

きずきあげる→つきあげる

きたいな(奇異)→きいな・ふしぎな 「しかし——奇異なことが有れば有るものだ。まあ、貴方の死んだ夢を見るなんて。」(破戒 156)

きたならしい→けがらわしい

きちがいじみる(狂気)→きょうきじみる 髯の延びた長い顎の、目の落窪んだ川西の顔が、お島の目には狂気じみて見えた。(あらくれ 186)

きちがいじみる(狂人染)→きょうじんじみる 見給へ、まあ其主義からして、もう狂人

染みてるぢやないか。はゝゝゝゝ。(破戒 270)

きびしい→いかつい・いかめしい・やかましい

きふせする→きうつする

きふせな(気鬱)→きうつな 結婚してからも、どうかすると、おゆふから離されて、房吉が気鬱な母親の側に寝かされたり、(あらくれ 95)

きまる(定)→さだまる あの時はね、私の心持も定つてゐませんでしたし……(伸子・上 108)

○金儲けをのみ考えている人には、一切の事業は「金になるか？」という質問(立場)によつてその価値が定まる、(哲学以前 83)

きめる(定)→さだめる 市九郎は、上人の言葉を聴いて、又更に懺悔の火に心を爛らせて当座に出家の志を定めた。(恩讐の彼方に 70)

きゃしゃな(繊細)→せんさいな 手足などの繊細なその体がお島感覚には、触るのが気味わるくも思へてゐたのであつたが、(あらくれ 121)

きゅうぎよする(休漁)→きゅうりょうする 日は晴れてゐたが、風のために全村は休漁したので、母は新治に頼み事をした。(潮騒 25)

きゅうりょうする→きゅうぎよする

きよい→いい

きよい(潔)→いさぎよい 「可<sup>ま</sup>ござんすとも。ゆつくり行つておいでなさいまし。」その男はさう言つて潔く引受けたが、胡散<sup>うさん</sup>な目をして笑つてゐた。(あらくれ 246)

きよい(皓)→しろい 行業は氷霜よりも皓く、(恩讐の彼方に 70)

きょうきじみる→きちがいじみる

きょうじんじみる→きちがいじみる

きょうす→もてなす

きよくせんする→カーブする

きらいな(嫌)→いやな 若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方ででしたけれども、其若い女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです。(こころ 232)

きらめく(煌)→かがやく あまりに明るいその空をときどき流れてくる雲切れは、白きを通り越してときどき淡紅色に美しく煌いてゐた。(冬の宿 41)

きりじにする(斬死)→ざんしする 白河口がやぶれて、奥羽同盟勢に援軍として出ている藩の御長柄奉行山中重次郎ほか四十三名が斬死した報せがついた時も、(落城 12~13)

きる→かぶる

きる(截)→たつ テーブルの上に鉄で截つたばかりの布地が描くうねつてゐる姿を美しい色の塊として鏡の中にも置いてゐた。(帰郷 170)

きる(断)→ことわる その大学を久しき以前に創設しなかつたのは、丁留を断ることを芳野氏が肯じなかつたのと平行する。(総長就業と廃業 348)

くいつぐ(喰継)→くいつなぐ 食糧は不足し、軍医と衛生兵は、患者のために受領した糧秣で喰ひ継いでゐたからである。(野火 6)

くいつなぐ→くいつぐ

くう→くらう

くうきよな→うつろな

くうな→うつろな

くぎる→かぎる・しきる

くしょうする→にがわらいする

くすぐる→そそる

くすぶる→いぶる

くすべる→くべる

くすむ→くろむ

くずれる(壊)→こわれる お島は氣持わるく壊れた髪を、束髪に結直して、(あらくれ 88)  
○根方の処の土が壊れて大鰻を捏ねたやうな根が幾筋ともなく露れ(高野聖 14)

くずれる→すたれる・なだれる

くだす(下)→おろす 岩壁に下す多数の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中から、洩れ始めた。(恩讐の彼方に 79)

くたびれる→くたぶれる

くたびれる(慥)→つかれる 門飾の笹竹が、がさがさと慥れた神経に刺さるやうな音を立て、(あらくれ 151)

くたぶれる(疲)→くたびれる・つかれる 茲に集る人々の多くは、日々の長い勤務と、多数の生徒の取扱とに疲れて、さして教育の事業に興味を感じるでもなかつた。(破戒 26)

くだりかける→おりかける

くだりきる→おりきる

くだりだす→おりだす

くだりはじめる→おりはじめる

くだる→おりる

くちおしい(口惜)→くやしい 菊池の家を潰した上に亦潰して、其で宜と思ふかい。口惜いとは思はんか。(思出の記・上 26)

くちづけする(接吻)→せつぶんする 海上の長旅を終つて、陸に上つた時の水夫の心地は、土に接吻する程の可憐しさを感じるとやら。(破戒 333)

くどい(煩)→うるさい・わずらわしい 其晩は割合に早く酔つて、次第に物の言ひ様も煩く、終には呂律も廻らないやうに成つて(破戒 68)

くねる(曲)→まがる その路はまっすぐではなくジグザグに曲り、目標をはっきり意識してではなく盲目的に近づいたのである。(原子物理学の発展とその方法 323)

- くべる(燻)→くすべる・ふすべる おつぎは漸く竈へ落葉を燻べて茶を沸した、みんな只ぼつさりとして茶を啜つた。(土・上 53)
- くぼむ(凹)→へこむ その眼の下にたゞ一つ、鈍く白い完全な円の中に、洞のやうに黒く凹んだまた完全な円。鋼鉄の円。銃口であつた。(野火 142)
- くもる(翳)→かげる 自在戸の上の半分は硝子になつてゐたから、その鏡の前に、人が立つてゐることだけは、湯気に翳つて朧げながら、あけない先から目にはいつてゐた。(多情仏心・前 310)
- くやしい→くちおしい
- くらう(食・喰)→くう 況んや昨日は榮華の滋味に飽いて今日粟飯の硬きを食ふ身となつては、(思出の記・上 12)
- 信之は、カアンと一つ、脳天に鉄槌を喰つた気持で、思ひもかけぬお澄の後姿に見入つて立ちつくした。(多情仏心・前 313)
- くらわす(食)→くわす どれだけ小者人夫に拳や頬打ちを食はしたかわからなかつた。(あにいもうと 139)
- くりかえす(反覆)→はんぶくする 極り切つた理窟も反覆して聞かせて居る うちには。(土・上 144)
- くるまる(包)→つつまる 夜になつて薄ッぺらい布団に包まつてから、家のことを思ひ出して、よく私達は泣きました。(蟹工船 111)
- くるむ(包)→つつむ 一年のうちで、七八の二月を其中に包まれて、穴に入つた蛇の様に凝としてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好い心持だつたのです。(こころ 164)
- くろむ(燻)→くすむ 褐色のペンキが燻み、ポーチには雨漏りさへしてゐた。(冬の宿 161)
- くわす→くらわす
- けがす(汚)→よごす たとい、あなたが自分で自分のからだを汚していても私はゆるして愛する気だとおっしゃってくださいのよ。(出家とその弟子 150)
- けがらわしい(穢)→きたならしい 私が今斯ういふことを告白しましたら、定めし皆さんは穢しいといふ感想を起すでせう。(破戒 311)
- けがれはてる(汚果)→よごれはてる 私は自分は汚れ果てていますが、純潔な人を尊敬します。(出家とその弟子 98)
- けがれる(汚)→よごれる 弱きものよ汝の名は女なり、しよせんは世に汚れた私でゐます。(放浪記 124)
- あなたのからだの汚れていることをあなたはひどく気にします。(出家とその弟子 130)
- げす(解)→かいす 顧みる母の眼色を、僕はよく解した。(思出の記・上 153)
- げせる→かいせる
- げだるい→だるい



けつまずく(蹶)→つまずく 曲者は既に遁げ落ちたけれど彼の不意の襲撃に慌てて節くれ立つた柿の根に蹶いて倒れた。(土・上 173)

けなげな(殊勝)→しゅしょうな 十年あまりの間、主人とすべて運命をともして来た殊勝な奴僕だ。(末枯 50~51)

けなしさる→おとしさる

けなす(非難)→ひなんする 私は不断紛々たる世間の批評以外に超然としてゐる面色を  
してゐて、実は非難されると、非常に腹が立つて、(平凡 108)

けぶったい→けむったい

けぶらす(煙)→けむらす 首の向きも直さず、濃く煙らして、炬炭の火を見詰めてゐた  
娘の瞳と睫毛とが、黒曜石のやうに結晶すると、(河明り 273)

けぶる→いぶる

けぶる(煙・烟)→けむる 道ぞひの流れの向ふに裾をひいてゐる山には濃い青嵐が煙つ  
てみえた。(あらくれ 251)

○灰色の水蒸気は低く集つて来て、僅かに離れた杜の梢も遠く深く煙るやうに見える。  
(破戒 141)

けむったい(煙)→けぶったい 「煙つてえのそつちへおん出さなくつちや仕やうねえや」  
風呂から出た儘拭ひもせぬ足に下駄を穿いて裸の臀を他人に向けて立つた一人が後を  
顧みていつた。(土・上 199)

けむらす→けぶらす

けむる→けぶる

けんこうな→たっしゃな

けんじつな→たしかな

けんしゅつする(牽出)→ひきだす 子宮口が開くまで待つて、骨盤位牽出を行なつて、  
肩胛部まで牽出した後に胎児の脳の実質を取り出すのである。(本日休診 89)

けんのんな(危険)→きけんな 一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は  
独りで極めてゐたから、危険で手が出せなかつたが、(平凡 131)

こうかつな→ずるい

こうきな→ものずきな

こうさいする→つきあいする

こうじゅくする→おうじゅくする

こうたいする→しりごみする

こうとうする→おじぎする

こうばしい→かんばしい

こうむる→かぶる

こえる→ふとる

こおどりする(雀躍)→じゃくやくする 仙太の手から打球板を奪ひ取らうとした少年な

ぞは、手を拍つて、雀躍して、喜んだ。(破戒 81)

こおる→いてる

こく(扱)→しごく 頭のあたりがむずむずして来た、平手で扱て見ると横撫に蛭の背をぬるぬるとすべるといふ、やあ、乳の下へ潜んで帯の間にも一疋、蒼くなつてソツと見ると肩の上にも一筋。(高野聖 24)

こくべつする→いとまごいする

ここみかける→かがみかける

ここみこむ→かがみこむ

ここむ(屈・踞)→かがむ 何喰はぬ顔をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈むでゐた雪江さんが、(平凡 81)

○待ちかねて、信之がボタンと押しあけはいらうとして、蹠むと、急に目の前がクラクラとした。(多情仏心・前 178)

ここむ→かがむ・しゃがむ

ここめる(曲・屈)→かがめる 庄馬鹿は腰を曲め乍ら、畳の上の賽銭を掻集めて歩いた。(破戒 220)

○お島は其の冠物の肩までかゝつた丸い脊を屈めて、(あらくれ 231)

こさえる(拵・製)→こしらえる 「これでもつて海軍将棋を拵へようといふんです。」(あらくれ 193)

○彼女は筍飯を製へて、飢へて倒れんとする僕等に供するのである。(思出の記・上 79)

こじする→ひけらかす

こしらえる→こさえる

こすりつける(擦)→すりつける 年をとつた、病身な犬は、甘えるやうに、鈴むらさんの膝のそばへ来て体を擦りつけた。(末枯 50)

こすりつける→なすりつける

こする→さする

こたこたする(混雑)→こんざつする お寺から坊さんが来る、其晩はお通夜で、翌日は葬式と、何だか家内が混雑するのに、(平凡 19)

こたわる(拘)→かかわる 人もあらうに窪井の妾だつたことを、今日が日まで秘し隠しかくされてゐたと云ふ表面の事実には、どうしても拘らずにゐられない気持も慥かにあつた。(多情仏心・前 198)

こつしよな→おろそかな

こつぶな(矮小)→わいしょうな 彼の体軀は寧ろ矮小であるが、其きりつと緊つた筋肉が段々仕事を上手にした。(土・上 66)

ことなる(異)→ちがう その袖が日本流のものと異つて、細長い袋になって、左右にぶらさがっている。(総長就業と廃業 352)

ことわる(謝)→あやまる 「何、舌を見せた、何某、誰某は医者じやないぞ、舌を見せ

ると云ふことがあるか、謝りなさい」(思出の記・上 66)

ことわる→きる

こなす→しょうかする

こぼれおちる→あふれおちる

こぼれかける→あふれかける

こぼれる→あふれる

こまかい(細)→ほそい 傘なしの彼に細い雨が降っている。(むらぎも 249)

こまかな(細)→ささやかな 細かな苔に蒼んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んできたか、桜の花弁の、三つ、六つ七つ、散り敷いてゐるのは、(多情仏心・前 354)

こやみない→おやみない

こらええる(耐得)→たええる 大人には耐え得ないことまでも、子供は耐えてゆくのだ。(人間の壁・上 212)

こらえかねる(耐兼)→たえかねる 私の顔を見て旅僧は耐へ兼ねたものと見える、吃吃と笑ひ出した、(高野聖 7)

こらえきれぬ(耐切)→たえきれぬ 頭痛持は血が上るほど耐へ切れないのが、例の下を向いて悠々と小取廻しに通抜ける旅僧は、誰も袖を曳かなかつたから、幸ひ其後に踞いて町へ入って、(高野聖 9)

こらえる(堪・耐)→たえる 明子は堪えていたが、とうとうほろほろと涙をこぼしていった。(くれない 87)

○叫ぶ子供。顔をしかめて耐えている子供。(人間の壁・上 272)

ごろごろする(輾転)→てんでんする うとうとと熟睡することも出来ないで輾転して長い夜を漸く明した。(土・上 29)

こわい(恐)→おそろしい さう考へると、夫人の動作が何となく蠱惑的に見えて、彼は急に恐くなった。(波 355)

こわい→おそろしい・おっかない

こわい(硬)→かたい 被害者は到頭隠匿した簡処を発見して巡査を導いた。雑木林の繁茂した間の、もう硬く成つた草の中へ蜀黍の穂は縛つた儘どさりと置いてあつたのである。(土・上 140)

こわい(粗剛)→そごうな 若白髪のみじつた粗剛さうな毛を、分けたとも掻き上げたともつかずモシヤクシヤさせ、(多情仏心・前 26)

こわい(剛)→つよい 「情の剛い奴ぢやな。」声はおこつて叱るやうであつたが、忠利は此詞と俱に二度頷いた。(阿部一族 32)

こわれる→くずれる

こんざつする→ごたごたする

さいわいな(幸)→しあわせな これによつて「哲学とは何か」の問いに答うべき伏線が敷かれるならば、幸である。(哲学以前 24)

さいしきする→いろどりする

さかさな(倒)→さかさまな・さかしまな 一枚に一句位づゝの割で倒に読んで行つた。  
(こころ 146)

さかさまな→さかさな・さかしまな

さかしい→かしこい

さかしまな(逆)→さかさまな 何時の間にか東の空暗くなり、やがて風颯々として逆に吹  
き来り、(思出の記・上 175)

さかしまな→さかさな・さかさまな

さからう→あらがう・はむかう

さがる→すする

さける→よける

さげる→ひっさげる

さざめきあう→ささやきあう

さざめく(私語)→ささやく 「おつぎは居るよおめえ、さういに見ねえでも」柱の陰か  
らいつて私語いた。(土・上 208)

ささやかな→こまかな

ささやきあう(私語)→さざめきあう 「洋行がへりの洋服屋だとさ。」学生たちは口々に  
私語きあつた。(あらくれ 229)

ささやく→さざめく・つぶやく

さしめす(指示)→しじする 君江は薄地の肩掛を取つて手に持つたまゝ、指示された  
椅子に腰をかけると、(つゆのあとさき 6)

さしずる(指揮)→しきする 時計のやうに正確に——これが座右の銘でもあり、生徒  
に説いて聞かせる教訓でもあり、また職員一同を指揮する時の精神でもある。(破戒  
18)

さしはさむ(挿・挾)→はさむ 「彼意地悪がよく告訴を取り下げた」「其には知事さん初  
諸君が色々骨を折つて下すつたのでございます」伯母は語を挿む。(思出の記・上  
140)

○「何も云わないで借りて下さい、僕はあげてもいいんですが、貴女がこだわると困  
るから。」そう云って、塵紙にこまかく包んだ金を松田さんは私の帯の間に挟んでく  
れている。(放浪記 42)

さす(指)→ゆびさす 私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼は云  
ひたがるのを、(こころ 15)

さす(照)→てらす 十一月上旬の日の光は淋しく照して、この西乃入牧場に一層荒寥  
とした風趣を添へる。(破戒 112)

さすらう(彷徨)→さまよう 雨の山野を彷徨ひながら、私が「生きる」と主張出来たの  
は、その二合ばかりの塩を、注意深く節しながら、嘗めて来たからである。(野火 127)

さする(擦)→こする・する 軽い<sup>いた</sup>疹みのある所をそつと平手で擦りながら、船がシャトルの波止場に着く時の有様を想像して見た。(或る女・上 190)

さそう→いざなう

さだまる→きまる

さだめる→きめる

さとい→みみざとい

さびしい(淋)→さみしい 冷飯に味噌汁をザクザクかけてかき込む<sup>き</sup>淋しい夜食です。  
(放浪記 43)

～さびしい(淋・寂)→～さみしい うら淋しく秋風の吹きわたる その小さな港町の棧橋に、(或る女・前 143)

○おく<sup>く</sup>みには、さつきはじめておかみさんから聞いた青木さんのお家<sup>うち</sup>の事情が、自分の事のやうにうら寂しく心に繰り返されてゐた。(桑の実 60)

○障子の縁に立てた懷鏡の蓋の赤い布<sup>ぬい</sup>がかうした沈んだ心持を色づけるたつた一つの赤い色のやうに小淋しい。(桑の実 154)

○そのやうな事が、この頃のたつた一つの物嬉しさである自分が、考へればいつまでも頼りない身の上のやうに小寂しくもある。(桑の実 94)

○糊<sup>のり</sup>気のぬけ切つた単衣<sup>ひとへ</sup>も物淋しかつた。(或る女・前 57)

さびれはてる→あれはてる

さびれる(荒)→ある 町幅のだゞつ広い単調で粗<sup>が</sup>雑<sup>ざつ</sup>な長い大通りは、どこを見向いても陰鬱<sup>ひんうつ</sup>に閑寂<sup>かんじやく</sup>してゐたが、その癖寒い冬の夕暮のあわたしい物音が、荒れた町の底に淀んでゐた。(あらくれ 165)

さまざま(種々)→いろいろな・しゅじゅな 茅<sup>ち</sup>芽<sup>が</sup>、野菊、其他種々<sup>さまざま</sup>な雑草が霜葉を垂れる畦道を憶出した。(破戒 55)

さまよう→さすらう

さみしい→さびしい

～さみしい(物寂)→～さびしい 丑松は素知らぬ顔、<sup>そと</sup>屋外の方へ向いて物寂しい曇<sup>ものすみ</sup>の空を眺めて居たが、(破戒 168)

さもしい(陋・卑)→いやしい 品性が、陋しく浅猿<sup>あさま</sup>しいものゝやうに思へた。(あらくれ 193)

○卑<sup>さも</sup>しい事を言ふやうだが、其日の弁当の菜は母の手製の饅頭でんぶで、(平凡 38)

さらけだす(暴露)→ばくろする 僕なぞはもうずんずん暴露<sup>さらけだ</sup>して、蔵<sup>くら</sup>つて置くといふことは出来ないがなあ。(破戒 269)

さわぎだす→はしゃぎだす

さわぐ→はしゃぐ

さんしする→きりじにする

さんしゅつする→うみだす

しあわせな→さいわいな

しいする(思惟)→しゆいする 我々は現実の非合理性を極めて深刻なものと思惟すべき理由を持つ。(人格主義 39)

しいる(盲)→めしいる 春琴の顔のありかと思はれる灰白い円光の射して来る方へ盲ひた眼を向けると(春琴抄 201)

しおれる→うなだれる

しおれる(凋)→かれる この前の水仙の花はもう凋れてしまつてゐたのだ。(冬の宿 46)

しかたない(詮方)→せんかたない 最早斯様なつては詮方なし、乞食しても前進する外は無い。(思出の記・上 178)

しかむ(蹙)→しじむ・ちぢむ 顔が妙に蹙んで口が無理に横へ引き吊られるやうに見える。(土・上 48)

しかめる(皺)→しわめる 日頃新平民と言へば、直に顔を皺めるやうな手合にすら、(破戒 296)

しかめる(皺)→ひそめる 葉子は熱病患者のやうに濁り切つた頭をもてあまして、車に揺られる度毎に眉を痛々しく皺めながら、(或る女・前 62)

しきする→さしずする

しきる(劃)→かぎる・くぎる お品は其小径と林との境界を劃つて居る牛胡頰子の側に立た。(土・上 16)

しごく→こく

しさる→さがる

しじする→さししめす

しじまる(蹙)→すくまる・ちぢまる・ちぢまる 遂騙されて蒲公英がまだ遠い春を遅緩しげに首を出して見ては、また寒く成つたのに驚いて蹙まつたやうな姿である。(土・上 101)

しじむ→しかむ

しじめる(蹙)→すくめる・ちぢめる 彼は古い菅笠を一寸頭へ翳して首を蹙めて行つた。(土・上 107)

しじめる→せばめる・ちぢめる

しせいする→いれずみする

したくする(準備)→じゅんびする 実は彼の演説をするために、昨夜一晚かゝつて準備しましたよ。(破戒 75)

したしい→ちかしい

したたらす(滴)→たらす 水に滴らした石油よりも一層早く、灰の上一面をばつと真青に拡がつた！(田園の憂鬱 115)

むつこい(執念・執拗)→しゅうねし 首筋の皮が擦り剥けて戸口に血の跡を印しても執念く餌料を求めて止まぬやうな形でなければならぬ。(土・上 171)

○云ひ出した以上、もう執拗く主張して訊き入れなかつた。(河明り 288)

しとる(湿)→しめる じめじめと降り続く秋雨に湿つた夜風が細々と通つて来て、(或る女・前 40)

しばたたく(瞬)→またたく・まばたく お位牌に対しても済まぬから、己は始終其が苦になつての……と眼を瞬かれた時には、私も妙な心持がした。(平凡 129)

じほうじきな→やけな

しみだす(滲出)→にじみだす 芋はとづくに尽きてゐたので、私は道々雑糞を透して滲み出す、その鹹い水だけを嘗めて来たのである。(野火 109)

しみだらけな(汚点)→おてんだらけな 座布団も色のさめたメリンスの汚点だらけになつたのが一枚、(つゆのあとさき 34)

しみでる(滲出)→にじみでる 頭髮は分解する組織から滲み出た液体のため、膠で固めたやうに皮膚にへばりつき、(野火 78)

しめきる→たてきる

しめす→うるおす・ぬらす

しめらす→ぬらす

しめる→しとる

しゃがむ(踞・蹲)→かがむ・こごむ 立つたり、しゃがみだり、腕まくりして肩を怒らしたり、(思出の記・上 81)

○何度も転げながらあの広場のところまできて、気が遠くなりさうになつてしゃがんでゐたといふのだつた。(冬の宿 76)

しゃがれる→かれる

しゃがれる(皸枯・皸喫)→しわがれる たしかに其は父の声で——しゃがれた中にも威厳のある父の声で、(破戒 85)

○羽の運動が鈍く成つて居るのか春のやうではなく低く徘徊うてしゃがれた喉を鳴らして居る。(土・上 134)

しゃくう(掬)→すくう 「あめんぼうをしゃくうか」(多情仏心・前 12)

しゃくしゃくする→ゆったりする

じゃくやくする→こおどりする

じゃっきする(惹起)→ひきおこす 一般に体系の状態に不連続的であつ 予め推知し得ない変化が惹起されること(物質世界の客観性について 275)

しゆいする→しいうする

しゅうじゃくする(執著)→しゅうちゃくする 個人が徒らにその生に執著せずに(人格主義 144)

しゅうちゃくする→しいうじゃくする

しゅうねし→しつこい

しゅじゅな→さまざまな

しゅしょうな→けなげな

しゅつにゆうしえる(出入)→でいりしえる 人間の自由というはかく種々の立場に出入し得る程度の如何によって決せられると言えよう。(哲学以前 75)

しゅんじゅんする→あとずさりする・もじもじする

じゅんびする→したくする・よいする

しょう→おぶう

しょう(背負・脊負)→せおう やせ細った身体に、大きな荷箱を一反<sup>たん</sup>ブロンキで背負い、(旧石器の狩人 305)

○子<sup>こ</sup>負<sup>お</sup>虫<sup>むし</sup>のやうに、彼は一生、その子を脊中に脊負つてゐなくつてはならない運命のもとにあつた。(波 310)

しょうかする(消化)→こなす 洋装が不自然でなくいたに付きスタイルブックや外国人の模倣の域を出て落着いたものに消化して了つたやうに見える高野左衛子のやうな女性<sup>め</sup>が、(棉郷 175)

しょうこうする(消耗)→しょうもうする 間断なく消耗して行く肉体の欠損を補給するために(土・上 60)

じゅする(誦)→しょうする・ずす それだけのことが終ると天守閣はじめ要所要所に火を放ち、最後に死屍の上につんだ雨戸、障子に火をかけて般若経を誦した。(落城 50)

しょうす→あかす

しょうする→あかしする

しょうする→じゅする

じょうぜつな→じょうぜつな

しょうそうする→いらいらする・やきもきする

しょうまする→すりへらす

しょうもうする→しょうこうする

しょじょらしい→おぼこらしい

しらむ(白)→しろむ 春らしい夕靄が河原を明るく白ませ、(多情仏心・前 299)

しりこみする(後退)→こうたいする 俊一の鼻を掴んでいぢくつて、彼れが後退すると抱きかゝへて頬つべたをおつつけた。(生まざりしならば 209)

しりぞく(退)→どく・のく・ひく ゴリラの襲撃を防ぐ唯一の方法は、断じて一歩も退かないということである。(高崎山 49)

○平井が、社会運動の方へまっすぐ飛びこんで行くという方向から一歩わきへ退いて、(むらぎも 80)

しりぞく(退)→ひく 戦争責任を感じて、自から職を退き、(自由学校 37)

しるす→きす

じれじれする→いらいらする

しろい→きよい



しろむ→しらむ

しわがれる→かれる・しゃがれる

しわめる→しかめる

しんげんな→おごそかな

しんしな→まじめな

すい(酸)→すっぱい 伸子はエプロンの紐を解きながら、酸いやうな笑ひで口元を歪めた。(伸子・上 175)

すいかんらしい(醉漢)→よっぱらいらしい 奥の間の廊下まで来ると、俄かに滝十郎は酔漢らしいつくり声をあげて、(多情仏心・前 84)

すいな→いきな

すかず(透)→とおす 或る時には擦ガラスを透して見るやうにはのかであつた。(田園の憂鬱 63)

○外の闇を透して騒がしい群集を見て居る。(土・上 190)

すがれる(末枯)→うらがれる 生気を失つて末枯れた顔や肉体をしてゐるやうな女を、(生まざりしならば 196)

すきかかる(空)→あきかかる 職人たちの手がしばらく空きかゝつたところで、(あらくれ 184)

すく(空)→あく 手の空いた漁夫や雑夫や船員が、デッキの手すりに寄つて、見とれながら、(蟹工船 79)

すく(梳)→とく それを梳かうとすると、冷りとしとつた生えるがままの毛髪は、堅く櫛に絡んで、(田園の憂鬱 49)

すくう→しゃくう

すくない→わかい

すくまる→しじまる

すくめる→しじめる・ちぢめる

すくまる(縮)→ちぢかまる・ちぢまる おつぎは両手で鼻を抑へて縮まつた。(土・上 192)

すくめる(縮)→ちぢめる 是方へやつて来る人影を認めた時は、丑松はもう身を縮めて、危険の近いたことを思はずには居られなかつたのである。(破戒 290)

すくめる(潜)→ひそめる 寒さの為に身を潜め乍ら目を瞑つて居る 鶏もあつた。(破戒 236)

すげない(素気)→そっけない 相変らず寡黙ではあつたが、そのため傲慢にも見えなければ、素気なくもなかつた。(真知子・前 132)

すげない(情)→つれない 何を言はれても、さう情なく振切つてしまふわけにも行かない(つゆのあとさき 18)

すける(助)→たすける この二三年商売の方を助けなどするために、(あらくれ 32)

すさる(退)→さがる・しさる・すざる <sup>わし ひとあしす</sup>私は一足退つたが、(高野聖 29)

すざる→すする

すす→しょうする

すすぐ(雪)→そそぐ 自分は雪ぐことの出来ぬ汚れを身に受けた。(阿部一族 67)

すたれる(頹)→くずれる 心のよりどころを失つて頹れてゆく一方のパイロンを精神的に救ふのは自分のほかはない、(冬の宿 124)

すっぱい→すい

すばしこい(敏捷)→びんしょうな 夫人はその時人の眼にはつきかねるほどの<sup>すばしこ</sup>敏捷さで葉子の方を窺つた。(或る女・上 112)

すりあげる(擦上)→ずりあげる おくみは坊ちやんを擦り上げながら頼んだ。(桑の実 88)

ずりあげる→すりあげる

すりつける→こすりつける・なすりつける

すりへらす(銷磨)→しょうまする 持つて生れた自然の性質を<sup>すりへら</sup>銷磨して居たのだ。(破戒 295)

する→さする

する(剃)→そる ちよつと顔を剃つてみましたので遅刻しました(群像 1956年3月 5)

ずるい(狡猾)→こうかつな <sup>ずる</sup>狡猾さうな笑ひを唇に漂はせて、(多情仏心・前 150)

せいきゅうな→せっかちな

せいじゃくな→ひよわな

せいせいする(晴々)→はれはれする 私は松さんが落ちついて、運転台で煙草を吸っていた事を考えると、やっぱり厭な男に思え、ああよかったと晴々するなり。(放浪記 84)

せおう→おぶう・しょう

せっかちな(性急)→せいきゅうな 極端な実利主義が、あの、年寄らしく<sup>せつめい</sup>性急な眉間の八の字と一緒に、まざまざと信之のあたまに思ひ浮べられた。(多情仏心・前 345)

せっぶんする→くちづけする

せつめいする→ときあかす

せばめる(蹙)→しじめる・ちぢめる 川幅は僅に半分に蹙められて見える。(土・上 148)

せびる(強請)→ねだる・ゆする <sup>たね</sup>種子が尽きて来ると、矢張女のところへ<sup>せび</sup>強請りに行くより外なかつた。(あらくれ 115)

せりくだる(迫下)→せりさがる 目の前に迫つて来るかと思ふと、<sup>せ</sup>迫り下つて、渦巻いてゐる底知れぬ淵を見せるのである。(潮騒 145)

せりさがる→せりくだる

せわしい(忙)→いそがしい <sup>さすが</sup>流石弁護士は<sup>せは</sup>忙しい<sup>がら</sup>商売柄、一緒に門を出ようと為るところを客に捕つて、(破戒 153~154)

せんかたない→しかたない

せんさいな→きやしな

そうきする→おもいおこす

そうぐうする→でくわす

そうけんな→たっしゃな

そうごんな→おごそかな

そうする→かくす

そこうな→こわい

そぎつな→がさつな

そぞうな→そまつな

そそぎこむ(注込)→つぎこむ これから一年のあいだ自分の努力と情熱とを注ぎこんで行かなくてはならない(人間の壁・上 83)

そそぐ→すすぐ

そそぐ(注)→つぐ 瓶ごと持出したマルテル・ブランデーを、氷の破片を入れたグラスに注いで、(帰郷 48)

そそる(衝動)→くすぐる・ゆすぶる 花粉の臭ひが更に心の或物を衝動る畑の間に行くとは、(土・上 195)

そっけない→すげない

そとでする(外出)→がいしゅつする ではなぜうそを言って外出あそぶのですか。

(出家とその弟子 167)

そねむ(嫉)→ねたむ 利を好み人を嫉むこと、漢人と胡人と何れか甚しき? (李陵 190)

そまつな(沮造)→そぞうな 番小屋は高原の東の隅に在つて、沮造な柵の内には末だ角の無い犢も幾頭か飼つてあつた。(破戒 113)

～そめる(初)→～はじめる 間もなく入梅があけて夏になり、土用の半からそろそろ秋風の立ち初める頃まで、(つゆのあとさき 39)

○勝造爺が彼事を僕に話した其日の午後、僕は一葉散り初めた桜の下に秋蟬の音を浴びながら本を読むで居た。(思出の記・上 133)

そらいな→なげやりな

そりつな→ぞんざいな

そる→する

それる(外)→はずれる 道が草原に露出してゐるところでは、列は道を外れて林に潜り、先でまた林に入つて来る道を捉へた。(野火 96)

ぞんざいな(粗率)→そりつな 朋輩にでも言ふやうに、粗率に言置いて行つて了つた。(平凡 69)

たいきやくする→あとずさりする

たいらかな→なだらかな

たええる→こらええる

たえかねる→こらえかねる

たえきれる→こらえきれる

たえる(堪・耐)→こらえる 大きなおなかを抱へて、苦しいのを堪へて、(伸子・上 142)

○人間はなぜ又この淋しさを耐へなければならぬのだらう。(友情 120)

たがう(違)→ちがう 何でも文部省の法規に定められたとおりにやらないと、狭み込んだ形が寸毫も違えば、直にお目玉を頂戴する。(総長就業と廃業 358)

たかる(集)→あつまる 小さい虫が沢山灯に集つて来る。(桑の実 131)

たきしめる→いだきしめる

たく→やく 不要物を焚く必要から上がる煙であるか、それとも遠方の共謀者と信号する煙であるかを、煙の形から見分けるといふ困難な任務が、歩哨に課せられてゐた。(野火 17)

たく→いただく

たくす(托)→まかす 老婆の如きは、よく此所を呑み込むで、主人の物を大事と経節のひとへど一片も無駄にせぬので、大に主人の信用を博して、留守も安心して托されると云ふ位。(思出の記・上 188)

たぐる(手探)→てさぐる 彼は右方の岩壁を手探り手探り奥へ奥へと進んだ。(思讐の彼方に 89)

たしかな(確実)→かくじつな 教育のある、確実な青年を一人世話して呉れ、(破戒 329)

たしかな(堅実)→けんじつな 次第に丑松は斯人の堅実な、引締つた、どうやら底の知れないところもある性質を感じ得くやうに成つた。(破戒 334)

だしぬけな(唐突)→とうとつな 此の唐突な発言で暫く静止して居た彼等は俄に威勢が出て拍手した。(土・上 180)

○余り唐突なので、窪井も信之も、気持のあるところを汲みかねて、黙つてゐると、(多情仏心・前 333)

だしぬけな(突然)→とつぜんな 気掛りな下宿の主婦の思惑で——まあ、この突然な転宿を何と思つて見て居るだらう。(破戒 30)

だす→いだす

たすける→すける

たちまじる(立交)→たちまじわる 彼等と立ち交つてゐる場合、常に感じさせられた不快な孤独の代りに、淡い、ぼんやりした悦びが、彼女の心をこれまでになく暢やかにした。(真知子・前 134)

たちまじわる(立交)→たちまじる 縛首にせられたものゝ一族が、何の面目あつて、傍輩に立ち交つて御奉公をしよう。(阿部一族 59)

たつ(断)→きる 遠くさかのぼれば、昔戀可大師は半臂を断つて法を求め、雲門和尚はまた半脚を折つて悟に入った。(貧乏物語 39)

たっしやな(健康)→けんこうな 病が病だから、蓮太郎の方では遠慮する気味で、其様

なことと迷惑を掛けたく無い、と健康なもの知らない心配は絶えず様子は表はれる。  
(破戒 131)

たっしやな(壮健)→そうけんな 彼様いふ風に平素壮健な人は、反つて病氣なぞに罹る。  
と弱いのかも知れませんよ。(破戒 94)

たっとい(貴)→とうとい 私は其時伯父に連れられて久振で帰省したが、父の面を見る  
より、心配を掛けた詫をする所か、卒然先づ文学の貴い所以を説いて聴かせて、(平凡  
128~129)

たつとぶ(貴)→とうとぶ 今まで古風を貴ぶひとだったのが、感覚的にかなり新味をく  
わえていた。(婦人倶楽部 1969年4月 35)

たてきる(閉)→しめきる 雪の深い冬の間、閉きつてあつたやうな、その新建の二階の  
板戸を開けると、(あらくれ 124)

たのしい(怡)→よろこばしい それでも尚世にながらへて此の仕事に従ふといふ事は、  
どう考へても怡しい訳はなかつた。(李陵 179)

たばねる→つかねる

たまる(留)→とどまる 滴のやうに留つた涙の一つが、静かに解けるのをちつと眺めて  
ゐる間に、(波 329)

たまる→なる

たもつ(保)→もつ 一年間は保っている一本の口紅だが、(くれない 128)

たやすい(易)→やすい これが、これまでに信之が、女に与へた約束の言葉のうちで、  
最も尊いものとして、自ら「金鵝勲章」と称へ、易くは許さないことにしてゐるもの  
だつた。(多情仏心・前 297)

たらず→したたらず

だるい(懈)→けだるい・ものうい ばけつをがらがらいはせて、働いてゐるお島の姿を  
見ると、それでも女は、懈さうな声をかけて、(あらくれ 182)

だるい→ものうい

たんこうな(淡紅)→うすあかな・うすくれないな 臂かすよりはむしろ唆かすやうに八  
の字を寄せるその狭い額、その淡紅な薄い唇、(青銅の基督 35)

ちがう→ことなる・たがう

ちかしい(親)→したしい 御互ひに長く顔は見合せて居ても、斯うして親しくするのは  
昨今だ。(破戒 34)

ちちかまる→しじまる・すくまる

ちちまる→しじまる・すくまる

ちちむ→しかむ

ちちめる(甞)→しじめる・すくめる すくみといふのは甞めた儘の形が保たれるやうに  
死体の下から荒縄を廻して置いて首筋の処でぎつしりと括ることである。(土・上 56)

ちちめる→しじめる・すくめる・せばめる

ちちゅうする→もじもじする

ちゃっけんする→つけけんする

ちょうめいする→ながいきする

ついはむ→つむ

つかかする→とおりこす

つかねる(束)→たばねる 熨斗餅が隅の方におかれたり、牛蒡締や輪飾が束ねられてあったりした。(あらくれ 152)

つかまえる(掴・捉・把・捕)→とらえる 外の足音ばかり掴えようとし、神経を澄していた。(くれない 126)

○賛にも、捉えられたらお慰みと書いてあるから、川のなかの鯨を瓢箪で捉えようとしているらしいが、瓢箪の酒を、鯨に飲ませようとしている風にも見える。(私の人生観 70)

○生きて流れてゐるものを、把へることは出来なかつた。(帰郷 244)

○其時、誰か斯う背後から追迫つて来て、自分を捕へようとして、(破戒 205)

つかまえる→つらまえる

つかむ→つまむ

つかる(浸・漬)→ひたる 毎晩風呂に浸って豚のような蛙の唸り声を聞いていてもったいなくて仕方がない。(私の人生観 49)

○真と善と美と聖との追求に漬ることによつて、(人格主義 112)

つかれる→くたびれる・くたぶれる

つきあいする(交際)→こうさいする 「そんな奴等と交際した日にや限はねえが、隅の方にちぢまつてりや何ともゆはねえな」(土・上 33)

つきあげる(築上)→きずきあげる 四方は小高く石垣を築き上げて、上には平石の間々に小石を敷つめ、(思出の記・上 24~25)

つきあわせる(綴合)→つなぎあわせる これら諸科学の見るところを綴ぎ合わせれば(哲学以前 131)

つきかえす(突返)→つつかえす 何だ彼だといつて、品物を突返さうとする役員をよく丸め込んだ。(あらくれ 144)

つきこむ→そそぎこむ

つく→はく

つく→そそぐ

つくろう(装)→よそおう 何気ない様子を装つて、(破戒 182)

つけけんする(着剣)→ちゃっけんする その次の汽艇からも、やつぱり銃の先きに、着剣した、顎紐をかけた水兵！(蟹工船 115)

つたう(伝)→つたわる 真知子はその時遠い奥の部屋から伝つて来る鼓の音を聞きつけた。(真知子・前 116)

つたない(拙)→まずい どこでも拙い話を熱心に聞いてもらって、ありがたいことだと思っているが、講演というものは何度やっても嫌なものである。(私の人生観 17)

○ノートの紙を切り取って、それに拙い鉛筆の文字が書きつらねてあった。(人間の壁・上 142)

つたわる→つたう

つかえす(突返)→つきかえす 鶴さんは欺かれたものとばかり思込んで、お島を突返さうと決心した。(あらくれ 76)

つつく(啄)←つつつく 白い羽の鶏が五六羽、がりがりと爪で土を搔つ掃いては嘴でそこを啄いて(土・上 16)

つつつく→つつく

つつまる→くるまる

つつむ→くるむ

つなぎあわせる→つぎあわせる

つのだたしい→かどだたしい

つのだつ→かどだつ

つぶやく(囁)→ささやく 絃に触れて囁くやうに動揺する波の音、(破戒 171)

つぶる(瞑・閉)→つむる 丑松は北の間の柱に倚凭り乍ら、目を瞑り、(破戒 212)

○睫毛の長い目を閉つてゐられる坊ちやんの寝顔を見守つた。(桑の実 31)

つぶる→つむる・ねむる

つまずく(蹶)→けつまずく 処々誰かが道芝の葉を縛り合せて置いたので、おつぎは幾度かそれへ爪先を引つ掛けて蹶いた。(土・上 148)

○勘次は慌てて草履の爪先が蹶きつつおつぎの後に踉いた。(土・上 194)

つまむ(撮)→つかむ 領元を撮まれて、高い高い処からドサリと落された。(平凡 28)

つまる→ふさがる

つむ(啄)→ついばむ 追ふものが無ければ鶏も遠慮なく、垣根の傍に花を啄むもあり、(破戒 115)

つむる(瞑)→つぶる 空の一方を仰いでから、堅く眼を瞑つて、(冬の宿 199)

つむる→つぶる・ねむる

つややかな→あでやかな

つよい→こわい

つらい→からい

つらまえる(捕・攫)→つかまえる・とらまえる 私は黙つて機会を窺つてゐました。しかし二日経つても三日経つても、私はそれを捕まへる事が出来ません。(こころ 257)

○私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まへた積で得意だつたのです。(こころ 256~257)

つれない→すげない

つれない(冷淡)→れいたんな 省吾の方には優しくしても、お志保に対する素振を見る  
と寧ろ<sup>いっ つれない</sup>冷淡としか受取れなかつたのである。(破戒 214)

ていたい→てひどい

ていりしえる→しゅつにゅうしえる

ていりする(出入)→ではいりする もとの客間にあたる右手のホールの隅に酒場が出来  
てゐてパーティンの出入りする狭い戸口があつたのを(婦郷 54)

でいる(出入)→ではいる 彼は其当時お品の家へは鄰づかりといふので能く出入つた。  
(土・上 66)

てさぐる→たぐる

てつくわす(遭遇)→そうぐうする ホラ、僕が散歩していると、丁度本町で君に遭遇した  
らう。(破戒 44)

ではいりする(出入)→ではいりする 今の良人が取引上のことで、ちよくちよく其処へ  
出入りしてゐるうちに、(あらくれ 21)

ではいる→でいる

てばしこい(手捷)→てばやい 手捷<sup>てばしこ</sup>其<sup>それ</sup>を机の下へ押込んで見たが、(破戒 181)

てばやい→てばしこい

てひどい(手痛)→ていたい 奥さんの言葉は少し手痛<sup>てひど</sup>かつた。(こころ 46)

てらしあわせる→てりあわせる

てらす→さす

てりあわせる(照合)→てらしあわせる お島をおくことの危険なことが、今夜の事実と  
照合<sup>てりあは</sup>せて、一層明白<sup>はつきり</sup>して来るやうに思へた父親は、(あらくれ 63)

でる→いでる

てんてんする→ごろごろする

とう(訪)→おとなう 其家を訪<sup>み</sup>ふ者は、門の岩畳<sup>からたち</sup>にして、家を繞る枳殻の生垣の隙間も  
なく尖鍼を立てゝ寄れや刺んと身構へて居る勢を見て先づ一驚を喫するであらふ。  
(思出の記・上 191)

とうとい(尊)→たっとい 私はあなたの苦しみを尊<sup>とう</sup>いと思います。(出家とその弟子 49)

とうとつな→だしぬけな

とうとぶ(尊・尚)→たっとぶ あの男に身を任せて居た位なら、何も其の処女の節操を  
尊<sup>とう</sup>ぶには当らなかつた。(蒲団 72)

○そのほうが古い習慣を尚<sup>とうと</sup>ぶ彼女の母にもいい事だし、(暗夜行路・前 68)

とおす→すかす

とおぼしりする→とっぱしりする

とおりこす(通過)→つうかする さまざまな境遇を通過<sup>とほうこ</sup>して、復た逢ふ迄の長い別離<sup>わかれ</sup>を  
告げる為に、(破戒 334)

とおる→かよう



ときあかす(説明)→せつめいする 其を読者の前に突着けて、右からも左からも説明して、呑込めないと思ふことは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないといふ遣方であつた。(破戒 14)

ときかける(解)→ほどきかける 一重羽織の紐を解きかけた。(つゆのあとさき 31)

ときにくい(解)→ほどきにくい 風に吹きとばされぬやうに、身を伏せて、体の綱を解いた。濡れてゐる結び目は解きにくかつた。(潮騒 146)

とく→すく

とく→ほどく

どく→しりぞく・のく

どくげんする→ひとりごとする

どくごする→ひとりごとする

とける→とろける

とつくむ(取組)→とりくむ 彼の金儲け術が、上達してくると共に、金使いの方も、年に似合わぬ抜目なさを見せてきたのは、やはり、金と取組んで一生を送る男の天性だったのだろうか。(週刊朝日 1956年8月5日 57)

とつぜん→だしぬけ

とつぱしりする(遠走)→とおぱしりする 「オジサマ、今日は、箱根へでも、遠走してみない？」(自由学校 326)

とどまる→たまる

とどまる(停・駐)→とまる 汽車は幾度となく高原地の静かなステーションに停まつた。(あらくれ 248)

○東京が近づくにつれて、汽車の駐まる駅々に、お島は自分の生命を縮められるやうな苦しさを感じた。(あらくれ 135)

とどめる(止)→とめる・やめる 恭吾を見かけて扇子を動かすのを止めて、会釈を送つて来た。(帰郷 66)

とびさがる(飛退)→とびしがる・とびしざる・とびすさる・とびすざる 加治馬は、これまで斬り結んでいた敵に、一際大きく踏みこんで、ビュー！ と斬りこんだ。相手は首を振つて飛び退つた。(オール読物 1956年10月 280)

とびしがる→とびさがる

とびしざる→とびさがる

とびすさる→とびさがる

とびすざる→とびさがる

とびだす(隆起)→りゅうきする ——いよいよ高く隆起した其頬の骨——(破戒 99)

とびまわる(飛廻)→とびめぐる 船の周りを水に近く長閑に飛び廻るのを見るのも、(或る女 185)

とびめぐる→とびまわる

とぶらう→とむらう

とぼける(呆)→ぼける 漁夫はあてのない視線を白ペンキが黄色に煤けた天井にやつたり、殆んど海の中に入りッ切りになつてゐる青黒い円窓にやつたり……中には、呆けたやうにキョトンと口を半開きにしてゐるものもゐた。(蟹工船 22)

とぼける(滑稽)→おどける 無邪気な人懐こい犬で、滑稽な面をして他愛のない事ばかりして遊んでゐる。(平凡 38)

とまる→とどまる

とむらう(用)→とぶらう これは老人や妻子を用ふためだとは云つたが、実は下人共に臆病の念を起させぬ用心であつた。(阿部一族 61)

とめる→とどめる

とらえる(捕)→つかまえる だぼをつぶしたり、手長鰻を捕へたり、(思出の記・上 76)

とらまえる→つらまえる

とりかえす(回復)→かいふくする・とりもどす やつと自分を回復した滝十郎が、(多情仙心・前 101)

とりくむ→とくむ

とりちらす(散乱)→とりみだす 信毎は一昨日の分も残つて、まだ緩込みもせずに散乱した儘。(破戒 201)

とりつくろう(取装)→とりよそおう 「今——新聞を読んで居たところです。」と丑松は何気ない様子を取装つて言つた。(破戒 203)

とりみだす→とりちらす

とりもどす→とりかえす

とりよそおう→とりつくろう

とる→うる

とろける(溶)→とける 身も心も溶くるばかり大泣きに泣いて、(思出の記・上 27)

なおざりな→おろそかな

なおす→いやす

ながいきする(長命)→ちょうめいする 出来るだけ長命(ながいき)して世の中を見てゐたいといふ気持にはなつた。(帰郷 335)

なぐる→うつ・ぶんなぐる

なげだす→ほうりだす

なげやりな(粗獷)→そらいな 山の上の人々の粗獷な習慣などを——(破戒 143)

なずく(懐)→なつく 東北訛のその子供は、おゆふには二人とも嫌はれたが、お島には能く懐いた。(あらくれ 93)

なすりつける(擦)→こすりつける・すりつける 駿は近所の砂を掘つては、無闇にそれを行介の体の上に擦りつけた。(波 398)

なすりつける(塗付)→ぬりつける 理由を考へ出さうとしても、考へ出せない私は、罪

- を女といふ一字に塗<sup>なす</sup>り付けて我慢した事もありました。(こころ 182)
- なだらか(夷)→たいらか 広々と夷<sup>なだら</sup>かな田畠や矮林が、(あらくれ 135)
- なだれる(頰)→くずれる いづれも一分一秒を争ふやうな気忙しな<sup>まつそ</sup>で、真直に改札口へと頰<sup>なだ</sup>れて来たのは、(多情仏心・前 137)
- なつかしい→ゆかしい
- なつく→なずく
- なまあたかい→なまぬるい
- なましろい(生白)→なまじろい・なまっしろい 毛は小男だ。おれよりもずっと小さい。手なども小さい。色が生白<sup>なましろ</sup>い。声まで細い。(むらぎも 134)
- なまじろい→なましろい
- なまっしろい→なましろい
- なまぬるい(生温)→なまあたかい 自分の血は今のはっきり脈を打って流れている血とは思えなかった。生温<sup>なまぬる</sup>く、ただだらだらと流れ回る。(暗夜行路・前 256)
- なめる→ねぶる
- ならう(教)→おそわる 商売熱心の上に凝り性な女房が、どこで誰に教<sup>なら</sup>つたともなく覚えて来ては、(多情仏心・前 209)
- なる(耐・堪)→たまる 何だか先生夫婦に欺かれたやうな気がして、腹が立つて耐<sup>な</sup>らなかつた。(平凡 106)
- 長い柄の蝙蝠傘を持って出て行く後姿が私は好くつて堪<sup>な</sup>らなかつたから、(平凡 74)
- においやかな→おやかな
- におやかな(匂)→においやかな 世を捨たる女かと見れば黒髪匂<sup>にお</sup>やかにして尼にもあらず、(文芸 1956年8月 202)
- にがす(遁・逃)→のがす その代り機会さへあれば決して遁<sup>にが</sup>さないことも確かだわ。(真知子・前 79)
- 結局むぐり弁護士風の議論に、重心は動かされて、その核心を逃<sup>にが</sup>すがごとき観がある。(総長就業と廃業 349)
- にがす→いっする・はずす
- にがわらいする(苦笑)→くしょうする 母は苦笑<sup>にがわらい</sup>して居た。(思出の記・上 128)
- ～にくい(難)→～がたい 御し易いのは青年、御<sup>にが</sup>し難いのも青年(思出の記・上 114)
- にげだす→ぬけだす
- にじみだす→しみだす
- にじみでる→しみでる
- にっこりする(微笑)→びしょうする 微笑<sup>にっこり</sup>した所は、美しいといふよりは仇ツぼくて、(平凡 134)
- にぶい→のろい
- にゅうような(入用)→いりような 村の人人は産婆には、果して「番頭さん」が入用<sup>にゅうよう</sup>な

- ものかどうかを知らなかつた。(田園の憂鬱 18)
- しょうぜつな(饒舌)→じょうぜつな 年寄でも流石女の饒舌なもので、問はず語りに色々の事を教へて呉れた。(思出の記・上 187)
- にらめすえる→ねめすえる
- にらめつける→ねめつける
- にらめる→ねめる
- ぬきだす(抽出)→ひきだす 弾の尻から火薬を引き出し、木の枝でこすつて火を起した。(野火 96)
- 普通第一種の中に加へらるる罪過を、私はこの場合の目的に適合せしめるために、特に第二種の悪として引き出して来た。(人格主義 168)
- ぬくまりきる→あたたまりきる
- ぬくまる→あたたまる
- ぬくめる(温)→あたためる 佐助が両足を 僕に抱いて温めたが(春琴抄 175)
- ぬけだす(逸出)→にげだす・はしりだす 父の厳しい性格を考へる度に、自分は反つて反対な方へ逸出して行つて、(破戒 150)
- ぬらす(湿)→しめす・しめらす 熱い涙は思はず知らず流れ落ちて、零落れた袖を湿したのである。(破戒 67~68)
- ぬりつける→なすりつける
- ねぎらう→いたわる
- ねじる→ひねる
- ねじる(捻・振)→ひねる・よじる 「明子、起きてる。」と顔を寄せた。その頬をすつと擦って、明子は捻るように顔をうしろへ引いた。(くれない 71)
- 彼女はいきなり、自分のかけていた眼鏡を両手で取って、きゅっと逆に振った(くれない 28)
- ねじれる(捻)→よじれる・よれる 薄い金紗の袷は捻れながら肩先から滑り落ちて、(つゆのあとさき 32)
- ねたむ→そねむ
- ねだる→せびる
- ねつっぽい→あつっぽい
- ねとほける→ねぼける
- ねばりつく→へばりつく
- ねふたい(眠・唾)→ねむたい 最初充分に食物を与えずにおくと、囚徒らは疲労を感じて眠たがる。(貧乏物語 13)
- 月色茫々たる野路を歩いて行くと、果ては段々睡たくなつて、(思出の記・上 63)
- ねふる(砥)→なめる 老牛の犢を砥る如くに僕を愛した。(思出の記・上 17)
- ねぶれる(眠)→ねむれる 眼が冴へて少しも眠れない。(思出の記・上 173)

ねぼける(睡呆)→ねとぼける 睡呆けて居るのではないかと疑ひながら一層に耳を確めた。(田園の憂鬱 88)

ねむたい→ねぶたい

ねむる(瞑・閉)→つぶる・つむる 初は面白半分に瞑つて之に對つてゐる中に、(平凡 7)

○学年試験に及第が出来ぬと、最終の目的物の卒業証書が貰へないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉つて毒を飲む気で辛抱した。(平凡 48)

ねむれる→ねぶれる

ねめすえる(睨据)→にらめすえる 思はずちつとその小男を睨め据ゑて、出入口を開いて通させようともせずに、信之はそこに、仁王立に突つ立つてゐた。(多情仏心・前 316)

ねめつける(睨付)→にらめつける 何故私はポチを鑕けて、人を見たら皆悪魔と思ひ、一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？(平凡 38)

ねめる(睨)→にらめる 白癡はどんよりした目をあげて膳の上を睨めて居たが、(高野聖 55)

ねらう(覬)→うかがう 私は黙つて機会を覬つてみました。(こころ 257)

のがす→いっする・にがす・はずす

のく→しりぞく

のく(退)→どく 妄念は起さずに早う此処を退かつしやい、(高野聖 76)

のこす→あます

のほりおりする→あがりおりする

のほりきる→あがりきる

のほりくだりする→あがりおりする

のほりだす→あがりだす

のほりつづける→あがりつづける

のほりつめる→あがりつめる

のほりはじめる→あがりはじめる

のぼる→あがる

のぼれる→あがれる

のみくいする(飲食)→いんしょくする 表の障子を開けて入ると、そここゝに二三の客もあつて、飲食して居る様子。(破戒 230)

のめる→やれる

のろい(鈍)→にぶい 砂埃の立つ白い路を、二人は鈍い俥に乗つて帰つて来たが、(あらくれ 176)

はいす→よす

はいつくばる(蹲踞)→うづくまる そここゝの樹の下に雄雌の鶏、土を浴びて静息として蹲踞つて居るのは、大方羽虫を振ふ為であらう。(破戒 163)

はいほうする→はいもうする

はいもうする(敗亡)→はいほうする 皆一溜りもなく敗亡する。(平凡 79)

はいりきたる→いりきたる

はいりこむ→いりこむ

はいりこめる→いりこめる

はいる→いる

はえしげる→おいしげる

はかいする→ぶちこわす

はからう(計)→はかる 武帝は諸重臣を召して李陵の処置に就いて計つた。(李陵 166)

はかる→はからう

はく(吐)→つく 「わしア悪党は嫌ひぢや」溜息を吐くのと一緒に呟いて、(多情仏心・前 153)

はく(噴)→ふく 汽船と云ふ煙を噴いて一時間に十里も行く船、(思出の記・上 51)

はぐる→めくる

ばくろする→さらけだす

はさむ→さしはさむ

はじきかえす→はねかえす

へはじめる→へそめる

はしゃぎだす(噪出)→さわぎだす つい酒か陽気の加減で、信之がひとりはしゃぎだしたやうな憎まれ口を利くのだつた。(多情仏心・前 349)

はしゃぐ(燥)→さわぐ お島はさうした男達と一緒に働いたり、ふざけたりしてはしゃぐことが好きであつたが、(あらくれ 5)

はしりおりる(走下)→はしりくだる 彼は勾配を走り下り、最早私の弾の届かないところまで行くと、(野火 178)

はしりくだる→はしりおりる

はしりすぎる→かけすぎる

はしりだす→ぬけだす

はずす(逸)→いっする・にがす・のがす 千載一遇の好機会、逸してなるものか、といふやうな氣になつて、(平凡 81)

はずれる→それる

はせすぎる→かけすぎる

はっきりする(分明)→ぶんめいする その日も養父は、使ひ道の分明しないやうな金のことについて、屋頃からおとらとの間に紛紜を惹起してゐた。(あらくれ 24)

はっけんする→みいだす

はてな(華美)→かびな 赤い模様や黄ろい形が雑然と附いた華美な襦袢の袖口から、(平凡 87)

はですきる(華美)→かびすぎる <sup>しろうつ</sup>素人では、いくら二十七八と見えるその年ごろにして  
も華美すぎる、(多情仙心・前 25)

はでやかな(艶)→あでやかな 華やかな声、艶やかな姿、(蒲団 12)

はなはだしい→ひどい

はなやかな(華麗)→かきれいな 殊に華麗な新婚の風俗は多くの人の目を引いた。(破戒  
172)

はねかえす(弾返)→はじかえす <sup>ま</sup>然うした不用意の誘惑から来た男の誘惑を、弾返す  
だけの意地が自分になかったことが悲しまれた。(あらくれ 121)

はまる(陥)→おちいる 早くから文学に随つて始終空想の中に漬つてゐたから、人間が  
ふやけて、秩序がなくなつて、真面目になれなかつたのだ。(平凡 138)

はむかう(抗)→あらがう・さからう 若者は顔を強く引締めて、この思ひがけない涙に  
抗ひ、ぶざまな泣顔を見せずにすんだ。(潮騒 102)

はれあがる(脹上)→ふくれあがる 或る時佐助齧歯を病み右の頬が夥しく脹れ上り(春  
琴抄 175)

はればれする→せいせいする

はれる(脹)→ふくれる 芸もなく四方の木から引張つたテントの下に、安田がいつもの  
やうに、脹れた片足を投げ出して坐つてゐた。(野火 148)

はんたいな→あべこべな

はんぷくする→くりかえす

ひきおこす→じゃっきする

ひきかえす→ひっかえす

ひきこむ→ひっこむ

ひきだす→けんしゅつする・ぬきだす

ひきつむ(引|包)→ひっくるむ 湿つた秋の空気が薄い烟のやうに町々を引包んで居る。  
(破戒 30)

ひきくるめる(引括)→ひっくるめる <sup>ひきくる</sup>引括めて云へば、野田家は今其肺癆に喰い入らふ  
とかゝつて居る虫をば、別に嫌ふ様子でも無く、平然と其家庭に入れて居る。(思出の  
記・上 132)

ひく→しりぞく

ひけらかす(誇示)→こじする 先づ友が何か下らぬ物を書いて私に誇示した。(平凡 99)

ひしょうする→にっこりする

ひす→かくす

ひすぎる(干過)→ほしすぎる <sup>まへんち</sup>毎日栗の木見て居て干過ぎやしめえかと思つて心配して  
んだからよ (土・上 37)

ひそかな→かすかな

ひそめる→しかめる・すくめる

ひそめる(秘)→ひめる 片野の妻は何事も片野の意に盲従した代り、片野がどのやうに窮迫した場合にも敢て彼女の秘めた金を出さうとはしなかつた。(厚物咲 43)

ひたる→つかる

ひっかえす(引返)→ひきかえす 「此方が一番さんで、夫れから二番さん三番さんと順になるンですから何卒……」といふのは聞慣れたこづも少女の声で、然う言棄てゝ例の通り端手なくバタバタと引返して行く。(平凡 115)

ひっくるむ→ひきつつむ

ひっくるめる→ひきくるめる

ひっこす(移住)→いじゅうする 姫子沢へ移住してから以来。(破戒 116)

ひっこむ(引込)→ひきこむ 若い女は怪訝な顔をして、一寸お待ちなさいと言つて引込むだぎり、中々出て来ない。(平凡 57)

ひっさげる(提)→さげる ついと丑松は風呂敷包を提げて出た。(破戒 29)

ひどい(甚)→はなはだしい 私は甚く輕蔑の念を起した。(平凡 100)

ひどい(酷)→むごい てめえのやうな奴はここでどんな酷い目に遭つたつて一生碌なことをしないことはわかつてゐるが、これくらゐのことは、もんのことを考へたら我慢してゐる。(あにいうと 148)

ひとまわりする(一週)→いっしゅうする 一週すれば二里半にあまるといふ天然の大牧場。(破戒 113)

ひとりごとする(独言)→どくげんする 新五はほくほく喜んで、あとでも「先生はエライ、先生はエライ」と独言して居た。(思出の記・上 87)

ひとりごとする(独語)→どくごする 「菊池の奥様だ、最早立たつしやるだ」と独語して、目礼したのもあつた。(思出の記・上 38~39)

ひなんする→けなす

ひねる→ねじる

ひねる(捻)→よる 警部は髯を捻りながら左右を顧みて、「困つたなあ」と云つて、(思出の記・上 196)

ひねる(捩)→ねじる 「はい。」と、おくみは立つて出て、上り口の電燈を捩つた。(桑の実 52)

ひめる→ひそめる

ひやかす(冷評)→れいひょうする 君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。(こころ 35)

ひやかす(冷嘲)→れいちょうする あなたのあとを追つかけてこつちまで逢ひに来たことがあるさうだが……、などと、ニヤリニヤリ笑ひながら冷嘲してゐた。(多情仏心・前 298)

ひややかな(冷酷)→れいこくな 一粒口の中へ入れて、掌上のをも眺め乍ら、「空穀が有るねえ。」と冷酷な調子で言ふ。(破戒 245)



ひらきかかる→あきかかる

ひらきかける→あきかける

ひよわな(脆弱)→ぜいじゃくな お前のさういふ脆弱<sup>ひよわ</sup>なのが、さうでないより私には  
もつとお前をいとしものにさせてゐるのだと云ふことが、(風立ちぬ 84)

ひらく→あく

ひらける→あける

ひんしゆくする→うんざりする

びんしょうな→すばしこい

ふきかける(吹懸)→ふっかける 私の別天地は譬へば塗盆へ吹懸<sup>いぎ</sup>けた息気のやうな物だ。  
(平凡 102)

ふきさく(吹裂)→ふきちぎれる 路傍の新樹は風にもまれ、軟なその若葉は吹き裂れて  
路の面に散乱してゐる。(つゆのあとさき 97)

ふきちぎれる→ふきさく

ふく(吐)→はく 全村郁李で、春に青白い霞がかけた様に、夏になれば此処も彼処も白  
粉<sup>こな</sup>を吐いた紫玉紅玉累々、ぼてぼてと落ちて、潰えて、村へかゝると酒の様な臭が芬  
と鼻をつく位。(思出の記・上 59)

ふくす→かえす

ふぐな→かたわな

ふくれあがる→はれあがる

ふくれる→はれる

ふける(蹙)→ほうける・ぼける 身も心もぐつたりとくづをれ、まだ六十を出たばかり  
の彼が急に十年も年をとつたやうに蹙<sup>しぢ</sup>けた。(李陵 202)

ふこうな→ふしあわせな

ふさう(適)→かなう 見たところ派手でハイカラで儲けの荒いらしいその商売が、一番  
自分の気分<sup>きぶん</sup>に適<sup>あ</sup>つてゐるやうに思へた。(あらくれ 147)

ふさが(塞)→つまる 奥さんの前に坐つてゐた私は、其話を聞いて胸が塞<sup>ふさが</sup>るやうな苦  
しさを覚えました。(こころ 266)

ふさぐ→ふせぐ

ふしあわせな(不幸)→ふこうな あの不幸<sup>ふしあはせ</sup>な父親の為には、どんなにかお志保も泣いて  
居るとのことであつた。(破戒 42)

ふしぎな→きたいな

ふすべる→くべる

ふせぐ(禦)→ふさぐ そこが風を禦<sup>あき</sup>ぐのに好適であつた。(潮騒 63)

ふちこわす(破壊)→はかいする・ぶっこわす 不思議にも斯の思想<sup>かんがへ</sup>は今度の旅行で破壊<sup>ぶちこは</sup>  
されて了つて、(破戒 122)

ふちこわす(打壊)→うちこわす やつぱり自分の立てた成算<sup>せうさん</sup>を打壊<sup>うちこは</sup>されながら、その時

々の気分を欺かれて行くやうなことが多かつた。(あらくれ 191)

ふちまける(打開)→うちあける よし、明日は先生に逢つて、何もかも打開て了はう。(破戒 138)

ふつ(打)→うつ 内では親にさへ減多に打たれた事のない頭だ。(平凡 17)

ふつ→うつ・やる

ふっかける→ふきかける

ふっこわす→ぶちこわす

ふとる(肥)→こえる 普通の人は、身代は太るほどよく、身体も肥るほどよいように思っているけれども、(貧乏物語 141)

ふみこむ(踏込)→ふんごむ 将校のうしろにかくれやがって、いまに踏込んでやるぞ。  
(真空地帯・上 61)

ふみとどまる→ふみとまる

ふみとまる(踏留)→ふみとどまる 母は何故気強くも此田舎に踏み留まつたのか。(思出の記・上 33)

ふゆうな→ゆたかな

ふらつく→ぶらつく

ふらつく(彷徨)→うろつく 不安な一夜を、芝口の或る安旅館に過して、翌日二人は川西へ身を寄せることになるまで、お島たちは口を捜すのに、暑い東京の町を一日彷徨いてゐた。(あらくれ 179)

ふらつく(逍遙)→ふらつく お島は父親が内へ入つてからも、暫く裏の植木畑のあたりを逍遙いてゐた。(あらくれ 39)

ふりおこす(振起)→ふるいおこす 今に膳を下げに来たら、今度こそは勇氣を振起して物を言つて見よう、(平凡 116)

ふりおこる(振起)→ふるいおこる 一時萎えた気が又振起つて、(平凡 134)

ふるいおこす→ふりおこす

ふるいおこる→ふりおこる

ふんごむ→ふみこむ

ふんそする→いいわけする

ふんなぐる(揉)→なぐる 諸人が眼を睜つて居る間に、伯父は件の男を踏みにぢり、揉ぐり、(思出の記・上 139)

ふんめいする→はつきりする

へこむ→くぼむ

へばりつく(粘)→ねばつく・ねばりつく 其が一層男の方へお島の心を粘つかせていつた。(あらくれ 130)

へばりつく(纏付)→まつわりつく・まとわりつく 天狗のお囃子は夜着の襟から潜り込んで来て、耳元に纏り付いて離れない。(平凡 25)

ほうえんな→ゆたかな

ほうける→ふける

ほうける(呆)→ぼける この一年間、壁を見て暮して来た空白さが、一度に彼を浦島太郎のやうに老いさせ呆けさせたやうであつた。(婦郷 63)

ほうこうする→ろろろする

ほうしな→ほしいままな

ほうじゅうな→ほうしょうな・ほしいままな

ほうしょうな(放縦)→ほうじゅうな <sup>ほうしょう</sup>放縦な人は小さいものをつまづかすことをおそれないのだ。(出家とその弟子 113)

ほうてきする→ほうりだす・ほったらかす

ほうりだす(放擲)→ほうてきする 持切れさうもない今の家を一思ひに<sup>ほうりだ</sup>放擲して<sup>ひた</sup>了ひたいやうな気分になつてゐた。(あらくれ 219)

ほうりだす(投出)→なげだす 風呂敷包をそこへ<sup>ほうりだ</sup>投出す、羽織袴を<sup>ぬぎす</sup>脱捨てる。(破戒 206)

ほうる(屠)→ほふる 各将校いづれも腕を無でて一挙敵機を<sup>ころ</sup>屠らんと機会の来るのを待つていた。(丸 増刊 1956年12月 191)

ほくじつな→まじめな

ほける(老耄)→おいほれる 「どうしてあの人はああ売れなくなつたかねえ。」「<sup>ぼけ</sup>老耄るばかりさ。」(末枯 32)

ほける→とぼける・ふける・ほうける

ほしいままな(放肆)→ほうしな 丑松は畳の上に倒れて、<sup>ほしいまま</sup>放肆な<sup>うづも</sup>絶望に埋没れるの外は無かつた。(破戒 206)

ほしいままな(放縦)→ほうじゅう(しょう)な <sup>やまが</sup>山家で言ひはやす幽霊の伝説、<sup>ほしいまま</sup>放縦な農夫の男女の物語などを聞いて、(破戒 55)

ほしすぎる→ひすぎる

ほす→かわかす

ほそい→こまかい

ほったらかす(抛擲)→ほうてきする 親の病気を<sup>ほつたらか</sup>抛擲して倫理学の講釈をしたりせられなかつた。(思出の記・上 59)

ほつれる(簪)→みだれる 小野田が力づよい手を弛めたときには、彼女の髪がばらばらに<sup>はつ</sup>簪れてゐた。(あらくれ 237)

ほつれる(縫)→もつれる まだ<sup>きつ</sup>縫れぬ髪を少し首を傾けつつ両方の拇指の股で代り代り髪を軽く後へ扱いた。(土・上 186)

ほてる→いきる

ほどきかける→ときかける

ほどきにくい→ときにくい

ほどく(解)→とく 亭主は風呂敷包を<sup>ほど</sup>解いて、一冊々々書物の表紙を調べた揚句、それ

を二通りに分けて見た。(破戒 229)

ほのか→かすか

ほのぐらい(微暗)→うすぐらい ふと目を覚すと、有明が枕元を膝籠と照して、四辺は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。(平凡 24)

ほふる→ほうる

ほりものする→しせいする

まかす→たくす

まがる→くねる

まごまごする(狼狽)→ろうばいする 「どうもお待せ申しまして、」といひながら、狼狽してゐる私の前へ据ゑた手先を見ると、(平凡 115)

まざりあう(混合)→まじりあう

まざりあう(交合)→まじりあう ブラームスの中に、後の跳ね戸をさして歩み去つた関のひそかな注意した靴音が交り合つた。(真知子・前 135)

まざる(混・雑・交)→まじる 一座さへはずんで来れば、なにか一人や二人初対面の人が混つてゐたところで、信之もそんなに堅くならずにすむわけだつた。(多情仏心・前 92~93)

○其中に一人の老翁も雑て居て、頻りに若い者の話や歌をまぜツかへして居た。(武蔵野 29)

○男のなかに交つて、地を取決めたり、値段の掛引をしたり、尺を取つたりするあひだ、(あらくれ 158)

まします→います

まじめな(真摯)→しんしな 誰も皆、暗く、陰鬱に眼を伏せた、真摯な、仮借のない師匠のまへに神妙に坐つた。(末枯 66)

まじめな(樸実)→ぼくじつな 何となく人の心を癒ける樸実なところがあつた。(破戒 210)

まじりあう→まざりあう 伸子にとつては楽しさと遠慮との混り合つた旅行であつた。(伸子・上 168)

まじる(雑)→まざる 深い吐息がそれ等の考へのなかに雑り、(田園の憂鬱 42)

まずい→つたない

またたく→しばたたく

またたく(瞬)→まばたく その小さい円い眼を特別な仕方て瞬かせて、真知子を見た。(真知子・前 189)

○少しいかつい眼も瞬きさへしないほどの真剣さのしるしだと知れた。(雪国 9)

まちふす→まちぶせる

まちぶせる(待伏)→まちふす 昔吾有であつた家屋敷山林田畑が到る所に待伏して、吾を辱しめる。(思出の記・上 13)

まっくらい(真黒)→まっくろい <sup>きのよ</sup>昨日迄の榮華の夢を脊に負ふて、<sup>まつくら</sup>真黒い<sup>あした</sup>明日の<sup>おそれ</sup>眞を懷に抱いて、(思出の記・上 13)

まっくろい→まっくろい

まつわりつく→へばりつく・まといつく

まつわりつく(纏)→まとわりつく 主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついて居た彼の二足の犬が、やうやう柔順になつて、(田園の憂鬱 5)

まといつく(纏絡)→からまりつく・からみつく・まつわりつく <sup>つた</sup>鳶や<sup>いちご</sup>莓などの<sup>まとひつ</sup>纏絡いたところを見ると、我輩はもう言ふに言はれないやうな心地になる。(破戒 61)

まとわりつく→へばりつく・まつわりつく

まぬかれる(免)→まぬがれる その一劃が戦火を免れたのは、そこが海岸に近く、附近に松林が多かつたためである。(新潮 1956年3月 232)

まぬがれる→まぬかれる

まばたく→しばたたく・またたく

まばゆい(眩)→まぶしい 果てしもなく現はれ出る人の顔の一番奥に、赤い衣物を裾長に着て、<sup>まばゆ</sup>眩い程に輝き渡つた男の姿が見え出した。(或る女・前 125)

まぶしい→まばゆい・まぼしい

まぼしい(目眩)→まぶしい 不意に箆笥や何や角や沢山な奇麗な道具が燦然と眼へ入つて、一寸<sup>まぼ</sup>目眩しいやうな気がする(平凡 58)

まみれる(汚)→よごれる 足袋も<sup>きやはん</sup>脚絆も<sup>ほこり</sup>塵埃に汚れて白く成つた頃は、(破戒 97)

まもる(熟視)→みまもる 涙に濡れた眸をあげて、<sup>まも</sup>丑松の顔を熟視つたは、お志保。(破戒 333~334)

まわる→めぐる

みいだす(発見)→はっけんする <sup>しまひ</sup>終には、<sup>なん</sup>对手が、何にも自分の話を聞いて居ないのだといふことを<sup>みいだ</sup>発見した。(破戒 177)

みおろす(見下)→みくだす どんな女だか、知らないが、お高くとまられて、見下されでもした日には、(自由学校 89)

○泉を見下す高みまで、永松が安田を撃つた銃を、取りに行つた。(野火 164)

みくだす→みおろす

みすかしきる→みとおしきる

みすかす→みとおす

みすかせる(見透)→みとおせる <sup>しんけい</sup>神経が急にざわざわと騒ぎ立つて、ぼ一つと煙つた霧雨の彼方さへ<sup>みとお</sup>見透せさうに眼がはつきりして、(或る女・前 90)

みだす→かきみだす

みだらな(淫猥)→いんわいな できるだけあくどい、<sup>みだら</sup>淫猥な話を引き出さうとして盛んに相槌を打つてゐた。(冬の宿 31)

みだらな→むやみな

みだれる→ほつれる

みつめる→みまもる

みとおしきる(見透切)→みすかしきる 遠の昔に心の中は見透し切つてゐるやうな、  
(或る女・前 149)

みとおす(見透)→みすかす 木村の顔にはその手紙を読み終へた葉子の心の中を見透さ  
うとあせるやうな表情が現はれてゐた。(或る女・前 204)

みとおせる→みすかせる

みとれる(見惚)→みほれる 私にはそれが考へに耽つてゐるのか、景色に見惚れてゐる  
のか、若しくは好きな想像を描いてゐるのか、全く解らなかつたのです。(こころ 217)

みほれる→みとれる

みまもる→まもる

みまもる(瞻・熟視)→みつめる 何んにも言はず急にもものいはいれないで瞻ると、親仁  
はどつと顔を見たよ。(高野聖 68)

○あまり二人が熱心に自分の顔を熟視るので、(破戒 83)

みみざとい(聡)→さとい 併しながら人品の説教は口舌の説教よりも雄弁で、心霊の耳  
は肉の耳よりも聡いものである。(思出の記・上 227)

むかいあう(向合)→むきあう それにつけても、こゝできぬ子と向合つて坐つてゐたと  
いふ学生はどういふ男なのだらう。(波 108)

むきあう→むかいあう

むきだしな(露骨)→ろこつな ……露骨に云ひますよ、露骨に云へば、ちとどうも我儘  
がすぎやアしないか、とね、(多情仏心・前 259)

むくちな(寡言)→かげんな 然し自分は入夫といふ関係もあるしそれに生来の寡言なの  
で(土・上 68)

むくちな(寡黙)→かもくな どうした風の吹きまはしか、昨夜はあの寡黙な頭がそれは  
よく喋舌つた。(末枯 58)

むごい(酷・惨)→ひどい それだつたのに思ひ入つて内田の所に来て見れば、内田は世  
の常の人々よりも一層冷やかに酷く思はれた。(或る女・前 55)

○それは決して惨いとか冷淡とかいふ声の響きではなかつた。(河明り 323)

むずかしい→かたい

むずかしい(難)→むづかしい ところが事実の世界の「背景」に量子力学的世界がある  
という表現的的確な意味は何であるかと問われると、返答はまた難しくなるのである。  
(物質世界の客観性について 286)

むづかしい→むずかしい

むやみな(妄)→みだりな どこかおどおどしてゐる女の様子に、妄に気がいらいらし  
て、(あらくれ 187)

めぐりあつまる→よりあつまる

めくる(剥)→はぐる 気乗りのしないやうな顔をして、本の小口を剥<sup>めく</sup>つてお出でになる。  
(桑の実 90)

めぐる(回・巡)→まわる 近頃ではK自身が切り離すべからざる人のやうに、私の頭の中をぐるぐる回<sup>めく</sup>つて、此問題を複雑にしているのです。(こころ 235)

○其れから僕は得々然と肩を掉つて、新五を引張つて塾の周囲を巡<sup>めぐ</sup>つて、(思出の記・上 87)

めしいる→しいる

めとる→もろう

もうろうな→おぼろげな

もくす(黙)→もだす 教育者がそのあずかつている子弟の将来を真面目に考えれば、黙<sup>もく</sup>していることができないのは、当然であつて、(改造 1954年11月 5)

もじもじする(逡巡)→しゅんじゅんする 初めは極りが悪くて他人の関を跨ぐのを逡巡<sup>もじもじ</sup>して居た。(土・上 81)

もじもじする(踟蹰)→ちちゅうする えゝとか、何とかいつて踟蹰<sup>もじもじ</sup>してゐる私の姿を、雪江さんはジロジロ見てゐたが、(平凡 90)

もす→もやす

もたげる→もちあげる

もだす→もくす

もちあげる(擡)→もたげる 微多としての悲しい自覚はいつの間にか其頭を擡<sup>もちあ</sup>げたのである。(破戒 14)

もちこたえる(持堪)→もちこらえる 明子は自分だけ持堪<sup>もちこた</sup>えていることが辛くなり、(くれない 84)

もちこらえる→もちこたえる

もつ→たもつ

もつれる→はつれる

もてなす(款待)→かんだいする お島は水菓子にビールなどをぬいて、暑い二階で彼等を款待<sup>もてな</sup>したが、(あらくれ 213)

もてなす(饗)→きょうす 婚姻の席上では酒の後は長く継がる様といふ縁起を祝うて、一つには膳部の簡単なとで饗飩を饗<sup>もてな</sup>すのである。(土・上 178)

もどす→かえす

もとめる→あつめる

もどる(復・帰)→かえる 省吾は少許<sup>すこし</sup>顔を紅くして、やがて自分の席へ復<sup>かえ</sup>つた。(破戒 305)

○一日西内家に勤めて、夕方から一里の余も宇和島へ通ひ、三時間勤めてまた一里あまりの夜道を帰る。(思出の記・上 203)

ものいう(言)→いう 婦人に対しては言<sup>こと</sup>はざるをよしとす。(思出の記・上 92)

ものうい(懶)→だるい かれら兄妹は起きると、眼をほそめまだ草臥<sup>ものう</sup>ののこる懶いから

だを片手でささへながら、(あにいもうと 137)

ものずきな(好奇)→こうきな 種牛<sup>なわうし</sup>の為<sup>きまつ</sup>に傷けられたといふ事実は、些少<sup>すくな</sup>からず好奇<sup>ものずき</sup>な手<sup>て</sup>合<sup>あひ</sup>の心を驚かして、(破戒 115)

もやす(燃)→もす 彼はただ徒に焚きつけを燃<sup>も</sup>した。(田園の憂鬱 72)

もらう(娶)→めとる 鎮西八郎が鶴を放して猿を退治して白縫姫を娶<sup>もら</sup>ったのか、猿が鶴を放して八郎を退治して白縫姫を貰<sup>もら</sup>ったのか(思出の記・上 9)

もれきたる(漏来)→もれくる 不図<sup>ふと</sup>唯<sup>ただ</sup>有<sup>あ</sup>る格子先きに今の牧師の説教の漏<sup>も</sup>れ来る<sup>も</sup>声に耳立て、(思出の記・上 223)

もれくる→もれきたる

やかましい(喧・囂)→かましい・かまびすしい 大統領ウエルソンが平和会議のため仏蘭西へ渡航<sup>とくわう</sup>する計画に関するステートメントが、喧<sup>やかま</sup>しい議論<sup>ぎろん</sup>の種<sup>くさね</sup>となつた。(伸子・上46)

○近所の子供が囂<sup>やかま</sup>しい声を立てゝ遊んでゐた。(生まざりしならば 202)

やかましい(厳)→きびしい かう云ふ落着<sup>おちつき</sup>のない子ですから、お骨も折れませうが、厳<sup>やかま</sup>しく仰<sup>おつし</sup>やつて、どうか驅使<sup>こまつか</sup>つてやつて下さい。(あらくれ 74)

やきもきする(焦燥)→いらいらする・しょうそうする お島には、自分一人がどんなに焦燥<sup>やきもき</sup>しても、出世する運が全く小野田にはないやうにさへ考へられた。(あらくれ 193)

やく→たく

やけな(自暴自棄)→じぼうじきな ……と期待して居た或物を俄に奪<sup>さら</sup>ひ去られた様な絶望とが混滑<sup>まじり</sup>し紛糾<sup>まじり</sup>して自暴自棄<sup>じぼうじき</sup>の態度を以ておつぎを責めた。(土・上 174)

やすい→たやすい

やすめる→やめる

やにっこい(脂)→あぶらっこい 彼の身辺<sup>しへん</sup>や市井<sup>ぢやうけ</sup>の道化<sup>だわ</sup>た話<sup>わ</sup>か卑猥<sup>ひわい</sup>な話で、それが彼の口から出ると、妙<sup>た</sup>に脂<sup>あぶら</sup>っこくしかもとぼけた魅力になるのだつた。(冬の宿 27)

やふれる→われる

やめる→とどめる

やめる(休)→やすめる 「何ですか、斯<sup>こ</sup>の雪の中で釣<sup>つ</sup>れるんですか。」と丑松は箸<sup>はし</sup>を休<sup>やす</sup>めて相手の顔を眺めた。(破戒 232)

やる(駆)→かる 乳屋は車を駆<sup>か</sup>つて戸々に牛乳を配達しつつある。(貧乏物語 91)

やる(打)→うつ・ぶつ 時々何の理由もなく、通りすがりに大切の頭をコツリと打<sup>う</sup>つて行くこともある。(平凡 17)

やる(行)→おこなう 此奴<sup>こいつ</sup>が余所目には楽なやうで、行<sup>い</sup>つて見ると中々<sup>ちやう</sup>楽でない。(平凡 71)

やれる(行)→いかれる・ゆかれる お内儀さん、夫婦揃<sup>そろ</sup>つてなくつちや行<sup>い</sup>れるもんぢやありあんせんぞ、(土・上 157)

やれる(飲)→のめる 蜂谷老人は上戸と見へて、徳利三本瞬<sup>しゅん</sup>く間に倒したが、僕等は無



論一滴も飲<sup>め</sup>ぬ方だから、彼娘<sup>かの</sup>の給仕で夕飯を済した。(思出の記・上 221)

ゆあみする→よくする

ゆかしい(懐)→なつかしい し<sup>の</sup>びやかに通<sup>も</sup>り過<sup>く</sup>時雨の音の如何にも幽<sup>しほ</sup>かで、又た鷹<sup>お鷹</sup>揚<sup>やう</sup>な趣きがあつて、優<sup>やさ</sup>しく懐<sup>なつか</sup>しいのは、実に武蔵野の時雨の特色であらう。(武蔵野 13)

ゆかす→いかす

ゆかれる→やれる

ゆきあう(行逢)→いきあう おとらは途<sup>みち</sup>で知合ひの人に行逢<sup>あ</sup>ふと、(あらくれ 41)

ゆきあたる(行当)→いきあたる 私は急に何か物に行<sup>ゆ</sup>当<sup>あた</sup>つたやうにうろうろして、(平凡 41)

ゆききする→おうらいする

ゆきわたる→いきわたる

ゆく(行)→いく 漸<sup>やうやう</sup>う起上<sup>おきあが</sup>つて道<sup>みち</sup>の五六町も行<sup>ゆ</sup>くと、(高野聖 20)

ゆさぶる(動揺・揺)→ゆさぶる 身体を横に動<sup>うご</sup>揺<sup>め</sup>ながら笑ひ私語<sup>ささや</sup>くやうにざわざわと鳴る。(土・上 15)

○初江は笑つて髪を揺<sup>ゆ</sup>ぶつた。(潮騒 125)

ゆすぶりつづける(揺続)→ゆすりつづける・ゆりつづける 私の頭を洗ふやうに揺<sup>ゆ</sup>り続<sup>つづ</sup>けるのだが、(機械 19)

ゆすぶる→そそる・ゆさぶる

ゆすりあげる→ゆりあげる

ゆすりつづける→ゆすぶりつづける

ゆする→せびる

ゆたかな(富有)→ふゆうな あれ程<sup>まりやう</sup>の容姿<sup>ようさ</sup>を持ち、あれ程<sup>ゆたか</sup>富有<sup>ふゆう</sup>な家に生れて来たので有るから、(破戒 172)

ゆたかな(豊艶)→ほうえんな 開けた浴衣の胸から坐つた腿<sup>もも</sup>のあたりの肉づきは飽くまで豊艶<sup>ゆたか</sup>になつて、(つゆのあとさき 115)

ゆだる(茹)→うだる 私の肉体は盛り出した暑<sup>あつ</sup>さに茹<sup>ゆ</sup>るにつれ、心はひたすら、あのうねる樹幹<sup>じくかん</sup>の鬱蒼<sup>うっそう</sup>の下に粗い齒<sup>は</sup>朵<sup>な</sup>の清涼<sup>せいりやう</sup>な葉が針立つてゐる幻影<sup>まぼろし</sup>に浸り入つてゐた。(河明り 321)

ゆったりする(綽々)→しゃくしゃくする 母よりは年<sup>とし</sup>の十余<sup>じゅうご</sup>も上<sup>うへ</sup>で、今<sup>いま</sup>些<sup>ち</sup>体<sup>てい</sup>も顔<sup>かほ</sup>も大<sup>おほ</sup>きく、何処<sup>どこ</sup>やら綽<sup>ゆつたり</sup>々<sup>々</sup>して居る。(思出の記・上 48)

ゆでる→うでる

ゆびさす→さす

ゆみがたな→ゆみなりな

ゆみなりな(弓形)→ゆみがたな 上<sup>のぼ</sup>りが一<sup>いつ</sup>ヶ<sup>しよ</sup>処<sup>ところ</sup>、横<sup>よこ</sup>から能<sup>よく</sup>く見<sup>み</sup>えた、弓<sup>ゆみ</sup>形<sup>なり</sup>で苑<sup>まろ</sup>で土<sup>つち</sup>で勅<sup>ちよく</sup>使<sup>し</sup>橋<sup>はし</sup>がかゝつてゐるやうな。(高野聖 13)

ゆらぎはじめる→ゆるぎはじめる

ゆらぐ(揺)→ゆるぐ 船の上下は最後のどよめきに揺ぐやうに見えた。(或る女・前 82)

ゆりあげる(揺上)→ゆすりあげる 外套の袖に通した両腕の肘を張つて廻転させ、肩へ揺り上げながら、続いて階段を駆けおりたが、(多情仏心・前 159)

ゆりつつける→ゆすぶりつつける

ゆるがせな→おろそかな

ゆるぎはじめる(揺始)→ゆらぎはじめる 自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動の為にもなく揺ぎ始めた。(或る女・前 41)

ゆるぐ→ゆらぐ

よい→いい

よいかける→えいかける

よいくたびれる→えいくたびれる

よいしびれる→えいしびれる

よいしれる→えいしれる

よいたおれる→えいたおれる

よいつぶれる→えいつぶれる

よいはじめる→えいはじめる

よういする(準備)→じゅんびする 持つて来る様に準備して置いた蠟引傘と、(思出の記・上 162)

よくする(浴)→ゆあみする 道後の温泉に浴して半日の閑を消するなど、さまざまの事もあつたが、(思出の記・上 222)

よける(避)→さける 是方を避けようとした人。(破戒 181)

よごす(穢)→けがす 少くも七八遍は、三好の口が嘘で穢されなければならなかつた。(多情仏心・前 120)

よごれはてる→けがれはてる

よごれる→けがれる・まみれる

よす(廢)→はいす どうかして瀬川君を廢して、是非其後へは君に座つて頂きたい。(破戒 76)

よじる→ねじる・ひねる

よじれる→ねじれる

よそおう→つくろう

よそよそしい(疎々)→うとうとしい 船客の大部分は葉子に対して疎々しい態度をして見せるやうになつた。(或る女・上 183)

よっかかる(倚)→よりかかる お島は帯をときかけたまゝの姿で、押入に倚かゝつて、組んだ手のうへに面を伏せてゐた。(あらくれ 53)

よっぱらいらしい→すいかんらしい

よどむ→おどむ

よびおこす(喚起)→かんきする 汽車の窓から、首をのばして彼等の見てゐる山の形が、ふと浜屋の記憶を彼等に喚起したのであつた。(あらくれ 249)

よみおえる(読終)→よみおわる 西洋野紙にペンで細かく書いた幾枚かの可なり厚いもので、それを木村が読み終るまでには暇がかゝつた。(或る女・前 202)

よみおわる→よみおえる

よみがえる→いきかえる

よりあつまる(滙)→めぐりあつまる 滙り集つて村人の所謂大川小川の二流となり、十分に谷を湿して居る。(思出の記・上 6)

よりかかる→よっかかる

よりだす→えりだす

よりとる→えりとる

よりわかる→えりわかる

よる→える

よる→ひねる

よれる→ねじれる

よろこばしい→たのしい

よろしい→いい

らいはいしとおす(礼拝通)→れいはいしとおす 良心として神の崇敬を礼拝し通した者の悲痛(人格主義 163)

らくたんする→がっかりする

らくようする→おちばする

りこうな(伶俐)→れいりな 知事は伶俐な男で、(思出の記・上 139)

りゅうきする→とびだす

れいこくな→ひややかな

れいたんな→つれない

れいちょうする→ひやかす

れいはいしとおす→らいはいしとおす

れいひょうする→ひやかす

れいりな→りこうな

ろうばいする→まごまごする

ろこつな→あらわな・むきだしな

わいしょうな→こつぶな

わかい(幼)→おさない 僕は齢よりも猶幼く、彼は年には余程ませて最早立派な一人前の男、(思出の記・上 216)

わかい(少)→すくない 同輩の乱暴を牽制するでも無く、ずるずる傍観者で居たのは、

年が<sup>あか</sup>少いとは云へ、実に男らしく無い仕打ちで、(思出の記・上 116)

わずらわしい→くどい

わななく(戦)→おののく 今朝も彼は朝飯のとき、奥での夫婦の争ひを、蒲団のなかで聴いてゐながら、臆病な神経を<sup>わな</sup>戦かせてゐた。(あらくれ 162)

わめく(喚)→おめく 只もう校舎を<sup>め</sup>撼つてワーツといふ声の中に、無数の円い顔が黙つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を<sup>め</sup>喚いてゐるのか分らない。(平凡 35)

わるさする(悪戯)→いたずらする 何したんだ、どういふもんだ——めた(幾度も)  
<sup>わるさ</sup>悪戯しちや困るぢやないかい、(破戒 241)

われる(破)→やぶれる 図書室にはひつてゐると、窓の外で「わあつ」と<sup>お</sup>破れるやうな笑声が起つた。(波 327)

### Ⅲ 自動詞か他動詞か決めにくい語の用例

#### 1. 辞典によってゆれているものの表

この表は、辞典によって自動詞・他動詞の注記がまちまちなものを集めたものである。自他両方の注記があるものは、「両」とした。対象とした辞典は、つぎの12種類である。（なお、『岩波』第2版については p.190参照。）

大槻文彦『言海』（1889・明治22年～1891・明治24年）

上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』（1915・大正4年～1919・大正8年）

新村 出『辞苑』（1935・昭和10年）

金田一京助『明解国語辞典（改訂版）』（1952・昭和27年）

新村 出『広辞苑（第1版）』（1955・昭和30年）

金田一京助『三省堂国語辞典』（1960・昭和35年）

武田祐吉・久松潜一『角川国語辞典（改訂版）』（1961・昭和36年）

金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎『新選国語辞典（改訂版）』（1962・昭和37年）

西尾実・岩淵悦太郎『岩波国語辞典』（1963・昭和38年）

久松潜一・林大・阪倉篤義『講談社国語辞典』（1966・昭和41年）

三省堂編修所『三省堂新国語中辞典』（1967・昭和42年）

新村 出『広辞苑（第2版）』（1969・昭和44年）

比較は、まず岩波・新選等数種の小辞典についてだけ行ない、これらのあいだに食いちがいがみられる語にかぎって、ほかの辞典もしらべることにした。したがって、最初から厳密にこれらすべてを比較すれば、まだ自他の注記が一致しない動詞があるだろうと思われる。

自他の不一致がこのようにおこる理由は、いくつか考えられる。

第1に、単純な誤記・誤植である。これは、版をかさねた辞典にも、意外に多くみられるのであって、この表で、ある一つの辞典だけが他と逆の注記をしているばあいには、その可能性がたかい。

第2に、用法に対する編者のけっぺきさである。ある動詞が主として自動詞

としてつかわれるが、他動詞的な例もないことはない。というときに、ある編者は後者の例を意識的に無視して「自」とし、別の編者は基準をゆるくとして「自他」とするであろう。

第3に、自動詞・他動詞というものをどう規定するかということである。「かみつく」という動詞はその「かみつかる」という受け身形が「なぐられる」と同じようなもので、このような受け身のあることが他動詞の特徴として大事である、と考えれば他動詞にはいる。しかし、目的語として「～を」ではなく「～に」の形をとる点を重視すれば自動詞にいらてもよいであろう。

## 2. 自・他の決定に参考となる用例

ここにあげる用例は、つぎのどちらかに属する動詞のものである。

A) 上の表に示した、辞典によって自他の認定が一致しないもの。(例―「あおぐ」「あてこする」)

B) 辞典の注記が一致していても、これに反する用例が見つかったもの。

(例―「あまんずる」「うなづく」)

もちろん、A)の条件にあてはまっても、資料の中に用例がなかったものも多い。また、用例があっても、自他を考えるのに参考にならないと思われるものは、拾わなかった。

各用例には、それぞれ自他どちらの方に属すると考えられるかを注記した。しかし、これは基本的には、自動詞・他動詞というものをどう規定するかにかかっているのであり、その点についての準備がないままにつくったこの資料では、自信をもって認定しているわけではない。さらに、ここにとりあげた動詞の多くは、ひん度の低いものであり、採用した用例の中にも、一般の慣用とは一致しないのではないかとみられるものもある。ここでは、できるだけもろろ的に、そのような例も拾うことにつとめたが、ここに1～2例があがっているからといって、ただちにその動詞を一般的に(たとえば辞典の中で)自動詞(または他動詞)とみとめるべき根拠になりえないことは、あきらかである。その意味で、あくまで文字どおりの参考資料としてみていただきたい。

(担当――宮島達夫)

## 1. 辞典によってゆれているものの表

(\*印は『岩波』第2版で修正されたもの。p.188 参照。)

	言 海	大 日 本	辞 苑	明 解	広 辞 苑 (一)	三省 堂 (小)	角 川	新 選	岩 波	講 談 社	三省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
哀願する				自		自	両	他	自	他		他
仰ぐ	両	両	両	両	両	自	両	自	自	自	両	自
あがる	両	両	両	両	自		自	自	自	自	両	自
あくがれる	自	自	自	自	自	自	両	自	自	自	自	自
あこがれる	自	自	自	自	自	自	自	両	自	自	自	自
焦る	自	自	自	自	自	自	自	他	自	自	自	自
あてこする	自	自	自	自	自	自	他	他	自	自	自	自
あびる	他	他	他	他	他	他	他	自	自	他	他	他
あまんずる	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
あらそう	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
あわれがなる		他	他	他	他	他	他	自	他	他	他	他
あいう												
言いう	自	他	自	自	自	自	自	自	他	他	自	自
いよる	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
いみある	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
いかる	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
いきどおる	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
畏敬する				他		他	他	他	自	他		
移項する				他		他	他	他	他	他	他	他
いたす	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
一括する				他		他	他	他	他	他		
一喝する				他		他	他	他	他	他		
一貫する				他		他	他	他	他	他		
逸する		両	両	自	両	自	両	両	両	両	両	両
一転する				自		自	両	両	自	自		
一服する				両		両	両	自	自	自		
一変する				両		両	両	自	自	自		
いつわる	両	両	両	両	両	両	両	両	他	他	両	両
移転する				自		自	自	自	自	自		
いどむる	他	他	他	他	他	他	自	自	自	自	他	他
いぶかる	他	他	他	他	他	他	自	自	自	自	他	他
飲食する				自		自	両	両	自	自		

[illegible]





	言海	大日本	辞苑	明解	広辞苑 (中)	三省堂 (小)	角川	新選	岩波	講談社	三省堂 (中)	広辞苑 (中)
喝破する	自	自他	自他	両自他	両自他	両自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かどつ	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かみつく	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
からかう	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
からまる	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かわる	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
か化する	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
感化する	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
換金する	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
姦す	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かんばん	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
鑑定する	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
カンニング	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かんにん	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
かんする	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
完了	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
緩和	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
起案	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
着替	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
き稿	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
寄算	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
起算	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
きそ	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
きど	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
気転	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
気ど	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
逆転	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
休館	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
休館	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
休業	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
協議	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
極論	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
去勢	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
きり	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
禁欲	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
くい	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他
くい	自	自他	自他	自他	自他	自他	他自他	他他	両自他	両自他	自他	自他



	言海	大日本	辞苑	明解	広辞苑 (一)	三省堂 (小)	角川	新選	岩波	講談社	三省堂 (中)	広辞苑 (二)
呼				他		他	両	自	他	他	両	両
誇				自	両	自	自	他	他	他	自	自
誤				自	自	自	自	他	他	他	自	自
こ				自	自	自	自	他	他	他	自	自
答				自	自	自	自	他	他	他	自	自
こ				自	自	自	自	他	他	他	自	自
ご				自	自	自	自	他	他	他	自	自
採				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
先				他	他	他	他	自	自	自	他	他
作				他	他	他	他	自	自	自	他	他
策				他	他	他	他	自	自	自	他	他
擁				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
査				他	他	他	他	自	自	自	他	他
誣				他	他	他	他	自	自	自	他	他
傷				他	他	他	他	自	自	自	他	他
さ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
作				他	他	他	他	自	自	自	他	他
歌				他	他	他	他	自	自	自	他	他
曲				他	他	他	他	自	自	自	他	他
食				他	他	他	他	自	自	自	他	他
サ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
触				他	他	他	他	自	自	自	他	他
賛				他	他	他	他	自	自	自	他	他
賛				他	他	他	他	自	自	自	他	他
サ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
グ				他	他	他	他	自	自	自	他	他
思				他	他	他	他	自	自	自	他	他
思				他	他	他	他	自	自	自	他	他
磁				他	他	他	他	自	自	自	他	他





[illegible]





	言 海	大 日 本	辞 苑	明 解	広 辞 苑 (一)	三 省 堂 (小)	角 川	新 選	岩 波	講 談 社	三 省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
増税する				自他		自他	自	両	自	自		
相談する							自	両	自*	自		
増炭する				自		自	自	両	自	自		
増反する				自		自	自	両	自	自		
増量する				自		自	自	両	自	自		
増賄する				自		自	自	両	自	自		
贈賄する				自		自	自	両	自	自		
疎隔する				自		自	自	両	自	自		
組閣する				自		自	自	両	自	自		
そ側る	他	他	他	自	他	自	自	自	自	自	他	他
反え	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
存続する				自		自	自	自	自	自		
存立する				自		自	自	自	自	自		
待機する				自		自	自	自	自	自		
剣す				自		自	自	自	自	自		
代言する				自		自	自	自	自	自		
対校する				自		自	自	自	自	自		
代行する				自		自	自	自	自	自		
代講する				自		自	自	自	自	自		
対質する	他	他	他	自	他	自	自	自	自	自	他	自
題す				自		自	自	自	自	自		
成刀する				自		自	自	自	自	自		
大任する				自		自	自	自	自	自		
帯退する				自		自	自	自	自	自		
待避する				自		自	自	自	自	自		
退避する				自		自	自	自	自	自		
代筆する				自		自	自	自	自	自		
代弁する				自		自	自	自	自	自		
対訳する				自		自	自	自	自	自		
代理する				自		自	自	自	自	自		
たえのぶ				自		自	自	自	自	自		
耐え	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
駄句				自		自	自	自	自	自		
妥結				自		自	自	自	自	自		
打算				自		自	自	自	自	自		



	言 海	大 日 本	辞 苑	明 解	広 辞 苑 (一)	三省 堂 (小)	角 川	新 選	岩 波	講 談 社	三省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
仲裁する				他		他	他	自	他	他	他	他
注射する				他		他	他	自	他	他	他	他
駐車する				他		他	他	自	他	他	他	他
抽象する		他	他	他	他	他	他	自	他	他	他	他
注腸する				他		他	他	自	他	他	他	他
躊躇する				自		自	自	自	自	自	自	自
注目する				自		自	自	自	自	自	自	自
注文する				他		他	他	自	他	他	他	他
中略する				他		他	他	自	他	他	他	他
中過する				他		他	他	自	他	他	他	他
超貢する				自		自	自	自	自	自	自	自
朝聴講する				他		他	他	自	他	他	他	他
彫刻する				自		自	自	自	自	自	自	自
超克する				自		自	自	自	自	自	自	自
調剤する				自		自	自	自	自	自	自	自
重疊する				自		自	自	自	自	自	自	自
調色する				自		自	自	自	自	自	自	自
徴税する				自		自	自	自	自	自	自	自
調味(聞)する				自		自	自	自	自	自	自	自
聴問する				自		自	自	自	自	自	自	自
調和する				他		他	他	自	他	他	他	他
直射する				自		自	自	自	自	自	自	自
直結する				自		自	自	自	自	自	自	自
沈下する				自		自	自	自	自	自	自	自
沈火する				自		自	自	自	自	自	自	自
沈鎮する				他		他	他	自	他	他	他	他
鎮定する				自		自	自	自	自	自	自	自
追善する				自		自	自	自	自	自	自	自
通水する				自		自	自	自	自	自	自	自
通達する				自		自	自	自	自	自	自	自
通風する				自		自	自	自	自	自	自	自
通謀する				自		自	自	自	自	自	自	自
通訳する				自		自	自	自	自	自	自	自

	言海	大日本	辞苑	明解	広辞苑(一)	三省堂(小)	角川	新選	岩波	講談社	三省堂(中)	広辞苑(二)
つかねる	他自	他自	他自	他自	他自	他自	他自	自自	他自	他自	他自	他自
つきあう												
つけ届け	自	自他	他他	他他	他他	他他	他自	自自	自他	他他	他他	他他
つちかう												
つかける		自他	他他	他自	他自	他自	他自	自他	他他	他自	他自	他自
つどう	自他	自他	自他	自他	自他	自他	自他	自他	他他	自他	自他	自他
つとめる												
つぶやく	自	自他	自他	自他	自他	自他	自他	自他	他他	自他	自他	自他
つめこむ		自他	自他	自他	自他	自他	自他	自他	他他	自他	自他	自他
露払い												
連れ	両	両	両	自	両	両	両	両	両	両	両	両
提案				自								
停車				自								
低唱				自								
停船				自								
遙増				自								
定置				自								
停留				自								
手加減				自								
摘心				自								
手助け	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
徹す				自								
撤退				自								
手抜き				自								
手解き		自	自	自	自	自	自	自	他*	自	自	自
てりかえ				自								
点火				自								
点眼				自								
点呼				自								
展翅				自								
転属				自								
転調				自								
点燈				自								
伝道				他								
伝導				他								

	言 海	大 日 本	辞 苑	明 解	広 辞 苑 (一)	三省 堂 (小) (二)	角 川	新 選	岩 波	講 談 社	三省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
伝聞する				自		自	両	両	他	両		
倒閣する				自		自	自	他	他	両		
透過する				両		両	自	他	他	他		
糖化する				自		他	他	他	他*	他		
投函する				自		自	自	自	自	自		
討議する				自		自	自	自	自	自		
投稿する				自		自	自	自	自	自		
倒錯する				自		自	自	自	自	自		
同情する				自		自	自	自	自	自		
投書する				自		自	自	自	自	自		
答申する				自		自	自	自	自	自		
倒置する				自		自	自	自	自	自		
同道する				自		自	自	自	自	自		
踏破する				自		自	自	自	自	自		
同伴する				自		自	自	自	自	自		
投薬する				自		自	自	自	自	自		
動揺する				自		自	自	自	自	自		
胴忘れする				自		自	自	自	自	自		
とがめする	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
独学する				自		自	自	自	自	自		
独吟する				自		自	自	自	自	自		
独裁する				自		自	自	自	自	自		
独酌する				自		自	自	自	自	自		
独特する				自		自	自	自	自	自		
独唱する				自		自	自	自	自	自		
得す		自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
特選する				自		自	自	自	自	自		
特戦する				自		自	自	自	自	自		
特発する				自		自	自	自	自	自		
得票する				自		自	自	自	自	自		
毒味する				自		自	自	自	自	自		
特約する				自		自	自	自	自	自		
戸締りする				自		自	自	自	自	自		
吐瀉する				自		自	自	自	自	自		
塗装する				自		自	自	自	自	自		

[illegible]







[illegible]



	言 海	大 日 本	辞 苑	明 解	広 辞 苑 (一)	三省 堂 (小)	角 川	新 選	岩 波	講 談 社	三省 堂 (中)	広 辞 苑 (二)
放射する				他		他	他	両	他	他		
射出する				他		他	他	両	他	他		
報償する				他		他	他	他	他	他		
防崩ずる	自	自	自	他	自	自	他	他	自		自	自
防雪する							他	他				
包帯する						自	他	他		自		
暴投する				自		自	他	他		他		
棒引きする				他		他	他	他	自	他		
放牧する				他		他	他	他	自	他		
抱擁する				他		他	他	他	自	他		
頬かぶる			他	他	他	他	自	両	他	自	他	他
募金する		自	自	他	自	自	自	他	自	自	自	自
墨書する	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
募債する							他	他	他	他	他	他
ほるもの							他	他	他	他	他	他
補す		他	他	他	他	他	他	他	他	他	他	他
発起する				他	他	他	他	他	他	他	他	他
発議する				他	他	他	他	他	他	他	他	他
発心する	他	他	他	自	他	自	自	他	自	他	他	他
欲す				自		自	自	自	自	自	自	自
補筆する						自	自	自	自	自	自	自
埋骨する				他		自	自	自	自	自	自	自
埋蔵する	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
ま問貸し				他		自	自	自	自	自	自	自
罷り越す		自	自	他		自	自	自	自	自	自	自
間借り				他		他	他	自	他	他	他	他
まきこむ		他	他	他	他	他	他	自	他	他	他	他
麻酔する	自	自	自	他	自	他	他	自	自	自	自	自
まちあぐ		自	他	他	他	他	他	自	自	自	自	自
まわる		他	他	他	他	他	他	自	自	自	自	自



[illegible]



原稿完成後に出た『岩波国語辞典』の第2版では、第1版にくらべ、下記のように修正されている。これらの項目には、前の表で\*印をつけた。

一貫する	他→両	おいつく	他→自	除草する	他→自	点火する	他→自
一変する	自→両	開業する	自→両	整地する	自→他	点呼する	名→他
移転する	自→両	懐妊する	他→自	製版する	自→他	伝導する	自→他
いどむ	他→両	加速する	自→両	精米する	他→自	討議する	他→両
いぶかる	自→他	起案する	両→他	絶叫する	自→両	動揺する	両→自
うちよせる	他→自	着替える	→他	漸増する	両→自	独裁する	他→自
影響する	他→自	助演する	他→自	増炭する	自→名	防音する	名→他

## 2. 自・他の決定に参考となる用例

あいがんする(哀願) [他]とぎれとぎれのその言葉から、嘉門は高にモルヒネの注射を  
でも哀願してゐるのだな、と私は不安になつたが、(冬の宿 56)

あおぐ(仰) [他]やはり、彼は吉野桜の花の梢を、振り返つて仰いだ、(帰郷 127)

○[他]伊庭が、三杯目のウキスキイを仰ぎながら、「結局どう云ふことになつたんだい」(多情仏心・前 116)

あがる(上) [他]「母様は何をあがるの」「私はペンよ。この頃」(伸子・上 140)

あくがれる(憧) [他]その関所の向こうの涼しい国をあくがれる力がなくなって、(出家とその弟子 71)

あこがれる(憧) [他]ニッポンのフジヤマをあらかじめ憧れてゐるからこそ、ワンダフルなのであつて、(富嶽百景 50)

○[他]少女時代を過したあの海沿いの町を、一人ぼっちの私は恋のようにあこがれている。(放浪記 187)

あせる(焦) [自]何だか気が焦る、今だ、今だ、と頭の何処かで喚く声がする。(平凡 90)

○[自]あせる氣を押し鎮め押し鎮め、顔色を動かさないだけの沈着を持ち続けようと勉めたが、(或る女・前 149)

○[他]そこで、結論をあせらずに、少しばかり我々の見聞をひろめることからはじめよう。(ものの見方について 18)

○[他]お島はさうも言つて氣をあせつた。(あらくれ 150)

あてこする(当擦) [他?]叔父は神経の遠くの方であてこすられたのを感じた風で、(或る女・上 51)

あびる(浴) [他]たつぷり水を浴びた屋根も燃えてゐさうには見えないのに、(雪国 170)

○[他]二人に別れて、やがて小糠雨を羽織に浴びながら、団子坂の文房具屋で原稿用紙を一帖買つてかえる。(放浪記 281)

あまんずる(甘) [自]温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじて居ることは時雄には何よりも情けなかつた。(蒲団 11)

○[他]又靈魂の救はれる事の爲めに肉体の死苦を甘んじると云ふ事がやがて死の讚美に思はれ、(青銅の基督 7)

あらそう(争) [自]しかしつい先日は貯金のことで、良人と争わねばならなかつた。(人間の壁・上 281)

○[他]雨が来ると、山蛭が水に乗つて来て、蠅と場所を争つた。(野火 133)

あわれがる(哀) [他]こゝのおかみさんは、おくみの氣立を哀れがつて、自分の血を享けたものゝやうによくして下さつた。(桑の実 8)



いよいよ(言寄)〔自〕昇翁の息子昇之助は美しい忍に何かと云い寄り、(平凡 1956年10月 101)

いがみあう(啗合)〔自〕何うせ此にゐても、母親と毎日々々啗みあつてゐなければならぬ。(あらくれ 39)

いかる(怒)〔自〕幾組かの肩越しにみえるその人物は、肩の怒つた青色の背広をきて、(冬の宿 131)

○〔他〕木部の友人等が葉子の不人情を怒つて、木部のとめるのも聴かずに、社会から葬つてしまへといしめいてゐるのを葉子は聞き知つてゐたから、(或る女・前 27)

いきどおる(憤)〔他〕その時、陵は友の為にその妻の浮薄をいたく憤つた。(李陵 192)

○〔他〕一番末の妹に附いてゐた乳母が両親の愛情の偏頗なものを憤つて密かに琴女を憎んでゐたといふ。(春琴抄 142)

いけいする(畏敬)〔他〕私は心のうちで常にKを畏敬してゐました。(こころ 195)

いたす(致)〔自〕「はッ、ありがとうございます、なんですか、午後から、少し、頭痛が致しまして……」(自由学校 116)

○〔他〕其日は民子は顔色がよく、はつきりと話も致しました。(野菊の墓 56)

いっかつする(一括)〔他〕防衛費と賠償費を一括したやり方は、(東洋経済新報 1956年1月14日 52)

いっかつする(一喝)〔他?〕「何をしとるカ」高い所に腰かけた警備巡査から、一喝された。(自由学校 366)

いっかんする(一貫)〔自〕イギリス人の場合は、論理さえ一貫しておればそれを直ちに客観的な知識であると見ようとする立場ではないということである。(ものの見方について 39)

○〔他〕理想とはその人の全生活を一貫すべき情熱である、(人格主義 21)

○〔他〕一方では教会の味方が敵かという対立が、政治的闘争の歴史を一貫している。(ものの見方について 103)

いっする(逸)〔自〕権力絶対主義はすでに理性以外に逸せる我儘の一種となる。(人格主義 135)

○〔他〕然しそれがために、私は機会を逸したと同様の結果に陥いつてしまひました。(こころ 192)

いってんする(一転)〔自〕それがとことんまで行くと、一転してフランスはナポレオンに率いられて国を挙げての対外戦争へと走ってしまった。(ものの見方について 18)

○〔自〕もう斯う心機が一転しては、彼様な女に関係してゐる気も無くなつたから、女とは金で手を切つて了つた。(平凡 138)

○〔他〕加治木は、長々と、彼の過去を語り、やがて、語調を一転して、(自由学校 226)

○〔他〕ことによると或は是が私の心持を一転して新らしい生涯に入る端緒になるかも知れないと思つたのです。(こころ 277)

いっふくする(一服) 〔自?〕深く一服して、送り出した煙を父親は林の中に見送つた。  
(綿郷 274)

○〔自〕「ぢやね、小父さんと阿母さんは、此処で一服してゐるからね、(あらくれ 17)

いっぺんする(一変) 〔自〕これは境遇によつて一変した人間が、さらにその境遇を一変せしめたのである。(貧乏物語 117)

○〔自〕駒井先生の入来と共に、育英学舎の面目は悉皆一変した。(思出の記・上 116)

○〔他〕もと漸進党の機関学校として温和な桃色の旗を掲げて居た学舎は、何時か旗幟を一変して濃い紅の色となつたのである。(思出の記・上 117)

○〔他〕諸国の経済組織はまさにその面目を一変せんとしつつある。(貧乏物語 102)

いっつわる(偽) 〔他〕自分はわざと斯んな真似をして己れを偽つてゐる愚物だといふ事に気が付くのです。(こころ 279)

いてんする(移転) 〔自〕手洗場の手拭、洗面所の手拭は、ちょっと油断していると、三畳の間に移転している。(厭がらせの年齢 302)

いどむ(挑) 〔自〕富沢氏は昨年、このナゾにいどんで一つの事実をつかんだ。(生命の暗号を解く 170)

○〔他〕……巨大な、真黒な、大熊のやうなものに向つて私は一生懸命に格闘を挑んでゐた。(冬の宿 146)

いぶかる(訝) 〔他〕そんな風に、いつか、駒子が、堀青年に対して、隔たりを失っているのを、読者は、訝つてはならない。(自由学校 53)

いんれいする(引例) 〔他〕最後にブラック(1882—)とピカソを二、三引例して全体の結びとしましょう。(美術手帖 1956年1月 31)

うかがう(伺) 〔自〕私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜ござんすか」と聞いた。(こころ 12)

うがつ(穿) 〔自〕山穿ちて入江潜み、江に沿ふて村もある。(思出の記・上 70)

○〔自〕或は此れが最も穿つた観察であるかも知れない(春琴抄 193)

○〔他〕彼は、何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つて居た。(思讐の彼方に 79)

○〔他〕県の審議会、顧問団といった手続きの方面では、微に入り細をうがって、とりきめている。(農業朝日 1956年7月 63)

うちかつ(打勝) 〔自〕一人の男に打ち勝つて、私は意気ようようと酒屋の二階へ帰ってきた。(放浪記 273)

○〔自〕貧苦に打ち克ち一と廉の名人となる程の者は生れつきから違つてゐる筈(春琴抄 183)

うちこむ(打込) 〔自〕亀山氏がタンパク質の合成に打ち込んでいるところ、もう一人の日本人がアメリカで、一つの仮説を考えていた。(生命の暗号を解く 168)

○〔自〕自分はむしろこれからも留守業務にうちこんで御奉公したいと思つている。(真空地帯・上 172)

○〔他〕審判官の合図があつて、大宮はまづ球をうち込んだ。(友情 78)

○〔他〕我々の潜む斜面に気紛れに自働小銃を打ち込んで行つた。(野火 107)

○〔他〕物事に耽り易い葉子は身も魂も打ち込んでその仕事に夢中になつた。(或る女・前 69)

○〔他〕新治はさほどの淋しさも感ぜず、土用波に揺られる舟の上で、親しい労働に身を打込んだ。(潮騒 149)

うちよせる(打寄) 〔自〕おしゃべりのあいまいに、板壁をゆるがす程ちかい所で、打ちよせる波の音がきこえていた。(人間の壁・上 35)

うつ(打) 〔自〕十一時が打つて間もなく、小きざみな、軽い後歯の音が静かな夜を遠く響いて来た。(蒲団 33)

○〔自〕六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいつばいに入れた平たい箱をもういちど手にもつた紙きれと引き合せてから、さつきの椅子の人へ持つて来ました。(銀河鉄道の夜 248)

○〔他〕電話室を出ると、茶の間の時計が八時を打つた。(真知子・前 170)

うったえる(訴) 〔自〕行商は浜で品物を見せるのが、いちばん海女たちの購買慾に訴へることを知つてゐて、わざとさう言ふ。(潮騒 126)

○〔自〕教養のある女も、ない女も、最後には、暴力もしくは、暴力的言辞に、訴えるのが、常ではないか。(自由学校 322)

○〔他〕彼女は自分の厄介になつてゐる家の人を訴へるわけにもいかなかった。(波 229)

○〔他〕それでも女は、額に脂汗を浮かせて下腹部の苦痛を訴へた。(本日休診 70)

うなづく(頷) 〔自〕諸将僚も之に頷いた。(李陵 164)

○〔他〕木下の母親もそれまでは断る元氣もなく、しぶしぶ承知の旨を肯いて見せた。(河明り 331)

うなだれる(項垂) 〔他〕職人は首を項垂<sup>うなだ</sup>れて溜息を吐いた。(あらくれ 167)

○〔他〕抗ひがたい運命の前にしづかに頭を項低<sup>うなだ</sup>れたまま、(風立ちぬ 127)

うらやむ(羨) 〔他〕葉子は心の奥底でひそかに芸者を羨みもした。(或る女・前 49)

○〔他〕斯う嘆息して、丑松は深く銀之助の身の上を羨<sup>うらや</sup>んだ。(破戒 163)

うれえる(憂) 〔他〕人に知られざることを憂へぬ蘇武を前にして、彼はひそかに冷汗の出る思ひであつた。(李陵 195)

うんでんする(運転) 〔自〕ストライキがなくて、工場が一ぱいに運転していても労働者には泣き泣きの年の瀬だった。(むらぎも 231)

○〔自〕渾ての機関は依然として旧のまゝに運転して居る。(思出の記・上 145)

○〔他〕この時、車を運転している海老塚氏が、突然声を發した。(未知の星を求めて 329)

うんぬんする(云々) 〔他〕尤もこの場合に、労働党も保守党も、「社会主義」という一定の思想体系を云々するわけではない。(ものの見方について 44)

えいきょうする(影響) 〔自〕子供の肉体の成長は、あきらかに精神の健康に影響し頭腦

の発達に影響する。(人間の壁・上 223)

えいずる(映) [自]其の時は唯自分等の陰翳が稍長く庭の土に映じて、月は隙間だらけの古ぼけた雨戸をほのかに白く見せて居た。(土・上 195)

○[他]島のように大小幾十隻の艦船から炯々たる光彩を大空まで映じ、まさに不夜城の現出である。(世界 1956年8月 76)

えきする(益) [他]若し自分の一死諸君を益する場合もあらば此命何時にても諸君の前に捧げん、と云ふ意を述べらるゝ時は、(思出の記・上 143)

えんずる(演) [他]自分が大勢の前で失敗を演じた以上にたまらなかつた。(波 45)

えんぜつする(演説) [自?] ステイブンソンは選挙本部において、意気銷沈している民主党員たちに向つてこう演説した。(日本及日本人 1953年7月 15)

○[他]昨日校長が生徒一同を講堂に呼集めて、丑松の休職になつた理由を演説したこと、(破戒 339)

えんりょする(遠慮) [他]二人はそれ以上立ち入るのをつい遠慮した。(むらぎも 121)

おいつく(追付) [自]あとから出て来た大滝老医師が、門のところで八春先生に追ひついた。(本日休診 94)

おうえんする(応援) [自]哲学的反省を有する優秀な科学者たちも自ら進んでこの声に応援した。(哲学以前 120)

○[自]金融筋は「放漫経営で馬脚を出し、金を借りたら居直る様な産業人はタタキ潰せ」と興銀-植村に応援しているが、(文芸春秋 1953年11月 164)

○[他]われわれは組合をあげて徹底的に諸君を応援する……(むらぎも 254)

○[他]選挙を応援して勝てばよし、負ければほとんど大抵の組合が候補者の落選ともにながつく。(世潮 1954年3月 44)

おうしんする(往診) [自]八春先生はこの患家にまだ一度も往診したことはなかつたが、(本日休診 67)

○[他]夜の九時ごろ、八春先生が急患を往診して帰つて来ると、(本日休診 76)

おうせつする(応接) [自]こんな手合と応接するのは、津上の毎日の日課の一つであつた。(闘牛 79)

○[他]社関係の訪問者はいつさい自宅では応接しないことにしてゐる津上だつたが、(闘牛 78)

おえる(終) [他]食事を終えて、店を出たのは、二時過ぎていた。(自由学校 65)

おこたる(怠) [他]縦ひ当番たりとも在宿して火の用心を怠らぬやうにいたせといふのが一つ。(阿部一族 60)

○[他]それに対して河井は、適当な返事を怠りはしなかつた。(真知子・前 145)

おこる(怒) [他]何だろう? 何を怒ってるんだろう? 何が杉岡を怒らしたのか全くわからぬまま、黒い唇からびりびりする声で怒鳴られて安吉は青くなってきた。(むらぎも 170)

○〔他〕おまへを怒る人なんかありやしないよ。(波 49)

おせんする(汚染) 〔自〕放射能に汚染した魚が、(東洋経済新報 1956年3月17日 24)

○〔他〕放熱面積が大きいこと、室内空気を汚染しないこと等、(婦人生活 1956年12月 99)

おそれる(恐) 〔他〕たしかに中堀中尉は林中尉をおそれていた。(真空地帯・上 189)

○〔他〕父は明らかに自分の病気を恐れてゐた。(こころ 117)

おそんする(汚損) 〔他〕油が多すぎるのも糸を汚損する心配がある。(ダイヤモンド 1956年5月12日 34)

おつかふせる 〔自〕「何が相変らずだい。」行介はおつかふせていつた。(波 8)

○〔自〕その二人の安否を問返す陵のよそよそしい言葉におつかふせるやうにして立政が再び言つた。(李陵 199)

○〔他〕女に対する男の覬覬、女の苟合などといふ葉子の敵を木村の一身におつかふせて、(或る女・前 211~212)

おっしゃる(仰) 〔自?〕「あゝ、瀬川君と仰るんですか。」(破戒 100)

○〔自?〕「え、子供をつれて一寸そこまで使ひに。——今のはモデルの女。」と青木さんは小さい声で仰る。(桑の実 20)

○〔他〕「王禅寺がどうなすつたの? あなた、今寝言をおつしやつてよ」(田園の憂鬱 94)

○〔他〕そんな弱い事を仰しやつちや不可せんよ。(こころ 126)

おとす(落) 〔自?〕二羽が尾と嘴と触れるやうに跡先に続いて、さつと落して来て、桜の下の方の中に這入つた。(阿部一族 28)

○〔他〕いまは秋の落日のなかに、黄色に染まつた空から黄金色の枯葉を雨のふるやうに落してゐた。(冬の宿 9)

おとづれる(訪) 〔自〕さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音信れた。(蒲団 83)

○〔自〕女房は夫の詞を聞いて、喜んで心尽しの品を取揃へて、夜更けて隣へおとづれた。(阿部一族 62)

○〔他〕この木部が度々葉子の家を訪れるやうになつた。(或る女・前 12)

○〔他〕父を斯の牧場に訪れたは、丁度足掛三年前の五月の下旬であつたことを思出した。(破戒 112)

おとなう(訪) 〔他〕新治はもう公然と宮田家の玄関をおとなふことができた。(潮騒 157)

おどる(踊) 〔自〕「お志保さんに?」丑松の胸は何となく踊るのであつた。(破戒 237)

○〔他〕あの高が、あんな風ななりをして、タンゴを踊つてゐるなどとは、あまりをかしいことで、本当とも思へなかつた。(冬の宿 132)

○〔他〕何か短いものを踊つてみせたりした。(多情仏心・前 146)

おもひこむ(思込) 〔自?〕清岡は何一つ疑ふ所もなく、心から君江に愛されてゐるものとばかり思込んでゐた。(つゆのあとさき 39)

○〔他〕この敏感な少年は母の彼への愛情に対する競争者と私を思ひ込んでしまったのだ。(冬の宿 152)

○〔他〕生きながらへるためには、どうしても完全に身を亡きものと思ひ込む必要があったのである。(李陵 180)

**おもいわずらう**(思煩) 〔自〕実をいふと、私はこの自分を何うすれば好いのかと思ひ煩らつてゐた所なのです。(こころ 49)

○〔他〕一生のことを思ひ煩ひ乍ら、丑松は船橋の方へ下りて行つた。(破戒 285)

○〔他〕近所への体裁や外聞を思ひ患つて、けなげらしく振舞つて家を出て来た者なのだ。(帰郷 77)

**おりかえす**(折返) 〔自〕それで専門家を連れ近日伺ふと男に手紙を出してやると、折り返して鉾区は既に他に譲渡したからといふ断りの返事が来た。(厚物咲 21)

○〔他〕事務長が音をたてゝ新聞を折り返した。(或る女・前 234)

**おわる**(終) 〔自〕刑が終つて中隊にかえると不規則になって腸をこわすものがあるから。(真空地帯・上 6)

○〔自〕写真が終つてから、皆は一万箱祝ひの酒で酔つた。(蟹工船 77)

○〔他〕木谷<sup>きたに</sup>上等兵が二年の刑を終つて陸軍刑務所から自分の中隊にかえってきたとき、(真空地帯・上 4)

○〔他〕その日の終り頃に、仕事を終つた漁夫が、気掛りで直ぐ便所のところへ行つたが、(蟹工船 33)

**かいぎする**(懷疑) 〔他〕若い一本気のときに、宗教を懐疑すると一緒に正直に教会から離れましたよ。(冬の宿 49)

**かいぎょうする**(開業) 〔自〕宿屋は三時に開業。お山へ客を送り出す。(文芸春秋 1953年7月245)

○〔他〕湯川の家内といふのは、先生が三雲産婦人科医院を開業して早々に、最初の第一番に来た患者である。(本日休診 54)

○〔他〕大正13年に仕出し屋魚竹を開業して以来三十余年、(婦人之友 1956年6月119)

**かいしゅうする**(改宗) 〔自〕かくてそれ迄は自ら洗礼をうけ、或は切支丹に厚意を持つてゐた西国の諸侯は幕府の嫌疑を怖れるが故に改宗し、切支丹の討伐にかゝつた。(青銅の基督 8)

**かいたいする**(懐胎) 〔他〕全くの処女となつて、そこに自らのうちに全く新たな真理を懐胎し出産せんとする悩みそのものである。(哲学以前 26)

○〔他〕その子供を懐胎したと考へられる期間、二月程の間といふもの、(波 162)

**がいたんする**(慨嘆) 〔自?〕「昔は八百円で売出されたんだがねえ」とガイタンしてもはじまらない。(文芸春秋 1954年6月53)

**かいちゅうする**(懷中) 〔他〕山道の往来に論語を懷中して、馬の口綱をとりながら子<sup>こ</sup>白<sup>はく</sup>学<sup>がく</sup>而<sup>して</sup>時<sup>とき</sup>習<sup>しう</sup>之<sup>を</sup>と誦する男である。(思出の記・上 19)

かいてんする(廻転) 〔自〕祝津の燈台が、廻転する度にキラツキラツと光るのが、ずうと遠い右手に、一面灰色の海のやうな海霧がきの中から見えた。(蟹工船 19)

○〔自〕別の細い野火は上が折釘のやうに曲つて、回転する磁石の針のやうに揺れてゐた。(野火 176)

○〔他〕そこで、ひそかに、首を回転してみると、彼女等は、すでに背流しを終り、各自に体を洗つてるところだったが、(自由学校 220)

かいにんする(懷妊) 〔他〕葉子はふと定子を懷妊つはうしてゐた時の烈しい惡阻の苦痛を思ひ出した。(或る女・前 115)

かくげんする(確言) 〔自?〕医師は、胸を打診し、舌を検べ、「さあこれで今度こそ大丈夫です」と確言かくげんした。(伸子・上 59)

かくもんする(学問) 〔自?〕もっとも、五百助の学生時代にも、あらゆる点で、学問する必要のない学生が、相当いた。(自由学校 206)

かくりする(隔離) 〔自〕いかなる国民或ひはいかなる国家も、世界の他の部分から隔離しては生きることができない。(心 1953年10月 11)

○〔自〕しかし他方面はますます隔離して、秦越の觀を呈するようになった。(総長就業と廃業 362)

○〔他〕是ぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ(こころ 117)

○〔他〕そしてきたない黒い粉はそと紙に包んで、白い粉から隔離しておいたものとします。(婦人朝日 1956年6月 66)

かせぐ(稼) 〔他〕手が利くところから仕立物などをして、小遣を稼いでゐた。(あらくれ 152)

○〔他〕いひなづけではなかつたにしても、彼の療養費を稼ぐために、ここで芸者に出たといふのだから、「真面目なこと」だつたにちがひない。(雪国 114)

かそくする(加速) 〔他〕電子を加速するにしても、(科学朝日 1956年3月 78)

かたどる(型) 〔自〕それでは、これに型どっていったら、我々日本人は一体どういうことになるだろう。(ものの見方について 16)

○〔他〕そばの紫檀の卓に飾つた、青銅のドームを型どつた古めかしい時計が、(真知子・前 203)

かつ(勝) 〔自〕實際角力に勝ちたいというより、私の気持ちでは自分の強さを父に感服させたいほうだった。(暗夜行路・前 16)

○〔自〕一人に勝つとは、千人万人に勝つということであり、それは要するに、己に勝つということである。(私の人生観 142)

○〔他〕最後の対明大戦を勝てば立教の優勝が確立するのだ。(野球界 1956年4月 149)

がっさくする(合作) 〔自〕古典劇を改造する原則の中に、必ず古典劇の老俳優と合作すること、協力すること、という原則がある。(世界 1956年1月 234)

がったいする(合体) 〔自〕すべての電子は次々と原子核と合体し、結局原子自身が消滅

するという運命を免かれないのである。(物質世界の客観性について 272)

○〔他〕社会学・社会人類学・社会心理学・臨床心理学の四つの部門を合体した、社会関係学部という新しい学部をつくった。(抵抗の科学 299)

**かっばする**(喝破) 〔自?〕彼等の尊敬する名人世阿弥が「能も当世当世と心得て、昔はかくなり心得べからず」と喝破した精神は、(中央公論 1953年8月 192)

**かどだつ**(角立) 〔自〕さゞ波が星を呼び出すやうに、海一面に角立つてゐる。(河明り 338)

**かみつく**(噛付) 〔自〕警棒で抱きかかへようとする、いきなり私の腕に噛みついて来ました。(本日休診 77)

○〔自〕その度にざわざわと白い波は材木に噛付いた。(波 74)

**からかう** 〔自〕靴をぬぐ間から女中にからかひながら、どやどやと表二階の広い座敷へ通る。(つゆのあとさき 61)

○〔自〕廊下を気取つて歩きながら、こつそり看護婦にからかつた。(真知子・前 19)

○〔他〕彼女は途方もない方面に浮上つて、行介をからかつた。(波 249)

○〔他〕進が真実小説の腹案を語るのやら、又は戯に自分をからかふのやら、(つゆのあとさき 97)

**からまる**(絡) 〔自〕地積は、案外に狭く、すぐ下は、崖になって、足のさきに、草が絡まった。(自由学校 153)

**かわる**(代) 〔他〕そんなら早月さんに席を代つて貰つたらいいでせう(或る女・前 119)

○〔他〕四年の間に、七度も学校をかわって、私には親しい友達が一人も出来なかった。(放浪記 6)

○〔他〕いまのうちに下宿をかわった方がいいとは思うが、(人間の壁・上 113)

**かんづく**(感付) 〔自〕彼等はもう今夜降誕祭のある事に感づいてそれを探りに行くのではなからうか。(青銅の基督 78)

○〔他〕小野田がどうかすると、その女のことを思ひ出して、裏店住ひをしてゐる、戸崎町の方へ訪ねて行くことを、お島もうすうす感づいてみた。(あらくれ 238)

○〔他〕而かもその最後から、涼しい色合のインパネスを羽織つた木部が続くのを感付いて、葉子の心臓は思はずはつと処女の血を盛つたやうに時めいた。(或る女・前 21)

**かんでいる**(鑑定) 〔他〕この考え方や見方が、新しくはいつてくるものを品定めし、鑑定して、取捨選択する濾過器の用をなしてきた。(ものの見方について 139)

**かんにんする**(堪忍) 〔他〕この母の行為で、お前たちの生涯をいさゝかでも損うことをかんにんしておくれ。(くれない 102)

○〔他〕伴子さんは私のこと、堪忍して下さいませわね。(帰郷 255)

**かんりょうする**(完了) 〔自〕観測の準備が完了したことを告げた。(未知の星を求めて 322)

○〔他〕西洋の画家たちが、まだ聖画もろくに描けないころ、東洋の画家たちは、すでに自然美の驚くべき表現を完了していた。(私の人生観 123)



かんわする(緩和) 〔自〕世界情勢は、その後スターリンの死、マレンコフ新ソ連政府の平和政策によつて緩和して来たけれども、(中央公論 1953年9月14)

○〔他〕いくらでもこれを緩和しようとする我々の切実な願望を(社会事情と科学的精神 124)

○〔他〕中共は極東における緊張を緩和するために、どんな役割を果たしたか?(改造 1953年9月61)

きかえる(着換) 〔他〕いつも殆んど着たきりの寝間着を、めづらしく青いブラウスに着換へてゐた。(風立ちぬ 82)

ききいる(聞入) 〔自〕勝手にしやべり合つてゐるのに聞き入つてゐるのがある。(蟹工船 14)

○〔自〕それにも拘はらず、掘貫井戸に湧く水の小さい囁きに、佇んで聞き入る日本人は多い。(帰郷 342)

○〔他〕そして、外の水の音を聞き入るやうな姿で、コニャックの盃を掌でかこつて、黙り込んでゐたが、(帰郷 346)

○〔他〕彼はそれを聞き入りながら、ついその口真似を口のなかでして、(田園の憂鬱 89)

きさんする(起算) 〔他〕じゃあいつから期間を起算するかということになると、(ジュリスト 1956年1月1日 67)

きそう(競) 〔他〕その流れと早さをきそうように、騎馬たちはまた狼啼山の麓まで駆け帰つていつた。(落城 25)

○〔他〕天鼓も嬉々として咽喉を鳴らし声を絞り絃の音色と技を競つた。(春琴抄 209)

きづく(気付) 〔自〕すると嘉門はふと、階下の物音に気付いたやうにして話をそらした。(冬の宿 126)

○〔自〕ところが屋敷は屋敷で私の眼が光り出したと気附いたのであらうかそれから殆ど私と視線を合さなくてすませる方向ばかりに向き始めた。(機械 24)

○〔他〕輝雄はずつと私を探偵のやうに付け狙つて、私の一挙一動をそつと観察してゐたのだな、それを自分は気付かずにゐたのだな、と思つた。(冬の宿 151)

○〔他〕今別れやうとする故郷は、少しも僕等の立去るのを気付かぬ様に、常にかはらぬ春の朝の装<sup>あした よろはひ</sup>をなして居る。(思出の記・上 41)

きどる(気取) 〔自〕船に乗りつけてゐる人々はどんなに気取つても歩きつきで判るのである。(河明り 255)

○〔他〕彼は固く口をつぐみ、こんな若さで偽善者を気取つてゐたのである。(潮騒 55)

○〔他〕僕は決してワアレン、ヘスチングスを気取る者ではない。(思出の記・上 29)

ぎゃくてんする(逆転) 〔自〕岡田首相が危地を脱出した二十七日夕から、形勢は逆転した。(特集文芸春秋 1956年 三代日本の謎 154)

きゅうぎょうする(休業) 〔他〕もう当分御飯を食べる事を休業しようかと思っています

のよ。(放浪記 284)

きよせいする(去勢) 〔他〕漫言子の説に従えば、まるで去勢されない宦官の支配を受けるようなもの。(総長就業と廃業 358)

きりこむ(切込) 〔自〕御馬頭桜沢逸作が十三名の手勢とともに騎馬で敵勢に斬り込んだのは、西の下刻である。(落城 36)

○〔自〕唐鍬の広い刃先が木の根に切り込む時には彼の身体も一つにぐさりと其の根を切つて透るかと思ふやうである。(土・上 98)

○〔他〕フロアや坐売の場所を一尺五寸平方ぐらい切り込んでおいて、その場所から出入りし、(商店界 1956年3月 50)

○〔他〕敵、面を切込む処を、裏より巻落して小手を切る。(読切小説集 1956年7月 272)

きんよくする(禁欲) 〔自?〕どうしても生命をかけて禁欲せねばなりません。(保健同人 1956年7月 58)

くいこむ(食込) 〔自〕ところどころに小さな沢が食ひこんだりしてゐた。(風立ちぬ 73)

○〔自〕その掴まり方は、彼女の指先が私の肩の肉に食ひ込んで痛い位だつた。(河明り 322)

くいる(悔) 〔他〕あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。(田園の憂鬱 11)

○〔他〕さうして心のうちで、何故先生の奥さんを煩はさなかつたかを悔いた。(ころ 99)

くぎんする(苦吟) 〔自〕瓢亭の若い女中さんは、苦吟しながら証文を書いてゐた。(本日休診 105)

くみあう(組合) 〔自〕後に落ちてゐる影が色々にもつれて、組合つた。(蟹工船 56)

○〔他〕すると行列はたちまち腕をくみあい、足を踏み鳴らして蛇行しはじめた。(人間の壁・上 343)

くらいこむ(喰込) 〔自?〕墜ちたりしたら、死なないまでも、今度は二年も喰いこむだらう(宝石 1956年6月 246)

くりだす(繰出) 〔自〕問屋といふのは便宜上の呼び方だが、そこからチンドン屋の繰り出す根拠地のことで、(文芸春秋 1953年7月 28)

○〔自〕佐土原勢は手負いのものゝあとからあとから新手がくり出して来た。(落城 26)

○〔他〕その頃から西国勢はどの攻め口にも新手をくり出して来た。(落城 34)

○〔他〕抜刀隊を繰り出し、小銃隊に掩護させた。(文芸春秋 1953年8月 245)

けいゆする(經由) 〔他?〕さらに鋼材の緊急輸入七十万トンのうち、スエズ運河を経由しないですむのは豪州物二十万トンだけであり、(実業之日本 1956年12月1日 41)

げきかする(激化) 〔自〕昭和三十年のはじめから、この抗争は激化した。(人間の壁・上 68)

○〔自〕五十四年一月から再び激化したラオスの戦いも(世界 1954年3月 9)

○〔他〕その従属性をますます強くすることは、日本国内における政治的対立をも一層激化することになる。(世界 1953年10月 48)

○〔他〕インドとパキスタンは、相互に対立を激化して、国力を浪費する結果になった。  
(中央公論 1953年 8月 277)

けしょうする(化粧) 〔自〕若い女は頬に化粧し、頬紅をさえつけていた。(落城 49)

○〔他〕川舟は風変りな屋形造りで、窓を付け、<sup>ふなづく</sup>舷から下を白く化粧して赤い二本筋を横に表してある。(破戒 170)

けついする(決意) 〔自〕進んで火に焼かれるほか、これにたいするどんな態度も迷いであると彼は決意したのではあるまいか。(私の人生観 102)

○〔自〕これ以上、この峠で、皮膚を刺す寒気に辛抱してゐることも無意味に思はれ、山を下ることに決意した。(富嶽百景 71)

○〔他〕象を避けるためこつそりと土地の小高くなつてゐる方へ移動することを決意した。(文芸春秋 1954年 6月 201)

○〔他〕退職を決意した二十三名の者で次のような申し合せができていた。(人生手帖 1953年 12月 51)

けっしんする(決心) 〔自〕相手が気がつくまで、いつまでもそこに突つ立つてゐてやろうと決心した。(波 174)

○〔自〕かう決心すると、彼は、一途に実行に着手した。(恩讐の彼方に 74)

○〔他〕是が非でもそこから三十万円の金を引張り出すことを決心した。(闘牛 97)

○〔他〕何人<sup>なんびと</sup>もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、独力此の大業に当ることを決心した。(恩讐の彼方に 74)

けつろんする(結論) 〔自〕しかしながらこのことによってさえもなお我々の民族が科学的精神において劣っていると結論するのは早計である。(社会事情と科学的精神 128)

○〔自〕必竟やくざだから遊んでゐるのだと結論してゐるらしかった。(こころ 116)

○〔他〕いわゆる「食物の欠乏のため彼らに向かつて授けらるる教育の効果を充分に受くることあたわざる状態」にあることを結論したのである。(貧乏物語 51)

○〔他〕あたかも過去何万年、人間は空中を飛べなかったからといって、飛行機の不可能を結論する者のごとく怠惰な論者である。(原子党宣言 417)

けむたがる(煙) 〔他〕却ってこれからさき、母親たちはこの先生をけむたがって、会合に出ても発言しなくなるかも知れないのだ。(人間の壁・上 196)

けんきんする(献金) 〔他〕衣類、家財を売って金にし、それを献金した。(世界 1954年 3月 244)

けんぶんする(見聞) 〔他〕またその娘が遂に流れ去つて行つた海の果ての豊饒を親しく見聞して来た私には、(河明り 341)

こいする(恋) 〔自〕で、私の性慾は雪江さんに恋せぬ前から動いてゐた。(平凡 94)

○〔自〕そんなに大学創立に熱心で、言わば大学に恋するような病であれば、必ず創業の際はうまくやるだろう。(総長就業と廃業 357)

○〔他〕彼は杉子を恋してゐることを白状した。(友情 17)

○〔他〕又女学生が野球選手を恋するのと変りがない。(つゆのあとさき 82)

こうえんする(公演) 〔他〕東京で公演したイブセン作『幽霊』が四月十三日から東京の俳優座劇場で再演されるが、それに先立ち三月三十一日から四月七日まで大阪労演主催で大阪の産経会館で公演される。(婦人公論 1956年5月 297)

こうさくする(工作) 〔自〕あらかじめ彼は、オウクリイに悪い噂が立つように工作しておいた。(別冊文芸春秋 1956年 56号 212)

○〔他〕美術的に工作された後世の鳥居。(日本及日本人 1954年1月 85)

こうさする(交叉) 〔自〕例の赤い襟が後で交叉して袖を短く扱あげる。(土・上 122)

○〔自〕巻いて編み巻いた目を長く引出して3目ずつ交叉させる。(婦人生活 1956年10月付録 あみもの全集 316)

○〔他〕クロス・アフガンは、前段の縦目を交叉して(婦人倶楽部 1956年3月付録 63)

こうじゅつする(後述) 〔他〕天ぶらの味じまんの店案内は後述しておいたから、参照されたい。(キング 1956年10月付録 103)

こうりゅうする(交流) 〔自〕それは唯一の社会と交流する場所だけれども、(学園評論 1953年11月 15)

○〔他〕それらの所信は、いささかも遲疑逡巡することなく極めて自然に交流されるのである。(中央公論 1953年9月 222)

こうれいする(号令) 〔自〕この立脚地に立つとき、国家の偉大とは必ずしも富強の力によつて他国に号令することではない。(人格主義 144)

○〔他〕彼等はともに、我々の生活の中心を占領して其処から四方を号令する實力を持つことが出来ないであらう。(人格主義 33)

ここうする(呼号) 〔他〕張はこれをしぶり、南北の決戦を呼号しつつ、一方で国民政府との妥協を考えていた。(中央公論 1954年4月 192)

こころづく(心付) 〔自〕勘次は直にお品の病氣に心付いて慍ういつた。(土・上 36~37)

○〔自〕が、同時に一方思いがけない気持ちの自分に起こっている事に心づいた。(暗夜行路・前 223)

○〔他〕お袋はお品をまだ子供のやうに思つて迂濶にそれを心付かなかつた。(土・上 66)

○〔他〕往來の向こう側を歩いていたのを知っていた事を今さらに心づいた。(暗夜行路・前 264)

こしょうする(呼称) 〔他〕モスクワがすでに一種の地上楽園の実現を呼称していた一九五〇年には、(中央公論 1954年2月 81)

こぞる(挙) 〔自〕「お島さんお島さん」と云つて、周囲の人が、こぞつて自分を崇めてゐるやうにも見えた。(あらくれ 44)

こたえる(答・応) 〔自〕必ず君の期待に応えるし、女教師全体の期待に添うように努力する。(人間の壁・上 262)

○〔他〕彼女は、事実を答えたが、平さんは、頑として、主張をまげなかった。(自由学校 267)

○〔他〕いま弁償すると云つてもらつても具合が悪いといふやうな意味のことを答へた。(本日休診 118)

こだわる 〔自〕彼はさっき<sup>けんしけん</sup>軍師拳の遊びを始めた時から自分の武骨な手にこだわっていた。(暗夜行路・前 35)

○〔他〕そして杉子のわきにあることをこだはらないではゐられなかつた。(友情 6)

こぶさたする(御無沙汰) 〔自〕俺が久しく君の処に御無沙汰してゐるのは君が想像するやうに、君の揶揄ひに憤慨しての事ぢやない。(青銅の基督 103)

○〔他〕近頃は新宿方面を主にして、有楽町をこぶさたしてるのは、事実である。(自由学校 142)

さえぎる(遮) 〔他〕傍にゐる私はむづがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にも行かないので、黙つて聞いてゐた。(こころ 134)

さえざる(囀) 〔他〕エー、ピー、シーを囀る横では、其れは犬である蟻はすねを持つと訳をつけ、(思出の記・上 208)

さがす(探) 〔他〕行介は手探りで電燈を探し、スキッチをひねつた。(波 11)

さきんずる(先) 〔自?〕食事を後にして、人に先んじねばならなかつた。(自由学校 184)

○〔他?〕戦略爆撃に数歩を先んじている米空軍は(日本及日本人 1954年3月11)

さくずする(作図) 〔他〕前はウエスト切替えなしとし、腰にフラップポケットを作図します。(主婦と生活 1956年4月付録 外出着とブラウス 86)

さくていする(策定) 〔他〕そこで緩衝地帯を策定する、という議論だつた。(日本週報 1956年12月5日5)

さけぶ(叫) 〔他〕田川夫人の面前で帽子を高く挙げて万歳を叫んだ。(或る女・前 79)

○〔他〕植物ウイルスの重要性を叫ぶ声も、ようやくあがってきて、(生命の暗号を解く 157)

ささやく(私語) 〔他〕秘密に、と思へば思ふ程、<sup>なほなほ</sup>猶々其を私語<sup>ささやく</sup>かすには居られなかつたのである。(破戒 258)

さしひかえる(差控) 〔自〕姪のお秀は始終、つましやかに差控へて居るだけ。(オール読物 1956年4月331)

○〔他〕五百助も、ムゲに、断わるのを、差控えたが、(自由学校 228)

さしひく(差引) 〔他〕総売上金三百三十万円、百万円の支出を差引いて二百三十万円が純利益となる。(闘牛 113)

さずかる(授) 〔自〕いつかわたくしのやうな者にも、氣立てのよい、美しい花嫁が授かりますやうに!(潮騒 24)

○〔他〕世間でも、人生でも、万事よろしくやっしていける能力を、授かってる女だよ、あの女は……(自由学校 281)

○〔他〕三十分乃至一時間稽古を授かり帰宅後日の暮れまで習つて来たものを練習する。(春琴抄 158)

サボる 〔他〕今朝はうちの班長殿、ねばうして、点呼をさぼらはりました……(真空地帯・上 72)

○〔他〕「俺ア仕事サボるんだ。出来ねえ。」——炭山<sup>あま</sup>だつた。(蟹工船 70)

さわる(触) 〔自〕私は門を出がけに手にさわった柵の枝を折って、門司まで持って行ったのを覚えています。(放浪記 294)

○〔他〕片手で膝のところをさわって「えへへ……」と笑った。(むらぎも 85)

○〔他〕手を触るさへ暑くるしい、旅の法衣の袖をかゝげて、表紙を附けた折本になつてのを引張り出した。(高野聖 6)

さんせいする(賛成) 〔自〕慈善事業に賛成するのも其為である。(破戒 124)

○〔他〕前にお栄がこの事をいい出し、尾の道から彼がそれを賛成した時に、(暗夜行路・前 233)

○〔他〕この実現の線にそうものとして国家連合をわれわれは賛成する。(原子党宣言 416)

しあんする(思案) 〔自?〕私は斯う云つて、心のうちで又遠くから相当の医者でも呼んで、一つ見せやうかしらと思案した。(こころ 112)

○〔他〕お品は二人を出し薄暗くなつた家にぼつさりして居ても畑の収穫を思案して寂しい不足を感じはしなかつた。(土・上 40)

しいする(思惟) 〔他〕思惟されたもの(思惟内容)は既に思惟主体に対する客観であり、(哲学以前 57)

○〔他〕とにかく我々は現実の非合理性を極めて深刻なものと思惟すべき理由を持つ。(人格主義 39)

じかいする(自戒) 〔他〕もっとも一方には、企業なり労組なりに密着しすぎて社会学のワクを越える危険性を自戒する学者もいる。(学問の動き 266)

じきゅうする(自給) 〔他〕戦前の日本はとにかく食糧を自給しえたのであるが、(文芸春秋 1953年7月60)

じきょうする(自供) 〔自〕吉岡が最初から素足だったと自供したため、(日本週報 1956年5月10日 13)

○〔他〕扇動班の首領でもあったことを自供した。(週刊読売 1956年9月9日 79)

しこうする(思考) 〔自〕理工共通の研究に従事する学者を招聘するに尽力せねばなるまいと思考し、(総長就業と廃業 362)

○〔他〕その意味の相違は、精神が思考し感じ意欲する主体であるのに対して、物質が思考せられ感ぜられ意欲せられる対象であるところにある。(人格主義 53)

しさくする(思索) 〔他〕私は、武蔵という人を、実用主義というものを徹底的に思索した、おそらく日本で最初の人だとさえ思っている。(私の人生観 141)

じさつする(自殺) [自]それから老人や女は自殺し、幼いものは手ん手に刺し殺した。  
(阿部一族 61)

じしゅうする(刺繡) [他]割竹を並べて上げた床には、花模様を刺繡した洋風のクッションのほか、何もなかった。(野火 54)

じしゅする(自首) [自]市九郎が有司の下に、自首しようかと云ふのを止めて、(恩讐の彼方に 70)

じちようする(自重) [自]また失礼だが榮養の方だつて十分とはいえないのだから、あくまで自重して下さい。(群像 1956年 8 月 67)

○[他]優れた価値を持ちながらその価値を自重することを忘れた者も、(人格主義 125)

○[他]開銀の延滞元本返済計画に若干ムリがあつたため復配を自重した。(東洋経済新報 1956年 7 月14日 85)

じちようする(自嘲) [他]「歯がよく切れる」のを自嘲する当時のインテリの類廃は、中原から最も遠いものである。(別冊文芸春秋 1956年 50号 198)

じつげんする(実現) [自]たださへ人を信じ得ず、時々自分の疑惑が実現するのを見て、一種の誇りさへ抱いてゐる多計代は、(伸子・上 198)

○[自]もしも改正が実現すれば、これを根幹として、日本中の教育行政は全部変わってしまう。(人間の壁・上 346)

○[他]娘の一日も早い帰島を実現しなければならぬと思つた。(潮騒 150)

○[他]動物学の専門家でもないこの人が、サルのエサづけという奇想天外のプランを考えついて、それを実現してしまつたということは、(高崎山 17)

じっせんする(実践) [他]しかもこの理論を実践しつつあるソヴィエト聯邦と直接に境を接する近隣において、(社会事情と科学的精神 127)

○[他]教え導く側の大人の方にはただ頭の中にあるに過ぎないものを、子供たちには実践するように要求するというわけである。(ものの見方について 171)

じったする(叱咤) [他]白髪まじりの先輩が、母校短艇部の一大事とばかりに馳せ参じて、若者を叱咤しながら昔とったオールを握ってコーチにつくようなもので、(ものの見方について 171)

じつついする(失墜) [他]彼がせっかくの人気をば一朝にして失墜せんことをおそれ、ぜひに沈黙を守らんことを切諫した。(貧乏物語 166)

じっばいする(失敗) [自]他のいろいろの方策が実際に失敗している今日、自分もまたこの方策よりほかはないと考える。(ものの見方について 54)

○[自]もし私が今度の選挙に失敗すれば、最早につちもさつちもいなくなる。(破戒 190)

○[他]いろいろの障碍のために五回も渡航を失敗している。(私の人生観 90)

じっぴつする(執筆) [他]全篇の趣向をそのまま現代の世相に当てはめた通俗小説を執筆して、或新聞に連載した。(つゆのあとさき 21)

しつもんする(質問) 〔自?〕すると女の年始は大抵十五日過だのに、何故そんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。(こころ 236)

○〔他〕兵隊たちは外出のこととなると、既にわかりきっている同じことを、繰り返し繰り返し質問するのだ。(真空地帯・上 98)

じとくする(自得) 〔他〕このことは頭で理解しようとするれば容易ではないが、物を創り出そうと仕事をしている芸術家自身は、よく自得しているところでしょう。(私の人生観 133)

じにんする(自認) 〔他〕アメリカでは、モダンな自認するミトロブーロスが譜面を手に入れて、(知性 1956年7月 38)

○〔他〕形式と言語の古さを敢て自認したところから生まれる、方法への新しい考慮など(短歌 1956年4月 119)

じにんする(辞任) 〔他〕後同十年十二月枢密顧問官に任ぜられて貴族院議員を辞任し(日本及日本人 1953年8月 98)

じふする(自負) 〔他〕十七世紀の形而上学体系は、真理を単に自負してその批判を忘れていた。(哲学以前 119)

○〔他〕彼は昨日兵隊の所持金をしらべたときすでに大体見当はついたと自分の直観のあやまらなかったことを自負した。(真空地帯・上 185)

じまんする(自慢) 〔他〕橋の下の開拓者であることを、爺さんが自慢してるのも、ウソでないかも知れなかった。(自由学校 178)

○〔他〕自分は其金を土台として今は此近在に「旦那々々」と立てらるゝ身になったことを自慢するのが常である。(思出の記・上 188)

しむける(仕向) 〔自〕小さい時から母親がさう仕向けてくれたので、「たんぼぼ」の店が開かれなくとも、いつか、自分で始めたいと夢みてゐたものである。(帰郷 170)

○〔他〕葉子はその時十九だつたが、既に幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手際よく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは十分に持つてゐた。(或る女・前 10)

しもんする(諮問) 〔他?〕原子力委員会から諮問された諸問題についてわれわれの見解をのべ、(中央公論 1954年6月 178)

しゃげきする(射撃) 〔他〕夜、河を横断しようとするジャンクを射撃しました。(改造 1954年6月 211)

しゃべる(喋) 〔他〕僕は紙切れを手にして、どんな空想をしゃべったか、もう少しも覚えていない。(私の人生観 69)

○〔他〕彼は標準語を巧みに喋った。(潮騒 21)

じゅうそくする(充足) 〔他〕在庫が一応充足されれば増大テンボもゆるむのではないかと(時の法令 1956年9月3日 33)

じゅうでんする(充電) 〔他〕ちょうど電池を充電するみたいにナ……(週刊東京 12月15)



日33)

しゅごする(守護) [他]まずすべての人によってこれを守護するの必要に迫られたのである。(貧乏物語 160)

しゅさいする(主宰) [他]シンガポール邦字雑誌社の社長で、南洋貿易の調査所を主宰してゐる中老人が、(河明り 295)

しゅさいする(主催) [他]今度の闘牛大会を主催するといふただそれだけの事が、(闘牛 75)

じゅしょうする(受賞) [他]日本人としてはじめてのノーベル賞を受賞して、敗戦に打ちひしがれた日本人の血を沸かせた湯川秀樹氏。(物質の根源と宇宙を結ぶ 100)

しゅつえんする(出演) [自]邦楽座の舞台上で活動写真の幕間に出演する木村の技芸を見た時から(つゆのあとさき 81)

じゅっかいする(述懐) [自?]しかし、仁科氏は終戦の時、「ぼくもまた研究生活に帰れる。長い間の無駄を取り返せる。戦争が終わって、本当によかった」と述懐した。(物質の根源と宇宙を結ぶ 101)

しゅっかする(出荷) [他]六〇双の高級品、八百三十円という品が、目立つて出荷されている。(ダイヤモンド 1956年8月11日 28)

しゅっぱんする(出品) [他]片野はこの一兩年来展覧会に菊を出品しなかつた。(厚物咲 37~38)

じゅんびする(準備) [他]彼は帯剣だけを準備して巻脚絆を忘れてきた一等兵に不満を感じた。(真空地帯・上 7)

しょうかくする(昇格) [自]村会議員は新しく津田山市ができた当座は、そのまま市会議員に昇格したのであったが、(人間の壁・上 29)

○[他]明治四十二年ごろになって、大阪医学校を医科大学に昇格してはどうかと、牧野文部大臣が市民にはかったところが、(総長就業と廃業 343)

しょうする(称) [自]然しながら若い衆と称する青年の一部は勘次の家に不断の注目を怠らない。(土・上 165)

○[自]学校に行くとき称して恋人の許に寄りはせぬかと思ふと、(蒲団 44)

○[他]ソクラテスは自らの天職をその母の職業になぞらえて産婆術と称し、自らを助産者に譬えていた。(哲学以前 28)

○[他]其処に夏を過ぎしに来る外人たちがこの谷を称して幸福の谷と云つてゐるとか。(風立ちぬ 145)

しょうどうする(聳動) [自]一時世間の耳目を聳動させた疑獄事件に連坐して刑罰を受けた。(つゆのあとさき 79)

○[他]偶然に起つた彼の破廉恥な行為が俄に村落の耳目を聳動しても、(土・上 165)

じょうほする(譲歩) [自?]軽い、てれた笑ひで、倉子は終に娘の百五十本説に譲歩しながら、未亡人に云つた。(真知子・前 201)

○〔他〕どの点を譲歩するつもりかということも考えておくべきであると（世界 1953年 12月 4）

しょうめつする（消滅）〔自〕すべての電子は次々と原子核と合体し、結局原子自身が消滅するという運命を免かれないのである。（物質世界の客観性について 272）

しょうりょうする（商量）〔他〕一人の町会議員は其金質を、一人は其重量と直径とを、一人は其見積りの代価を、いづれも心に商量したり感嘆したりして眺めた。（破戒 18）

しよくはつする（触発）〔他〕ジラフ、虎、ライオン、それぞれを見ていろんな感想を触発された。（むらぎも 160）

○〔他〕多くの刺戟に触発される都会の少年の環境とはちがつて、（潮騒 18）

しれいする（指令）〔他〕一九二七年周恩来が南昌で暴動を起すことを彼に指令した時に、（中央公論 1954年 5月 181）

しんがいする（震駭）〔自〕此分で行けば行々は日本の文壇を震駭させる事も出来ようかと思つた。（平凡 104）

しんきする（振起）〔他〕生の勇気を喪失せずに益々これを振起する努力が必要である。（人格主義 172）

しんぼうする（辛抱）〔他〕息子は父と新しい母との生活を数ヶ月辛抱した。（厚物咲 31）

すうはいする（崇拜）〔他〕僕は、女性を崇拜したいんです。（自由学校 64）

すきこのむ〔好好〕〔自〕姉は自分から好きこのんで、貧しいこの植木職人と一緒になつたのであつた。（あらくれ 55）

○〔自〕でも、好き好んで芸者なぞになるものぢやないわね。（生まざりしならば 206）

すごむ（凄）〔自〕たまには蹴られると、ちよつとすごんで、『オレの方に質問させないなら勝手にしろ、その代りどんなことが起きてもオレは知らんゾッ』とドスを利かせましたが、（文芸春秋増刊 1954年 2月 44）

すすりあげる（嘔上）〔自〕奈何して私は斯う物に感じ易いんでせう。」と奥様は嘔り上げた。（破戒 252）

○〔自〕彼女は個の横顔に自分の顔を押しつけたまま、嘔りあげて泣き出した。（伸子・上 99）

○〔他〕お経の間、シーンとしてゐた。誰か鼻をすゝり上げてゐる。（蟹工船 88）

○〔他〕医師は私より五歳年少の馬鹿である。食虫類のやうな長い鼻に、始終水漬をすゝり上げてゐる。（野火 171）

すべりだす（滑出）〔自〕見送りに来た者の顔を窓に見て、自動車は滑り出した。（帰郷 318）

○〔他〕蛸は、不承不承、昼寝の最中を起された人のやうに、全身を這り出してうづくまつた。（潮騒 16）

すます（澄・済）〔自〕楽しさうに、而かも十分奥様ぶつて済まして出て行つた。（真知子・前 19）

○〔自〕彼はすました顔をつくっていた。(真空地帯・上 13)

○〔他〕外の足音ばかり搦えようとし、神経を澄していた。(くれない 126)

○〔他〕うつろな耳で、それでも彼は庭の何処からか聞えてくる一匹の蟬の声に耳をすましてゐるやうにみえた。(李陵 202)

**せいしする**(静思) 〔他〕彼等が提供する事実と挙証とを、静思して見る必要はあるであらう。(人格主義 180)

**せいせいする**(生成) 〔自〕秩序が生成するのは系の外からエネルギーの供給があることにもとづく。(生命の謎はどこまで解けたか 181)

**せいめいする**(声明) 〔自〕今日では、明治時代は誤れる時代と声明してはばからなかった。(革命期における思惟の基準 144)

○〔他〕昨日いったことと反することを今日いって置きながら、自分の立場の変化を声明した人間を聞いたことがない。(革命期における思惟の基準 144)

**せいようする**(静養) 〔自〕うちへ帰つて静養するんだ、静養させなかつたら人権蹂躪だ、と怒鳴りちらしてをります。(本日休診 70)

**せく**(急) 〔自〕新治は急いてゐた。(潮騒 104)

○〔自〕彼女はだんだん気がせいてゐた。(真知子・前 123)

○〔他〕婆やはやつと、おくみがお午の後じまひをしてゐるところへ、気を急いた容子で帰つて来た。(桑の実 44)

○〔他〕金子伍長は走ってきたのか息をせいていて、ひどくあわてこんでいたが、(真空地帯・上 194)

**ぜつきょうする**(絶叫) 〔自〕歩きながら渠はかう絶叫して頭髮をむしつた。(蒲団 5)

○〔他〕今となつては、祖先から承け継いだ市の習慣を破壊して、新たに大学設置を絶叫すべき時期でなくなった。(総長就業と廃業 348)

**せっけんする**(節儉) 〔自〕私は到頭耐らなくなつて、しかし何故だか節儉して、十円の半額金五円也を呈して、不覺又敬意を表して了つた。(平凡 130)

**せっしょくする**(接触) 〔自〕かれらがはじめて野生のサルに接触したのは、やはり都井岬であった。(高崎山 30)

○〔他〕ヤンワリと、彼の背と尻とを、争う二つの肉体の中心点に、接触する運動を起した。(自由学校 193)

**ぜつする**(絶) 〔自〕穎異人に絶するの、二葉より芳しのと云ふが、(思出の記・上 5)

○〔自〕火は防いだが、沮洳地の車行の困難は言語に絶した。(李陵 160)

○〔他〕言語を絶した混乱のあまり彼は茫然と壁によりかかつた。(李陵 174)

○〔他〕一切の思惟を絶し一切の意欲を絶した純粹感情自体の活動形式である。(哲学以前 254)

**せりあう**(競合) 〔自?〕論理的に精緻というよりは犀利な直観力をもつ思想が、相互に競り合い、自己を主張しているというのが、(ものの見方について 108)

○〔自?〕今はただ二頭になつて後をかなり離して鼻でせり合つてゐる一つは、たしかに嘉門の賭けた馬である。(冬の宿 189)

**せりだす**(迫出) 〔自〕大方、にやけ野郎にベタついて、子供時分のよだれをもういつべん垂らしやがつたので、<sup>べつ</sup>臍の上がせり出したのだらう。(あにいもうと 139)

**せんえんする**(遷延) 〔自〕ソヴェート同盟と合衆国との間の協力を幾月も幾年も遷延させたかも知れないのです。(平和 1953年7月 57)

**ぜんそうする**(漸増) 〔自〕受注は漸増し業績も若干好転しそうだ。(東洋経済新報 1956年4月21日 92)

○〔他〕軍備の重荷を課しその上にこれを漸増することを期待したり、(中央公論 1954年6月 46)

**せんてんする**(宣伝) 〔自〕おれは共産黨員だと自分で宣伝しているような者にろくなものはない。(人間の壁・上 138)

○〔他〕これをもっとも宣伝されたのが、いつも若い人のいうことをよくきいていた後藤守一先生で、(旧石器の狩人 314)

**そうしつする**(喪失) 〔自〕倫理の本から幸福論が喪失したといふことはこの混乱を代表する事実である。(人生論ノート 15)

○〔他〕この日を境として、日本の民衆は選挙権の一つを喪失した。(人間の壁・上 355)

**そうしんする**(送信) 〔他〕これはでたらめな雑音を送信したとて、テレビに意味のある画像が生ずることがないことからただちに理解できる。(生命の謎はどこまで解けたか 181)

**そうしんする**(増進) 〔自〕世界を遠視した新進気鋭の士に待たなければ大阪の繁栄は増進しない。(総長就業と廃業 347)

○〔自〕機械の発明のためにわれわれの生産力は一躍して千倍万倍に増進したわけである。(貧乏物語 71)

○〔他〕各個人がその私益私欲をほしいままにするという事がやがて公共の利益、社会の繁栄を増進するゆえんであると説いたものである。(貧乏物語 96)

○〔他〕福利の価値あるはそれが人格の価値を増進するところにある。(人格主義 142)

**そうだんする**(相談) 〔自?〕この五人が、八春先生のゐる前で、滝さん所有にかかる「東京近郊遊覧案内」といふ古ぼけた地図をひろげ、明日はどこに行かうかと相談した。(本日休診 43)

○〔他〕昼飯をすましてから明日からのことをかれらは相談した。(むらぎも 126)

**そかくする**(疎隔) 〔自〕共産党がはじめ大いにリードし、やがて社会党ともブルジョア党とも次第に疎隔してゆき、(ものの見方について 102)

**そかくする**(組閣) 〔他〕第三次伊藤内閣は、この年一月十二日に組閣されたのであるが、(人生手帖 1954年5月 27)

**そなえる**(備) 〔自〕敵の捕虜が、匈奴軍の強いのは、漢から降つた李將軍が常に兵を練り

軍略を授けて以て漢軍に備へさせてゐるからだと言つたといふのである。(李陵 185)

○〔自〕冬に備えることを、爺さんは、警告するのである。(自由学校 188)

○〔他〕五百助にないものを、同じ年頃なのに、辺見は、残らず備えてるような気がした。(自由学校 71)

そる(反) 〔自〕身体がびりびりと撼ぎながら手も足も引き締められるやうに後へ反つた。(土・上 48)

○〔他〕「相変らずだね。」と、島村は首を反つて、どこかをかしいやうで少し中高な円顔を、真近に眺めた。(雪国 97)

そんぞくする(存続) 〔自〕かうして芝がいつまでも存続してゐるやうに、身体質は毎代に生殖質から分れて各個体となるので、(波 323)

○〔自〕人類が人類として存続する限り、恐らく変ることがないであらう。(人格主義 26)

○〔他〕極端なる場合についていへば、それはまた必ずしも永久にその形体を存続することでもない。(人格主義 144)

○〔他〕ところが大宮御所に在わした貞明皇后さまが、大正時代の女官制度をそのまま存続し、名残りを惜しまれていた関係上、(特集文芸春秋 1956年 天皇白書 87)

そんりつする(存立) 〔自〕もともと個別的に存立するバラバラの思想を自分が中心になって繋ぎとめているのであるから、(ものの見方について 49)

○〔自〕どうしても井上と手を握らずには船会社は存立しないことがよく判つた。(文芸春秋 1954年 5月 285)

たいきする(待機) 〔自〕昨日の失敗にこりて、通用門の内側に待機していた警官たちは、手のくだしようがなかった。(人間の壁・上 347)

○〔他〕落ちつき払って、亭主が頭を下げて帰ってくるのを、待機してる顔つきである。(自由学校 190)

だいげんする(代言) 〔自?〕娘が答へようとしないので、松木ポリスが手帳を見ながら代言した。(本日休診 47)

だいこうする(代行) 〔他〕私は神の怒りを代行しなければならぬ。(野火 64)

だいする(題) 〔自〕すなわち試みに蜜蜂の詩の末尾に置かれたる「教訓」と題する短詩を見るに、その末句は次のごとくである。(貧乏物語 96)

○〔他〕ベルグソンが、彼のある著書を「思想と動くもの」と題した時、動くものについて動くように語る人は少ないと断言できただろうと思う。(私の人生観 135)

たいせいする(大成) 〔自〕当時は僧籍にあることは絵師として大成するには大事な条件であった。(私の人生観 94)

○〔他〕「政令一途に出て、王政維新を大成する」ためであったと述べているが、(エコノミスト 1956年 10月 20日 41)

たいにんする(退任) 〔自〕退任したある重役は、(東洋経済新報 1956年 9月 29日 56)

たいひする(待避) 〔自〕山梨へ向う汽車の中で空襲にあい、待避した小屋の中で、(平凡

1956年5月 280)

○〔他〕一二列車を待避した旨の赤間自白に符合すること。(世界 1954年3月 155)

だいひつする(代筆) 〔他〕お昼、ベニの履歴書を代筆してやる。(放浪記 202)

だいべんする(代弁) 〔他〕むろん政党は、それが代表する階層や民衆群の利害を代弁することによって、互に対立するのは当然のことであるが、(ものの見方について 177)

たえしのぶ(耐忍) 〔他〕彼女等はその子供のために、子供を正しく教育してもらうために、新しい時代の新しい人民として教育してもらうために、この苦難を耐え忍んでいたのだ。(人間の壁・上 342)

○〔他〕それでは何の為に斯うした惨澹たる日々をたへ忍んでゐるのか?(李陵 194)

たえる(耐) 〔自〕とつさに津上の肩に纏りたい衝動に耐へながら視線をなほもリングの上に投げてゐた。(闘牛 153)

○〔自〕ある日、伸子は苦しみに堪へられなくなつたので、(伸子・上 200)

○〔他〕大きなおなかを抱へて、苦しいのを堪へて、いちいち会ふ思ひつたらなかつたよ(伸子・上 142)

○〔他〕自分は淋しさをやつとたへて来た。(友情 127)

だけつする(妥結) 〔自?〕むしろ、領土問題をウッチャッて早々と妥結した方がいいという考え方も生まれて来る。(東洋経済新報 1956年1月21日 22)

だけつする(妥決) 〔自〕したがつて捕虜問題が妥決した今となつては(日本及日本人 1953年8月 62)

たたえる(湛) 〔自〕堀には動かない水が空を映して湛へて居る処がある。(土・上 115)

○〔自〕色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛へて居る。(野菊の墓 10)

○〔他〕せきとめられた濠の水は清冽な雪笹山の流れ清水を満々とたたえていた。(落城 15)

○〔他〕婦人は眼もとに笑みをたへながらいつた。(波 348)

たたずむ(佇立) 〔自〕長いこと丑松は千曲川の水を眺め佇立んで居た。(破戒 285)

たたみかける(畳掛) 〔自〕「丈は高いか、低いかな」と、実之助は畳みかけて訊いた。(恩讐の彼方に 83)

○〔他〕暴間をたたみかけて得々たる豪傑もあり、(思出の記・上 112)

○〔他〕新婦の紋附や長襦袢が、屏風の蔭に畳みかけたまゝ重ねられてあつたりした。(あらくれ 66)

たちぎきする(立聞) 〔他〕お鳥はふとそれを立聞きしたりなどすると、堪へがたい圧迫を感じた。(あらくれ 15)

だっきゃくする(脱却) 〔自〕患者は人事不省から僅かばかり脱却して、生あくびをした。(本日休診 98)

○〔他〕人間の限界を越えて無限に自己を拡大せむとするロマンティズムを脱却して

来る。(人格主義 164)

だっしゅつする(脱出) 〔自〕時として、五百助は、満身の力をこめて、この鉄格子をネジ曲げ、そのすきまから脱出したい欲望に、襲われる。(自由学校 362)

○〔自〕自分自身はどうしてもニヒリズムから脱出することができないのである。(人生論ノート 103)

たてまつる(奉) 〔他〕酒屋の旦那様と人々から奉られてゐた時分にも、(厚物咲 23)

○〔他〕何となく気味のわかつた姻戚の伊達政宗迄が思ひがけない奥羽での切支丹迫害の報告書を奉つた時、(青銅の基督 6)

だでんする(打電) 〔他〕彼は演説を終つて後、アイゼンハワー元帥に祝福のメッセージを打電した。(日本及日本人 1953年7月 15)

たのしむ(楽) 〔他〕「いい実り、触つても気持のいい稲だわ。去年とは大変なちがひだわ。」と、稲の感触を楽しむやうに目を細めた。(雪国 118)

○〔他〕生活を楽しむ者はリアリストでなければならぬ。(人生論ノート 125)

ためす(試) 〔他〕机のふたの具合をためして見る。(人間の壁・上 87)

ためらう(躊躇) 〔自〕返事にためらつてゐる私を見た時、奥さんは「教師？」と聞いた。(こころ 90)

○〔他〕だからあなたも今度も、一度でも子供のことで別れることをためらつたことがないでしょう。(くれない 94)

たんしゅくする(短縮) 〔他〕第一、それだけ、彼女の自由時間を、短縮することになる。(自由学校 17)

だんずる(談) 〔他〕恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、其の態度が総て一変して、(蒲団 6)

たんそくする(嘆息) 〔他〕私は一人旅の旅宿の語らなさを、<sup>わたしひとりたび りょしゆく つま</sup>染々歎息した、(高野聖 7)

ちかくする(知覚) 〔他〕夜も昼も、時間を本能的に知覚するふしぎな才能を代りにもつてゐる。(潮騒 118)

ちぢれる(縮) 〔自〕髭の毛も自然に縮れてまっ黒い。(むらぎも 169)

チャーターする 〔他〕いま船は暹羅の塩魚を蘭領印度に運ぶためにチャーターされてゐるから、(河明り 294)

ちゃくしょくする(着色) 〔自〕移植して生れた白卵が齊一に濃く着色したことは、(自然 1956年9月 53)

○〔他〕味加減をみて不足のものを加え、キャラメルを入れて着色します。(若い女性 1956年12月 187)

ちゅういする(注意) 〔自〕彼は又彼で、自分の事に一切を集中してゐるから、私の表情などに注意する暇がなかつたのでせう。(こころ 238)

○〔他〕私は、もしやと思って、太陽の方向を注意したが、格別異常は認めなかった。(未知の星を求めて 323)

- 〔他〕木部は段々監視の眼を以て葉子の一挙一動を注意するやうになつて来た。(或る女・前 15)
- ちゅうこくする(忠告) 〔他〕彼は近いうちにもう一度米子を訪ねて、よく養生することを忠告して貰ひたいとさへ云つた。(真知子・前 133)
- ちゅうしゃくする(注釈) 〔自?〕ちやうどこの辺に、このとほりに、こんなに大きく、こんなにはつきり、このとほりに見えます、と懸命に注釈するのである。(富嶽百景 53)
- ちゅうしょうする(抽象) 〔他〕科学的態度はいわゆるそのままの具体的な事実を或る方面から抽象し切断して見る見方であり、(哲学以前 143)
- ちゅうちよする(躊躇) 〔自〕絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない。(蒲団 17)
- 〔他〕彼一人放つぱり出して行くのも心残りのやうな気がして返事を躊躇してゐるところへ、佃が入つて来た。(伸子・上 75)
- 〔他〕そこまで行くと船員ですらが中に這入るのを躊躇した。(或る女・前 144)
- ちゅうもくする(注目) 〔自〕近代科学の言う自然の正確な observation とは、自然の合法則性だけに注目するという意味合いがある。(私の人生観 108)
- 〔自〕木谷は歩調を取って頭を右に向け、向うからやってくる軍刀の将校に注目した。(真空地帯・上 6)
- 〔他〕しかし、それにしては、その取上げる問題が非常に卑近で、やさしいということ、注目しなければならぬのではあるまいか。(ものの見方について 21)
- 〔他〕われわれは本観測に先立ち、暫くの間肉眼で東の地平線を注目した。(未知の星を求めて 332)
- ちゅうもんする(注文) 〔他〕安吉が目で知らせて二人はそのゆで小豆屋へはいつてゆで小豆を注文した。(むらぎも 198)
- ちゅうわする(中和) 〔他〕やはり現実動いている米ソの対立を緩和し、これを中和しようという政策へ曾禰君の方が歩み寄られたことで、(世潮 1954年3月 90)
- ちようかする(超過) 〔他〕しかし教室は生徒の定員五十名をはるかに超過して、六十人ちかいすし詰め学級になっているのではないか。(人間の壁・上 328)
- ちようこうする(聴講) 〔他〕十五日も前に、英文学と社会学を聴講する届をしたきり父の病気で放つてあつた。(伸子・上 61)
- ちようこくする(彫刻) 〔他〕功績表彰の文字を彫刻した名誉の金牌を授与されたのである。(破戒 18)
- ちようじようする(重畳) 〔自〕熱帯の陽の下に単調に重畳した丘々を、視野の端に意識しながら、(野火 45)
- ちようみする(調味) 〔他〕かんびょうは塩少しと砂糖で調味して、煮汁に薄く食紅をとき込み、きれいな薄紅色に煮ます。(婦人生活 1956年8月付録 日本料理 175)



ちようわする(調和) 〔自〕私の持つて帰るものは父とも母とも調和しなかつた。(こころ 64)

○〔自〕思想の違いは軽くみて、利害の相違のみに重点をおき、その相違を調和させ妥協させようとするのであるから、(ものの見方について 52)

○〔他〕彼の考えは、第一にはキリスト教、第二にはデモクラシー、第三には社会主義、という三つの思想を調和した形でできていると見てよい。(ものの見方について 34)

○〔他〕陰と陽を調和することを第一の任務としていた太政大臣の監督によつて、(日本及日本人 1954年3月 95)

ちよくしゃする(直射) 〔自〕烈日が土偶<sup>どぐう</sup>のやうに盛固<sup>もりかた</sup>めた砂の上に直射してゐた。(波 399)

ちよっけつする(直結) 〔自〕キリスト教と社会主義とは、やかましく言えばやはりなかなか直結しないのである。(ものの見方について 35)

○〔他〕全ソ中央消費組合連合とわが国の生活協組連合を直結する協組貿易が開始されたことも、(エコノミスト 1956年8月11日 28)

ちんかする(鎮火) 〔自〕ところが、数日経っても鎮火せぬこのストライキに引ずられるようにしてストライキ支持声明を出して以来、(ものの見方について 116)

ちんていする(鎮定) 〔他〕ソヴェトの新しい指導者たちは、徐々に極東の各地の熱い戦争を鎮定して行き、(中央公論 1954年1月 120)

つうたつする(通達) 〔自〕強ひて彼等にながらへてゐると云ふのは、通達した考ではないかも知れない。(阿部一族 39~40)

○〔他〕中堀中尉は書類の形式にこり、各中隊に対しては用紙の節約をきびしく通達していたにもかかわらず、(真空地帯・上 173)

つかねる(束) 〔他〕彼としては手を束ねて溝に落ちた子供を見てゐることはたまらなかつた。(波 70)

つきあう(付合) 〔自〕嵐の日、前夜からつづつた強風に、責任を重んじる燈台長の徹夜につきあつた母子は、朝寝をした。(潮騒 72)

○〔他〕あの方にお相客を願つてさ、ちよいと晩御飯だけ附合つて頂くことになつてゐるんだがねえ……(多情仏心・前 58)

つちかう(培) 〔自〕花を賞せんとする者は、必ずその根につちかうことを忘れてはならぬ。(貧乏物語 49)

○〔他〕今の教育は子供の育つ力をつちかつてやる、子供に悟らせる、そういう教育なんです。(人間の壁・上 186)

つかける(突掛) 〔自〕伸子は、喉<sup>のど</sup>につかけてくるやうなときめきを感じながら、力一杯のびをした。(伸子・上 152)

○〔自〕まるでそつちへわざわざ突つかけるやうに車が向いて行つてしまふんだ。(群像 1956年2月 44)

○〔他〕広介も下駄をつっかけて通りまで送ってくる。(くれない 35)

つどう(集) 〔自〕其処に集ふ色々の靈魂は、この神の恩寵を讃美して飽くことを知らない。(人格主義 164)

つとめる(勤・努) 〔自〕娘は会社に勤め、男の子は会社の給仕をしながら夜間中学に通つてゐるさうである。(本日休診 90)

○〔自〕あたかも理学がその啓発に務めたようになっている。(総長就業と廃業 361)

○〔自〕さて暫くしてから歯をくひしばつて己を落ちつけようと務めるのである。(李陵 181)

○〔他〕八春先生の執刀で、伍助院長が助手をつとめた。(本日休診 108)

○〔他〕何が起らうとわれわれは清水を送ること、それを専一につとめるべきだ。(波 68)

○〔他〕そしてこの頃は逢つても知らん顔をすることを努めてゐた。(友情 4)

つぶやく(呟) 〔他〕そんなことを呟きながら、私も彼女と同じやうに寝られさうもない自分を寝つかせに、自分の真つ暗な部屋の中へはひつて行つた。(風立ちぬ 137)

○〔他〕伸子は呻くやうに彼の名を呟いた。(伸子・上 92)

○〔他〕何か呪を呟く妖婆のやうにも見えた。(田園の憂鬱 54)

つめこむ(詰込) 〔他〕床のなかで朝の新聞を読み終ると、健一郎は旅行鞆をとり出して、肌着やワイシャツなどを詰め込んだ。(人間の壁・上 299)

つれる(連) 〔自〕テープを握ったまま船の動きにつれて突堤の群衆が走る。(むらぎも 147)

○〔他〕先生は時々奥さんを伴れて、音楽会だの芝居だのに行つた。(こころ 25)

ていあんする(提案) 〔他〕かれらは動物園と実験用サル供給センターをふくむ理想的研究所の設立を提案した。(高崎山 45)

ていしゃする(停車) 〔自〕汽車は、いかにも山麓らしい、物置小屋と大してかはらない小さな駅に停車した。(風立ちぬ 91)

ていしょうする(低唱) 〔他〕鼻音で、カルメンの讃を低唱しだした。(多情仏心・前 152)

てっする(徹) 〔自〕教師という仕事に徹して、自分にやれるだけはやらなくてはならない。(人間の壁・上 331)

○〔他?〕彼は昼の勤めが終ると夜を徹するばかりにして六法全書と格闘しつづけたのである。(厚物咲 17)

てったいする(撤退) 〔自〕ところが占領軍が撤退し、日本の独立が回復されてから、政府の方針は次第にかわって来た。(人間の壁・上 103)

○〔自?〕李陵は即刻此の地を撤退して南へ移ることにした。(李陵 158)

てりかえす(照返) 〔自〕白粉の斑にこびりついたやうな額のあたりが、屋根から照返して来る日光に汚らしく見えた。(あらくれ 183)

○〔自〕新築の白っぽい木地には白熱ガスのケバケバしい強い光が照りかえしていた。

(暗夜行路・前 30)

○〔他〕雨にぬれた往来が街の灯りを美しく照りかえしていた。(暗夜行路・前 83)

○〔他〕熱帯の狂はしく繁つた緑が、どぎつく陽を照り返してゐるばかりであつた。  
(野火 50)

でんどうする(伝道) 〔他〕熱心にその計画の有益かつ必要なことを伝道したところ、  
(貧乏物語 114)

でんぶんする(伝聞) 〔他〕監督官庁としてもできる限りの配慮をしているということを  
伝聞しているが、(商店界 1956年3月 68)

とうかんする(投函) 〔他〕この手紙をまだ投函しないという事でお迷うようでは不愉快だという気持ちから、(暗夜行路・前 185)

とうぎする(討議) 〔他〕社会文芸研究会をこれからどうやって行くかを討議するための、  
(むらぎも 179)

とうさくする(倒錯) 〔自〕それをもう一度行ひたいといふ願望の倒錯したものではあるまいか。(野火 69)

どうじょうする(同情) 〔自〕お前のお栄さんに対する気持ちには同情する。(暗夜行路・前 191)

○〔他〕お人よしで、何も気がつかずにいる友だちがそれをしきりに心で同情している。  
(暗夜行路・前 22)

とうしょする(投書) 〔他〕君江が内股の黒子の事を、村岡に云付けて街巷新聞に投書させたのであつた。(つゆのあとさき 44)

○〔他〕「種蒔く人」に短文を投書してそれが活字になつたり、(文芸 1956年5月 45)

とうしんする(答申) 〔他〕改善すべきを改善すべく具体案を指示するの必要を答申した  
以上は、(日本及日本人 1954年4月 17)

とうはする(踏破) 〔他〕主要なる位置を占むる教室主任が、雑作なく来意を示すにおいては、大難関はすでに踏破した気持がした。(総長就業と廃業 366)

どうはんする(同伴) 〔他〕よって日教組指令第四号にもとづき、全組合員はこの大会に父母を同伴し参加せよ。(人間の壁・上 332)

どうようする(動揺) 〔自〕李陵の心は流石に動揺した。(李陵 200)

どうわすれする(胴忘) 〔他〕平井のやつ、また歓迎会を胴忘れたナ……(むらぎも 76)

とがめる(咎) 〔自〕「此の肉刺はとがめえか」おつぎは手の平の処々に出た肉刺を見て心配相にいつた。(土・上 88)

○〔自〕私がお師匠様に打ち明けなかったのがいけなかったのです。私はいつも心がとがめていました。(出家とその弟子 168)

○〔他〕私は父をとがめる気は少しもありません。(出家とその弟子 103)

どくしょうする(独唱) 〔他〕そこで、ビールが出ると、ジーナは立つて伊太利の民謡を独唱し、興を添へた。(オール読物 1956年6月 154)

とくする(得) 〔自〕それに秩父丸には勿体ない程の保険がつけてあるんだ。ボロ船だ、沈んだらかへつて得するんだ。(蟹工船 27)

とそうする(塗装) 〔他〕まつ白な壁、天井も白で塗装されているが、これは古い習慣にすぎない。(別冊小説新潮 1956年4月 258)

どなる(怒鳴) 〔自〕私も大きな声でどっかにいい男はないでしょうかとお月様に唼鳴りたくなってきた。(放浪記 48)

○〔他〕やけに大声で「スト、ン節」をどなつた。(蟹工船 72)

とびちがう(飛達) 〔自〕ちひさな冬の蠅は斯の部屋の内に残つて、窓の障子をめがけては、あちこちあちこちと天井の下を飛びちがつて居た。(破戒 222)

とりひきする(取引) 〔他〕例えば、植物学者には恐らく三角形の内角の和は問題になるまいし、経済学者には古生物は取引されまい。(哲学以前 86)

○〔他〕一昨年のように不作であった年は、一貫目千円を超えて取引されたといわれます。(農業世界 1956年4月 91)

とりみだす(取乱) 〔自〕昂子はいつになく少し取乱してゐた。(波 205)

○〔他〕男が或る機会には手傷も負はないで自分から離れて行く……さういふいまいましい予想で取り乱されてゐた。(或る女・前 174)

○〔他〕ほんたうに私は今夜気を取り乱してゐたのですわ。(冬の宿 77)

○〔他〕昨夜脱ぎ捨てた着物や、解きすてた帯紐に取乱されてゐる裏二階の四畳半は、(つゆのあとさき 87)

どんかする(鈍化) 〔自〕一般に上昇率は鈍化しても尚繁榮は続くであろうという見方が多い。(エコノミスト1956年1月21日 61)

ないこうする(内攻) 〔自〕危険が到来せずその予感だけしかない場合、内攻する自己保存の本能は、人間を必要以上にエゴイストにする。(野火 8~9)

ないていする(内定) 〔自〕毎日入りが内定したのでは、同じく日石の中野健一遊撃手があゝる。(サンデー毎日 1956年11月18日 5)

ながす(流) 〔自〕通りを流す哀れなちやるめらの音の中に秋の夜は更けて行つた。(青銅の基督 34)

○〔他〕食う事にも困らないものだから、あの人達は街にジンタまで流している。(放浪記 35)

なぎたおす(難倒) 〔他〕ものにつかまりながら、何度も薙ぎ倒されて、船橋に辿りついた安夫は、船長にその旨を報告した。(潮騒 143)

なさる(為) 〔自〕あなたも節約して電車になさいよ。矢さん。(つゆのあとさき 24)

○〔自〕「王禪寺がどうなすつたの? あなた、今寝言をおつしやつてよ」(田園の憂鬱 94)

○〔他〕しかし、それほど聞かれて悪い話なら、何故あたしの寝てるそばで、あんな話をなさつたの。(波 271)

なまける(怠) 〔他〕「ええか。こいつ読んでも、仕事怠けんつて約束せるか」(潮騒 98)  
 なやむ(悩) 〔自〕それでなくとも就職難に悩んでゐる今日だから、と未亡人も云つた。

(真知子・前 203)

○〔他〕のみならずついには、罪を自覚するのも悩みを悩むのも我ならぬ神だと感じられてくる。(哲学以前 252)

につくりする(荷造) 〔他〕味噌や醬油などを荷造した荷馬が、町に幾頭となく立駢<sup>たちなら</sup>んで、(あらくれ 114)

にらまえる(睨) 〔他〕涙に濡れた目もとで、お澄は、優婉<sup>やさなら</sup>みに叔母を睨まへながら莞爾<sup>にっこり</sup>した。(多情仏心・前 202)

にんずる(任) 〔自?〕この夫妻はかなり芝居通を以て任じてゐるらしいが、(波 174)

○〔他〕彼は陵を右校王に任じ、己が娘の一人をめあはせた。(李陵 187~188)

ねころぶ(寝転) 〔自〕彼は、ゴロリと、その上に寝転んで、ライターの火を消した。(自由学校 153)

○〔他〕日と雨に反り返った濡れ縁に、良人の南村五百助が、大きな体を長々と寝転んで、日向ボッコをしてる。(自由学校 6)

ねじこむ(捻込) 〔自〕本人よりも親父がカンカンに腹を立て、捻ち込んだ(春琴抄 191)

○〔自〕あの人をつるしあげたり、藤沼都長官にねじ込んだり、おてんばだったわね。(人間の壁・上 289)

○〔他〕彼は膝がしらで四つ匍に歩きながら座敷へあがつて財布を懐へ掘ち込んでふいと出た。(土・上 93)

ねちがえる(寝違) 〔他〕由香子は、翌朝、肩が痛かつたり、首筋を寝ちがえていることが多かつた。(中央公論 1954年3月 282)

ねつえんする(熱演) 〔他〕珍しくアバズレ役を熱演する香川、(サンデー毎日 1956年10月 21日 77)

ねんざする(捻挫) 〔他〕東京の映画女優が近ごろどこそこで、右足を捻挫したことも知つてゐた。(潮騒 43)

のりかえる(乗替) 〔自〕信濃町で、国電を降りて、都電に乗り代えると、小さな車体の隅から、彼女に対して、帽子を脱いだ男があった。(自由学校 69)

○〔他〕船で走って上海に行く。そこで船をのりかえて揚子江をのぼって行く。(むらぎも 135)

のりきる(乗切) 〔自〕さうして十分肥つて脂肪が乗り切つた頂上に取り出されて、丸焼にして諸方へ送られる。(真知子・前 83)

○〔他〕日清、日露の戦争を乗切って飛躍してゆくだけの、大きなエネルギーを展開することができた。(ものの見方について 167)

○〔他〕彼は逆流を乗切る時のやうに頭を前に突出し、(波 32)

のりつける(乗付) 〔自〕船に乗りつけてゐる人々はどんなに気取つても歩きつきで判る

のである。(河明り 255)

○〔自〕自分の昨日の伴がもつと目立つやうな服装をし、河井たちの如く自動車で乗りつけてゐたならば、(真知子・前 82)

○〔自〕こんなところに、車で乗りつけるものは、殆どないだけに、いよいよやつて来たなと彼は観念してゐた。(波 117)

○〔他〕富士見町の待合野田家の門口へ自動車を乗りつけた三人連。(つゆのあとさき 60)

○〔他〕腹いせに騒いで邪魔をしてやろうと、突然自動車を乗りつけたのである。(つゆのあとさき 83)

**のりとおす**(乗通) 〔他〕青木さんは、汽車と言へば西洋ではそちこちと長い汽車を乗り通してうんざりしたといふお話をなさる。(桑の実 112)

**はいかする**(倍加) 〔自〕盲目になつてからの彼の労苦は以前に倍加した。(春琴抄 206)

○〔他〕真正な愛によつて自己の所有を隣人にわかつとき、その愛は我々の欠乏に堪へる力を倍加し、(人格主義 120)

**はいかんする**(廃刊) 〔自〕平民新聞は頻々たる禁止、裁判、同志の入獄、財政の窮乏のために、ついに三十八年一月末をもって廃刊し、(エコノミスト 1956年11月3日 57)

**はいしゃくする**(拝借) 〔他〕で、失礼と思ひつつ、遂に一ヶ月の旅の間、君の名を拝借しました。(冬の宿 171)

**はいしゅつする**(輩出) 〔自〕女流作家がかくも輩出した時代はめずらしい。(週刊東京 1956年9月29日 63)

○〔他〕戦後の分野は急速に発展し、つぎつぎとノーベル賞学者を輩出した。(生命の暗号を解く 147)

**はいする**(廃) 〔他〕結局は、土地と生産手段の私有を廃して、それを民主的にコントロールされた国家の手にゆだねるという方策が必要になってきた。(ものの見方について 54)

**はいぞうする**(倍増) 〔自〕売上げは十億円で前々期比微減したが利益は五千二百万円と倍増し。(エコノミスト 1956年9月22日 76)

○〔他〕志村化工はこの十月から、能力を倍増する。(ダイヤモンド 1956年10月9日 62)

**はいぞくする**(配属) 〔他〕対潜水艦警戒新鋭機「ネブチューン」、二機が羽田着、海上自衛隊に配属された。(週刊読売 1956年3月25日 14)

**はいりょする**(配慮) 〔他〕革命の前衛としての党と大衆との結びつきをこまかく配慮しながら、理論水準の高い論文・報告に一貫して努力してきている。(中央公論 1953年8月 290)

**はいれいする**(拝礼) 〔自〕時宗廟の階の下に立つて、内陣に向つて拝礼すると、(帰郷 127)

**はいかいする**(破壊) 〔他〕むしろ教育を破壊するものであつて、まるで犬を馴らしている

ようなものだとは僕は考えるわけです。(人間の壁・上 192)

はくねつする(白熱) 〔自〕それが口火になってかえつて議論が白熱したというような例もある。(中央公論 1954年5月 47)

はげむ(励) 〔自〕もはや安心して教職にはげむことが出来るはずであった。(人間の壁・上 103)

○〔他〕勘次は次の年には殆ど自分一人の手で農事を励まなくてはならぬ。(土・上 65)  
はさんする(破産) 〔他〕其年の春に父は一家を破産し、其年の秋に僕は父を喪<sup>うしな</sup>つたのである。(思出の記・上 5)

はじいる(恥入) 〔他〕たゞたゞ自分の早合点を恥ぢ入るばかりだ。(多情仏心・前 353)

はしゅつする(派出) 〔他〕二日午前二時五十分、松野議長は根本官房長官に対し、五百名の警官を派出してくれることを要求した。(人間の壁・上 350)

はじる(恥) 〔他〕彼等は、過去の無智を恥ぢた。(思讐の彼方に 79)

パスする 〔自〕試験にパスして、いきなり部隊副官兼人事課長に抜擢されるなんて、めぐまれすぎてゐるわ。(世界 1956年4月 250)

はたらきかける(働掛) 〔他〕どのような悪を働きかけられても、それをゆるさねばならない。(出家とその弟子 181)

○〔他〕反対実行委は村当局を介し大根布の実行委復帰を働きかけ、三者合同の懇談会がもたれた。(世界 1953年11月 108)

はたらく(働) 〔他〕二人は、窮するに連れて、悪事を働かねばならなかつた。(思讐の彼方に 62)

はつおんする(発音) 〔他〕「K子、といふことにしときませう。」と嘉門は得意らしくKの字を発音した。(冬の宿 116)

はつかする(発火) 〔自〕廊下に立って見送る未亡人の耳に、まもなくモーターの発火する音がきこえ、それがたちまち遠くなった。(人間の壁・上 110)

はつげんする(発言) 〔他〕桎梏から解放され、自由に思うことを発言している。(新潮 1956年1月 62)

はつどうする(発動) 〔自〕もう一つ、五百助が迷惑なのは、そういう駒子の戦後の変化が、果して、彼女の本心から発動したか、どうかという点にある。(自由学校 131)

○〔他〕国連理事会で、拒否権を発動して十八カ国一括加盟を蹉跎させた国民政府が、(キング 1956年3月 214)

はっぱうする(発砲) 〔自?〕「鉄砲の音は痛快ね」と娘は云つて、しきりに当もなく発砲して貰つた。(河明り 318)

はつれいする(発令) 〔他〕農業、商業、軽工業の全般にわたつて矢継早に政府の決定が発令された。(中央公論 1954年1月 182)

はてる(果) 〔自〕日向の海岸はいつ果てるともなく長い。(高崎山 19)

○〔他〕了海、身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。(思讐の彼方に 86)

はなしあう(話合) 〔他〕二人はゆつくり落付いて、左右いふ事を話し合ふ訳にも行かないのですから。(こころ 244)

はなしかける(話掛) 〔他〕さき子が何を話しかけても、微かに首を縦にふるか、横にふるだけで一語も発しなかつた。(闘牛 143)

はにかむ 〔他〕男と並んで歩くのをはにかむやうなのは一人も無くなつた。(蒲団 11)

はばたく(羽搏) 〔自〕船を追つてついて来てゐた一羽の鷗は、ふいに高く翔けあがり、その翼は鉄塔をこえて羽搏いた。(潮騒 56)

○〔他〕わが心と行いは、常に、大いなる自由の翼を、羽ばたきたい。(自由学校 270)

はばむ(阻) 〔他〕駒子は、少し、色をなして、叔父の言葉を阻んだ。(自由学校 76)

はびこる(蔓) 〔自〕土のなかに蓄へられた彼等の滋養分も彼等の根もとに蔓つた名もない雑草に悉く奪はれた。(田園の憂鬱 29)

はらむ(孕) 〔他〕その子供をはらむと、学生は国に帰つてしまひ文通はなかつた。(あに いもうと 136)

はりこむ(張込) 〔自〕新宿と上野に張り込んでいる刑事に連絡した。(オール読物 1956年 12月 65)

○〔他〕今日の式をあげるための御祝儀のつもりなら、十万円ははりこんだわけだ。(小説新潮 1956年 3月 208)

はりだす(張出) 〔自〕そのところで電車レールのカーヴが一番大きく張り出していた。(むらぎも 214)

○〔自〕西へ耳のやうに張り出した半島から成立つてゐる。(野火 105)

○〔他〕街角の電信柱に、初めて新聞が張り出された。(放浪記 186)

○〔他〕家々の庇を長く張り出して、その端を支へる柱が道路に立ち並んでゐた。(雪国 154)

はりつける(張付) 〔他〕とりあえず窓の外側から、画鋏でセロファンをはりつけてやろうというのだった。(人間の壁・上 274)

はりつめる(張詰) 〔自〕薄氷のはりつめた刈田の上を、時おり刺すような北風が吹きすさんですぎた。(落城 10)

○〔自〕お島は両親の前へ出ると、急と胸苦しくなつて、昨夜から張詰めてゐた心が一時に弛ぶやうであつた。(あらくれ 57)

○〔他〕壁まですつかり杉皮が張りつめられてあつて、天井も何もない程の、思つたよりも粗末な作りだが、(風立ちぬ 146)

はんすうする(反芻) 〔他〕歩きながら、私は今襲はれた奇怪な観念を反芻してゐた。(野火 16)

はんめいする(判明) 〔自〕そして彼等を收容すべき救護施設もまた、敗軍の必要からその能力がないことが判明すると、彼等にはもう行く所がなかつた。(野火 26)

はんもんする(反問) 〔他〕三度目には此方からとうとう其理由を反問しなければならな



くなりました。(こころ 161)

○〔他〕私は最後にこのことを彼等に反問せんと欲する。(人格主義 140)

ひきあう(引合) 〔自〕船大工もこのごろ工賃が安くて人が多いし、寒い浜へ出るのは引きあわない話だそうな。(放浪記 163)

○〔他〕二人は手を引合つて人込のなかを歩いてゐたが、<sup>きつぱり</sup>矢張心が落着かなかつた。  
(あらくれ 22)

ひきあげる(引上) 〔自〕それから火を踏み消して、跡を水でしめして引き上げた。(阿部一族 75)

○〔自?〕先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずつと前であつた。(こころ 12)

○〔他〕使ひの者をやつて荷物をこちらに引き上げるかもしれぬから、(冬の宿 96)

ひきこむ(引込) 〔自〕ひとがきたので曾田は各班の外出簿の整理があるからといってすぐ事務所に引きこんでしまった。(真空地帯・上 137)

○〔自〕木谷が顔をあげると頬骨のつき出た頬のぐっと引きこんだあの所長がやわらかい顔をつくって立っていた。(真空地帯・上 64)

○〔他〕安吉は、手も足も縮めて、かけ布団を首と枕との間へきゅっと引きこんでいる。(むらぎも 205)

ひきしめる(引締) 〔他〕少女はかるく眉をひきしめた。(潮騒 9)

ひきずる(引摺) 〔他〕二人は痛い足を引摺つて、またそこを動きだした。(あらくれ 181)

ひきつづく(引続) 〔自〕それからまだ一週間と立たないうちに引き続いて起つたそんな思ひがけない死のために、(風立ちぬ 107)

ひげする(卑下) 〔他〕前よりも一層己れを卑下し奉公の誠を尽して(春琴抄 205)

びこうする(尾行) 〔他?〕加治木が、五百助に目配せをして、二人のあとを、尾行し始めた。(自由学校 205)

○〔他〕この地域を離れる人(はつきりした理由があつて初めて許可される)は、尾行されているかもしれないことを知っていた。(中央公論 1954年6月 171)

ひたる(浸) 〔他〕その頃になると、いつも爐端に姿をみせる精米所の主人が、もうやつて来て大きな体を湯に浸つてゐた。(あらくれ 119)

ひっこす(引越) 〔自〕私が今居る家へ引越したのはそれから間もなくでした。(こころ 275)

○〔他〕それから家を引越す事、これもそんな必要ないとも思いますが、(暗夜行路・前 209)

ひっぱる(引張) 〔他〕きぬ子に帯の片端を持たせ、自分も一方の端をつかんで、二人で帯の両端をしつかりと引張つてゐた。(波 80)

ひねる(捻) 〔自〕あの庭には、人間臭いところが強い。日本的にひねつたところがなく自由で闊達で明るい。(帰郷 249)

○〔他〕伸子は電熱機のスイッチをひねつた。(伸子・上 113)

ひょうげんする(表現) 〔他〕それは少年たちの心の悲劇を表現した悲しい詩である。  
(人間の壁・上 163)

ふういんする(封印) 〔他?〕不定の期限をつけ固く封印せられてみたいのちだ。(帰郷 156)

ふうびする(風靡) 〔他〕十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女学生界の流行を風靡したのも彼女である。(或る女・前 10)

ふきおろす(吹降) 〔他〕風が吹き、海の方に向けて灰色の霧雲を吹きおろしてゐた。  
(冬の宿 161)

ふきだす(吹出) 〔自〕くわえ煙草の口の周囲に、美事なニキビが、吹き出していた。  
(自由学校 205)

○〔自〕先刻から笑ふ癖のついでた女房等は一時にぶつと吹出して粉が其処らに散つた。  
(土・上 212)

○〔自〕都門に、秋風が吹き出したのに、五百助の身边は、春の花が咲く陽気だった。  
(自由学校 244)

○〔他〕出発する旧式の機関車が吹き出す蒸気のやうに、(野火 41)

ふきゅうする(普及) 〔自〕教育は普及している。まことに世界に類がないほど教育は普及している。(人間の壁・上 59)

○〔他〕いくら教育を普及したからとて、まずパンを普及させなければだめである。  
(貧乏物語 42)

○〔他〕三田塾が如何に一布衣翁の感化を日本に普及したかは、今更言新しく云ふ迄も無いが、(思出の記・上 101)

ふくむ(含) 〔自〕それには、年も、先方がずつと上だらう、と云ふやうな気持ちが含んでゐたものとみえて、(多情仏心・前 39)

○〔他〕海綿が水を含んで重たくなつて行くやうな工合であつた。(帰郷 222)

ふちこむ(打込) 〔他〕ただ国民の全行動をぶち込んで大きな歴史を作ろうという野望をもつとき、ドイツ人のデザインはつねに狂いがちである。(ものの見方について 80)

ぶつかる 〔自〕船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾き、もう沈みかけました。(銀河鉄道の夜 290)

ふみきる(踏切) 〔自〕アメリカが北ベトナム爆撃にふみ切った時、(学問の動き 245)

○〔他?〕彼は甲板を踏み切つて、跳び込んだ。(潮騒 145)

ふみこむ(踏込) 〔自〕そして、電子顕微鏡ですら見えない世界へ踏み込んでいった生命研究の最先端の物語を繰り広げよう。(生命の暗号を解く 147)

○〔自〕なにやら、三人が探偵で、深夜に、犯人の巢にでも、踏み込むやうな気持がする。(自由学校 239)

○〔他〕他の一足はなかなか執拗に稲田のなかまで足を泥にふみ込んで追ひ込む。(田園の憂鬱 44)

ふみだす(踏出) 〔他〕おつぎは其れを追はうとして覚えず足を踏み出すと、一步運んだ勘次の手がむずとおつぎの首筋を捉へた。(土・上 192)

○〔他〕足に豆も踏み出さず、三日目の四時過ぎには、別府の此方の神崎と云ふ所に着ゐた。(思出の記・上 165)

○〔他〕私の左手は、幼時から第一歩を踏み出す習慣になつてゐる足、つまり右足の足首を握る。(野火 134)

ふみまよう(踏迷) 〔自〕また我々が人生の行路において無数に与へられる岐路に踏み迷ふとき、(人格主義 32)

○〔他〕他人に対する態度において正しい道を踏み迷はないために、(人格主義 72)

プラスする 〔自〕中道派が世評のマイナスを氣にして選挙の引のばしをやり、日を重ねるにしたがつてかえつて吉田自由党にプラスした。(改造増刊 1953年10月 39)

○〔他〕自営に進めば、これに若干をプラスすることになるうが、かといって飛躍的な上昇も示すまい。(エコノミスト 1956年9月8日 75)

ふりこめる(降籠) 〔他〕だから「下人が雨やみを待っていた」と言うよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と言うほうが、適當である。(羅生門 7)

○〔他〕闘牛大会の第一日、第二日を完全に降りこめた雨は、二日目の夕方から上つた。(闘牛 143)

ふりむく(振向) 〔自〕神父は信者席の方へは振り向かずに、そのまま脇にあつた小室の中へ一度引つ込んで行つた。(風立ちぬ 154)

○〔他〕「雪が凍みてゐるから氣をつけてね。滑る。」と、駒子は島村を振り向いたが、その拍子に立ち止まつて、(雪国 163)

○〔他〕逸早く足を止めて葉子の方を振り向いた。(或る女・前 129)

○〔他〕漸く渡り終つて其の絶壁を振向いた刹那、彼の心には咄嗟に大誓願が、勃然として萌した。(恩讐の彼方に 73)

ふるまう(振舞) 〔自〕その癖表面では事務長の存在をすら氣が附かないやうに振舞つた。(或る女・前 162)

○〔他〕今まで誰の前に出ても平氣で自分の思ふ存分を振舞つてゐた葉子は、(或る女・前 162)

○〔他〕部下の記者は待合に連れて来て酒肴を振舞ひ芸者をあてがふ腹である。(つゆのあとさき 61)

○〔他〕軽井沢でも浅間庵とかでは自由に人を振舞ふことになつて居り、(心 1953年11月 42)

ぶんさんする(分散) 〔自〕他人のところへ嫁にやることによって財産が分散することがいやなんです。(人間の壁・上 119~120)

ぶんしゅつする(噴出) 〔自〕いままで、圧迫されていた情熱は、高圧の蒸氣のようす

ごいエネルギーになって噴出した。(旧石器の狩人 309)

ふんばつする(奮発) [自]おれももう一度奮発して働いて見やうかと思ふんだが、(つゆのあとさき 113)

○[自]せっかく大阪市民が旧套を脱して、帝大創立に奮発した挙句、(総長就業と廃業 360)

○[他]南では養蚕の結果が好かつたのと少しばかり余つた桑が意外な相場で飛んだのとで、一元ばかりの酒を奮発したのであつた。(土・上 205)

○[他]実は今夜連れられて行つた先で、矢田が気前好く祝儀を奮発するかどうかを確めて置かうと思つたゞけである。(つゆのあとさき 25~26)

ふんばる(踏張) [自]僕等がどんなに踏張つたつて、こいつを掻乾すことは出来やせんよ。(波 66)

○[他]そして、息もせず、体ぢゆうを強ばらせ、足を畳に踏張つて抵抗した。(伸子・上 166)

○[他]新治は片足を舐先に踏んばり、足をひろげて、海の中の何ものかと永い綱引をつづけてゐる。(潮騒 16)

ぶんれつする(分裂) [自]すなわち統一あるそのままの事実が分裂してここに意識主観に対する客観(いわゆる意識界・自然界)が現われる。(哲学以前 60)

○[他]立場とは、すでに述べた通り、そのままの純粹経験が自らを分裂し統一するところのアブリオーリ(先験的原理)である。(哲学以前 199)

へいしする(閉止) [自]而して少し上眼をつかつて鏡の方を見やりながら、今まで閉止してゐた乱想の寄せ来るまゝに機敏にそれを送り迎へようと身構へた。(或る女・前 57)

へめぐる(経巡) [自?]順礼といふ者は行方知れずになつた親兄弟や何かを尋ねて、国を経巡つて歩くものだと言ふ。(平凡 44)

へんかくする(変革) [他]固定して動かぬものを、急激に変革することから起る危険を避けながら、少しずつ動かしてゆくというデモクラシーで、(ものの見方について 200)

へんこうする(変更) [他]昨日と今日で、企劃を変更するやうな男ではない。(闘牛 132)

へんぼうする(変貌) [自]気ままな戯れがきびしい仕事に変貌すると、若い娘は誰もおそれをなし、春が来ればもう夏の訪れを厭ふやうになるのであつた。(潮騒 121)

ほうげんする(放言) [他]あなたがとてつもないことを放言するから、私は日本人として肩身の狭い思いをしています(文芸春秋 1953年10月 109)

ほうしする(奉仕) [自]今日の政府が本当に人民に奉仕しているかどうか。(人間の壁・上 321)

ほうしゃする(放射) [自]同時に、彼女から放射する電気のやうなものを私は感じた。(河明り 322)

○[他]短い冬の日はまだ落ちかけて黄色な光を放射しつつ目叩いた。(土・上 13)

○[他]世界の人間関係は、利害を異にする大小無数のこの種の操縦者が入りみだれ、

- その放射する電波の錯綜した上に構成されているばかりでなく、(抵抗の科学 303)
- ほうしゅつする(放出) 〔他〕準星などはこれだけ莫大なエネルギーを、数万年から数十万年という短時間のあいだに放出してしまうわけである。(宇宙の謎はどこまで解けたか 97)
- ほうずる(崩) 〔自〕李陵は武帝の崩じたのを知った。(李陵 197)
- ほうたいする(縛帯) 〔自〕左の手首に縛帯していらつしやいます。(本日休診 76)
- 〔他〕所が、翌日先生が両足を縛帯しながら、這ひ出して来て、例の通り課業を初めたので、(思出の記・上 115)
- ほうようする(抱擁) 〔他〕いきなりウエリイは私をぎゅつと抱擁した。(別冊小説新潮 1956年10月 137)
- ほおかむりする(煩冠) 〔自〕相手は北洋漁獲の制限ときたわけですね。それに煩かむりできたら、まだ日本も相当だったかも知れませんが、(世界 1956年7月 109)
- ほきだす(吐出) 〔他〕そしてそのゴムを赤ん坊の口にくはへさせた。しかし赤ん坊はすぐほき出してしまった。(波 178)
- ほこる(誇) 〔他〕生家も養家も旧家を誇る家柄で、(厚物咲 16)
- ほっしんする(発心) 〔自〕世の中は堅気のことだ。——堅気にかぎる。ふとかう扇朝は発心した。(末枯 21)
- ほっする(欲) 〔自〕動けない、或ひは動かうと欲しない者、つまり「坐り込ん」である者等は、(野火 24)
- 〔他〕みんなが実質的な休養を欲してゐるのは当然である。(本日休診 43)
- まいぞうする(埋蔵) 〔他〕嫌いな学問にも、深く利益が埋蔵してあるぞ。(総長就業と廃業 351)
- まう(舞) 〔他〕自分でも盛んに舞台にでて能を舞った。(中央公論 1953年8月 192)
- 〔他〕夫義仲と愛児との位牌をまつりつつ客にはべつて琴を弾じ舞をまつたが、(改造増刊 1954年1月 281)
- まがりする(間借) 〔自?〕都電常盤橋停留所のそばに常盤小学校という学校があり、その中に明石中学校が間借している。(中央公論 1953年12月 175)
- 〔他〕明子が子供たちの間借りしている部屋へ来てから次の日も、その次の日も、(くれない 115)
- まきこむ(捲込) 〔他〕フランスは、それから二十年間戦争のために走りつづけ、おかげで全欧州を戦火のなかに捲き込んでしまった。(ものの見方について 18)
- またたく(瞬) 〔自〕彼は曾田の眼がまぶしうにまたたくのをみた。(真空地帯・上 161)
- 〔他〕五百助は、眼をまたたきながら、アグラをかいた。(自由学校 9)
- まちあぐむ(待) 〔他〕内儀さんも主人を待ちあぐんで居る。(土・上 144)
- まちあわせる(待合) 〔自〕君江は舞踊家木村義男と馴し合して、カツプエーを出てから有楽橋の暗い河岸通りで待合せ、自動車で三番町の千代田家といふ懇意な待合へ行つ

た。(つゆのあとさき 81)

○〔他〕丁度そこには叔父も丑松を待合せて居た。(破戒 113)

○〔他〕彼は京都で急行を待ち合わせてもよかったのだ。(暗夜行路・前 212)

まんぞくする(満足) 〔自〕未亡人は彼の答に満足した。(真知子・前 166)

○〔他〕色欲を満足することによりてその子孫を繁殖し、(貧乏物語 75)

みあたる(見当) 〔自〕新人会の連中が一人も見当らない。(むらぎも 346)

みいる(見入) 〔自〕きぬ子は満足さうに鏡の中の自分に見入りながら、両手でしきりに顔をこすつてゐた。(波 98)

○〔自〕この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。(蒲団 29)

○〔他〕傍に置いて、ちつとそれを見入つた。(蒲団 59)

○〔他〕そして鏡の中の二つの顔をちつと見入つた。(波 175)

みずましする(水増) 〔他〕これが水増しされた優越感で、どこまでが水増しの部分だから、しまいには自分でも区別がつかなくなるのである。(文芸春秋増刊 1954年 2月 26)

みなれる(見慣) 〔他〕こゝだけが決り取られて、日本の景色を見慣れた私たちの感覚に現実感を与へる。(河明り 299)

○〔他〕それを見馴れてゐるわれわれは開いた眼よりも閉ぢた眼の方に慈悲や有難みを覚え(春琴抄 140)

みほれる(見惚) 〔自〕私にはそれが考へに耽つてゐるのか、景色に見惚れてゐるのか、若しくは好きな想像を描いてゐるのか、全く解らなかつたのです。(こころ 217)

○〔他〕それを見惚れて、砂塵の風のなかで立つて居る子供の彼自身が、彼の頭にはつきりと浮んで来た。(田園の憂鬱 96)

みまわる(見巡) 〔他〕隣りのベッドのお町さんを見巡りに行くと、横合ひから看護婦に卑猥な言葉を浴びせかける。(本日休診 117)

○〔他〕雨に濡れながら、小屋のうしろを見回てみると、べつに、異状はない。(自由学校 231)

むける(向) 〔自〕これは真知子に向けて云はれたので、さうしてはゐられないと彼女は答へた。(真知子・前 189)

○〔自〕同じ日に法然様は土佐へ向け、お師匠様は北国をさして御発足あそばしました。(出家とその弟子 37)

○〔他〕寝静まつた多くの漁船が、星明りの下に、船首を威丈高に海のほうへ向けて並んでゐる。(潮騒 37)

○〔他〕黒潮に乗つて、金華山沖あたりからは航路を東北に向けて、蔦地に緯度を上つて行くので、(或る女・前 97)

むちうつ(答打) 〔自〕実は一瞬ではあつたけれど、私の絶々な気持ちによく答打てられるものがありました。(放浪記 304)

○〔自〕混戦に乗じて敵の馬を奪つた数十人は、その胡馬に纏うつて南方へ走つた。

(李陵 165)

○〔他〕霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした所謂難行苦行の人を指すのです。(こころ 225)

○〔他〕ローザを有り難う。彼女が私を鞭打つ。私の弱さを、私の怯懦を、私の胡魔化しを、私の一切の微温的なものを。(真知子・前 149)

めいきする(明記) 〔他〕投稿原稿には必ず住所氏名を明記して下さい。(新潮 1956年 6月 317)

めぐる(廻) 〔他?〕空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。(武蔵野 13)

○〔他?〕中でも興味深く思われるのは、このホーキ星の分裂をめぐって、又も二つの見解が対立したことである。(未知の星を求めて 327)

めしあがる(召上) 〔他〕先生、大手術なさる前には、やはり先生もお酒を召しあがるんですね?(本日休診 65)

めんくらう(面喰) 〔自〕面喰つた日本人は、首を後に硬直させて、どうしていゝか分らなかった。(蟹工船 47)

もさくする(摸索) 〔他〕その疑いは落着く先を摸索している動揺であり、この分裂はさらに結合せんがための主客二分である。(哲学以前 52)

もたれる(凭) 〔自〕十三四の女の子が一人石垣にもたれて、毛糸を編んでゐた。(雪国 48)

○〔他〕自分も欄干に腕をもたれて覗き込んで、(帰郷 281)

もちあがる(持上) 〔自?〕行介は引続き、きぬ子の級を受持つて、そのまゝ持上つて行つた。(波 52)

もちなおす(持直) 〔自〕病気はメキメキと持ち直したが、一向、手紙もよこさない。(自由学校 102)

○〔他〕男は急に鞆を持ち直して振り向いたが、歩くのをやめない。(帰郷 110)

もみあう(揉合) 〔自〕しきりに揉み合ってるうちに、バシンと音がして、怪漢が地にたたきつけられた。(自由学校 123)

もやう(舫) 〔自〕左岸に三艘の砂礫船が舫つてゐた。(本日休診 76)

○〔自〕何十隻という漁船や荷船がところどころにもやっている。(暗夜行路・前 152)

○〔他〕舫はれた二艘の黒い影は、相携へて高々と昇り、また沈んだ。(潮騒 146)

○〔他〕堤防のなかに一隻、組合の船が舫つてある。(潮騒 154)

もよおす(催) 〔自〕私はなんだかあくがれるような、浮き世をなつかしむような気が催して来ます。(出家とその弟子 75)

○〔他〕そして、げえつと吐気を催したが、口からはなにも出ず、目の縁が湿つて、頬が鳥肌立つた。(雪国 80)

もんどうする(問答) 〔他〕二人が何を問答しているのか安吉にはてんで分らなかった。(むらぎも 339)

やくげんする(約言) 〔他〕今論を進めんがため、重ねて中編における所論の要旨を約言せんか、(貧乏物語 86)

やくだつ(役立) 〔自〕この法案は、わが国の教育の真の民主化に役立つものと思っております。(人間の壁・上 353)

やけつく(焼付) 〔自〕彼は海から上ると、焼けつくやうな砂の上にごろりと横になった。(波 398)

やすまる(安) 〔自〕有力な敵があつても、其の恋人をだに占領すれば、それで心の安まるのは恋する者の常態である。(蒲団 34)

やすむ(休) 〔自〕結局そのへんの茶屋で少し休んで行く事にした。(暗夜行路・前 29)  
○〔他〕翌日行介は学校を休んだ。(波 116)

やすめる(休) 〔他〕まつ子は答へなかつたが、しばらく手を休めて外の嵐の音をきいてゐた。(冬の宿 81)

ゆうごうする(融合) 〔自〕生物学と物理学、化学は、完全に融合したといつていい。(生命の謎はどこまで解けたか 178)

○〔自〕感じるというのは対象そのものに合致し融合することである。(哲学以前 241)

○〔他〕愛は一切を融合する。(哲学以前 254)

○〔他〕その中に生物学、物理学、化学の問題をひとつに融合し、物理的世界と生物的世界の統一という科学者の夢を実現したものである。(生命の謎はどこまで解けたか 184)

ゆうせんする(優先) 〔他〕そこで、民主主義の問題は誰をこのうちで優先するか、いかにひろく生活保障をするかにあるわけであるが、(世界 1954年4月 26)

ようりくする(揚陸) 〔他〕タクロバン地区における敗勢を挽回するため、西海岸に揚陸された、諸兵团の一部であつたわが混成旅団は、(野火 9)

よそうする(予想) 〔他〕八春先生は窓の黒いカーテンをおろし、大体の傷害症状を予想して、必要と思はれる治療器具を消毒した。(本日休診 49)

よみふける(読耽) 〔自〕ある者は同じやうな熱心さで漫画の本に読み耽つてゐた。(潮騒 20~21)

○〔自〕少し眉根を寄せながら、手紙に読み耽ける木村の表情には、(或る女・前 202~203)

○〔他〕いづれ種々雑多な本を読み耽っているのだらうが、勉強の上であんまり無茶な冒険はやらなくなって来たように察しられる。(私の人生観 26)

○〔他〕見れば郡視学は巻煙草を燻し乍ら、独りで新聞を読み耽つて居る。(破戒 21)

らくがきする(落書) 〔他〕性器をラクガキする心理！(小説サロン 1956年9月 104)

らっかんする(楽観) 〔他〕しかし、だからといって前途を楽観することは許されない。(文字を読む機械 391)

りえんする(離縁) 〔自〕今度といふ今度こそは絶念めた、自分はもう離縁する考へで居る、と書いて呉れと頼んだ。(破戒 251)



○〔他〕上さんを離縁しろなんて言つてゐましたよ。(あらくれ 212)

りかんする(離間) 〔他〕アメリカとその与国を離間してアメリカを孤立せしめつつ、  
(改造 1953年 8月 78)

りきせつする(力説) 〔他〕直子が個の行<sup>ぎやうじやう</sup>状を保証することで、間接には自分の潔白<sup>けつぱく</sup>さをも力説するのが、(伸子・上 122)

りさんする(離散) 〔自〕一体伯父の親類は、維新後八方に離散した上に、(思出の記・上 126)

りしょくする(利殖) 〔他〕酒場ではお上さんが、一本のキング オブ キングスを清水で七本に利殖しているのだ。(放浪記 85)

りそうかする(理想化) 〔他〕あなたは僕を理想化してゐる。(友情 108)

りだつする(離脱) 〔他〕部隊を離脱してからの孤独なる私にとつて、(野火 175)

○〔他〕単に主観的個人的なる迷妄を離脱して一般に通ずる真理を主張するものと思われやすい。(哲学以前 174)

りつあんする(立案) 〔他〕向う十カ年間に二千六百名の先生を退職させるということが立案されているそうです。(人間の壁・上 177)

りべつする(離別) 〔他〕で、細君を離別すると共に、裁判所に嫡出子否認の訴へを起したのだ。(波 162)

りゅうにゅうする(流入) 〔自〕日本ほど各種各様の文化が流入してきた国はあるまい。(ものの見方について 185)

りゅうろする(流露) 〔自〕文章の調子は詩のように流露していた。(くれない 80)

れいじする(例示) 〔他〕私は現実生活に対する理想主義の態度を例示するために、経済生活の考察と理想主義との関係を一言しておきたい。(人格主義 41)

れんこうする(連行) 〔他〕もと綿糸ブローカー大杉大三を逮捕して、角館署に連行して来た。(改造 1954年 4月 195)

れんせつする(連接) 〔自〕乃ち「東京」が此線路に出て武蔵野を貫いて直接に他の範囲と連接して居るからで有る。(武蔵野 27)

ろんぎする(論議) 〔他〕そこで、ドイツ人は、天国への門をくぐることを忘れて、天国を論議する門の方へと引込まれてゆくのである。(ものの見方について 65)

ろんそうする(論争) 〔他〕「何を論争したの？」(人間の壁・上 257)

わする(和) 〔自〕女の子は首を出さずにそれに和した。(暗夜行路・前 214)

○〔自〕自分自身と和することのできぬ心が、どうして他人と和することができようか。(私の人生観 129)

○〔他〕その後蘇武が窖の中に幽閉された時旃毛を雪に和して喰ひ以て飢を凌いだ話や、(李陵 191)

わびる(詫) 〔他〕彼は涼太郎たちが戻つてゐないことを深く詫びながら、今夜は彼の家に泊るやうに勧めた。(波 123)

○〔他〕私はいかに自分の肉体を養ふ要請に出づるとはいへ、すべて有機質から成り立つてゐる食物を喰べることを、その有機質の以前の所有者であつた生物達に、まづ詫びるのである。(野火 166)

わめく(喚) 〔他〕無数の円い顔が黙つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。(平凡 35)

わらう(笑) 〔自〕五百助は、まだ、姓名を名乗ってないから、ニヤニヤ笑って、立っていた。(自由学校 197)

○〔他〕むしろそのように大声をあげる彼を下士官たちはわらっていた。(真空地帯・上 170~171)

わりこむ(割込) 〔自〕彼女等が四人も占拠してる中へ、割り込む大胆さは、思いも寄らぬことだった。(自由学校 220)

## Ⅳ 語末からの逆びきによる動詞・形容詞

1. これは、動詞・形容詞・形容動詞のそれぞれについて、ふつうの50音順配列とは反対に、語末の音節からはじめて順次さかのぼるやりかたで、50音順配列を試みたものである。
2. 表をつくったおもな目的は、現代語の動詞や形容詞を、たがいに参照するのに助けとすることであった。
3. 単語は、例解国語辞典・岩波国語辞典の見出し語によった。
4. したがって、たとえば「食べおわる」「書きおわる」「見おわる」……のように、生産力のゆたかな造語形式による合成語は、資料の性格上、原則としてはいっていない。もっとも、たまたま上の2辞典のどちらかがのせているばあいには、意識的にはぶくことはしなかった。
5. まず語構成上の観点から単純語と合成語とに一応分けた。単純語のグループは活用によって分け、その中は完全な逆順にならべた。合成語のグループは、あと要素の50音順にした。
6. 単純語と合成語の区別、合成語の分類などは、便宜的なものにすぎない。たとえば、「そむく、かたむく、おもむく」が単純語のほうに並んでおり、合成語の「～むく」の所に「あお～、うつ～」が並んでいるが、両者の間に必ずしも明らかな一線が引けるわけではない。したがって、両方の部を合わせ見て利用していただきたい。
7. 「形容詞Ⅰ」は動詞とだいたい同じやりかたで配列してある。語数が動詞よりずっと少ないためあって、逆順に並べたことの効用は動詞ほど大きくはないようである。合成語の「(5)有縁語」は派生語なども含んでいるが、意味と語形において他の語と関係があるとみられる語の意味で、まったく便宜的に使った。
8. 「形容詞Ⅱ」は、形容詞を語幹末部の音節の母音によって分類してみたものである。語の範囲はⅠと同じであるが、複合語は除いた。（\*印を付けた語は複合語、接頭語による派生語のあと要素でもあるもの。）また、接尾語

による派生語については、接尾語を「～ばい」のような形で上と同様に配列した。

9. 形容動詞の部は、和語のものだけに限り、語幹全体が漢語・外来語であるものは対象外とした。混種語については、語末の要素が漢語、外来語でないものは範囲内とした。なお、語種の認定は新潮国語辞典によった。
10. このような表は、いろいろな目的に役立つことが予想される。たとえば、語構成・語源の研究や送りがな問題などである。ただし、目的によっては、この表のような基本形だけの配列ではなく、すべての語形を配列したもののほうが有用であろう。たとえば、送りがな問題を考えるための資料としては、「いって(行)」「おこなって(行)」や「とあって(通)」「かよって(通)」などが近い所に並んでいるような逆びきの表が必要であろう。

また、語構成の参考資料とするばあいには4に述べたように、生産性の高い造語形式による合成語はほとんど含まれてはおらず、生産性のよわい形式による合成語は含まれている、という傾向のある表であることに留意していただきたい。

(担当 動詞——宮島達夫, 形容詞——西尾寅弥)

# 動 詞

## 1. 単 純 語 (語末からの五十音順)

### (1) 5 段 活 用

(ア行) あう, いう, おう (追), おう (負), おおう, きおう (競), よそおう, におう, うるおう, かう (買), かう (飼), かう (支), うかがう, たがう, うたがう, したがう, たたかう, ちかう, ちがう, つちかう, まちがう, つかう, つがう (番), あつかう, ねがう, むかう, あらがう (抗), からかう, くらう, すくう (掬), すくう (救), ぬぐう, しゃくう, こう (請), こう (恋), いこう, かこう, まごう, すう, そう, おそう, きそう, さそう, よそう (装), あらそう, うたう, したう, つたう, てつだう, とう, いう, つどう, まとう, まどう, やとう, たゆとう, ならう (綱), かなう, あがなう, まかなう, あきなう, おぎなう, つぐなう, おこなう, そこなう, あざなう, いざなう, しなう, うしなう, まじなう, やしなう, おとなう, になう, うべなう, ともなう, うらなう, ぬう, ととのう, はう, うばう, かばう, つくばう, おぶう, まう, かまう, かくまう, しまう, すまう, たまう, うやまう, ふるまう, おもう, もやう, ゆう (結), よう, かよう, しょう, ただよう, まよう, さまよう, あらう, いらう (弄), さからう, はからう, きらう, ねぎらう, くらう, さらう, あしらう, はじらう, かかずらう, さすらう, やすらう, わずらう, かたらう, あげつらう, へつらう, てらう, ならう, ねらう, はらう, とぶらう, とむらう, ためらう, もらう, わらう, くるう, ふるう (奮), ふるう (震), ふるう (篩), つくろう, そろう, のろう, ひろう, よろう (饗), いわう。

(カ行) あく (開), あく (飽), いく, うく, おく, かく (掻), かく (書), かく (昇), かく (欠), あがく, えがく, みがく, もがく, きく (聞), きく (利), なげく, こく (うそを〜), こく (扱, いねを〜), うごく, しごく, さく (咲), さく (裂), ほざく, しく (如), しく (敷), くじく, はじく, すく (好), すく (剝), すく (鋤), すく (透), すく (空), すく (梳), すく (漉), すく (結), うずく, かずく, きずく, かしずく, うすずく, うなずく, つまずく, せく (急), せく (咳), せく (塞), のぞく (除), のぞく (覗), しりぞく, たく, だく, いたく, くだく, すだく, たたく, いただく, またたく, はたく, はばたく, つく (突), つく (着), つく (築), つく (搗), つく (潰), いつく, つつく, つづく, くつつく, せつつく, なつく, とく (解), とく (溶), どく, くだく, とどく, ほどく, もどく, なく, いななく, わななく, ぬく, こまぬく, つらぬく, まねく, こまねく, のく, おののく, はく (履), はく (穿), はく (吐), はく (掃), あばく, さばく, ひく, おびく, なびく, ひびく, ふく (吹), ふく (拭), ふく (葺), しぶく, かたぶく, はぶく, ふぶく, やぶ

く、しわぶく、まく(撤),まく(巻),むく(向),むく(剝),あぎむく、そむく、かたむく、おもむく、うめく、おめく、ぞめく、わめく、やく、かがやく、ささやく、つぶやく、ぼやく、ゆく(行),ゆく(逝),はたらく、ひらく、あるく、おどろく、とどろく、わく(沸),わく(湧),かわく、ゆわく。

(方行) あえぐ、あおぐ(仰),あおぐ(扇),かぐ(嗅),かぐ(欠),こぐ(扱),こぐ(漕),ひさぐ、ふさぐ、かしぐ(傾),かしぐ(炊),ひしぐ、すすぐ、ゆすぐ、かせぐ、ふせぐ、そぐ、いそぐ、そそぐ(注),そそぐ(濯),またぐ、つぐ(注),つぐ(継),つぐ(次),かつぐ、とつぐ、みつぐ、とぐ、なぐ(和),なぐ(薙),つなぐ、ぬぐ、しのぐ、はぐ(剝),はぐ(剋),はぐ(布を〜),へぐ、ことほぐ、つむぐ、もぐ、はしゃぐ、およぐ、そよぐ、たいらく、ゆらく、ゆるぐ、たじろぐ、まじろぐ、くつろぐ、さわぐ。

(サ行) もうす、かえす、くつがえす、ひるがえす、おす、たおす、とおす、なおす、もよおす、うるおす、かす、あかす(明),あかす(飽),いかす、うかす、おかす、かかす、きかす(利),きかす(聞),けがす、こかす、こがす、うごかす、さがす、すかす(空),すかす(きどる),すかす(賺),せかす、いそがす、つかす、でかす、とかす、おどかす、なかす、ながす、うながす、にがす、ぬかす、ねかす、のがす、そそのかす、はかす、ばかす、はがす、ひかす(落籍),なびかす、ひびかす、ふかす(更),ふかす(吹),ふかす(おいもを〜),へがす、ほかす(放),ほかす、まかす(任),まかす(負),ごまかす、ちょろまかす、めかす、ときめかす、かがやかす、にぎやかす、ちゃかす、ふやかす、ぼやかす、そよがす、はたらかす、ちらかす、たぶらかす、みはるかす、ゆるがす、ころがす、とろかす、とどろかす、わかす、かわかす、さわがす、かどわかす、かくす、つくす、ほぐす、けす、げす(解),こす(漉),こす(越),おこす、すごす、ほどこす、にこす、のこす、ほごす、よこす、よごす、さす(差),さす(鎖),かざす(翳),かざす(挿頭),きざす、くさす、とざす、くずす、はずす、たす、だす、いたす、きたす、くだす、ただす、はたす、ひたす、ほだす、みたす、みだす、もだす、わたす、うつす(映),うつす(移),ほつす、やつす、おとす、おどす(威),おどす(鍼),おっことす、さとす、もどす、やどす、なす(済),なす(成),いなす、けなす、こなす、もてなす、はなす(離),はなす(話),のす、あそばす、とばす、のばす、しのばす、ころばす、ほころばす、ふす、いぶす、かぶす、つぶす、まぶす、へす(滅),へす(押し〜),ほす(干),おぼす、こぼす、とぼす、ほとぼす、のぼす、ほろぼす、ます(坐),ます(増),あます、ございます、はげます、へこます、さます(覚),さます(冷),すます(済),すます(澄),だます、なます、のます、からます、くらます、ふくらます、むす(蒸),むす(生),しめす(湿),しめす(示),ためす、なめす、のめす、もす、かもす、ともす、どよもす、あやす、いやす、ついやす、たがやす、こやす、たやす、どやす、はやす(生),はやす(囃),ひやす、ふやす、もやす、よす、あらす、まいらす、からす、いからす、

とがらす、つからす、ひからす、こわがらす、とんがらす、きらす、たぎらす、まぎらす、くらす、おくらす、ふくらす、めぐらす、こらす(凝)、こらす(懲)、にごらす、しるす、つるす、ゆるす、おろす、ころす、さらす、くさらす、しらす、じらす、はしらす、ずらす、そらす(反)、そらす(逸)、たらす(垂)、たらす(証)、したたらす、もたらす、ちらす、ちぢらす、てらす、ならす(鳴)、ならす(償)、ならす(均)、ならす(生)、ぬらす、はらす(腫)、はらす(晴)、ばらす、ふらす、へらす、すべらす、おぼらす、むらす、ねむらす、もらす、くもらす、じゃらす、はやらす、くゆらす、あわす、おわす、におわす、かわす、つかわす、にぎわす、くわす、こわす、さわす(酈)、まどわす、まわす、かよわす、ただよわす、まよわす、あらわす、まぎらわす、くらわす、わずらわす、ならわす、くるわす、ふるわす。

(タ行) うつ、なげうつ、あおつ、かつ、うがつ、わかつ、かこつ、たつ(立)、たつ(絶)、そだつ、はなつ、そぼつ、まつ、あやまつ、たもつ。

(ナ行) しぬ。

(バ行) うかぶ、さけぶ、はこぶ、よろこぶ、すさぶ、むせぶ、あそぶ、とぶ、とうとぶ、たつとぶ、まなぶ、しのぶ(偲)、しのぶ(忍)、よぶ、およぶ、えらぶ、ならぶ、ころぶ、ほころぶ、ほろぶ。

(マ行) あむ、いむ(忌)、うむ(産)、うむ(膿)、うむ(熟)、うむ(倦)、うむ(績)、えむ、かむ(嚙)、かむ(擲)、あかむ、いがむ、おがむ、かがむ、かじかむ、すがむ(眇)、せがむ、ちぢかむ、つかむ、やっかむ、はにかむ、ひがむ、しゃがむ、ゆがむ、いきむ、りきむ、くむ(組)、くむ(汲)、くくむ、はぐくむ、さしぐむ、すくむ、たくむ、つぐむ、にくむ、ふくむ、むくむ、めぐむ、しゃくむ、はげむ、こむ、かこむ、ごごむ、すごむ、なごむ、へこむ、いさむ、かさむ、きざむ、なぐさむ、すさむ、はさむ、おしむ、いとおしむ、きしむ、いつくしむ、いそしむ、したしむ、つつしむ、なじむ、かなしむ、にじむ、たのしむ、あやしむ、いやしむ、くるしむ、すむ(澄)、すむ(住)、すむ(済)、かすむ、くすむ、さげすむ、しずむ、すすむ、すずむ、たたずむ、なずむ、ぬすむ、はずむ、ひずむ、やすむ、そむ(染)、ひそむ、のぞむ、いたむ、したむ、たたむ、ねたむ、ちぢむ、つむ(摘)、つむ(積)、つむ(詰)、つつむ、むつつむ、とむ、いどむ、うとむ、よどむ、いなむ、さいなむ、はかなむ、たしなむ、ちなむ、いとなむ、そねむ、のむ、このむ、たのむ、はむ、ついばむ、こぼむ、むしばむ、はばむ、ふむ、あやぶむ、くぼむ、しばむ、すぼむ、つぼむ、つまむ、もむ、やむ(病)、やむ(止)、くやむ、なやむ、うらやむ、あゆむ、たゆむ、よむ、とよむ、どよむ、うらむ、えらむ、からむ、あからむ(明)、あからむ(赤)、くらむ、たくらむ、ふくらむ、しらむ、にらむ、はらむ、うるむ、あかるむ、くるむ、たるむ、つるむ、ぬるむ、ひるむ、ゆるむ、あわれむ、くろむ、もくろむ、まどろむ、しわむ(皺)、たわむ。

(ラ行) ある、いる(要)、いる(入)、いる(煎)、はいる、まいる、うる(売)、こう

る(梱), ほうる, りょうる(料), える(選), える(彫), かえる(反), くつがえ  
 る, ひるがえる, おる(織), おる(折), おる(居), あおる(煽), あおる(呻),  
 かおる, こおる, とどこおる, とおる, いきどおる, なおる, はおる, かる(駆),  
 かる(刈), かる(狩), かる(借), あがる, いかる(埋), いかる(活), いかる(怒),  
 うかる(受), うかる(浮), もうかる, かかる(係), かかる(罹), かがる, さかる,  
 さがる, ふさがる, しかる, すぎる, あずかる, さずかる, たすかる, むずかる, た  
 かる, はだかる, またがる, つかる, のっかる, ぶつかる, むつかる, とがる, つな  
 がる, ぬかる(道が〜), ぬかる(抜), まかる(負), まかる(罷), まがる, はかる,  
 たばかる, はばかる, ひかる, いぶかる, あやかる, こんがらかる, とんがらかる,  
 とんがらがる, こぐらかる, こんぐらかる, ずらかる, ちらかる, むらがる, ころが  
 る, ひろがる, わかる, とんがる, きる(鎖), きる(切), さえぎる, かぎる, しぎ  
 る, たぎる, ちぎる(契), ちぎる(千切る), みなぎる, にぎる, もぎる, よぎる,  
 くる(剝), くる(繰), えぐる, おくる, くくる, くぐる, さぐる, まさぐる, いじ  
 くる, すぐる, くすぐる, こそぐる, たくる, たぐる, うたぐる, つくる, てくる,  
 なぐる, ひにくる, はぐる, ばくる, しゃべくる, まくる, めくる, めぐる, もぐ  
 る, しゃくる, からくる, ける, かける, かげる, あざける, しける, しげる, たけ  
 る(哮), たける(猛), ふける, こる(樵), こる(藪), こる(梱), おこる(起), お  
 こる(怒), おごる, こごる, にごる, のこる, はびこる, ほこる, さる, あさる, い  
 ざる, かざる, くさる, ごさる, ささる, しさる(退), すさる, くださる, なさる,  
 おぶさる, かぶさる, まさる(増), まさる(勝), まざる, あわさる, しる, アジ  
 る, いじる, ぎゅうじる, かじる, きしる, くじる, しくじる, こじる, すじる, そ  
 しる, なじる, にじる, ねじる, ののしる, はしる, たばしる, ほとばしる, ほじ  
 る, まじる, むしる, もじる, やじる, よじる(攀), よじる(振), する(擦), す  
 る(剃), ずる, さえずる, かする, ぐずる, けずる, こする, てこずる, さする,  
 すする, なする, なめずる, ゆする, ゆずる, あせる, せせる, ふせる, そる(剃),  
 そる(反), こぞる, そそる, なぞる, ほそる, たる, あたる, いたる, うだる, か  
 たる, きたる, くだる, おこたる, すたる, たたる, したたる, へだたる, ねだる,  
 はたる, ひたる, ゆだる, よたる, わたる, ちる, ぐちる, とちる, つる, うつる  
 (移), うつる(映), つづる, まつる(祭), まつる(糸で〜), つかまつる, たてま  
 つる, あやつる, てる, ほてる, とる, おとる, おどる, はかどる, さとる, しと  
 る, たどる, のっとる, あなどる, すなどる, ふとる, めとる, もとる, もどる, や  
 どる, なる(成), なる(鳴), うなる, がなる, かさなる, となる, どなる, ことな  
 る, つらなる, ぬる, ねる, うねる, くのる, つねる, ひねる, おもねる, のる, い  
 のる, つのる, みのる, はる, いばる, えばる, くばる, のさばる, しばる, くだば  
 る, へたばる, ねばる, へばる, ちらばる, いびる, くびる, せびる, ふる(振),  
 ふる(降), あぶる, いぶる, かぶる, がぶる, たかぶる, けぶる, しぶる, くすぶ



る、ダぶる、つぶる、なぶる、にぶる、ねぶる、ほぶる、やぶる、しゃぶる、へる、すべる、はべる、しゃべる、ほる、ぼる、サボる、むさぼる、しぼる、ふすぼる、とぼる、のぼる、あまる、うまる、かがまる、たかまる、わだかまる、つかまる、ふかまる、きまる、おくまる、せぐくまる、うずくまる、ぬくまる、ひくまる、こまる、かしこまる、ちちこまる、おさまる、はさまる、しまる、はじまる、うすまる、うずまる、しずまる、やすまる、せまる、そまる、ひそまる、たまる、だまる、かたまる、さだまる、たたまる、あたたまる、あらたまる、ちちまる、つまる、あつまる、つづまる、とまる、つとまる、とどまる、まとまる、なまる(黙)、なまる(小刀がへ)、はまる、せばまる、すぼまる、つぼまる、あやまる(誤)、あやまる(謝)、はやまる、きよまる、つよまる、からまる、くるまる、まるまる、ゆるまる、ひろまる、きわまる、よわまる、こうむる、ほうむる、けむる、つむる、ねむる、しめる、つめる(抓)、のめる、もる(漏)、もる(守)、もる(盛)、おもる、くもる、くぐもる、ぬくもる、こもる、つもる、ともる、どもる、まもる、やる、おっしやる、いらっしやる、うっちゃる、はやる(流行)、はやる(逸)、くりやる、ゆる、くゆる、よる(縫)、よる(囚)、よる(選)、よる(寄)、およる、はしよる、たよる、わる、うわる、おわる、かわる、かかわる、さわる(触)、さわる(障)、たずさわる、しわる、まじわる、すわる、そわる、おそわる、いたわる、こだわる、つたわる、いつわる、まつわる、ことわる、そなわる、よばわる、まわる、たまわる、うけたまわる、よわる、くわわる。

## (2) 上 1 段活用

いる(鏹)、いる(居)、いる(射)、おいる、ひきいる、くいる、むくいる、しいる、もちいる、きる、あきる、いきる、おきる、すぎる、つきる、おじる、とじる(綴)、とじる(閉)、はじる、おちる、くちる、おっこちる、みちる、にる(煮)、にる(似)、ひる(簸)、ひる(放)、ひる(干)、あびる、おびる、かびる、げびる、こびる、さびる(鏽)、さびる(寂)、ちびる、ほとびる、しなびる、ねびる、のびる、からびる、ほころびる、ほろびる、わびる(詫)、わびる(侘)、みる、かんがみる、しみる(凍)、しみる(染)、こころみる、おもんみる、おりる、かりる、こりる、たりる。

## (3) 下 1 段活用

える、あえる、いえる、ついえる(潰)、ついえる(費)、うえる(飢)、うえる(植)、おえる、かえる、かかえる、さかえる、たがえる、したがえる、ちがえる、まちがえる、つかえる(仕)、つかえる(支)、つがえる、ひかえる、まがえる、むかえる、かんがえる、きえる、くえる、たぐえる、こえる(越)、こえる(肥)、きこえる、こごえる、さえる、おさえる、こさえる、ささえる、たずさえる、おしえる、まじえる、すえる(鏝)、すえる(据)、そえる、かぞえる、たえる(榎)、たえる(絶)、あたえ

る、きたえる、こたえる(堪), こたえる(答), たたえる(湛), たたえる(称), つ  
 たえる, うったえる, もだえる, うろたえる, かつえる, たとえる, なえる, かなえ  
 る, そなえる, となえる, にえる, ととのえる, はえる(生), はえる(映), いばえ  
 る(嘶), さらばえる, ひえる, おびえる, そびえる, ふえる, ほえる, おぼえる,  
 あまえる, かまえる, つかまえる, わきまえる, ふまえる, みえる, まみえる, もえ  
 る(萌), もえる(燃), ながらえる, こらえる, さらえる, なずらえる, なぞらえる,  
 あつらえる, しつらえる, とらえる, ふるえる, うれえる, ころろえる, そろえる,  
 おとろえる, くわえる(銜), くわえる(加), たくわえる, ゆわえる, あける, あげ  
 る, いける(生), いける(行), いける(埋), うける, どうける, ほうける[→ほお  
 ける], もうける(設), もうける(儲), ほおける(蓬), ほおける(惚), かける(欠),  
 かける(掛), かける(駆), かかげる, けしかける, くける, こける(倒), こける  
 (瘦), こげる, さける(裂), さける(避), さげる, ささげる, ふざける, しける,  
 いじける, おじける, かしげる, くじける, ねじける, はじける, ひしげる, すける  
 (透), すける(助), すげる, あずける, かずける, さずける, すずける, たすける,  
 うなずける, そげる, そそける, しりぞける, たける, あたける, しいたげる, かた  
 げる(肩), かたげる(傾), くだける, いただける, はだける, またげる, さまたげ  
 る, もたげる, つける(潰), つける(着), つげる, かこつける, つづける, やっつ  
 ける, なつける, とける(解), とける(溶), とげる, どける, おどける, とどけ  
 る, ほどける, なげる, つなげる, にげる, ぬける, ぬげる, のける, はける, ぼけ  
 る, はげる, さばける, ひける, ふける(深), ふける(老), ふける(芋が〜), か  
 たぶける, やぶける, へげる, ほける, ぼける(頭が〜), ぼける(惚), とぼける,  
 まける, まげる, かまける, たまげる, なまける, むける(剃), むける(向), そむ  
 ける, たむける, かたむける, めげる, もげる, やける, ひしゃげる, にやける, ふ  
 やける, ほやける, よける, しょげる, たいらげる, からげる, しらける, しらげる  
 (白), だらける, ひらける, やわらげる, ずるける, ころげる, くつろげる, とろ  
 ける, のろける, ひろげる, よろける, わける, たわける, あせる, いせる, うせ  
 る, おおせる, うかせる, きかせる(利), きかせる(聞), せかせる, いそがせる,  
 のぞかせる, ねかせる, ひびかせる, まかせる, わかせる, さわがせる, きせる, げ  
 せる, させる, なげる, はなせる(話), にせる, のせる, はせる, はぜる, うかば  
 せる, あそばせる, しのばせる, ほころばせる, あびせる, ふせる, かぶせる, のぼ  
 せる, ませる, まぜる, つかませる, すませる, のませる, からませる, みせる, む  
 せる, やせる, よせる, いからせる, つからせる, とがらせる, こわがらせる, とん  
 がらせる, まぎらせる, おくらせる, ふくらせる, しらせる, ちぢらせる, くもらせ  
 る, はやらせる, あわせる, いわせる, におわせる, にぎわせる, くわせる, そわせ  
 る, ただよわせる, くらわせる, くるわせる, ふるわせる, しんぜる, でる, あて  
 る, いてる, ひいでる, うでる, もうでる, ごてる, すてる, たてる(建), たてる

(立), たでる, おだてる, そだてる, そばだてる, へだてる, くわだてる, なでる, かなでる, はてる, ばてる, ふてる, めでる, もてる, ゆでる, あわてる, ねる(寝), かねる, たがねる, つかねる, わがねる, つくねる, こねる, ごねる, そこねる, かさねる, すねる, くすねる, たずねる, ゆだねる, はねる, たばねる, ひねる, まねる, つらねる, へる(経), うかべる, くべる, すべる(統), くすべる, ふすべる(燻), たべる, のべる(述), のべる(延), くらべる, しらべる, ならべる, うめる(埋), うめる(湯を〜), あかめる, あがめる, かがめる, しかめる, たしかめる, すがめる, たかめる, とがめる, ながめる, ふかめる, ゆがめる, きめる, くくめる, すくめる, ぬくめる, ひくめる, ふくめる, こめる, ことめる, さめる(覚), さめる(醒), さめる(冷), いさめる, おさめる, なぐさめる, しめる(締), しめる(占), いじめる, はずかしめる, せしめる, おとしめる, たのしめる, はじめる, いましめる, いやしめる, しからしめる, こらしめる, くるしめる, かるしめる, うすめる, うずめる, かすめる, しずめる(静), しずめる(沈), すすめる(進), すすめる(勸), やすめる, せめる(責), せめる(攻), そめる, ひそめる(潜), ひそめる(顰), ほそめる, ためる(溜), ためる(嬌), いためる(撓), いためる(痛), かためる, さだめる, あたためる, したためる, なだめる, あらためる, ちぢめる, とちぢめる, つめる, あつめる, つづめる, とめる, つとめる, まとめる, みとめる, もとめる, なめる, たしなめる, ぬめる, ねめる, はめる, せばめる, そばめる, ちりばめる, ひめる, ほめる, くぼめる, すぼめる, つぼめる, もめる, やめる(病), やめる(止), あやめる, はやめる, きよめる, つよめる, からめる, あからめる, あきらめる, ひらめる, くるめる, ぬるめる, まるめる, ゆるめる, くろめる, ひろめる, まろめる, きわめる, しわめる, たわめる, よわめる, あれる, いれる, しいれる, うれる(熟), うれる(売), おれる, しおれる, たおれる, かれる(枯), かれる(涸), いかれる, うかれる, けがれる, こがれる, あこがれる, すがれる, そがれる, つかれる(疲), つかれる(憑), ながれる, まぬかれる, のがれる, はがれる, しゃがれる, わかれる, きれる, あぎれる, いぎれる, ちぎれる, とぎれる, まぎれる, くれる(與), くれる(暮), ぐれる, おくれる, かくれる, ささくれる, しぐれる, ねじくれる, すぐれる, たくれる, ちぢくれる, しらばつくれる, ひねくれる, はぐれる, しらばつくれる, しらばくれる, ふくれる, ほぐれる, まくれる, むくれる, しゃくれる, こましゃくれる, よごれる, される, ざれる, うかされる, ひかされる, くだされる, ほだされる, うなされる, つまされる, しれる(痴), しれる(知), じれる, こじれる, ねじれる, よじれる, すれる, ずれる, うすれる, かすれる, くずれる, こすれる, おとずれる, はずれる, わすれる, それる, おそれる, たれる, だれる, へこたれる, しだれる, すたれる, ただれる, なだれる, しなだれる, みだれる, もたれる, ちぢれる, つれる(釣), つれる(連), ほつれる, もつれる, やつれる, てれる, とれる, なれる, こなれる, はなれる, ぬれる, ぬれ

る, はれる (晴), はれる (腫), あばれる, うかばれる, よばれる, くびれる, さびれる, しびれる, くだびれる, ふれる (振), ふれる (触), あふれる, あぶれる, かぶれる, つぶれる, やぶれる, ほれる (惚), ほれる (堀), うぬぼれる, おぼれる, こぼれる, むすぼれる, うまれる, のまれる, まみれる, むれる (蒸), むれる (群), たわむれる, もれる, うもれる, うずもれる, しゃれる, じゃれる, ゆれる, よれる, いらせられる, あてられる, ふられる, われる, こわれる, おそわれる, あらわれる, とらわれる。

#### (4) 変格活用

くる, する。

## 2. 合成語

### (1) あと要素が独立するもの

(あう) いい~, いがみ~, うけ~, おち~, おり~, おれ~, かかり~, かけ~, かち~, かみ~, きり~, くい~, くみ~, こみ~, さし~, しげり~, しり~, すれ~, せめ~, せり~, だき~, たち~, つかみ~, つき~, つり~, つれ~, で~, でき~, とけ~, とくみ~, となり~, とり~, なれ~, に~, にらみ~, ねじ~, はなし~, はり~, ひき~, ふり~, へし~, み~, むかい~, むき~, めぐり~, もみ~, やり~, ゆき~, より~, わたり~, /まに~。

(あかす) かたり~, とき~, なき~, なげき~, のみ~, まち~。

(あがる) うかび~, うき~, おどり~, おもい~, きれ~, すくみ~, ずり~, たち~, ちぢみ~, つけ~, つり~, とび~, なり~, ぬけ~, のし~, のぼせ~, はね~, ひ~, ふるえ~, めし~, もち~, もり~, わき~。

(あける) うち~, こじ~。

(あげる) あらい~, いれ~, うち~, かき~, かぞえ~, きり~, くみ~, くり~, け~, こみ~, さし~, しぼり~, しぼり~, しゃくり~, すすり~, せき (咳)~, せき (塞)~, せり (迫)~, せり (競)~, そだて~, そめ~, せぐり~, たくし~, たたき~, つくり~, つみ~, つり~, でっち~, とり~, なで~, ねじ~, のり~, はり~, ひき~, まき~, まくし~, まつり~, み~, めし~, もうし~, もち~, もり~, ゆい~, よみ~。

(あさる) かい~。

(あそぶ) もて~。

(あたる) おもい~, さし~, つき~, み~, ゆき~。

(あつかう) とり~, もち~, もて~。

(あつまる) より~。

(あつめる) かき~, かり~, とり~。

- (あてる) かぎ～, さがし～, つき～, ひき～, ふり～, わり～。  
 (あます) もて～。  
 (あまる) おもい～。  
 (あやまる) いい～, み～。  
 (あらす) くい～。  
 (あらためる) くい～。  
 (あらわす) み～。  
 (あるく) で～, とび～, ながれ～, ねり～, わたり～。  
 (あわす) →あわせる。  
 (あわせる) あり～, い～, いい～, いれ～, うち～, うめ～, おもい～, かき～, か  
 け～, かみ～, きき～, くみ～, くり～, しめし～, だき～, たずね～, つき～, つ  
 ぎ～, つづり～, てらし～, とい～, とり～, にらみ～, ぬき～, ねり～, のり～,  
 はぎ～, ひき～, まち～, み～, もうし～, もち～, よみ～, /め～。  
 (いそぐ) うり～。  
 (いだす) み～。  
 (いたる) たち～。  
 (いる【入】) いたみ～, おし～, おそれ～, おち～, かんじ～, きき～, きえ～, く  
 い～, こみ～, しみ～, せき～, たえ～, たち～, たのみ～, つけ～, とり～, なき  
 ～, ね～, はじ～, ひき～, み～, わび～, /め～。  
 (いる【居】) なみ～。  
 (いれる) うけ～, おとし～, かい～, かき～, かり(刈)～, かり(借)～, きき～,  
 くみ～, くり～, しょうじ～, さし～, とり～, のり～, もうし～, よび～。  
 (うける) かり～, ひき～, まち～, み～, もうし～, ゆずり～, /まに～。  
 (うしなう) み～。  
 (うせる) きえ～, にげ～。  
 (うそぶく) そら～。  
 (うつ) むかえ～, /なみ～, めい～, むち～, /のた～。  
 (うつす) ひき～。  
 (うつる) おし～, のり～, ひき～。  
 (えむ) ほくそ～, ほほ～。  
 (おう) うけ～, /せ～。  
 (おおせる) し～。  
 (おがむ) ふし～。  
 (おく) さし～, すて～, きき～, とめ～, とり～, /さて～。  
 (おくる) かき～, み～, もうし～。  
 (おくれる) しに～, だし～, たち～, のり～。

(おこす) おもい～、かき～、すき～、だき～、たたき～、ひき～、ふり～、ふるい～。

(おこなう) とり～。

(おこる) わき～。

(おさえる) さし～、とり～。

(おされる) け～。

(おしむ) だし～。

(おちる) うまれ～、ずり～。

(おとす) いい～、うち～、かき～、きき～、きり～、け～、せめ(攻)～、せめ(責)～、せり～、とり～、なき～、ふるい～、み～。

(およぶ) きき～。

(おりる) とび～。

(おる) へし～、／た～、ほね～。

(おれる) くず～。

(おろす) こき～、なで～、ふき～、み～。

(がう) あて～。

(かえす) おい～、おし～、おもい～、おり～、きき～、きり～、くり～、け～、こね～、すき(漉)～、すき(鋤)～、せき～、そめ～、つき～、つつ～、てり～、とい～、とり～、はね～、ひき～、ひっ～、ふき～、まぜ～、まぜっ～、み～、むし～、もり～、やり～、／とって～、でんぐり～、ひっくり～、ぶり～、／うら～、／ごった～。

(かえる〔返〕) あぎれ～、いき～、さえ～、しずまり～、しょげ～、そり～、たち～、にえ～、ね～、はね～、ふり～、ふんぞり～、み～、むせ～、わき～、われ～、／そっくり～、そりくり～、でんぐり～、にえくり～、ひっくり～、／うら～、よみ～、わか～。

(かえる〔換〕) おき～、きり～、くみ～、くり～、さし～、すげ～、すみ～、すり～、たて～、つくり～、とり～、のり～、ひき～、ふり～、よみ～。

(かかえる) だき～、めし～。

(かがやく) てり～。

(かかる) きり～、さし～、せめ～、たち～、つかみ～、つつ～、とおり～、とび～、とり～、のし～、のり～、ひっ～、ふり～、よっ～、より～、／しも～。

(かきまわす) ひっ～。

(かぎる) み～。

(かく〔欠〕) ぶっ～、／こと～。

(かく〔掻〕) ひっ～、／ゆ～。

(かくす) おし～。

(がける〔翔〕) あま～。

(がける〔駈〕) さき～。

(かける〔掛〕) い～、おい～、おし～、おっ～、きり～、さし～、さそい～、し～、しに～、せめ～、たたみ～、たて～、つつ～、つめ～、で～、とい～、なげ～、のり～、はたらき～、はなし～、ひっ～、ふっ～、ふり～、み～、みせ～、もたせ～、もち～、よせ～、よび～、／こころ～、こし～、て～、め～。

(かこむ) とり～。

(かざす) さし～、ふり～。

(かさなる) おり～、つみ～。

(かさねる) おり～、つみ～。

(かざる) き～。

(かじる) きき～。

(かたづける) とり～。

(かたまる) こり～。

(かためる) さし～。

(がたる) もの～。

(かつ) うち～。

(かつぐ) ひっ～。

(かぶせる) おっ～。

(かぶる) かい～、ひっ～、ふり～。

(かまえる) まち～、／み～。

(かよう) に～。

(がれる) うら～、しも～、しわ～。

(かわす) いい～、くみ～、とり～、み～、よび～。

(かわる) いれ～、うつり～、うまれ～、きり～、しに～、すみ～、たち～、なり～、ぬけ～、／うって～。

(きえる) かき～。

(きかせる) とき～。

(きく) つたえ～、もれ～。

(きめる) とり～。

(きよめる) はらい～。

(きる) いい～、うち～、おし～、おもい～、かい～、かし～、かっ～、かり～、くい～、し～、しめ～、すみ～、すり～、だし～、たち～、たて～、つき～、つつ～、つめ～、で～、にがり～、ねじ～、のり～、はさみ～、はり～、ふみ～、ふり～、み～、もち～、やき～、わり～、／うら～、く～、せ～、ね～、ま～、よこ～、／こ～、／ちょん～、ぶった～、／いきせき～。

(きれる) うり～、すり～、ふっ～、わり～、／こと～、／はち～。

- (きわめる) み～。  
(くう) す～。  
(くくる) しめ～、すべ～、ひっ～。  
(くぐる) かい～。  
(くさる) ふて～。  
(くす) ひき～。  
(くずす) きり～、もち～、とり～。  
(くずれる) なき～。  
(くだく) うち～、かみ～。  
(くだす) かき～、のみ～、み～、よみ～。  
(くたびれる) まち～。  
(くだる) へり～。  
(くどく) かき～。  
(くねる) まがり～。  
(くびる) み～。  
(くむ) し～、とっ～、とり～、のり～。  
(くもる) かき～。  
(くらう) めん～。  
(くらす) いい～、なき～、なげき～、ふり～、ゆき～。  
(くる) かい～、さし～、／かん～、ちち～、つま～。  
(くるう) まい～。  
(くるめる) いい～、ひっ～。  
(くれる) あけ～、かき～、ゆき～。  
(くわえる) つけ～。  
(くわわる) つけ～。  
(けす) いい～、うち～、とり～、もみ～。  
(けずる) くし～。  
(こえる) さし～、のり～。  
(こがれる) こい～、まち～。  
(こける【倒】) ねむり～、わらい～。  
(こける【瘦】) やせ～。  
(こす) おい～、かち～、くり～、さし～、とり～、のり～、ひっ～、まかり～、まけ～、み～、もうし～、もち～。  
(こする) あて～。  
(こたえる) ふみ～、もち～。  
(こなす) き～、し～、つかい～、やり～、よみ～。



(このむ) すき～。

(こぼれる) い～, さき～, ふき～。

(こむ) あて～, い～, いきおい～, いり～, うち～, うり～, おい(追)～, おい(老)～, おくり～, おし～, おどり～, おもい～, おり(折)～, おり(織)～, かい～, かかえ～, かき～, かけ～, かり～, き～, きき～, きめ～, きり～, くい～, くみ(汲)～, くみ(組)～, くらい～, くり～, ころがり～, ころげ～, さし～, し～, しけ～, しのび～, しょい～, しょげ～, じれ～, すべり～, すり(擦)～, すり(刷)～, すわり～, せき(急)～, せき(咳)～, せっ～, たき～, だき～, たくし～, たたみ～, たて～, たのみ～, だまし～, ため～, たらし～, つかい～, つぎ～, つけ(漬)～, つけ(付)～, つっ～, つみ～, つめ～, つり～, つれ～, てり～, とじ～, とび～, とり～, なき～, なぐり～, なだれ～, に～, ね～, ねじ～, ねむり～, のみ～, のり～, はかり～, はなし～, はめ～, はらい～, はり～, ひえ～, ひき～, ひきずり～, ひっ～, ふうじ～, ふき(拭)～, ふき(吹)～, ふさぎ～, ぶち～, ふみ～, ふり(降)～, ふり(振)～, ふれ～, ほれ～, まい～, まき～, まぎれ～, まるめ～, み～, めかし～, めり～, もうし～, もち～, よび～, わり～, /いき～。

(こめる) おし～, たち～, たて～, たれ～, とじ～, とり～, ひっ～, ふうじ～, ふり～, やり～。

(こもる) たて～, とじ～, ひき～, ひっ～, /くち～, す～, ふゆ～, み～。

(ころす) うち～, かみ～, さし～, しめ～, とり～, ひき～, ほし～, もり～。

(ころばす) つっ～。

(ころぶ) ね～。

(こわす) とり～, ぶち～。

(さいなむ) きり～, せめ～。

(さかる) で～, もえ～。

(さがる) くい～, なり～, ひき～, /やに～, /ぶら～。

(さく) きり～, つん～, ひき～。

(さける〔裂〕) はり～。

(さける〔避〕) とお～。

(さげる) きり～, くり～, とり～, ねがい～, はらい～, ひき～, ひっ～, はり～, み～, /ぶら～。

(さす) つき～, /こころ～, さお～, な～, ね～, め(目)～, め(芽)～, ゆび～。

(さだめる) み～。

(さばく) うり～, とり～。

(さびる) かみ～, かん～。

(ざめる) あお～, きょう～, め～。

(さらばう) おい～。

- (さらばえる) やせ～。
- (さる) すぎ～、たち～、とり～、ひき～。
- (さわぐ) たち～。
- (さんずる) はせ～。
- (しきる) とり～。
- (しく) くみ～、ちり～、ふり～。
- (しげる) おい～。
- (しずまる) ね～。
- (しずむ) うち～、なき～、ふし～。
- (しずめる) とり～。
- (したがう) つき～。
- (しのぶ) たえ～。
- (しばる) くい～、ふん～。
- (しぼる) ひき～、ふり～。
- (しまる) とり～、ひき～。
- (じみる) あか～、あぶら～、きちがい～、しょたい～。
- (しめる〔占〕) かい～。
- (しめる〔締〕) かみ～、だき～、にぎり～、ふみ～。
- (しめる〔染〕) たき～、に～。
- (しらべる) とり～。
- (しる) おもい～、み～。
- (しるす) かき～。
- (すえる) うち～、み～。
- (すかす) み～。
- (すがる) おい～、とり～、より～。
- (すぎる) で～、ね～、ゆき～。
- (すく) みえ～。
- (すくむ) たち～。
- (すくめる) い～、だき～。
- (すぐる) より～。
- (すごす) きき～、ね～、み～、やり～。
- (すすめる) のり～。
- (すてる) いい～、かき～、かなぐり～、きり～、とり～、なげ～、ぬぎ～、のり～、ふり～、み～。
- (すます〔澄〕) おこない～、きき～、とり～、み～。
- (すます〔済〕) し～、なり～。

(する・ずる・じる) あせ～, あだ～, あたい～, あまん～, うとん～, おもん～, がえん～, かるん～, くみ～, くらい～, けみ～, こい～, さいわい～, さきん～, そらん～, たくましゅう～, たむろ～, つみ～, なく～, なに～, なみ～, なみだ～, なんなんと～, のり～, ほっ～, まっとう～, もの～, やすん～, よく～, よみ～, わたくし～。

#### ・ア行

愛～, 圧～, 案～, 按～, 医～, 慰～, 委～, 逸～, 淫～, 印～, 鬱～, 映～, 詠～, 益～, 役～, 演～, 怨～, 応～, 臆～。

#### ・カ行

嫁～, 化～, 架～, 科～, 課～, 賀～, 介～, 解～, 会～, 慨～, 害～, 画～, 渴～, 合～, 冠～, 関～, 姦～, 減～, 観～, 感～, 期～, 帰～, 擬～, 議～, 拘～, 喫～, 給～, 休～, 窮～, 御～, 供～, 饗～, 狂～, 興～, 行～, 禁～, 吟～, 具～, 遇～, 寓～, 屈～, 訓～, 薫～, 敬～, 刑～, 慶～, 激～, 微～, 決～, 驗～, 検～, 猷～, 滅～, 鼓～, 伍～, 期～, 抗～, 困～, 高～, 薨～, 講～, 号～, 刻～, 剋～, 哭～, 婚～, 混～。

#### ・サ行

坐～, 際～, 策～, 察～, 賛～, 算～, 産～, 参～, 散～, 竄～, 諷～, 死～, 資～, 辞～, 侍～, 治～, 持～, 弑～, 失～, 謝～, 积～, 寂～, 修～, 誦～, 修～, 仕～, 宿～, 祝～, 熟～, 準～, 殉～, 処～, 書～, 署～, 除～, 叙～, 序～, 恕～, 称～, 頌～, 賞～, 誦～, 証～, 請～, 生～, 乘～, 食～, 囑～, 信～, 進～, 推～, 製～, 制～, 征～, 接～, 撰～, 節～, 絶～, 撰～, 僭～, 宣～, 煎～, 相～, 草～, 奏～, 蔵～, 即～, 則～, 賊～, 属～, 損～, 存～, 損～, 存～。

#### ・タ行

墮～, 帶～, 対～, 体～, 題～, 託～, 諾～, 達～, 脱～, 嘆～, 彈～, 断～, 談～, 着～, 注～, 沖～, 誅～, 朝～, 徴～, 弔～, 寵～, 長～, 陳～, 通～, 挺～, 呈～, 敵～, 適～, 徹～, 撤～, 点～, 転～, 賭～, 投～, 同～, 動～, 督～, 得～, 毒～, 鈍～。

#### ・ナ行

難～, 任～, 熱～, 念～。

#### ・ハ行

派～, 配～, 麾～, 排～, 拝～, 倍～, 博～, 駁～, 縛～, 発～, 罰～, 反～, 判～, 比～, 秘～, 必～, 評～, 表～, 瀕～, 貧～, 付～, 賦～, 諷～, 封～, 扮～, 聘～, 僻～, 偏～, 眨～, 変～, 便～, 弁～, 便～, 補～, 保～, 崩～, 焙～, 封～, 報～, 奉～, 卜～, 没～, 歿～。

#### ・マ行

摩～, 慢～, 魅～, 瞑～, 命～, 銘～, 滅～, 免～, 面～, 模～, 目～, 默～。

・ヤ行

約～, 訳～, 扼～, 輸～, 幽～, 有～, 擁～, 要～, 浴～。

・ラ行

拉～, 利～, 律～, 略～, 領～, 類～, 令～, 列～, 躰～, 弄～, 勞～, 録～, 論～。

・ワ行

和～。

(ずる) ひき～, /うわ～。

(すわる) い～。

(せまる) さし～。

(そう) つき～, つれ～, より～。

(そえる) かき～。

(そこなう) いい～, し～, しに～, み～。

(そそぐ) ふり～。

(そだつ) おい～。

(ぞる) のけ～, ひ～。

(そろう) さき～, で～。

(それる) み～。

(そろえる) とり～。

(たいする) あい～。

(たえる[絶]) しに～, /と～。

(たえる) よこ～。

(たおす) おがみ～, かり～, くい～, なぎ～, のみ～, はり～, ふみ～。

(たぎる) にえ～。

(たくる) ひっ～, ぶっ～, ふん～。

(たす) つぎ～。

(だす) あみ～, いびり～, うかれ～, うき～, うけ～, うち～, おい～, おっぼり～, おびき～, おもい～, かい～, かき(掻)～, かき(書)～, かぎ～, かけ～, かし～, かり～, きき～, きり～, くみ～, くり～, け～, さし～, さそい～, さらけ～, し～, しめ～, せり～, そめ～, つかみ～, つき～, つくり～, つけ～, つまみ～, つみ～, つり～, つれ～, とび～, とり～, なき～, なげ～, ぬき～, のり～, はい～, はき(掃)～, はき(吐)～, はじき～, はみ～, はり～, ひき～, ひねり～, ひり～, ふき～, ふみ～, ふり～, ほうり～, ほき～, ほり～, み～, めし～, よび～, わり～。

(たたえる) ほめ～。

(たたく) しば～。

(ただす) きき～, とい～。

(たたむ) おり～。

(たつ) いきり～、うき～、おもい～、おり～、きおい～、きり～、そそり～、たけり～、つっ～、つれ～、とび～、なり～、に～、にえ～、ひき～、ふるい～、もえ～、ゆき～、わき～、／あわ(粟)～、あわ(泡)～、うきあし～、おじけ～、おぞけ～、おもて～、かしら～、かど～、きわ～、けば～、さき～、さっき～、す～、そうけ～、そば～、たび～、つの～、つのめ～、つぶ～、つま～、つまさき～、とげ～、なみ～、はら～、ひ～、ふしくれ～、みみ～、め(芽)～、め(目)～、やく～、よう～、／あら～、いら～、おも～、さか～、よ～。

(たてる) あらい～、いい～、うめ～、おい～、かき(書)～、かき(楮)～、かざり～、かぞえ～、かり～、くどき～、くみ～、け～、さし～、し～、せがみ～、せき～、せめ(政)～、せめ(責)～、つき～、つくり～、つっ～、つみ～、とり～、ならべ～、に～、ひき～、ひっ～、ふり～、ほめ～、まくし～、み～、もうし～、もり～、／あわ～、かど～、さき～、しょうこ～、つま～、やく～、よう～、／あら～、いら～、さか～。

(だまる) おし～。

(たたる) こと～。

(たれる) あく～、あまっ～、うな～、しお～、しみつ～。

(たわる) よこ～。

(ちがう) いれ～、かけ～、くい～、すれ～、とび～。

(ちがえる) さし～、け～、とり～、ね～、はき～、み～。

(ちらす) あたり～、おい～、かき～、くい～、とり～。

(ちる) とび～。

(つかう) き～、こき～。

(つかえる) さし～。

(つかせる) ばた～。

(つかまえる) とっ～。

(つかまる) とっ～。

(つかむ) ひっ～。

(つかる) ぶ～、み～。

(つかわす) さし～。

(つく) い～、いて～、おい～、おち～、おもい～、かじり～、かぶり～、かみ～、からみ～、かんがえ～、くい～、くみ～、くらい～、こげ～、こびり～、さび～、しがみ～、しゃぶり～、すみ～、とっ～、とび～、とり～、なき～、に～、ね～、はり～、ひっ～、ふるい～、へばり～、むすび～、もえ～、やき～、ゆき～、より～、わずらい～、／いぎ～、いろ～、うわ～、えん～、おぞけ～、かた～、かん～、き～、きず～、こころ～、たて～、ちから～、どく～、ぬか～、ね～、ひざま～、もと～、／ち

か～、／こ～。

(つぐ) あい～、うけ～、とり～、ひき～。

(つくす) いい～、たち～。

(つくばう) はい～。

(づくる) かたち～。

(つくろう) とり～、み～。

(つける) いい～、いため～、いり～、うけ～、うち～、うみ～、うり～、おおせ～、  
おさえ～、おし～、おち～、おどし～、かき～、かぎ～、かけ～、かざり～、き～、  
きき～、きざみ～、きめ～、きり～、くっ～、こぎ～、さし～、し～、しかり～、し  
ばり～、しめ～、すい～、すえ～、すり～、せめ～、そなえ～、たき～、たたき～、  
つき～、てり～、とき～、とり～、なぐり～、なげ～、なすり～、なで～、に～、に  
らみ～、ぬり～、のり～、はね～、はり～、ひき～、ふ～、ふき～、ふみ～、ふん～、  
まち～、み～、みせ～、むすび～、もうし～、やき～、ゆわえ～、よせ～、よび～、  
わり～、／あと～、いち～、いんしょう～、うら～、えん～、かた～、かんけい～、  
きず～、きそ～、こじ～、こと～、ちから～、な～、／ちか～。

(つづく) うち～、ひき～。

(つなぐ) くい～。

(つもの) いい～。

(つぶす) くい～、すり～、にぎり～、のみ～、もり～。

(つぶれる) のみ～、よい～。

(つまむ) かい～。

(つまる) おし～、に～、ゆき～、／いき～、て～。

(つめる) おい～、おし～、おもい～、きり～、くい～、せんじ～、つき～、とい～、  
に～、のぼり～、はり～、み～。

(つもる) ふり～、み～。

(つらねる) ぬき～。

(つる) ひき～。

(つれる) うち～、ひき～。

(でかす) し～。

(でる) うかれ～、うき～、さし～、とどけ～、とび～、ぬきん～、ねがい～、はい～、  
はみ～、まかり～、もえ～、もうし～、ゆるぎ～。

(とおす) おし～、さし～、たて～、のり～、み～。

(とおる) しみ～、すき～、つき～、まかり～。

(とがめる) きき～、み～。

(とく) ひも～。

(とける) うち～。

- (とげる) し～、そい～、なし～、やり～。  
 (とどく) ゆき～。  
 (とどける) きき～、み～。  
 (とどまる) おもい～、ふみ～。  
 (とばす) うり～、け～、けっ～、つき～、なぐり～、はり～、ふき～。  
 (とぶ) けし～。  
 (とぼける) ね～、／そら～。  
 (とまる) おもい～、たち～。  
 (とめる) い～、うけ～、うち～、かき～、くい～、けし～、さし～、し～、せき～、  
 だき～、つき～、とり～、ひき～。  
 (ともなう) あい～。  
 (とらえる) ひっ～。  
 (とる) いけ～、うけ～、うち～、かき～、かり～、きき～、きり～、くみ～、すい～、  
 だき～、ぬき～、ね～、のっ～、ひき～、み～、めし～、よみ～、／みて～、／あい  
 て～、あや～、いろ～、え～、かた～、き～、くま～、け～、じん～、つかさ～、つ  
 ま～、てま～、とし～、ひ～、ひま～、ぶん～。  
 (なおす) いい～、そめ～、たて～、で～、とり～、ねり～、み～、もち～。  
 (なおる) い～、たち～、ひらき～、むき～。  
 (ながす) うけ～、かき～、きき～、よみ～。  
 (なく) すすり～。  
 (なぐる) かき～、ぶん～。  
 (なげる) ぶん～。  
 (なす) おり～、すみ～、つくり～、とり～、み～、／なく～。  
 (なやむ) のび～、ゆき～。  
 (ならう) み～。  
 (ならす〔鳴〕) かき～、ふみ～。  
 (ならす〔均〕) ふみ～。  
 (ならぶ) い～、たち～。  
 (ならわす) いい～。  
 (なる〔成〕) あい～、／なく～、／およん～。  
 (なる〔鳴〕) たか～。  
 (なれる) すみ～、み～、／て～、みみ～、め～、もの～、／よ～。  
 (におう) さき～。  
 (にがす) とり～。  
 (にじる) ふみ～。  
 (ぬく) うち～、おい～、かき～、かち～、くり～、しり～、そめ～、だし～、つき～、

- はしり～、ひき～、ふみ～、み～、／うろ～、すっぱ～、ひっこ～。  
 (ぬける) きり～、すり～、つき～、／あか～、／ず～、ずば～。  
 (ぬる) ち～。  
 (ぬれる) なき～、／しょぼ～、そぼ～。  
 (ねがう) こい～。  
 (ねらう) つけ～。  
 (のがす) み～。  
 (のがれる) いい～。  
 (のく) たち～、とび～、ひき～、／とお～。  
 (のける) おし～、つき～、とり～、はね～、はらい～、ひき～、／とお～。  
 (のこす) おもい～、かき～、とり～。  
 (のこる) あけ～、きえ～、くれ～、さき～、ちり～。  
 (のばす) くい～。  
 (のびる) いき～、おち～、にげ～。  
 (のべる) くり～、さし～。  
 (のぼせる) とり～。  
 (のぼる) さし～、せめ～、たち～、よじ～、／さか～。  
 (のめす) うち～、つん～、ぶち～。  
 (のる〔乗〕) とび～。  
 (のる〔告〕) な～。  
 (ばう) はら～。  
 (はえる〔映〕) てり～。  
 (ばえる〔生〕) め～。  
 (ばがす〔剣〕) ひっ～  
 (はからう) とり～、み～。  
 (はかる) おし～、おもん～。  
 (はこぶ) もち～。  
 (はさむ) さし～、／た～、わき～。  
 (はじける) さい～。  
 (はだかる) たち～。  
 (ばしる) あかみ～、かん～、くち～、さい～、さき～、さや～、ち～、にがみ～。  
 (はずす) きき～、とり～、のり～、ふみ～。  
 (はずれる) で～、／なみ～。  
 (ばたく) ひっ～。  
 (はたす) うち～、つかい～。  
 (はたらく) たち～。



- (はてる) きえ～, くち～, たえ～, なり～, み～。  
 (はなす) きり～, つき～, つっ～, とり～, ひき～, ぶっ～, ふり～, み～, /て～。  
 (はなつ) いい～, とき～, ぬき～, ふり～。  
 (はなれる) かけ～, とび～, /よ～。  
 (ばねる) つっ～。  
 (はまる) あて～。  
 (はめる) あて～。  
 (はやす) ほめ～, もて～。  
 (はらう) あけ～, うち～, ური～, おい～, おっ～, きり～, し～, で～, とり～, なぎ～, ひき～, やき～, よっ～。  
 (はらす〔腫〕) なき～。  
 (はらす〔晴〕) み～。  
 (はる) いい～, つっ～, で～, でっ～, ひっ～, ふん～, み～, /いき～, かく～, かくしき～, かさ～, かど～, き～, ぎしき～, げす～, けんしき～, しかく～, しゃちこ～, しゃちほこ～, しゃっちょこ～, すじ～, ぶ～, ほお～, ほね～, よく～, /こわ～, /がん～, でしゃ～。  
 (ひかえる) さし～。  
 (ひく) さし～, さっ～, わり～, /ま～, みち～, ゆ～, ゆみ～, /なが～, /しょっ～, しょ～, たな～。  
 (ひしぐ) とり～。  
 (びたる) いろ～。  
 (ひびく) さし～, なり～。  
 (ひらく) きり～。  
 (ひろげる) くり～, とり～。  
 (ぶく) うそ～, め～。  
 (ふくめる) いい～。  
 (ふける) よみ～。  
 (ふさがる) たち～。  
 (ふす) つっ～, なき～, /うつ～, /ひれ～。  
 (ふせる) きり～, くみ～, とき～, なぎ～, ねじ～, /うつ～。  
 (ふる〔降〕) そぼ～。  
 (ふる〔振〕) わり～, /いた～, /ゆす～。  
 (ふるす) いい～。  
 (ふれる) あり～。  
 (へだたる) かけ～。  
 (へだてる) かけ～。

- (ぼける) ね～, ふる～。
- (ほこる) 勝ち～, さき～。
- (ほす) くみ～, のみ～。
- (ほどく) ふり～。
- (ほれる) おい～, きき～, み～。
- (まう) み～。
- (まがる) ひん～。
- (まぎれる) とり～。
- (まく〔巻〕) とり～, /いき～, うず～, /さか～。
- (まく〔撒〕) ふり～, /ばら～。
- (まくる) おい～, ふき～。
- (まける) ぶち～。
- (まげる) ひん～。
- (まごう) み～。
- (まさる) いや～, たち～。
- (まじる) いり～, たち～。
- (ます〔増〕) いや～。
- (ます〔在〕) おわし～。
- (まぜる) かき～, こき～, とり～。
- (まちがう) まかり～。
- (まつわる) はい～。
- (まとう) つき～。
- (まどう) にげ～, /と～。
- (まとめる) とり～。
- (まねく) さし～。
- (まもる) み～。
- (まよう) たち～, /ち～。
- (まわす) おい～, かき～, きり～, くり～, こづき～, さし～, つけ～, とり～, のみ～, のり～, ひき～, ひねくり～, ひねり～, はり～, ふり～, み～。
- (まわる) かけ～, たち～, で～, とび～, のたち～, ふれ～, み～, /もって～, /うわ～, した～。
- (みだす) かき～, とり～, ふり～。
- (みだれる) いり～, さき～。
- (みる) かえり～, /うち～, /かいま～, ゆめ～。
- (むかう) たち～, /て～, は～。
- (むかえる) で～。

- (むく[向]) で～, ふり～, み～, /あお～, うつ～。
- (むく[剥]) すり～。
- (むける[向]) さし～, し～, ねじ～, ふり～, /あお～, うつ～。
- (むける[剥]) すり～。
- (むしる) かき～。
- (むす[生]) くさ～, こけ～。
- (むすぶ) きり～, とり～。
- (めぐらす) はり～。
- (めぐる) へ～。
- (めす) おぼし～, きこし～, しろし～。
- (もうける) おもい～, まち～。
- (もうす) もの～。
- (もつ) うけ～, とり～。
- (もどす) かい～, さし～, つき～, とり～, はらい～, よび～, わり～。
- (もどる) たち～, まい～。
- (もよおす) かり～。
- (もらす) きき～。
- (やぶる) うち～, け～, つき～, ふみ～, み～, よみ～。
- (やめる) とり～,
- (やる) おし～, おもい～, かい～, み～。
- (ゆく) おち～, たち～, /ころ～。
- (よせる) うち～, おし～, おびき～, すい～, せめ～, とり～, めし～, よび～, /かた～, こと～, /ちか～。
- (よどむ) いい～。
- (よる) あゆみ～, いい～, しのび～, すり～, たち～, つめ～, にじり～, もち～, /かた～, とし～, /ちか～。
- (わかれる) しに～。
- (わける) おし～, かき(掻)～, かき(書)～, きき～, そめ～, つかい～, とり～, ひき～, ふき～, ふみ～, ふり～, み～, より～。
- (わずらう) おもい～。
- (わすれる) ね～, み～。
- (わたす) あけ～, いい～, さげ～, ひき～, み～, もうし～, ゆずり～。
- (わたる) あけ～, すみ～, とび～, なり～, はれ～, ゆき～。
- (わびる) まち～。
- (わらう) あざ～, せせら～。
- (われる) えみ～, ひ～, /ひび～。

## (2) あと要素が独立しないもの

- (あぐむ) まち～。  
 (かう) とび～、ゆき～。  
 (かねる) たまり～、まち～、み～、もうし～。  
 (きける) もうし～。  
 (くわす) で～。  
 (こくる) だまり～。  
 (こびる) ひね～。  
 (こまざく) きり～。  
 (ざかる) とお～。  
 (さす) かき～、のみ～、よみ～。  
 (しきる) なき～、ふり～。  
 (しだく) ふみ～。  
 (じゃくる) なき～。  
 (じろむ) はな～。  
 (すくまる) い～。  
 (すさぶ) ふき～。  
 (ずさむ) くち～。  
 (そびれる) いい～、ね～。  
 (そべる) ね～。  
 (そぼつ) ぬれ～。  
 (そめる) なれ～、み～。  
 (そやす) ほめ～。  
 (ちぎる) ほめ～。  
 (ちゃける) あか～、あかっ～、しら～、しらっ～。  
 (つかる) いい～、こと～。  
 (とれる) み～。  
 (ふためく) あわて～。  
 (ふらす) いい～。

## (3) 接尾語のついたもの

- (かす) あまや～、うっちゃら～、おちゃら～、おびや～、すっぽ～、そびや～、だま～、とがら～、とんがら～、はぐら～、はね～、ひけら～、ひや～、ほったら～、まぎら～、みせびら～、やら～。  
 (がる) ありがた～、あわれ～、いとおし～、いとし～、いや～、うれし～、おし～、

- かわい～、きょう～、くやし～、けむた～、こわ～、つう～、にく～、ほし～、よ～。  
 (ぎる) あぶら～。  
 (ぐむ) つの～、なみだ～、め～。  
 (くる) こね～、せせ～、ぬた～、のた～、ひね～、ほじ～。  
 (げる) あらら～、こそ～、ばか～、ひょうで～。  
 (ずむ) くら～。  
 (つく) いちゃ～、うろ～、がさ～、がた～、がちゃ～、がっ～、きら～、ぎら～、ぐず～、ぐら～、こせ～、ごた～、ごちゃ～、ごて～、ごろ～、ごわ～、ぎら～、ざわ～、じと～、じめ～、しょぼ～、じゃら～、そわ～、だぶ～、ちら～、ぬら～、ねば～、ばく～、ばた～、ばら～、ばら～、びく～、ひょろ～、ひり～、ふら～、ぶら～、べた～、べと～、まご～、むか～、もた～。  
 (なわる) おそ～。  
 (のく) あお～。  
 (のける) あお～。  
 (ばむ) あか～、あお～、あせ～、かれ～、き～、くろ～、けしき～、しろ～、すす～。  
 (びる) おとな～、ひな～、ふる～、ひから～、あら～。  
 (びれる) うら～、わる～。  
 (ぶる) つう～、ていさい～、／ゆさ～。  
 (ぶれる) うら～、／おち～。  
 (めかす) うご～、ひら～、ほの～。  
 (めく) あき～、あだ～、いろ～、つや～、とき～、はる～、／なま～、／うご～、きし～、きら～、くる～、ささ～、さざ～、ざわ～、さんざ～、とき～、どよ～、はた～、ひし～、ひら～、ほの～、ゆら～、よろ～。  
 (やぐ) はな～、／わか～。  
 (らぐ) うす～、やす～、やわ～。  
 (わう) あじ～、にぎ～。  
 (わわす) にぎ～。

## 形 容 詞 1

### 1. 単 純 語 (語末からの五十音順)

#### (1) ク 活 用 系 統

いい、かいい、かわいい、うい、あやうい、おおい、とおい、みじかい、たかい、あたたかい、あったかい、ちかい、でっかい、でかい、ながい、にがい、ふかい、こまかい、やわらかい、わかい、おおきい、えぐい、にくい、みにくい、ぬくい、ひくい、

こい, かしこい, はしこい, すごい, しつこい, はしっこい, しつっこい, むごい, あさい, ちいさい, くさい, むさい, うるさい, すい, うすい, こすい, まずい, やすい, たやすい, おそい, ほそい, いたい, かたい (堅), かたい (難), ありがた, い, めでたい, つべたい, つめたい, みみっちい, あつい (熱・暑), あつい (厚), いかつい, きつい, どぎつい, ごつい, ねつい, がめつい, うとい, けうとい, とうとい, くどい, あくどい, さとい, あざとい, いざとい, すすどい, たっとい, ひどい, ふとい, しぶとい, するどい, きわどい, しんどい, ない, ふがいない, もったいない, さがない, しがない, おっかない, おぼつかない, はかない, すくない, いけない, あたじけない, かたじけない, すげない, あどけない, いとけない, しどけない, いわけない, おさない, きたない, いぎたない, はしたない, つたない, ぎごちない, えげつない, せつない, やんごとな, あぶない, みっともない, つれない, すっぱい, しょっぱい, ねばい, にぶい, あまい, うまい, せまい, さむい, ねむい, おもい, はやい, かゆい, はがゆい, こそばゆい, まばゆい, おもはゆい, かわゆい, よい, きよい, いさぎよい, つよい, あらい, えらい, からい, えがらい, くらい, つらい, かるい, あかるい, ずるい, だるい, かつたるい, ひだるい, ぬるい, ふるい, まるい, ゆるい, わるい, おもしろい, のろい, ひろい, ぼろい, もろい, ちょろい, あわい, こわい, しわい, やわい, よわい。

## (2) シク活用系統

あしい, おいしい, うっとうしい, おしい, いとおしい, おかしい, さかしい, はずかしい, むずかしい, そっかしい, むづかしい, もどかしい, ゆかしい, うつくしい, はげしい, ややこしい, ひさしい, やさしい, すずしい, かまびすしい, まずしい, したしい, ただしい, おびただしい, あわただしい, いとしい, ひとしい, おなじい, かなしい, おとなしい, むなしい, たのしい, こうばしい, かんばしい, きびしい, さびしい, わびしい, まぶしい, ほしい, おぼしい, とぼしい, めぼしい, あつかましい, やかましい, たくましい, せせこましい, あさましい, すさまじい, かしましい, おぞましい, いたましい, けたたましい, つましい, つつましい, おとましい, やましい, さみしい, いかめしい, さもしい, ひもじい, あやしい, いやしい, くやしい, いじらしい, めずらしい, あたらしい, すばらしい, みすばらしい, しかつめらしい, くるしい, めまぐるしい, いちじるしい, うれしい, よろしい, くわしい, かがわしい, けわしい, ふさわしい, せわしい, いたわしい, いまわしい, うるわしい, うれわしい。

## 2. 合成語

(1) 複合語 (あと要素の独立しないものも含む), 接頭語による派生語

(あたたかい) なま～。

(あたらしい) こと～, なま～, ま～, みみ～, め～。

- (あつい[厚]) て～, ぶ～。  
 (あつい[暑]) むし～。  
 (あらい) て～。  
 (いたい) かたはら～, かたわら～, て～。  
 (うい) もの～。  
 (うるさい) くち～。  
 (えらい) ど～。  
 (おおい) おそれ～, のこり～。  
 (おかしい) ちゃんちゃら～。  
 (おいしい) くち～, なごり～, のこり～。  
 (おそろしい) すえ～, そら～, もの～。  
 (おもい) て～。  
 (がしこい) せち～, わる～。  
 (がたい) ぎり～, くち～, て～, もの～。  
 (がなしい) うら～, もの～。  
 (がゆい) むず～。  
 (からい) こす～, しお～, せち～。  
 (がるい) て～。  
 (ぎたない) いじ～, うす～, くち～, こ～, ね～, はら～。  
 (きびしい) て～。  
 (きみわるい) うす～。  
 (くさい) あお～, いそ～, いんき～, うさん～, かび～, きな～, けち～, こげ～,  
 しゃら～, しんき～, ちち～, つち～, てれ～, どろ～, なま～, のろ～, ばか～,  
 バタ～, ひと～, ひなた～, ふる～, まっこう～, みず～, めんどう～, もの～。  
 (くどい) しち～, まわり～。  
 (ぐらい) うしろ～, うす～, お～, こ～, ほの～。  
 (ぐるおしい) もの～。  
 (くるしい) あつ～, いき～, おも～, かた～, きき～, こころ～, せま～, ね～, み  
 ん, むさ～, むな～, /あい～。  
 (くろい) あおん～, あか～, あさ～, か～, どす～, はら～, まっ～。  
 (こそばい) しり～。  
 (ごわい) て～。  
 (ざかしい) こ～。  
 (さがない) くち～。  
 (ざとい) みみ～, め～。  
 (さびしい) うら～, もの～。

- (さむい) うすら～, うそ～, お～, はだ～。  
 (さわがしい) もの～。  
 (しろい) あお～, なま～, なまっしろい。  
 (ずうずうしい) いけ～。  
 (すかない) いけ～。  
 (すくない) たのみ～。  
 (すごい) もの～。  
 (すさまじい) もの～。  
 (ずっぱい) あま～。  
 (ぜわしい) き～。  
 (たかい) うず～, かん～, かんじょう～, け～, こ～, さんよう～, そろばん～, な  
 ～, ものみ～。  
 (たのもしい) すえ～。  
 (たらない) もの～。  
 (たりない) もの～。  
 (たるい) あまっ～, した～。  
 (だるい) け～。  
 (ちかい) ほど～, ま～。  
 (づよい) がまん～, き～, ころ～, しんぼう～, ちから～, て～, ね～, ねばり～。  
 (づらい) きき～。  
 (とおい) えん～, ほど～, ま～, まわり～, みみ～。  
 (ない) あえ～, あじき～, あじけ～, あっけ～, あぶなげ～, おとなげ～, かぎり～,  
 がんぜ～, ころ～, ころもと～, さりげ～, しかた～, そっけ～, じゅつ～, じ  
 ょさい～, せん～, せんかた～, だいじ～, たより～, だらし～, つつが～, なさけ  
 ～, なにげ～, なにごころ～, ならび～, にげ～, にべ～, はてし～, めんぼく～,  
 やるかた～, やるせ～, よぎ～, よし～, よんどころ～, わけ～, わり～°  
 (ながい) ひょろ～, ほそ～。  
 (なつっこい) ひと～。  
 (なまぐさい) ち～。  
 (にがい) ほろ～。  
 (にくい) ころ～, こづら～, つら～。  
 (にくらしい) こ～。  
 (ぬるい) て～, なま～, ま～。  
 (ばしこい) す～, て～。  
 (ばしっこい) す～。



- (はずかしい) うら～, き～, こ～, そら～。  
 (はばったい) くち～。  
 (ばやい) す～, て～, てっとり～。  
 (ひどい) て～, こっ～。  
 (ひろい) て～, だだっ～。  
 (ふかい) うたがい～, うたぐり～, えんりょ～, おく～, くさ～, け～, こ～, しゅ  
 うねん～, つつしみ～, つみ～, なさけ～, ね～, ようじん～。  
 (ぶとい) ず～, の～。  
 (ほそい) か～, こころ～, ながっ～。  
 (ぼったい) あつ～, はれ～。  
 (まずい) き～。  
 (まるい) まん～。  
 (むさい) じじ～。  
 (むずかしい) き～, こ～, しち～。  
 (めずらしい) もの～。  
 (めたい) うしろ～。  
 (めでたい) お～。  
 (めんどくさい) しち～。  
 (もろい) なみだ～。  
 (やかましい) くち～, こ～。  
 (やさしい) なま～。  
 (やすい) お～, き～, こころ～, み～。  
 (ゆかしい) おく～。  
 (よい) いろ～, こごち～, こころ～, ほど～, み～, みめ～。  
 (よわい) か～, こころ～, ひ～。  
 (わかい) うら～。  
 (わるい) きみ～。

## (2) 複合+派生による語

まちどおしい。

## (3) 「～～しい」の形式をもつ語

## (a) 和語系

## ・名詞の反復+しい

かどかどしい, ことごとしい, そらぞらしい, とげとげしい, はかばかしい, はな  
 ばなしい, みずみずしい, ものものしい, よそよそしい。

## ・形容詞語幹の反復+しい

あらあらしい、いたいたしい、うとうとしい、おもおもしろい、かるがるしい、くどくどしい、しらじらしい、にがにがしい、にくにくしい、よわよわしい、わかわかしい。

・その他

なまなましい、なれなれしい、にぎにぎしい、まめまめしい／ういういしい、おおしい、かいかいしい、めめしい／いまいましい、うやうやしい、くだくだしい、けばけばしい、こうごうしい、ずうずうしい、すがすがしい、ただけしい、たどたどしい、つきづきしい、ふてぶてしい、まがまがしい、ゆゆしい。

(b) 漢語系

ぎょうぎょうしい、そうぞうしい、どくどくしい、ばかばかしい、びびしい、ふくぶくしい、りりしい、れいれいしい。

(4) 接尾語による派生語

(がたい) え～、おかし～、たえ～、どし～。

(がましい) あてつけ～、おこ～、おしつけ～、さしで～、はれ～、ひと～、みれん～、わざと～。

(がわしい) みだり～。

(こい) あぶらっ～、すべっ～、ねばっ～、ひやっ～、まだるっ～、まるっ～、やにっ～。

(たい) おも～、くすぐっ～、けむ～、じれっ～、ねむ～、ひら～、ひらべっ～、やばっ～。

(たらしい) じまん～、なが～、にく～、むご～。

(にくい) いい～、きき～、し～。

(ぼい) あきっ～、あだっ～、あらっ～、あわれっ～、いがらっ～、いろっ～、えがらっ～、おこりっ～、きざっ～、くろっ～、しめっ～、しろっ～、ぞくっ～、ねつつ～、ほこりっ～、ほねっ～、みずっ～、やすっ～、りくつつ～、わすれっ～。

(らしい) あい～、いや～、おとこ～、おんな～、かわい～、きたな～、すいた～、たいそう～、にく～、にんげん～、ばか～、ふんべつ～、もったい～、もっとも～、わざと～。

(5) 有 縁 語

(a) 動詞と有縁的(規則的な対応)

いさましい(いさむ)、いそがしい(いそぐ)、いとわしい(いとう)、いまめかしい(いまめく)、うたがわしい(うたがう)、うとましい(うとむ)、うらやましい(うらやむ)、おもわしい(おもう)、かがやかしい(かがやく)、きづかわしい(きづかう)、くるわしい(くるう)、このましい(このむ)、さわがしい(さわぐ)、した

わしい(したう), なつかしい(なつく), なまめかしい(なまめく), なみだぐましい(なみだぐむ), なやましい(なやむ), にあわしい(にあう), につかわしい(につかう), ねがわしい(ねがう), ねたましい(ねたむ), のぞましい(のぞむ), のろわしい(のろう), はらだたしい(はらだつ), ふるめかしい(ふるめく), ほこらしい(ほこる), ほほえましい(ほほえむ), よろこばしい(よろこぶ), わずらわしい(わずらう)/くるおしい(くるう), このもしい(このむ), たのもしい(たのむ)。

(b) 動詞と有縁的(不規則的な対応)

いそがわしい(いそぐ), いぶかしい(いぶかる), うらめしい(うらむ), おそろしい(おそれる), けがらわしい(けがれる), こいしい(こう), しおらしい(しおれる), なげかわしい(なげく), にぎわしい(にぎわう), まぎらわしい(まぎれる), むつまじい(むつまじ), めざましい(めざまめる)。

(c) 形容詞などと有縁的

こまかしい(こまかい), あぶなっかしい(あぶない), せわしない(せわしい), ちかしい(ちかい), ばばっちい(ばばい)/いかがわしい(いかが), おろかしい(おろか), はなはだしい(はなはだ)。

(d) 名詞などと有縁的

あおい(あお), あかい(あか), きいろい(きいろ), しろい(しろ), ぐろい(ぐろ), かくい(かく), しかくい(しかく), しぶい(しぶ), けむい(けむ)/ままい(まま)。

(e) 連語的な形容詞

いたたまれない, いなめない, うけとれない, くえない, こたえられない/あきたりない, いたたまらない, おもいがけない, くだらない, しのびない, つまらない, にえきらない, はかりしれない, やりきれない/おやすくない, やむない/あられもない, そこはかとな, にべもない。

## 形 容 詞 2

### 1. ク活用系統

#### ・ア段音+い (102)

あかい, みじかい, \*たかい, \*あたたかい, あったかい, \*ちかい, でっかい, かい, \*ながい, \*にがい, \*ふかい, こまかい, やわらかい, \*わかい「あさい, ちいさい, \*くさい, \*むさい, \*うるさい」～たい, \*いたい, かたい(堅), \*かたい(難), ～がたい, ありがたい, くすぐったい, ひらべったい, やぼったい, じれったい, \*めでたい, つべたい, けむたい, ねむたい, つめたい, ひらたい「\*ない, ふがいない, もったいない, くえない, \*さがない, しがない, おっかない,

おぼつかない, はかない, \*すくない, おやすくない, いけない, おもいがけない, あたじけない, かたじけない, すぎない, あどけない, いとけない, しどけない, いわけない, おさない, せわしない, \*きたない, いぎたない, はしたない, つたない, ぎこちない, えげつない, せつない, そこはかとなない, やんごとない, しのびない, あぶない, やむない, いなめない, みっともない, にべもない, あられもない, にえきらない, くだらない, いたたまらない, つまらない, あきたりない, やりきれない, はかりしれない, つれない, うけとれない, いたたまれない, こたえられない」\*すっぱい, しょっぱい, ねばい」あまい, うまい, せまい」\*はやい」\*あらい, \*えらい, \*からい, えがらい, \*くらい, \*つらい」あわい, \*こわい, しわい, やわい, \*よわい。

・イ段音+い (6)

いい, かわいい, かわいい」おおきい」ばばっちい, みみっちい。

・ウ段音+い (46)

\*うい, あやうい」えぐい, かくい, しかくい, \*にくい, ~にくい, みにくい, ぬくい, ひくい」すい, うすい, こすい, まずい, やすい, たやすい」\*あつい(熱), \*あつい(厚), いかつい, きつい, どぎつい, ごつい, ねつい, がめつい」しぶい, にぶい」けむい, \*さむい, ねむい」\*かゆい, はがゆい, こそばゆい, まばゆい, おもはゆい」\*かるい, あかるい, ずるい, \*だるい, かったるい, ひだるい, \*ぬるい, ふるい, \*まるい, ゆるい, \*わるい, かわゆい。

・エ段音+い (0)

・オ段音+い (44)

あおい, \*おおい, \*とおい」こい, ~こい, \*かしこい, \*はしこい, \*すごい, しっこい, しつっこい, むごい」おそい, \*ほそい, うとい, けうとい, とうとい, \*くどい, あくどい, \*さとい, あざとい, いざとい, すすどい, たっとい, \*ひどい, \*ふとい, しぶとい, するどい, きわどい, しんどい」~ぼい」おもい」\*よい, きよい, いさぎよい, \*つよい」きいろい, \*くろい, \*しろい, おもしろい, のろい, \*ひろい, ぼろい, \*もろい, \*ちょろい。

## 2. シク活用系統

・ア段音+しい (119)

あしい, \*おかしい, \*さかしい, すがすがしい, \*はずかしい, \*むずかしい, いそがしい, ちかしい, そそっかしい, なつかしい, あぶなっかしい, むつかしい, もどかしい, にがにがしい, はかばかしい, ばかばかしい, いぶかしい, まがまがしい, こまかしい, いまめかしい, なまめかしい, ふるめかしい, かがやかしい, ゆかしい, おろかしい, わかわかしい, \*さわがしい」ひさしい, \*やさしい」いたいたい, くだくだしい, したしい, ただしい, おびただしい, はらだたしい, あわ

ただし、はなはだし」おなじ、\*かなしい、おとなしい、はなばなしい、むなしい」こうばしい、けばけばしい、よろこばしい、かんばしい」いまいましい、ほほえましい、へがましい、あつかましい、\*やかましい、たくましい、なみだぐましい、せせこましい、あさましい、いさましい、\*すさまじい、めざましい、かしましい、おぞましい、のぞましい、いたましい、けたたましい、ねたましい、つましい、つまましい、むつまじい、うとましい、おとましい、なまなましい、このましい、まましい、やましい、なやましい、うらやましい」あやしい、いやしい、うやうやしい、くやしい」へらしい、あらあらしい、しおらしい、ほこらしい、いじらしい、しりじらしい、\*めずらしい、そらぞらしい、へたらしい、\*あたらしい、すばらしい、みずぼらしい、しかつめらしい」にあわしい、へがわしい、いかがわしい、なげかわしい、うたがわしい、きづかわしい、につかわしい、ねがわしい、にぎわしい、くわしい、かぐわしい、けわしい、ふさわしい、\*せわしい、いたわしい、したわしい、いとわしい、いまわしい、おもわしい、よわよわしい、けがらわしい、まぎらわしい、わずらわしい、うるわしい、くるわしい、うれわしい、のろわしい。

・イ段音+しい (11)

ういういしい、おいしい、かいがいしい、こいしい」にぎにぎしい」\*きびしい、\*さびしい、びびしい、わびしい」さみしい」りりしい。

・ウ段音+しい (15)

\*ずうずうしい」うつくしい、どくどくしい、にくにくしい、ふくぶくしい」すずしい、かまびすしい、まずしい、みずみずしい」まぶしい」ゆゆしい」かるがるしい、\*くるしい、めまぐるしい、いちじるしい。

・エ段音+しい (11)

れいれいしい」ただけだし、とげとげしい、はげしい」ふてぶてしい」いかめしい、まめめめしい、めめしい、うらめしい」うれしなれなれしい。

・オ段音+しい (31)

\*おいしい、おおいしい、こうごうしい、そうぞうしい、いとおいしい、まちどおしい、うとううしい、\*くるおしい、ぎょうぎょうしい」ややこしい」よそよそしい」いとしい、うとうとしい、かどかどしい、くどくどしい、ことごとしい、たどたどしい、ひとしい」たのしい、ものものしい」ほしい、おぼしい、とぼしい、めぼしい」おもおもしい、さもしい、このもしい、\*たのもしい、ひもじい」\*おそろしい、よろしい。

## 形容動詞 (和語)

### 1. 単純語 (語末からの五十音順)

ぞんざい、なまじい、おちゃっぴい、おっちょこちょい、きらい、さいわい、まっとう、ずんどう、たえ、あたりまえ、なお、すなお、いかが、やぶさか、たしか、かすか、わずか、おごそか、おろそか、さだか、したたか、ゆたか、なまじっか、ふつつか、おおどか、のどか、まどか、ばか、たおやか、すこやか、さやか、あざやか、けざやか、ささやか、おだやか、すみやか、さわやか、すくやか、ふくやか、ほがらか、あきらか、なだらか、つまびらか、なめらか、おろか、にわか、いき、あこぎ、すき、いんちぎ、やっき、すてき、すぐ、あいにく、ちくはぐ、いたいけ、やけ、いやちこ、うつけ、きざ、どじ、おなじ、なまじ、ぐず、いなせ、しあわせ、あだ、めった、へた、むだ、あらた、せっかち、けち、ちゃち、がさつ、おっつかっつ、いびつ、きてれつ、あで、だて、かって、はで、みごと、しとど、かたくな、はすは、はすば、おてんば、はんば、うぶ、あべこべ、からっぱ、さかさま、さかしま、よこしま、ひま、ぶま、へま、わがまま、おしゃま、のろま、とんま、たくみ、つみ、むやみ、まじめ、みじめ、だめ、まめ、ちゃめ、でたらめ、おも、やみくも、もっとも、まとも、いや、むちゃ、めっちゃ、やんちゃ、あやふや、たいら、なまくら、ぼんくら、さかしら、いたずら (徒)、いたずら (悪戯)、ひたすら、ぐうたら、みだら、まばら、うらはら、つばら、ずべら、ずぼら、きよら、うらら、そっくり、なおざり、みだり、かなり、ひたぶる、しみったれ、あっぱれ、まれ、あわれ、ねんごろ、そぞろ、うつろ、おどろ、しどろ、おぼろ、さわ、やわ、あらわ、たわわ、さかん、とんちんかん、ざっくばらん。

### 2. 合成語

#### (1) 複合語 (あと要素の独立しないものも含む)、接頭語による派生語

(あお) まっさお。

(あか) まっか。

(あじ) おお～、こ～。

(あたり) ば～、ばち～。

(あつ) ぶ～。

(あて) おし～。

(あら) て～。

(あわれ) もの～。

(いり) ねん～。

- (いろ) き～。  
(うす) じ～, しな～, て～。  
(うち) あり～。  
(えて) ふ～。  
(おくれ) じだい～。  
(おも) き～, うち～, しり～。  
(がお) ころえ～。  
(がかり) おお～, き～, ころ～。  
(かつて) えて～, てまえ～, み～。  
(かなめ) かんじん～。  
(から) ばん～。  
(がら) こ～。  
(がる) き～, うち～, しり～, て～, み～。  
(がわり) ふう～。  
(きたり) あり～。  
(きらい) だい～, まけ～。  
(ぐい) おお～。  
(ぐさ) もの～。  
(くそ) へた～。  
(くち) む～。  
(くちや) しわ～/むちや～。  
(くら) まつ～。  
(くろ) まつ～。  
(けし) つや～。  
(けずり) あら～。  
(ごかし) おため～。  
(ころえ) ふ～。  
(こまか) こと～。  
(ごろ) て～。  
(ごわ) じょう～。  
(さかさま) まっ～。  
(ざかり) けつき～。  
(さく) き～。  
(さま) あから～, ぶ～。  
(ざわり) き～, みみ～, め～。  
(さんじ) き～。

- (しあわせ) ふ～。  
 (じかけ) おお～。  
 (しずか) もの～。  
 (しだら) ふ～。  
 (しつけ) ぶ～。  
 (しゃべり) お～。  
 (しゃれ) お～。  
 (しらず) いのち～, なさけ～, はじ～。  
 (じろ) いろ～。  
 (すき) だい～, で～, もの～。  
 (すぐ) き(生)～, まっ～。  
 (ずくな) ひと～。  
 (すけ) あけ～。  
 (ずっぽう) あて～。  
 (すべり) うわ～。  
 (ぜま) て～。  
 (ぞろい) ふ～。  
 (ぞんざい) いけ～。  
 (だか) かさ～, けん～, さき～, わり～。  
 (たしか) ふ～。  
 (たらず) した～。  
 (ぢか) て～, み～。  
 (ちがい) けた～, ころえ～, すじ～。  
 (ちぎ) こうまん～。  
 (ちゃら) へい～。  
 (づかみ) おお～。  
 (つくり) こ～, つみ～。  
 (つけ) うち～, ふみ～。  
 (づまり) き～。  
 (つりあい) ふ～。  
 (で) うす～。  
 (でき) じょう～, ふ～。  
 (てぎわ) ふ～。  
 (てこ) へん～。  
 (でっかち) あたま～。  
 (てまわし) はや～。



- (どお) てま〜、ま〜。  
(とどき) ふ〜。  
(なか) なま〜。  
(なが) おも〜、き〜、した〜。  
(なみ) つき〜、にんげん〜、ひと〜、ひとし〜。  
(なり) おざ〜。  
(なれ) ふ〜。  
(にあい) ふ〜。  
(ぬけ) だし〜、ま〜。  
(のろ) うす〜。  
(はか) あさ〜。  
(はずみ) かる〜。  
(はずれ) あて〜、けた〜。  
(ばち) すて〜。  
(ばったり) ゆきあたり〜。  
(はなし) あけ〜。  
(はば) おお〜。  
(ばや) き〜、くち〜、やつぎ〜。  
(はら) ごう〜、ふとっ〜。  
(ばらばら) てんでん〜。  
(はり) ごうじょっ〜、ごうつく(強突く)〜、ごうつく(業突く)〜、じょうっ〜、よく〜。  
(はんか) なま〜。  
(びか) きん〜。  
(びら) おおっ〜。  
(びろ) はば〜。  
(ふか) ま〜、よく〜。  
(ぶっせい) き〜。  
(ぶら) て〜。  
(ぶらりん) ちゅう〜。  
(へた) からっ〜、きき〜、くち〜。  
(べら) うすっ〜。  
(ぼけ) ピン〜。  
(まかせ) き〜、ちから〜、で〜。  
(まぎれ) くやし〜、くるし〜。  
(まぐれ) き〜。  
(まじめ) き〜。

- (まとい) あして～。  
 (まま) き～, じ～。  
 (まみれ) ち～。  
 (まめ) あし～, うち～, こ～, て～, ふで～。  
 (まわり) おお～。  
 (みじか) き～, て～。  
 (みず) むこう～。  
 (みち) じ～。  
 (みどろ) ち～。  
 (むき) あつらえ～, ひた～, ふ～。  
 (もどろ) しどろ～。  
 (やす) かく～, さき～, わり～。  
 (やたら) めった～。  
 (やっかい) に～。  
 (やり) なげ～。  
 (やわらか) おて～, もの～。  
 (よし) おひと～。  
 (より) みみ～。  
 (よわ) あし～, き～, こし～, ひ～。  
 (りん) へんちき～, へんてこ～, みょうちき～。  
 (わらわ) おお～。  
 (わる) いじ～, しょう～。

(2) 「～～な」の形式をもつ語

(a) 一般語の反復十な

(名詞)

いろいろ, うちうち, さまざま, なみなみ。

(動詞連用形)

おもいおもい, きれぎれ, たえだえ。

(その他)

まちまち

(b) 擬態語的なもの

かちかち, がちがち, からから, がらがら, ぎゅうぎゅう, くしゃくしゃ, ぐじゃぐじゃ, ぐしょぐしょ, ぐずぐず, くだくだ, ぐちゃぐちゃ, こちこち, こてんこてん, ごわごわ, ずたずた, びしょびしょ, ふらふら, べたべた, べらべら, べろべろ, べろんべろん, ほやほや, ぼろぼろ, めちゃめちゃ。

## (3) 接尾語による派生語

## (a)

- (がち) あめ～, くろめ～/, あり～, くもり～。  
 (げ) おも～, こともな～, ちいさ～, ちからな～, な～, にく～, わか～, いぶかし～, さかし～, ものほし～/おぼろ～/けな～。  
 (ずく) けんべい～。  
 (そう) ものほし～。  
 (ぶり) おお～/おもわせ～。  
 (み) いや～。  
 (め) たか～, はや～/ひかえ～。

## (b)

## (やか)

- (名詞) きわやか, つややか, はなやか, みやびやか。  
 (形容動詞語幹) あでやか, はでやか。  
 (形容詞語幹) あおやか, かるやか, ひろやか, まろやか, ゆるやか, わかやか/おとなしやか, つつましやか。  
 (動詞連用形) しのびやか, のびやか, はれやか。  
 (畳語の語基になりうるもの) こまやか, なよやか, にぎやか, にこやか, ひそやか, ひややか。  
 (その他) つつまやか, むつまやか/しなやか, しめやか, なごやか, におやか/, おおきやか, すずやか, まことしやか/きらびやか, しとやか。

## (らか)

- (形容詞語幹) あららか, きよらか, たからか。  
 (その他) うららか, おおらか, やすらか, やわらか。

## (か)

- (畳語の語基になりうるもの) こまか, しずか, はるか, ひそか, ほのか。  
 (その他) あたたか, あらたか, たいらか, ほこらか。  
 <(やか) (らか) (か) については, 単純語の所も参照>

## (4) 連語的なもの

ありのまま, うわのそら。

国立国語研究所資料集 7

動詞・形容詞問題語用例集

¥ 1,700

昭和46年 3 月20日 印 刷

昭和46年 3 月30日 発 行

著 作 者 国 立 国 語 研 究 所

発 行 者 株 式 会 社 秀 英 出 版

代 表 者 山 本 春 男

印 刷 者 山 之 内 印 刷 株 式 会 社

---

発 行 所 株 式 会 社 秀 英 出 版

[162] 東京都新宿区市ヶ谷加賀町 2—30  
振替 東京 119739・電話(260)5281

UDC 809.56—31

3081-33060-3042

NDC 814

# 国立国語研究所刊行書一覧

## 国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 ——用 法 と 実 例——	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 ——鶴岡における実態調査——	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	180円
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品切れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品切れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) ——総記および語彙表——	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) ——漢 字 表——	〃	1,000円
23	話 し こ と ば の 文 型 (2) ——独話資料による研究——	〃	550円

24	横組みの字形に関する研究	〃	350円
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) ——分 析——	〃	1,000円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	750円
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30—1	日本言語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30—2	日本言語地図(2)	〃	〃
30—3	日本言語地図(3)	〃	8,000円
30—4	日本言語地図(4)	〃	8,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) ——親族語彙と社会構造——	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅱ)	〃	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) ——マキ・マケと親族呼称——	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	700円
40	送りがない意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 ——松江24時間調査資料から——	〃	900円

#### 国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	〃
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語関係刊行書目	〃	300円
5	沖縄語辞典	大蔵省印刷局刊	3,000円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,100円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円

8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円
---	-----------------	---	------

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	〃	750円
3	ことばの研究 第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	12	昭和35年度	350円
2	昭和25年度	〃	13	昭和36年度	160円
3	昭和26年度	160円	14	昭和37年度	220円
4	昭和27年度	品切れ	15	昭和38年度	250円
5	昭和28年度	240円	16	昭和39年度	250円
6	昭和29年度	200円	17	昭和40年度	250円
7	昭和30年度	品切れ	18	昭和41年度	300円
8	昭和31年度	220円	19	昭和42年度	300円
9	昭和32年度	200円	20	昭和43年度	350円
10	昭和33年度	品切れ	21	昭和44年度	400円
11	昭和34年度	220円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	450円	昭和38年版	950円
昭和30年版	600円	昭和39年版	品切れ
昭和31年版	品切れ	昭和40年版	1,100円
昭和32年版	〃	昭和41年版	1,100円
昭和33年版	〃	昭和42年版	1,100円
昭和34年版	〃	昭和43年版	品切れ
昭和35年版	550円	昭和44年版	1,500円
昭和36年版	800円	昭和45年版	1,500円
昭和37年版	品切れ		

---

高校生と新聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

「動詞・形容詞問題語用例集」正誤表

頁・行	誤	正
3 -9	騰写版ずり	騰写版ずり
15 3	<u>甘酔く</u>	<sup>あま</sup> <u>甘酔く</u>
19 -3	大法輪	大法輪
22ハシラ	辞典にあまり登録されていない語	辞典にあまり登録されていない語
27 -11	おとこすきする	おとこずきする
50 3	まじまじと	まじまじと
69ハシラ	登録されていない語辞典にあまり	辞典にあまり登録されていない語
70 //	辞典にあまり登録されていない語	〃
96 //	録されていない語典にあまり	〃
130 -7	<sup>さも</sup> 卑しい事	<sup>さも</sup> <u>卑しい事</u>
// -2	さんしする	ざんしする
162 5	p. 190参照	p. 188参照
246 15	いき〜。	いき〜。
265 -13	*ほそい」,	*ほそい」
266 -8	うなしいなれなれしい。	うれしい, なれなれしい。
268 9	(かつて)	(かつて)
// //	み〜。	み〜。
// -15	まつ〜。	まつ〜。
// -14	まつ〜。	まつ〜。